

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国専断特許承認第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第8巻第13号 昭和38年12月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

12月号

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国専断特許承認第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・表紙第8巻第13号 昭和38年12月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

定価 250 円

IBM 1807

東京都中野区松が丘2の21 株式会社 あまとりあ社 振替・東京10756番
(久保書店宛)

武芸残酷物語

忍者一代

小山竜太郎
木屋進 著

凄惨きわまりない忍者の世界！ 勝つた
めには親も子も妻も斬らねばならぬ！
必殺の闇にうごめくは妖しの白猫かまた、
白裸のままに縛られた女忍者か！

230円 送料40円

これが忍術だ！

その歴史
と技法

小山竜太郎・著

これ一冊で忍術のことならなんでもわか
る。歴史的に文献的にさらにまた実技の
写真を多く挿入した、もっとも正確なそ
して興味しんしんの忍術入門書！

170円 送料40円

お手頃な値段で たのしい読みものが
いっぱい！ あまとりあ社の特選出版物！

■東京都中野区松が丘二丁目二番
株式会社 あまとりあ社
振替・東京一〇七五六・久保書店宛

裏窓叢書 ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

400円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

350円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵

400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

捕えられた美女群の危難に
つぐ危難！ 凄絶のクライ
マックスが連続する 息も
つかせぬ迫力編！

ウソのようなホント

続・話のネタになる本

¥170
円 40

野高一作・著

★目次の一部★コケが乳房を大きくする★ガマン出来なくなる薬
★出歯カメは長生きしない★妻の値段★アメリカの女トルコ風呂



裏窓・十二月号・目次

◎表紙

モデル・柚木あぐり

◎目次カット・中川彩子

カメラ・吉田 久

とびらカット・江渕晃夫

色
オフセット
2
オフセット

深夜のひとりごと

文・吉永昌合夫
カメラ・吉田 久

(9)

白い炎

吉田 久

(223)

破魔姫受難

文・島本春雄
絵・山田彬弘

(103)

オフセット
色紙ページ

アメリカSM絵物語

フェニクス商会・特約

(127)

甲賀
女忍帖

崖の上の墓標

佐藤達四郎

(160)

海外サ
ド小説

ピン・アップだけはやめて!

A・Dグラナムール
遠藤雄夫・訳

(24)

わが
白き道

FとMとの行き戻り

光谷東穂

(80)

選ア

まるい簞口具

西ドイツ・フェニクス商会

(122)

ラビ

カーテンのある風景

吉田 久

(111)

特グ

海外SMフォトご紹介

カリフォルニア・フェニクス商会

(15)(215)

S 夫
M 婦

奇妙な実験

八 卷 令

(168)

アラビア
の城・6

太陽のない宮殿

北園透一郎

(54)

読者の
おたより

私のSM論

重 森 東

(198)

体当た
りM論ああ、ぼくの欲望は貪欲に
どこまで生きれば充たされるのか

水 尾 究

(142)

裏窓タウン

(135)

読書コーナー

(212)

S マンガM

コレハオドロ記『尻に敷かれた男』

左 次 朗

(92)

夫 復
讐 の

恋人たちのオリ

九十九十郎

(68)

特集

★★★★マゾヒズム画廊★★★★フェニクス商会

(176)

体当たられマゾヒズム論

エダ・キリコ

(44)

灰色の夜

水 尾 究

(49)

ほ 紳
士 録

永遠にこどもでありたい男

かびや・かずひこ

(96)

M 文
献 の

現代マゾヒズム文化時評②①

森下高茂

(152)

連載マ
ゾ小説

ゴルドンの記憶⑨

阿麻哲郎

(202)

編集後記

(214)



深夜の ひとりごと

吉永百合夫・文
吉田 久・写真

①書けない

書けない。どうしても、書けない！
えらいものを、ひき受けたぞ！

——おれは、ずいぶん長いあいだ「裏窓」の愛読者だった。白状すると、だいぶ、この雑誌から、ヒントも頂いた。

しめきり日が切迫し、テーマもプロットもぜんぜん浮かばず、四苦八苦のたうちまわっているとき、「裏窓」をひらくと、ふしぎに、なにかしら、小説のネタがみつかる。まったく、奇妙なくらいだ。

ふしぎな魅力、というのが、おれたちグループの「裏窓」に対する評価だが、ヒントをつかめたときなど、正直、そのとおりだと思う。

いや、そろそろしいお世辞など、もう、やめよう。

いくらお世辞をいったところで、あの編集長、それにのってくるタマではない。

のぼしにのぼしたしめきり日だ。もうこれ以上、のびないだろう。

こなまいきな毒舌を、遠慮えしやくなくまき散らし、ときには齒の浮くような機嫌をとりながら、いつのまにか自分の掌中にこつちをひきずりこんでしまう、あの編集長。



②ちくしょうめ！

いかにも子ども子どもした童顔で、自分の若さをむきだして「裏窓」への愛情にみちた熱弁をふるいだすから、ついこつちも油断して本心をさらけ出す。

すると、いつのまにか眼の底に、チラチラ皮肉の色を光らせながら、こつちの本心を、じいっとうかがっているという、とぼけた若僧だ。ちくしょうめ！

いや、悪口を書くのも、もう、やめよう。なんといっても、あいつは、いまのところ「裏窓」の全権力をにぎっているらしいからな。怒らせても、まずい。





③ 文学的サド小説！

さて、小説だ。

サド小説を、書かねばならない。

まったく、えらいものをひき受けてしまったな。

こんなに始末のわるいものだとは思わなかった。といって、いまさら、できないといって断わるのもシヤクだ。

おれはなにしろ、職業作家なのだからな。

「先生——」

（と、編集長のやつが言やがったのだ）

「先生のような著名の方に、毎号ご愛読を賜わることは、本誌の名誉であり心から感謝しております。また、いつもご遠慮のない、適切なご批評を頂き、ふかくふかく感謝しております。ですが、ご批評ばかりではなく、たまには、先生ご自身の筆による傑作をおねがいますよ。先生ほどの技術、表現力、そして高度な文学性があれば、きっと従来にない新鮮な、文学的なサド小説ができあがると信じます。失礼ながら、原稿料はお望みどおりお支払いいたします。ぜひ、書いてくださいますよ、先生……」





④ 不満だらけ

「フム、そうだな。ペンネームを、ぜんぜんべつの、でたらめなやつでよかったら、ためにひとつ、書いてみるか」

と、おれはついいうっかり、口をすべらせてしまったのだ。

だいたい、おれには「裏窓」の、いわゆるサド小説というやつに、前から不満がある。

まず第一に、登場人物の「人間」が描けてない。責める側も責められるほうも、ぜんぶが類型的である。

第二に、ストーリーが、これまた類型である。ということとは、あまりにも通俗的な設定展開ばかりだということだ。

第三に、表現力の拙劣さ。ボキャブラリーの貧しさ。たとえば、かんじんの責め場面でも、描写に深みがなく、手垢のついた安易な形容の羅列に終始している。

などなど、このほかにも不満はたくさんある。

だから、おれが書くんだったら、それらの類型をのり越えた斬新な……という意気込みがあった。そこでひき受ける気にもなった。

ところが……はじめから駄目だ。ペンが、どうにも、うごかない。

⑤ ご希望どおり

そこでおれは、あいつのところへ電話したのだ。

「やっぱりね、縛られてもだえている美人をこの目でたっぷりみないと……どうも想像だけじゃ、迫力のある描写はできないね」

「そうですか。それじゃ、縛られた女の子をひとり、先生のおそばに置きましょう」

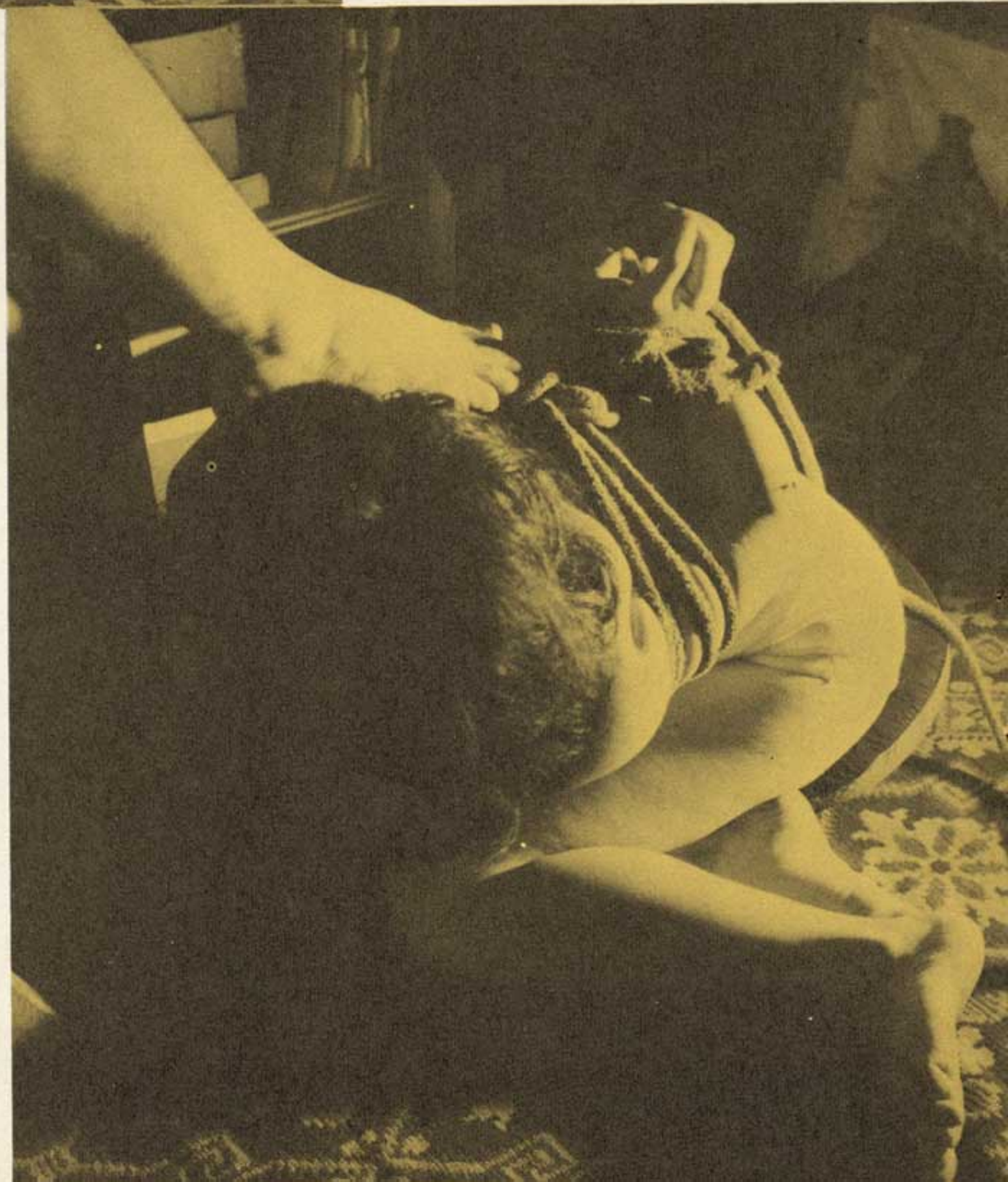
編集長め、いともあっさり言やがった。



⑥ 念のため

編集長は、連れてきたモデルを、あッというまに縛りあげると、にやりと言った。

「ぼくは帰ります。ですが、先生、この子にこれ以上のことをすると、あちこちへ言いふらされて、先生のご名譽にキズが付きましますから、その点だけはお気をつけて……」





⑦ 助けてくれ!

縛られた女性は、縛られたまま、じいっとして、死んだ魚のようにうごかない。

冗談じゃない。こんな女の子にそばにいられたら、よけい気が散って書けやしない。

「だいじょうぶ? 痛くない?」

心配になってきくと、

「はい、だいじょうぶです」

いなかの女学生のように素直にこたえる。

「苦しくなったら、そう言いなさい。解いてあげるから」というと、また従順に「ハイ」

従順はいいけど、小説のほうは、さっぱり進行しない。プロットすら、まとまらない。

苦しくなるのは、こっちのほうだ。

サド小説なんてものは、究極、空想の所産なのだな、ということが、ようやくわかりかけてきた。モデルを前にデッサンする絵描きとは、本質的にちがうのだ。

ちくしょうめ、わかったぞ。

あの編集長め。おれが書けないことを、はじめからわかっていて、わざとこんな手数のかかる悪戯を企んだのだな。おれが、いつも「裏窓」の悪口ばかりいうものだから、こんなかたちで復讐しやがったのだな。

ちくしょうめ、ああ、たすけてくれ!

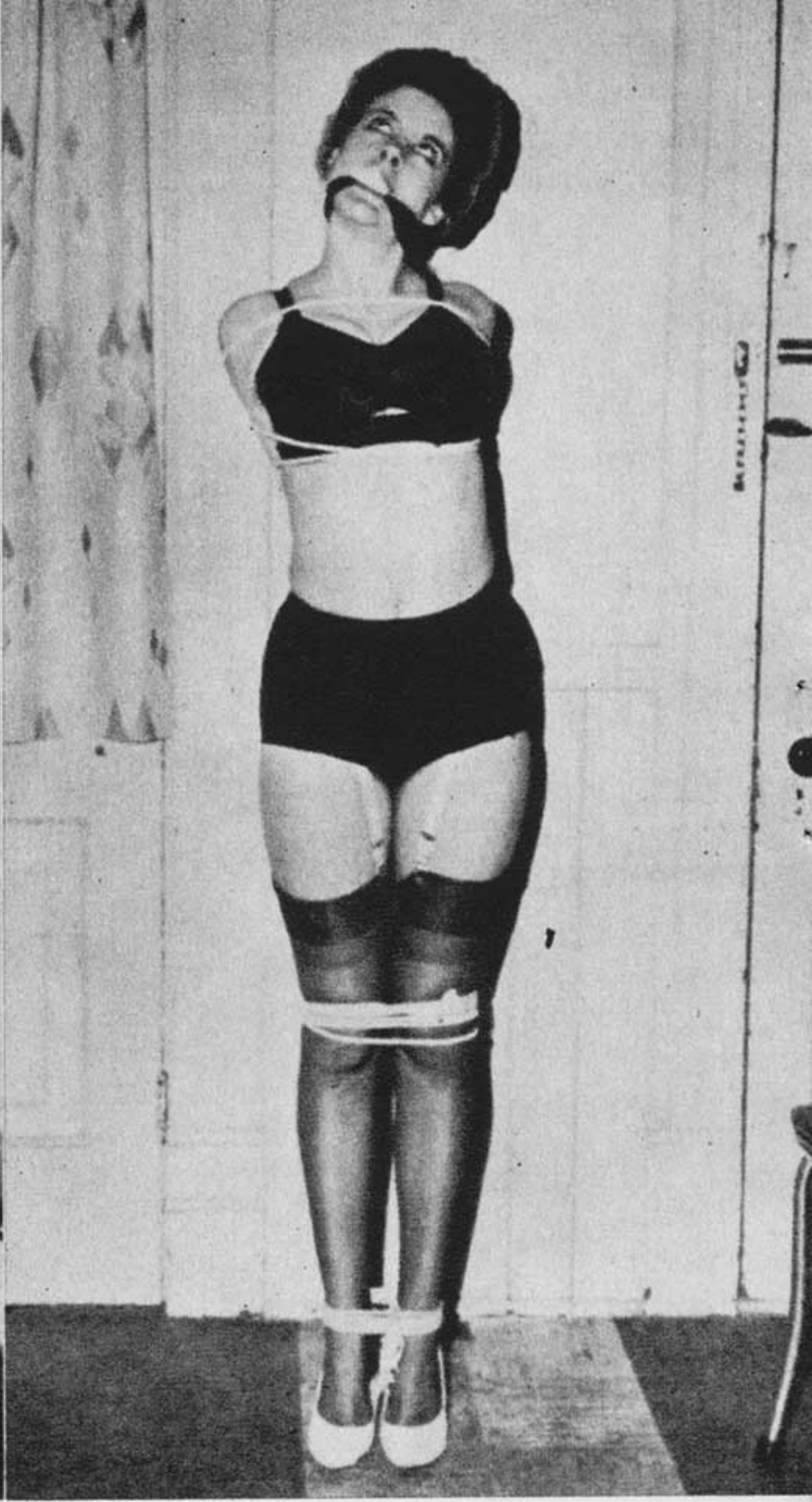
海外の公刊誌より

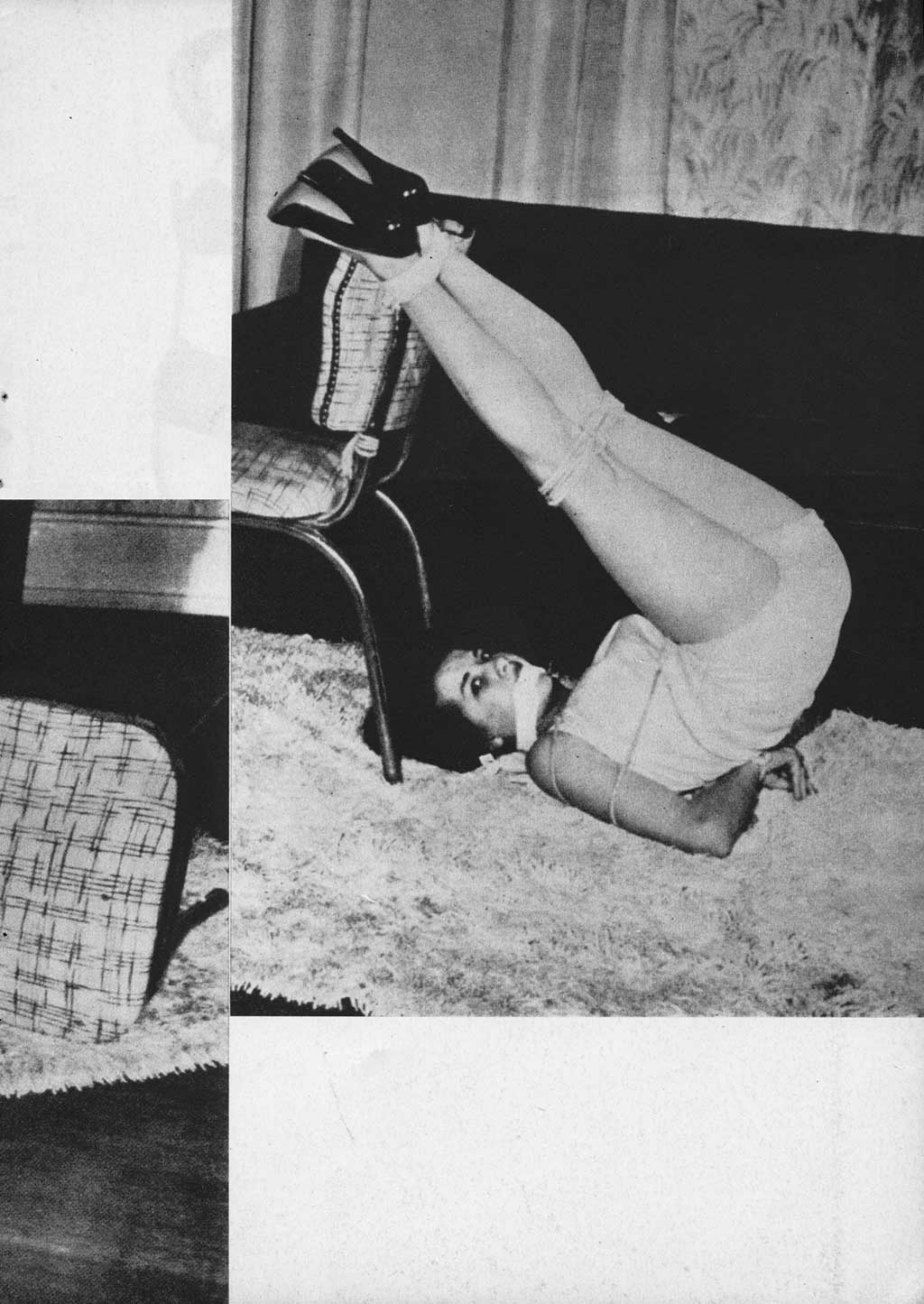
SMフォトご紹介①



カルフォルニア・フェニクス商会・特約













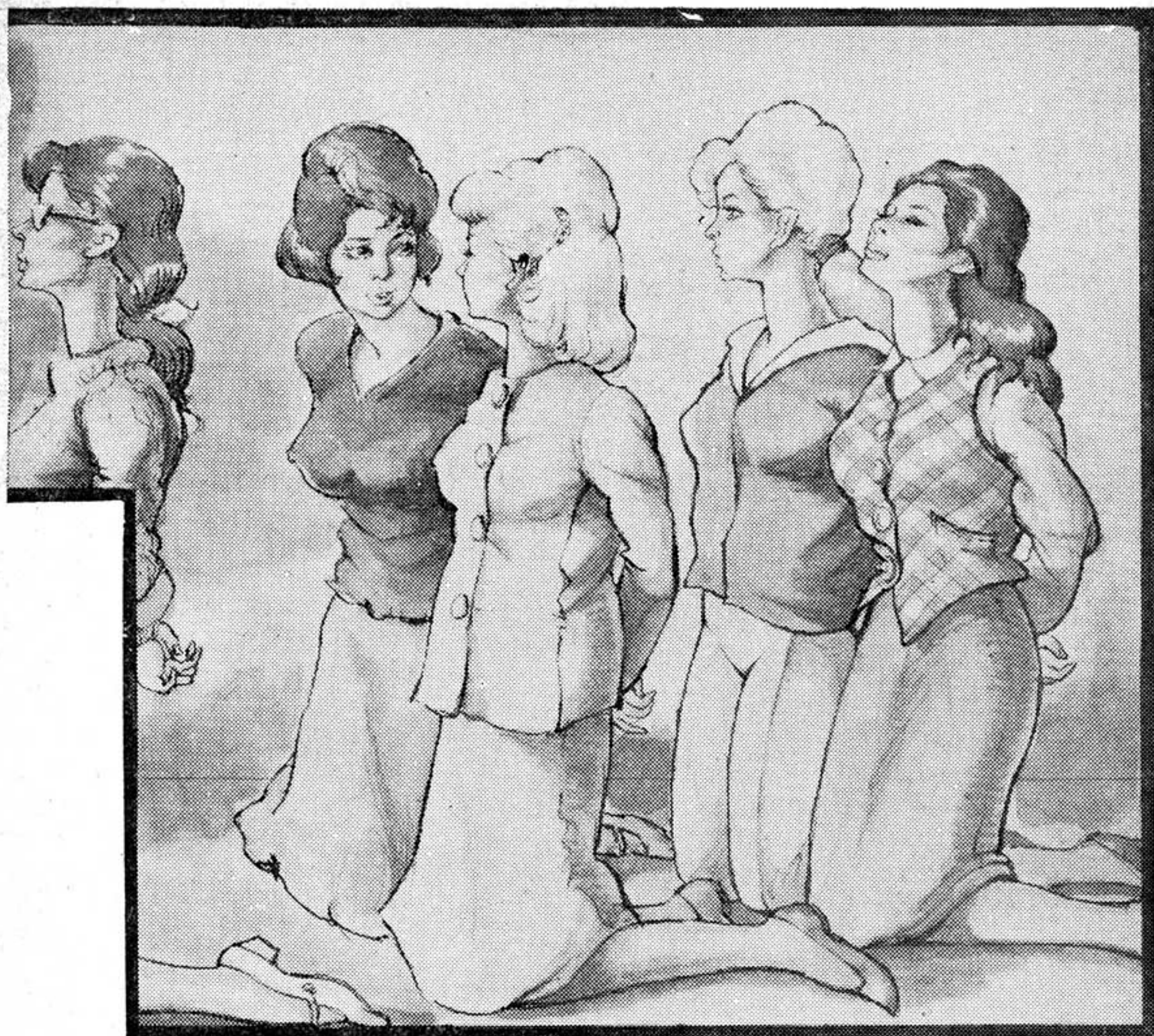


裏窓



12 月 号

第 8 卷 · 第 13 号



せなかにまわした手と手がじっとりとぬれてくる。くちびるをきゅっとむすんで、あたしはゆかのうえにひざまづいていた。

あたしとならんで、会長さんの説明をきいている五人のなかま。あたしたちは、大学クラブの入会志望者なのだ。

会の名は——カップ・デルタ女性クラブ。

「あたしたちのクラブ、ほかのどこより、ぐっと高級なのよ。このことよくおぼえといてね」

会長さんは、しなやかなからだを窓へにもたせ、キャンパスのみどりに眼をやった。

「あたしたち、やろうとおもったら、あなたたちをだますことだってできるのよ。いっそのこと、バッチリ、ひどいめにあわしちゃうかな……たとえばねえ、回虫だとか、ウジ虫だとか、ぬるぬるしたものがウジャウジャいるなかを、はだしで歩かせちゃう。じゃなかったら、氷でいれずみこしらえるとかさ——でエもね」

と、あたしたちに視線をもどして！

「そんなことって、まるで子どもだましじゃない？ KDEの会員になるにはさ、あなたがた、うんと想像力をはたらかすことね。だって、入会したひとたち、ちよっとばかりしムードがちがってくるようよ」



■ほんにおまえはカワイ子ちゃん

ピン・アツプだけはやめて!

A・D・グラナムール

遠藤雄夫・訳
落合竜二・絵

「ま、いやらし!」
あたしの左がわで、カレン・モルドーンが
ちいさくさけんだ。

カレンは、女のあたしでさえ、おもわずだ
きしめたくなるようなかわいい子ちゃん。プロ
ンドの髪が、ながく、たつぷりと、ページ・
ボーイみたいにカールしている。

彼女、十七才になったばかり。新入生のく
せに、もう、VIPの資格もとっているって
うわさ。

それに、この子ったら、ハイ・スクール時
代の恋びとから、プロポーズもされているん
だって……いくらあたしの耳がはいからっ
てエまさか、こればかりはしらなかったわ。
彼氏、来年には、カレンのゆびにウェディ
ング・リングをはめてやろう、そんな気でい
る。

だって、もう一年たてば、彼のサービス・
ステーションで充ぶんやっっていけるそうよ
——ちえっ! あたし、ジェラシー感じちゃ
うな。

「おだまり、モルドーン! あんたみたいな
おしゃべりはどうなるかわかっているの!」
マジジ会長のするどい口調。小ぎれいにま
とめた亜麻いろの髪が波うってゆれる。
まるで、ハイド氏ね。

あたし、ビクツとした。くびをすくめちゃった。自分がしかられたような錯覚——。

あたしたちの沈黙と恐怖。

会長さん、満足したらしいわ。

「さ、これから、カードを—まいずつわたすわ。それには、何番街かっということがかいてあるの。で、いまから夜あけまでのあいだに、自分のつごうのいいとき、そこへいって、なにかとってきちゃう。つまりさ、これがその家のものだっていう証拠品ね。いい？　つかまるようなヘマ、しないでよ」

マジジさんは、なれた手つきでシガレット

に火をつけた。

「あしたのおひるまでに、ちゃんとここへもどってきたひとが合格。わがKDE、新会員の誕生ってわけね。いいわね？　時間は正確にまもること。一秒だって容しゃしないからね、さ、これでいいかな……」

かたちのよいひとさしゆびが、タバコの灰をこぼす。

かわいそうに、ちょうどカレンのあたまが灰皿なんだわ。

「そう。もしも、破壊行為だの、家宅侵入罪だのって、あなたがた、つかまっちゃったり

したらね……もつとも、そんなグズさんいるはずないが。いたとしても、あたしたちには関係ないわ。勝手にしやがれよ」

まっ！

「あら、ご心配？　そうね、こういえばブタ箱なんかのご厄介になることはないでしょうよ——あたし、クラブにはいるための試験ちゆうなの。それから、こんなのはどう？　行政官が、北軍の兵士たちにいったのご存じでしょ？　ワキをむいてろって。こういうときは、あなた、目こぼしするものよ」

なんてこというんだろ！　バカにするにもホドがあるわ。

「でも、あなたがた、もしもみつかったら、ポリなんかがよばれそうになったりしたら、むろん、なにか手をうたないといけなくてよ。でないと、このすばらしいKDEのメンバーになれなくなっちゃいますものね」

会長さんは、シガレットを窓のそとになげすてると、きつとした表情であたしたちをみつめた。

「さあ、これでぜんぶよ。質問するなら、いまのうちよ」

いちばん右はしにすわっていた子が手をあげた。

ベッツィ・ファロー。



きゃしゃな子。サン・グラスなんかかけちやって、ぴっちり肌にくいこんだセーター、ひどくいろっぽいショート・スカート。

「なに？」

くちとはべつに、マジさん、鼻さきでわらっている。

（ブジョク！）

「あの、あなたは……会長さんは、その家のひとがあたしたちをつかまえて、警察につれていくって——ほんとに、そうお考えですか？ あたし、その、つまり……むしろ、それこそ法律違反じゃないかって、そんな気が……」

「ねえ、ファローさん。あなた、そんなこと考えるのやめて、いますぐ、午後の講義に出席なさったほうがいいんじゃないかしら？」

いやみねえ。いじわる。

「もっとも、あなたがあたしよりもKDEのこと、よくしっているなら話はべつだけど……」

「あら！ いいえ、あたし、あたしは……やります、やりますわ。ただ、ちょっとしりたかっただけなんですの——」

ベッツィの声はすっかりしりつぽみ……ほほ、はすかしさでまっ赤にそまってしまっ

た。

まったく、こういうばあいは、だまってい

るにかぎるわ。
「ふしぎがることなんかないわ。おやりなさいよ。じゃなければ、いますぐやめちゃうことね。どっちも、かんたんなようよ」

「やります……」

会長さんは、もう、ベッツィのほうには眼もくれない。そして、ポケットからカードをとりだす。

あたしたちは、ケートを先とうに、こんどはたての列をつくった。

「手のひらをひざのしたにいれて。あたまをさげて。さ、あたしにむかつてはってらっしゃい。自分のカードをくちにくわえて、そのままていくのよ。はい！ ワン、ツー、スリー！」

あたしはといえば、こういったすべてのことにたいしてほとんど疑問はなかった。

もし、みつかって、拳銃をつきつけられたらどうするのって？

だって、学校でいちばんたいせつなのは、このKDEの会員になることなんですもの。

これで会員になれなかったら、そりゃたいへんなの。クラスメートからはバカにされるし、さえないカレッジ・ライフになっちゃう

わ。

あたし、不安だった。

でも、いっしょうけんめい、マジさんのほうにはっていったわ。

首をまげて、くちびるをあけて。歯にカードをはさんで……。

あたしは、のろのろと部屋をでたの。

おとなりの部屋で、あたしたちをむかえてくれたのは、ふたりの上級生。卵がたの板きれなんかもって、いったい。なにしようっていうのかしら？

「おくちをきかないで、非公認さんがた。自分のカードをみて、番地をおぼえたら、さつさとのみこんじゃいなさい」

非公認さんだって？ いかさないな。

それでも、あたしたちはいそいでカードを手にとった。

カレンが、あたしにのしかかるようになかった。こうで、

「あなた、どこ？ あたし、ケンネリ街ですって——キャッ！」

バシッ。

すさまじい一撃。

カレンのおしゃべりをめざとくみつけた上級生が、松の木板で彼女のおしりをひっぱたたいたのだ。

いたそうにこしをおさえて、彼女、かわい
いしかめっつら。

つぎの瞬かんなの、ほんとに、あたしがカ
レンを好きになっちゃったのは。

なぜって、彼女ったら、すごく元気に、精
力的に、ゴシゴシ、ゴシゴシ、おしりをこす
りはじめたんですもの。

あたし、心のなかでさげばずにはいられな
かった。

(いいわア、カレン！ その調子、その調
子！)

「おしやべりはいけないっていったでしょ？

ひっぱたかれんのがいやなら、はやく番地を
おぼえて、さっさとのみこんじゃうことよ」

カレンときたら、そんなことはぜんぜんき
こえませんなんて、顔して、ゆうゆうとカー
ドをながめている。

でもさ、やっぱり、なぐられるのはいやよ
ね。いいかげんで、彼女もカードをのみこん
じやったわ。

こうして、あたしたち六人が、カードを胃
のなかにおさめてしまうと、上級生たちは、
(部屋をはいでて、入会試験をはじめてくだ
さいな)

それを、身ぶり手ぶりでやったのよ。

ちえっ！ きどってんの……。

十時――。

あたしのスポーツ・カーは、いま、ブラン
ナン通りをはしっている。

心臓が、ドッキン、ドッキンって。陽気な
あたしも、さすがに緊張しているんだな。

あたしのわりあては、ケンネリ街、四三二
番地、カールソン家。

くるまが街標板のところへくるたびに、あ
たしはスピードをおとして、街の名をたしめ
ねばならなかった。

ケンネリ街なんて、あたし、ぜんぜんしら
ないんだもの。

こうして、ノロノロウロウロ、やっこのこ
とで、あたしはケンネリ街にたどりついた。

くるまをとめて、おや、とおもった。

(これが、ケンネリ街？)

およそ、こんな大げさな名とはけたはずれ
のうらさみしい街。

家々はかぞえるほどしかない。せいぜい、
二、三十けんってところ。

それに、なんてまた、くらいんだろう。

(四三二番地っていうと、たしか、この右っ
かわのはずだわ……そうだ、ここからは歩い
ていこう。そのほうがあやしまれなくてす
むわ……)

くるまにかぎをかけながら考えた。

(いったい、どうやって、はいりこめってい
うのかしら？)

これに、あたし、こんなことやるのはじて
なんですもの。七つ道具そろえたところで、な
んにもはじまらないわ。

ふと、あたしは、くらやみのなかにママの
やさしい顔をおもいうかべた。

「アンナ、あなた、なにやってるの？」

「……」

ゆるしてね、ママ。あたし、どうしてもK
DEにはいりたいの。一生に一度の泥ぼろ
がた、ゆるしてやって、ママ！

「……」

ママの顔が、ふっと、きえた。

くらやみだけがあたしをつつんでいる。

そのときよ。あたしは(シメタ)とおもっ
たの。

ねっ、ほら！

あたし、懐中電燈をもってきてたのよ。
セーターのポケットや、おさいふなんかに、
そっとさしこめるあの豆電よ。

すごおく、くらいの。番地名がみえないの
よ。

あたしは、こっそり、ひかりをあてた。

「……！」

ついでに――。

まさに、まさに、カールソン。

大きな二階屋が、どっしりとこしをすえて
いる。

(よかったア、うえもしたもまっくらだわ)

むろん、電気がついてないからって、それ
がひとのいないということじゃないわ。

でも、こういうちいさな街では、ほとん
どのひとがはいうちに寝こんじゃうのね。

あたしにしてみればこれこそ、ねがってもな
いチャンスよ。

通りにとまっているくるまの数はしれたも
の。

あたしのまえには、中古セダン型フォード
だけ。うしろには、ブルーの車体。サンダー
フォードかな。

「さあ……」あたしは、そつとつぶやいた。

「うらにまわってみよう。お台所か、お勝手
口か、じゃなければ、きつと、あけっぱなし
の窓があるにきまつてるわ。それでもだめだ
ったら、窓をわって……」

あたし、ちよつとためらった。

(みつかつちやうかな?)

シーンとして、気がとおくなりそうな感
じ。きこえてくるのはコオロギのなき声だ
け……。

ガレージ、うら庭、庭園、バス・ルーム……



「あア、あいてる！ かアもねエ」

うれしくて、おもわず、くちばしっちゃつ
た。浴室の窓が半びらきになってるんです
もの、当然よ。

そればかりじゃないわ、ね、みてごらん
さい、ハシゴまであるじゃないの。

あたしは、大いそぎで、それを窓のしたに
そなえつけた。

気づかれないように、注意ぶかく、こっ
そり、あたしはそれをのぼった。

窓を、ほんのちよびつとあける……。

なかはまっくら。あたしは、豆電で、足が
かりのないことをたしかめる。

からだのむきをかえ、そつと、ゆかにとび
おる。

あたし、自分でもおどろくほどおちついて
いたわ。その証拠に、こんなことを考えて、ニ
ヤリとしちゃったもの。

(セーターをきて、あんまりすてきじゃない
コールてんのスカートをはいてきたこと。こ
れは、あたしに先見の明があったという、み
ごとなあかしだわ。よこれでもよし、やぶけ
てもよし……フフフ)

あたしは、すっかり満足していた。

豆電をたよりに、あとは品ものをえらぶだ

け。

手紙、便せん、背広、ううん、鉛びつだっ
ていいいのよ。とにかく、カールソンってか
いてありさえすれば……。

まさか、そうは問屋がおろさないらしい。
バス・ルームにはなにもなし。

となると、これからがコトだな……。

あたしは、浴室のドアのところに手をのば
した。

(……)

おもいきって、まわす。

あいた。

(……)

「ムッ！」

とつぜん、あたしはくちをふさがれた。も
う片ほうのうでが腰をおさえつけて、さらに
べつのうでが二本、グイッと足くびをつかん
だ。

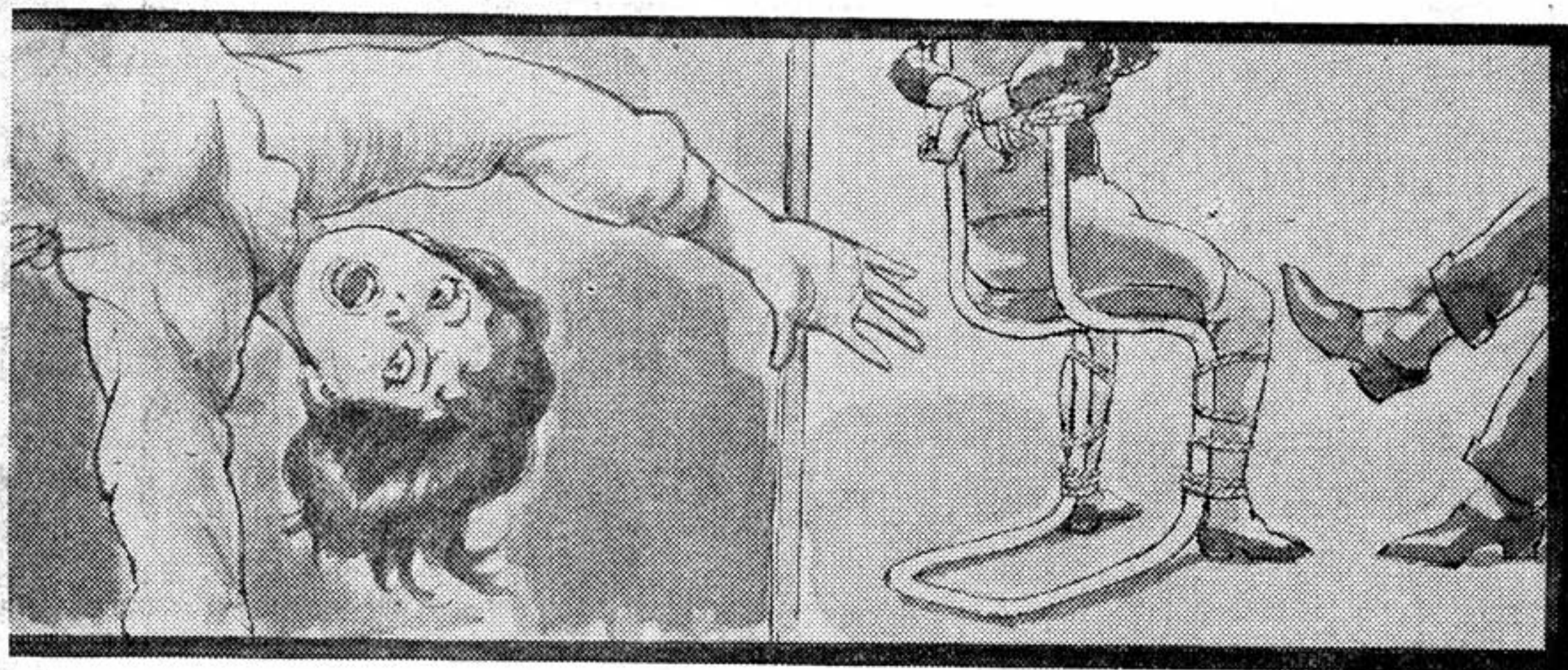
あっ、とおもったとき、あたしのからだは
高だかと空中にさしあげられていた。

あたしは、びっくりした。

手をふりほどこうとした。足をばたつかせ
た。にげようとした。

あたし、泥ほうじゃないわ。たすけて！
さけぼうとした。

でも、声にならなかった。



かわりに、あたしの耳にきこえてきたの
は、あらあらしい男の声だった。

「こいつ、さっきの片ワレらしいな。ジョジ
ヨのやつ、もっと手をまわしたとおもうか、
なあ？」

あたしのくちびるをおさえつけている手。
汗でじとついた手。

「それさ、マックス。まったくあやしいもん
だぜ」

まるで、馬がいなくなかうような声。

あたしの足をつかまえているヤツだな。

「でもよ、ジョジョの野郎がどういう気なの
かア、すぐにわかつちまうだろうさ。それに
したってよ、はえぬきのやつがやることにし
ちゃア、まったくバカげたこった。ボスんと
こにカールソンのダイヤがあることとしてよ
オ、それでいて、こんなアマツちよつかって
ぬすませるたア、へ、なんてドジふんでやが
んだ」

「ボスがおでましになりやア、みんな、わか
ちちまうさ。おい、それよか、はやいとこ、
このアマしばっちまおうぜ」

「よしきた」

男たちは、あたしをかついだまま歩きはじ
めた。

「マックスよ、ボスは、うえの寝室にいるん



「だろ？ 壁じかけの金庫にダイヤがしまいこんであるアな……ヘッヘッヘ、なあ？」

「あ？ ああ、へへへ、ちょいとたのしめるな……」

(……)

たのしめる？

あたし、ぎよっとした。

身もだえしていたからだだが、たちまちのうちになえていくようだった。あつい血がつかめたい水にかわっていくような、そんな恐怖が全身をはしった。

(あーっ、たすけて！)

あたしは、なおもからだをよじった。

なのに、男たちはそんなことにおかまいなく、ほとんどかけるようにして、スイスイ部屋にはいった。

馬のいななき声のほうに、足くびをおさえながら、スイッチをはじいた。

あたしは、あかるくなった部屋をみまわして(あっ！)とおどろきの声をあげた。

カレン、カレンじゃないの！

そこは、とてつもなくでっかいホールだった。

そのちょうどまんなかに、さるぐつわをか

まされ、いすにしばらくつけられて……。

(カレン！ どうしたの、あなた？)

手は背なかにまわされて、手くびと、ひじと、うでが、がんじょうな細びきでいすにくくられている。

くやしいけど、うまい。みごとなしばらくただわ。

ぴっちりしたブルーのセーターから、カレンの、まアるい、ひきしまった乳房を、グンとまえにつきだしている。

両あしは、いすのはばにひらかれ、くるぶしがいすの脚にがっちりゆわえつけてある。

そればかりじゃないの。

ふくらはぎには、ピンとはったつながグルグルまきつけてある。

チェックのショート・スカートにはすっかりしわがよって、両ひざがむきだし。

彼女ったら、ソックスしかはいてないんですもの、つなとつなのあいだには、なんともいえないくぼみやもりあがっちゃって……。

同性のあたしが、オイロケを感じちゃったほど。

「アンナ……」

もちろん、あたしにはきこえなかったわ。すすりなくようなカレンの声。

「カレン……」

恐怖とおどろきで、大きくみひらかれたカレンのひとみ。

「むかいあわせといこうじゃねえか」

眼の交流をたちきつたのはマックス。

「おれがとつかまえてるから、おめえ、いすとロープもってこいや」

「よっしゃ」

いななき声の男が、あたしの足をゆかにおろす。

この一瞬をのがすテはない。あたしは、マックスのむこうずねを、おもいつきり、けつとばしてやった。

「いてっ！ ちつきしよう、このアマッ！」

「ム、ムム、ウーッ……」

男のちからって、こんなにつよいものだとはしらなかったわ。逆をとられた右うでに、キリキリするいたみ——ひとたまりもなく、あたしはゆかにくずれおちた。

正直いって、それでもあたしはまだまだへこたれちゃいなかった。

あたしは泥ぼうじやないんだもの。

「ヘッヘッヘ……」

「あ、なにをするの……」

男はあたしのからだをおこしたとたん、右手で、右手で——ああ、はずかしさで気がくるいそうだわ。

右あしのむこうずねに、男の右あしがからみついてくる。おしりには左ひざが密着して……。

「やめてよ！ やめてったら！ あんたなんかこんなことする権利、どこにあるっていうの！ あーっ、よしてったら！」

「権利だア？ ヘッヘッ、ボスがおいでになりやア、わかるというんだ。おい、エディはやくしろよ」

いななき声の男は、一分もしないうちに、いすとひものたばをもつて帰ってきた。

「よし、じゃ、ちょっと手つだってくれ。このアマ、くちのへらねえ女郎だ。むこうのブ Rond ときたら、一年ぶんもびっくりしやがつたくせによ」

「やめて、あたしは——ム、ム……」

ひきようよ！ あたしにはなにもいわせないで、しばったり、ねじったり、からだじゅうをなぜまわすなんて……男のひとって、みんな、こうなのかしら！

それにしても、これ、いったいなんのマネ？ ジョジョって、だれのことなの？

カールソンのダイヤ？ ボス……。

ちがうわ、ひとちがいなのよ。なんて、そっかしい男たちなんだろう。

とってよ、さるぐつわをはずして、いわせ

てちょうだいってば！

ふと、あたしはカレンのグリーンのひとみをみつめた。

（カレン、だいじょぶよ。がまんして。あたしたち、まちがえられただけなのよ）

ボス——きつと、そのひとならわかってくれるわ。

あたしって、よっぽど、オプティミストなのね。「こっちは、ボス」っていうマックスの声で、ホッとしちゃったもの。

「ねえ、おどろいちゃいますあ。ダイヤをぬすもうなんて女が、ほら、もう一びきいたんですぜ」

あらっ、まだあんなこといってる。いいわよ、このオジさまにぜんぶおはなししちゃうから。

オジさまは、ふかぶかと帽子をかぶった、たくましいかた。肉づきのよくちびるのはしには、ふとい黒葉巻をかみしめて……大きなひとみ。

ああ、はやくこれをはずして、ほんのこのいわせて！

「クックック、運のわるい女どもめ——おいカールソンのブツはこれだ」

オジさまは、骨ぶとの手で、上着のうちポケットをかるくたたく。



ダイヤの指輪が、キラッとかがやく。
でも、ちょっとけばけばしいわよ、オジさま。

「おれがしりてえのはな、あのろくでなしのジョジョめ、どうしてカールソンのダイヤに気づいたかってことだ。おれたちがシゴトに

かかったこたアやつはしるはずがねえ。それに、情報手にいれたからって、こんどのこたア、まったくナワ張りちげえじゃねえか……いつかまたこんなことしやがったら、こんどこそ、ハジキで一発だ」
「まったくだぜ。あつしが考えてたのもそれ

なんスよ」

と、エディ。

ちえっ腰ぎんちゃくめ。

「よし、この娘っ子が、ジョジョのことをどうぬかすかきいてみるか。おい、さるぐつわをはずせ」

待望の一瞬。

あたしは、ただちに、真実をのべはじめた。

「ねえ、オジさま。あたしたちは——ウ、ウッ！ ム、ム……」

大きな手が、すさまじいいきおいであたしのくちもとをおそった。

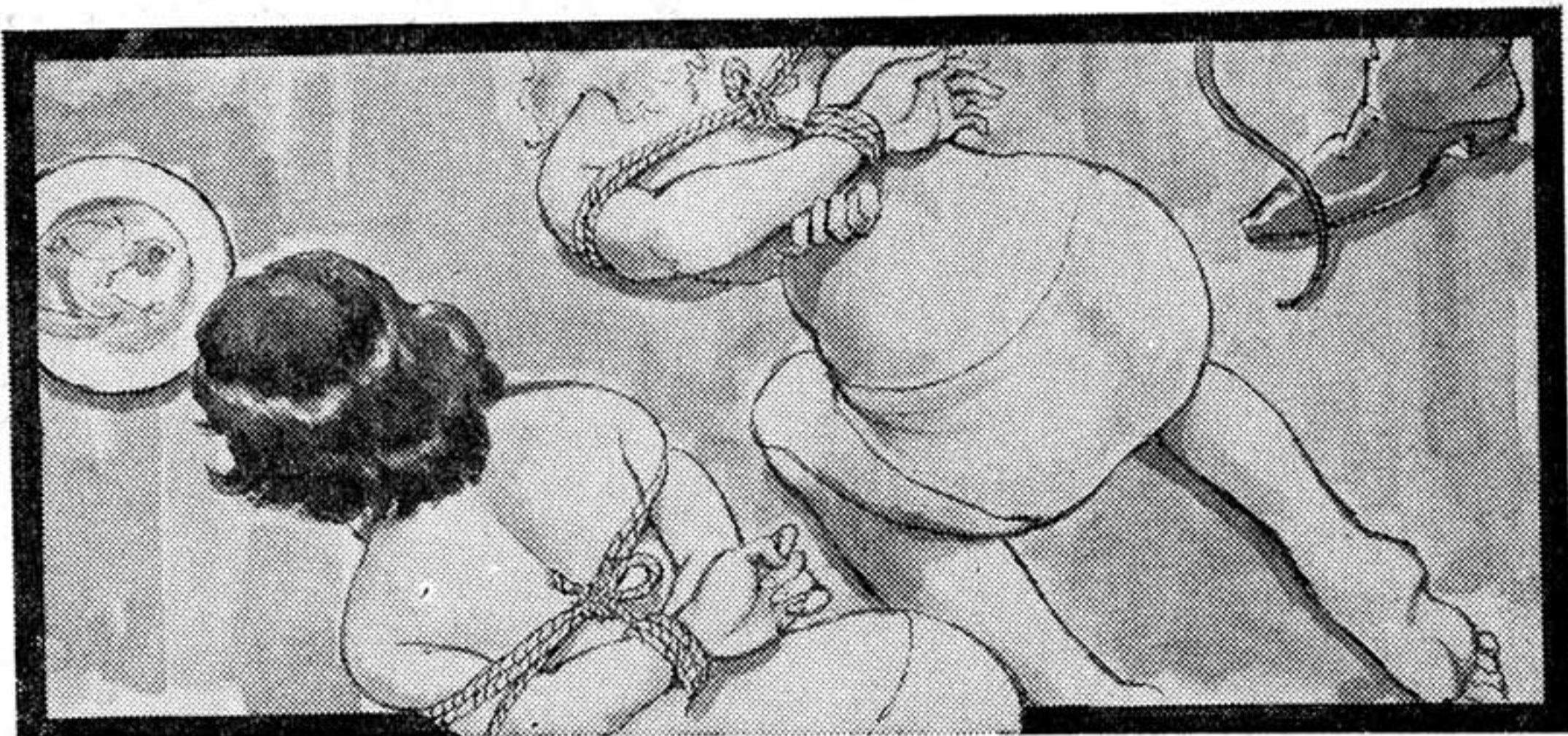
うたれたひょうしに歯があたっちゃった。したくちびるから、あごをつたって、血がひとしく……。

激痛に、一瞬息がとまった。

(ひどい。オジさままで、こんな乱ぼうなさるなんて……)

「きかれたらしゃべるんだ。おれのききてえことをいってくれりゃいいんだよ。え、お嬢さん……クックック、おまえさん、名まえはなんていう？」

「ア、アンナ……ウィ、ウィリアム。あたしは、トレント——ウッ！」
バシッ！



オジさまの手が、くちびるにたたきつけられる。あたしのあたまをつかんで顔をよこむきにしたかとおもうと、ガシッ！ ガシッ！ ものすごいちからで、いすの背にぶっつけはじめたの。

うたれたあごの肉塊がとびちる。

泣かずにはいらなかったわア……。

ガシッ！ ガシッ！

「よけえなこたア、ぬきだといったろ？　じやねえと、おめえさんのドタマ、かちわったるでエ。どうなんだ……さあ、おめえさんとこっちの金髪さんは、どこでジョジョの野郎としりあったんだ、あ？　さ、はやくいうんだ。この家はな、二週間以上もあき家になった。近所だって、すっかり戸じまりがしてあらアな。おれたちがなにやろうと、おめえたちがいくら泣きわめこうと、だれにも気づかれやしねえのよ。さあ、どうだ、これでもシラをきるつもりか？……ジョジョの手したになったなアいつなんだよオ？」

ああ、そんなにあたしをせめないで……たのむから、あたしにいわせてちょうだい……。

「いわねえのかい！」

「いう、いうわ……でも、あなたにいえることは、あ……あたしは、トレント大学へいていて……ジョジョなんてひと、ぜんぜんし

らないの、カレンも、カレンも学生で、新入生で……」

そうかい、しらねえってのかい。なかなか想像力がある学生さんだぜ。よし、そのお脳をちっとばかしはたらかせてやろうじゃねえか……ちっ！　こんな赤んぼつかってダイヤをかつぱらおうなんて、けっ、ジョジョもヤキがまわったもんだ……おい、ごまかさねえでこたえるんだ、いいな！」

「だって……そんなことおっしゃっても、あたし、ほんとなの、学生なの。それでこの、これは、クラブの入会——試験……入会試験なの……あたしたち、この家をわりあてられて、で、で……なかにはいって……はいて、なにか証拠品をぬすんで……いえ、もってこいって、いわれたの。そうしないとあたしたち……だって、NDEの会員になれないんですもの！」

ああ、信じてちょうだい……。

あたしは、いま、こわいの。ガクガク、ガクガク、からだじゅうがふるえてるの。

「いやはや、すばらしい！　なんてヌケヌケとごまかしやがんだ……おい、いいかげんにしねえと、こいつらに少々やってもらうことになるぜ、あ？」

マックスとエディが、くびるをゆがめてあ

たしをみる……。

ああ、もう、しらない、男ってみんなこうなんだわ。

あたしの眼からは、くやしなみだがあふれた。

泣けるだけ泣きたい！ 泣きたい……。

「あたしは……あたし、ジョジョなんてひと知らないわ……ああ、信じてくれないのね……いや、いやよ、もう……NDE……クラブ、クラブの事務所に……電話して……おねがい、マッジ・エイ——ムスを、よんで……会長なの、そのひとがクラブの会長なの……そうすれば、あたしたちのこと……ぜんぶ……おはなし、してくれるわ……ああ、ウソじゃないわ……いや、いやァん……信じてよ……たすけて……このまま、帰して……警察になんかいわないわ、おねがい——」

「ヒッヒッヒ、ポリにいわねえだって？ ちつ、いくらボンクラでも、こんなバカバカしいこというなアきいたことねえぜ。そりゃジョジョにいうセリフだろうぜ。おい、さるぐつわかませろ」

「あ、やめて！ なに……なにしようっていうの、やめて、おねがいだから……あたし、ちがうわ、あ……ム、ム……ムッ！」
「ああ、いやッ！ アンナをいじめないで、

いじめないで……あ、あああ……」

「ああ、カレン」

オジさま——いいえ、もうちがう。あたしのオジさまなんかじゃない。ただのボスなんだわ。ひどいわ、ひどいわ……。

「きやつ……」

ああ、なにをやるうっていうの……。
エディの手に、キラリとひかるジャックのナイフ。

男がカレンにちかづいていく。

あたしは、あたしは、こわい……。

「ヘッヘ、なにもきりつけようたアしねえよ、ただ、こいつがじゃまなんでね」

カレンの胸に手をのばして、男はシュッとナイフをきりおろした……。

「きやつ！」

あたし、こわごわ眼をあけた……。

カレン、カレン。死なないで、カレン……。

セーターがズタズタにやぶかれ、うすいページュのブラジャーとスリップがのぞいてる。おそろしさに焦点をなくしたカレンのひとみ。

でも、でも血なんてひとしずくだってみえなかった……。

「ヒッヒッヒ、ころしちまったら、モトもコもなくなくなっちゃうぜ」

いやしいわらいをうかべて、男はスリップのつりひもに手をかける。

（はだかにされる……あーッ……カレン、カレン……）

ゆたかに波うっている胸に、じつとくいいる男の眼。

ポケットにナイフをしまい、つと、エディはブラジャーのしたに両手をはめこんだ。

「アーッ……」

カレンのせつない鳴咽。くるったようにけいれんする全身。

エディの骨ばったゆびが、ぴったりと胸をかこう。

すっかりとりこになった美しいそれを、ゆつくり、しめつけ、ひともみ、ひともみ、かみしめるようにしほりはじめる。

かたく、にぎりしめ、おたがいをこすりあわせ、かたく、ひともみ、ひともみ、なにかをしほりだしでもするように……。

やがて、精力にみちた男のゆびが、じょじょにブラジャーをさきはじめる。

（カレン！ カレン……）

どうすることもできないカレン。くびからウエストまで、すっかりむきだしになつて……。

「おい、ブルネットのほうだ」とボス。

(ブルネット……あたし? あたしのね……
あ、ああ……)

なれた手さばきでセーターをひっちぎるマックス。

あたし、あたし、くるっちゃう! ああ、
いいの、くるったほうがいいの……。

からだをねじくり、のたくり、もだえ、あ
たしのほほには、いくすじものなみだが流れ
ていく。

男の毛ぶかいゆび。

「エディ、金髪をはじめろ」

カレンのさるぐつわがはずされる。

「いやあ! やめて! ほんとうなのよ、あ
たしたち、入会試験にきたっていうのに!

ウソじゃないたら! ダイヤなんかしらな
いわ! ああ、やめて、あたしをきずつけな
いで! おねがい、着物をかえしてエ! ひ
どいわ、ひどいわ、あんまりだわア!

「ウヒヒヒ……ジョジョのやつ、よっぽどう
まく手なづけやがったらしいぜ。すっかりむ
ちゆうにさせてよ、あなたのためなら火のな
か水のなかなんていわせやがったな。ちっ、
ろくすっぽ、金もやらなかったにちげえね
え……」

(あ、ああ……)

「ヒッヒッ! こんどだきやあ、ちいっとば

かし度をこしてるようだぜ。ドジふみやがつ
て、こいつらあとでこっぴどくやられやがる
ぞ。フフフ、そのまえにおれたちのさばきを
うけていただくじゃんか。それっ、はじ
めろ、エディ!

「いやあ、やめてよオオ! おねがいよオ!
た——す——け——てえ、あたしを焼かない
で、焼かないでエ!」

(焼く? 焼くですって!)

あたし、ハッと眼をみひらいた。

(……)

いや、いやっ!

あたしはみちやったの。ボスの手から、あ
ざやかに灼熱したすいかけの葉巻が、エディ
の手にわたったのを——。

ああ、気がとおくなっていく。

なにもかも、霧のように、もやのように、

あたしをくるんで……。

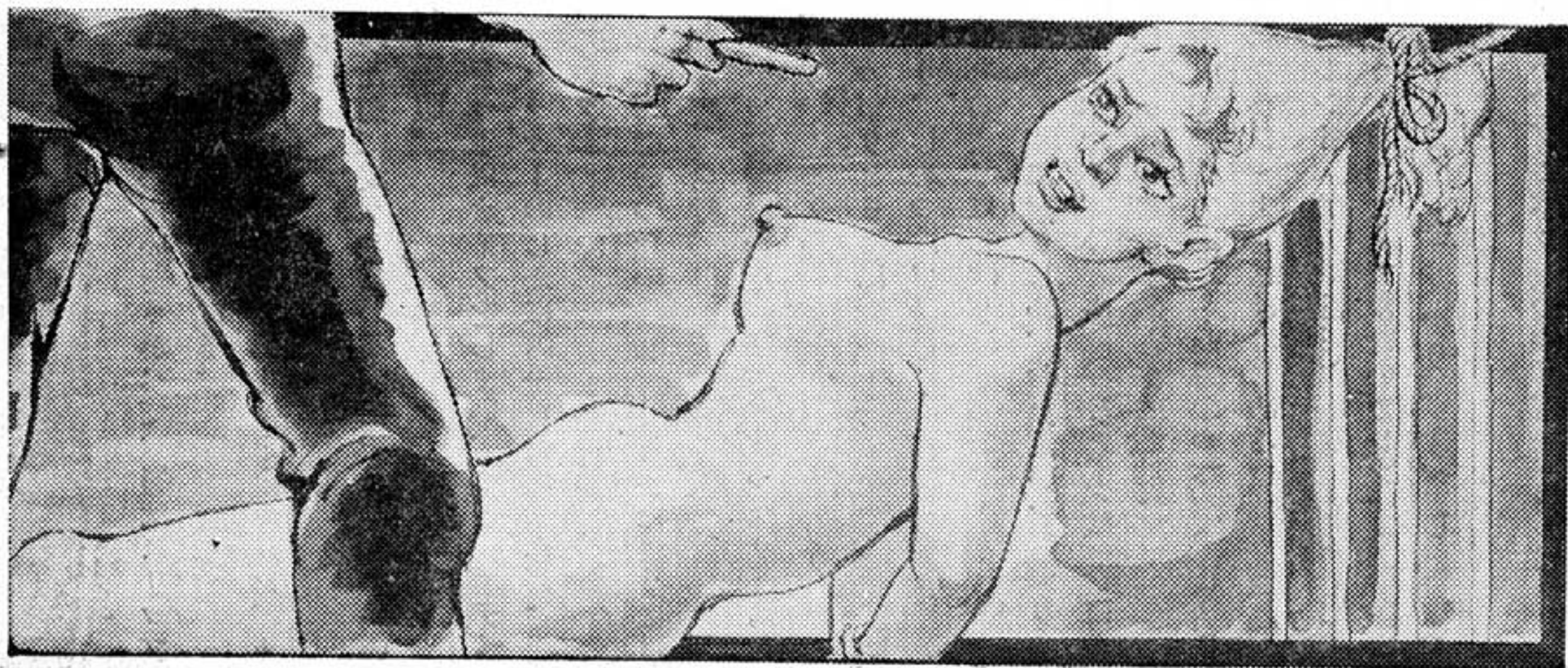
あたし……ああ、いや、やめて……。

あたし……あたし……だめ、だめなの……

ああ、あ、あ……。

「ヘッヘッへ、ボス。こちらア、はやばや
といかれちゃいましたぜ!」

「……ほう。マックス、てめえ、どっかで練
習でもしやがったな」



「ヘッヘッ……」

おれはふと、エディのほうをみやった。

エディのやつ、しらんふりしてやがる。フツフツ、くやしいらしい。かわいいところあるぜ。

「エディ、はじめたらどうなんだ」

おれは、ハッパをかけてやった。

「へいっ！」

エディは、まず、女の左の隆起をえらびあげた。

手のひらで、それをすっぽりととおおう。

葉巻の火を、そのしろいふもとにちかづける……。

ピクッ——火がやわ肌にとふれたとき、女のからだは、電気を流したようにけいれんする。

ゆっくり、ゆっくり、あつい火さきをおしつける。すばやくひきもどす……こんだアベつの部分だ。ふたつのもりあがりにはさまれたあの部分だ……。

ゆっくり、もっと、ゆっくり、もっとだ。

「ウヒヒヒ……」

こりやあ、たまらねえ。ゾクゾクしてくるぜ。

やがてそれが、けいれんをつづけるしろい肉に、シリシリとくいこんでいく。うすいけ

むりをあげながら……。

「ああ、ああ、あ……」

たえまない女の絶叫。

ツメがたって、いすの背をかきむしる。いすのはしからはしまで、強れつな回転運動をつづける女のあたま。わきのしたから、ジクジクにじみでる汗……。

（エディ、いいぞ。それでいいんだ）

「マックス、次はそっちだ。アンナとかいったな」

（アンナ？ カレン？……よかろう、どうせほんものじゃあるめえ）

おれはあたらしい葉巻に火を点じた。

二、三ぶく、ふかふかとすいこむ。

（……）

まっかに焼けてる。いいいろだ。

葉巻をマックスに。

（おオっ！ マックスめ、アジなことしやがる）

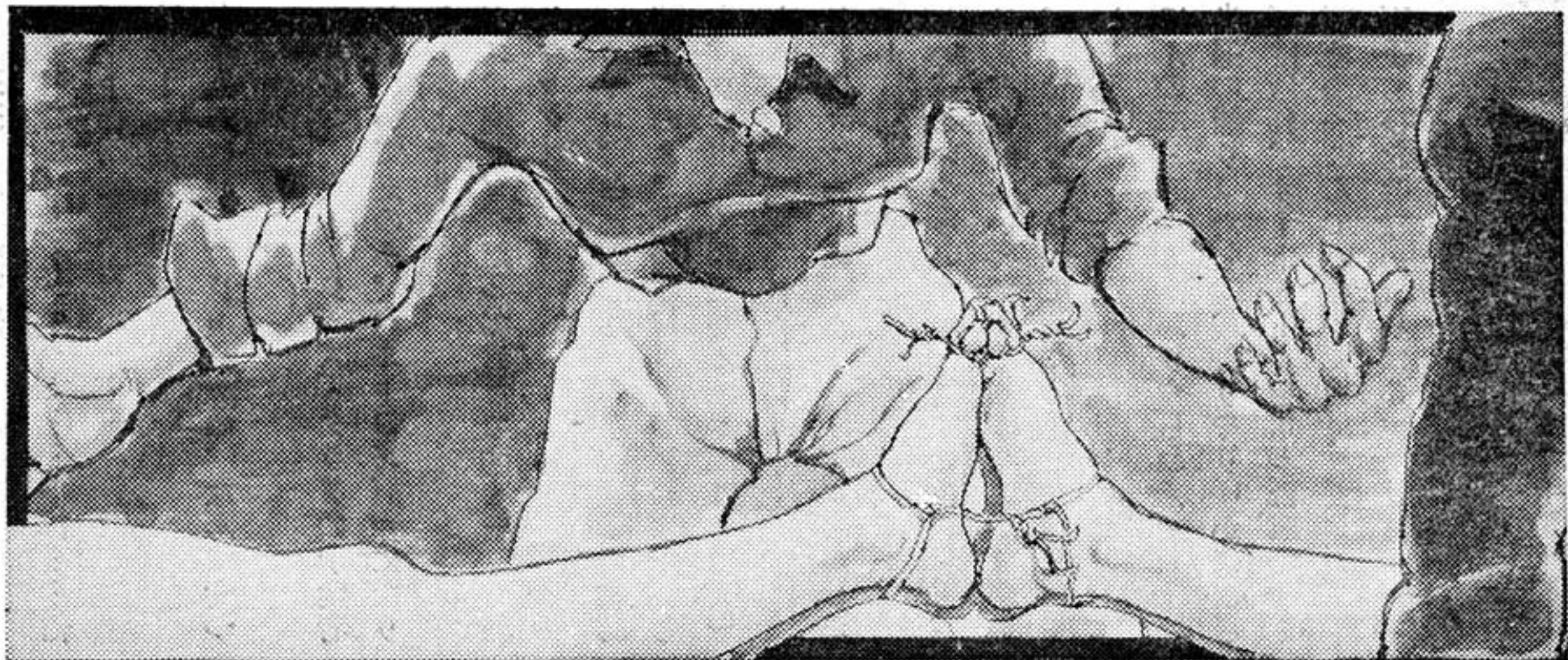
こいつ、女の胸に円をかきはじめたぜ。乳首の飾り窓たア、こりや、シビレルぜ……。

ブルネットめ、正気にもどったな。

火のさきが、チクリ、チクリ。

クリームいろの隆起をかみちぎるように、ひとかみ、ひとかみ、アンナをせめぬく。

ほっそりしたのど笛が、猫みてえだ。ゴロ



ゴロなってやがる。

焦点をもとめるように、くうをさまよう女の眼。

やれ、やるんだ！ こげろ、こがしちまうんだ！

「マックス、てっぺんにもつけるんだ。こがすんだ」

ポツンとびでたなまいきなつぼみ……そうだ、かすらせろ、さ、おしつけろ……シワをよせてちちこまった頂点へ……そうだ、五秒かんたつぶりだ！

「ウヒヒッヒッ……」

みにくくゆがむアンナの顔。ひたいによせたシワ。たぎってくる汗。全身をつきだし、くねらせ、ツメはいすの背をほる、かきむしる……。ヒヒヒヒ……

「よかろう。はずしてしゃべらせろ」

女の充血した眼だま。息もたえだえな女。あえいでいる女。

たまらねえ、たまらねえ！

「あ、あ……かみ、さま、あた……あたしを……たすけて……シヨ、シヨなんて、ほんとに……しらない……ちかうわ……おねがい……あ、ああ、どうか……よんでちょうだい、

クラブ……クラブを……あたしたち、会員予定者で、ここに……いけて……むむ……信じて——あ、ああ、だめ……」

「けっ！ 会員予定者だど？」

あきれたこった。シヨシヨめ、なんて女つかいやがったんだ。

「いやいや、女！ ジャズ・クラブの予定者だともいいてえのか。ベルトのご厄介になりてえのかよ？」

「ボス、焼きゴテだってことですぜ」とマックス。

「バカヤロ。おれア、ちゃんと娘っ子の雑誌で読んだのよ。尻っほ、ムチでひっぱたいちやあ、ウジ虫、くわせるんだってことをよ」おれには考えがあった。

このアマッちよめ、かならずドロはかしたるで！

「おい、こいつらいすからはずせ。エディ、てめえ、台所へいって皿をもってこい。いいか、ゴチソウをこってりつめてだ。さ、はやくしろ！」

ほんの二、三分もかかりやしねえ。

半裸の捕りよたちア、むりやりゆかにひさまづけられ、オートミールをもった皿のうえに顔をつっこんでいるってすばうだ。

両手くびをせなかでしる。



エディとマックスが、おのおのカレンとア
ンナのくびをおさえつける。

そのあいだに、おれが、ふたりのスカート
とスリッパをひきさく。まったく、こたえれ
ねえぜ。

びっちらした絹のパンティが、ふとももに
ぎゅっとくいこんで……ヒッヒッヒ、しまっ
ているぜ。

ブロンドの女のパンティときたら、こりや
アなんてまたちいさいんだ。まんまるい尻の
半分、すっかりみえちまってるぜ。

「ウ、ウーン……」

「ひーっ！」

いい声だア！

たまらねえ！

「カレンとかいったな。正直いやア、なにも
しはしねえよ、う？」

「あ、あたしは……クラブ、クラブ——」

ふざけんな、アマ！

ブルネットめ、ガードルなんかとっちまう
んだ！ ストッキングなんか、クソくらえ！
「さあて、おふたりさんよ。これから、ちょ
つとしたクラブあそびをやらかそうってんだ
が。どうだね？」

かわいたくちびるをひたす。フン、それに
しちやア、クルのかはやそうだ……。

「おふたりにわざわざあつらえた夕食だ。ぜ
ひとも、きれいさっぱり、たいらげていただ
こうじゃねえか。おはなしは、そのあとゆっ
くりうけたまわるとしましょうや」

おれはひじかけいすにもどって、ドッカと
腰をすえた。

すばらしい「晩さん」だ。

眼をほそめずにはいらねえ。おれは、ふ
たつの皿をみやった。

くさってすっぱくなったクリーム。悪臭を
はなっているさかなのハラワタ。ぐにやぐに
やにとけたチーズ。そのうえとうがらしいり
のソース。くろずんだバナナが二、三きれ。

「お嬢さんたちア、お酒ものめんだらうね
え？ ヒッヒッヒ……アンモニア・ビールも
いれときましたよ。ウヒヒヒ……」

いかすじゃねえか。

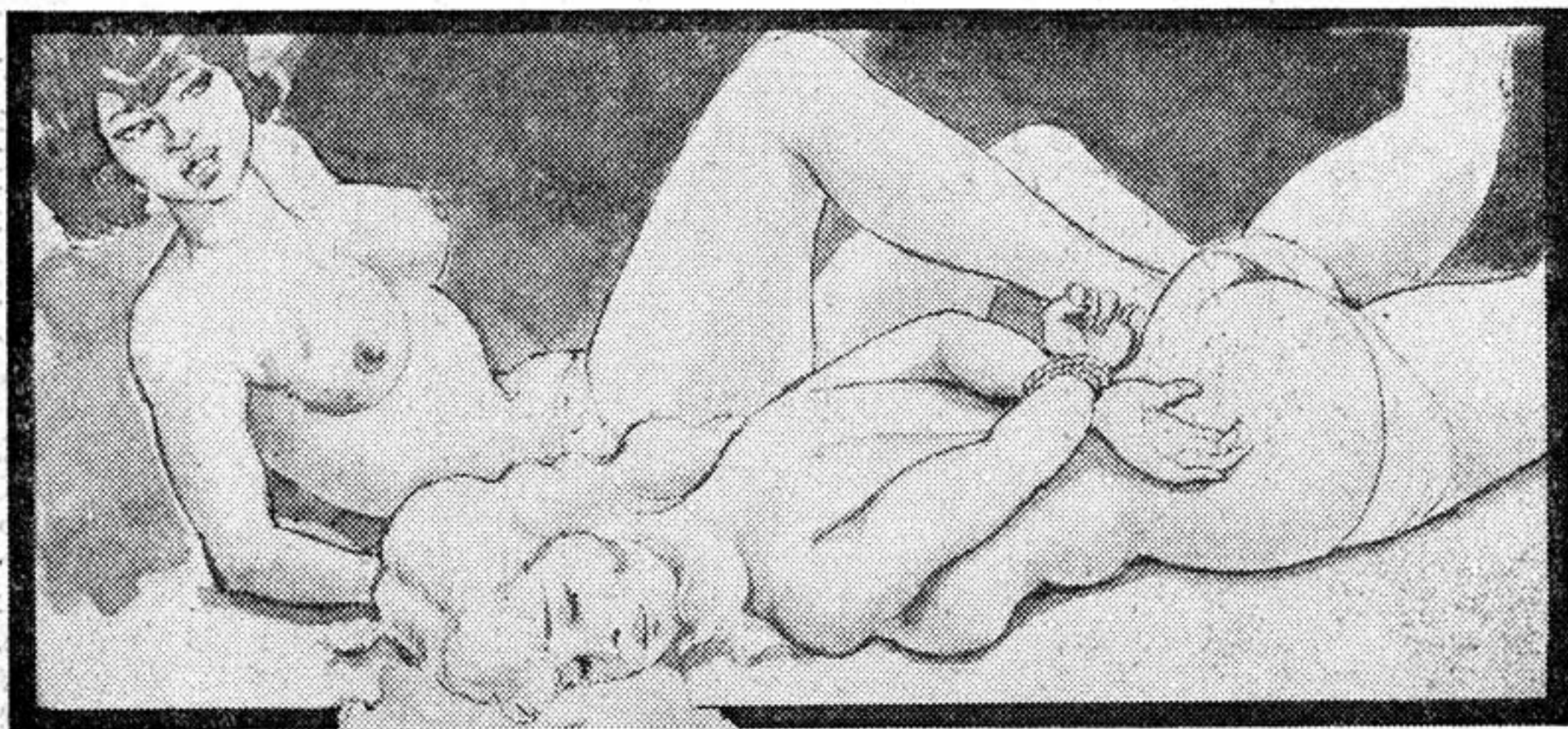
こういったくさりものをゴタゴタ、ゴタゴ
タませあわせて、みただけでもゾクツとくる
ぜ。

「おくちを自由にさせてやれ」

さるぐつわがとかれる。

まあ、エディとマックスのもっているベル
トをみてやってくれ。

ぐっと感じるねえ。いかにも重量感にあふ
れて、フッフッ、やるほうらしくじゃねえっ



てとこだ。

「さあ、どうぞ、おたくださいな……たべてくれねえのかい？……はくんじゃねえ、くうんだ。くえ、アマ！」

刑執行者たちめ、おれの合図もまてねえときている。

バシッ！ ム、ム！

ガッ！ ウーッ！

いっせいに、ベルトの殴打。

つきでた臀部の肉に、めりこめ！ めりこめ！

ビシッ！ ビシッ！

女のひざがガクガクゆれる。

もうすこしだ、それっ、やるんだ！

「ひーいっ!!」

たべてるぜ、たべてやがる！

ツメをたて、尻をびくつかせて……くっつて、くっつて。ウヒヒヒ……。

ガシッ！ ガシッ！

それ、もっとやれ。もういっちょう！ バ

シッ！ これでもか！ ガッ！ ガッ！ ガ

ッ！……もういっちょだ。まだまだ、くいた

りてなさそうだぜ、それっこれでもか、これ

でもか、ガッ！ ガッ！……。

やがて、くれないの条痕が、しろい肉のう

えにむくむくとふくれあがってくる。

それが、たちまち炎症をおこして、肉のしろみとあざやかなコントラストをしめしなから、くろぐろとしたアザにかわっていく。

ピクッ、ピクッとぜん動する尻の肉。そこに、いたるところ、鉛いろのしみがついていく。

ベルトがたたきおろされるたび、女はオートミールに突進する。

悲鳴をあげ、せいせいあえぎ、すっぱいクリムをなめ、にこりじるをすすする。

ガシッ！ ウッ——ゴクッとのみこむ。

なんともいえない臭気だろう、え？ 肺、胸、グングン、グングン、おしひろがってくるだろう、ウヒヒヒヒ……。

「ウ、ゲ、ゲー……」

(フッフッ……このへんでやめといたるか)

葉巻をすって、ベルトをおろさせる。

エディとマックス、はあはあ、いってやがる。

「さあ、どうなんだ。ジョジョはどこでダイヤのこと感づきやがった。え？ もうしらないとはいわさんぞ！」

おれは席をたって女たちにちかよった。

ゆかのうえに、ただのたくりまわっている犠牲者たち。

きめのこまかい尻の肉はすっかりはれあが

り、そこにはなんぼんもの浅ぐろい条線をえがいている。

みごとなゲイ、ジツ、だ！

「おい、いくら泣きわめいたって、こちとら

ア、そんなことでだまされやしねえぞ！」

「しらないわ、しらないわ、あ、ああ……」

けっ！

「ジョジョの野郎め、なんてえ女よこしやがったんだ。ち、うまくしこんだもんだ。こんなごう情もおめずらしいぜ。なにやらかしても、くちをわらねえってのかい……」

おれは、むしろあきれたよ。しかし、このままじゃすまされねえ。

「やい、女郎ども！ おめえたちがその気なら、こっちにやア、まだまだネタはあるんだ……ちつきしよう！ 手ほどきうけてえってんだな。ようし！」

おれは、覚悟をきめたぜ。

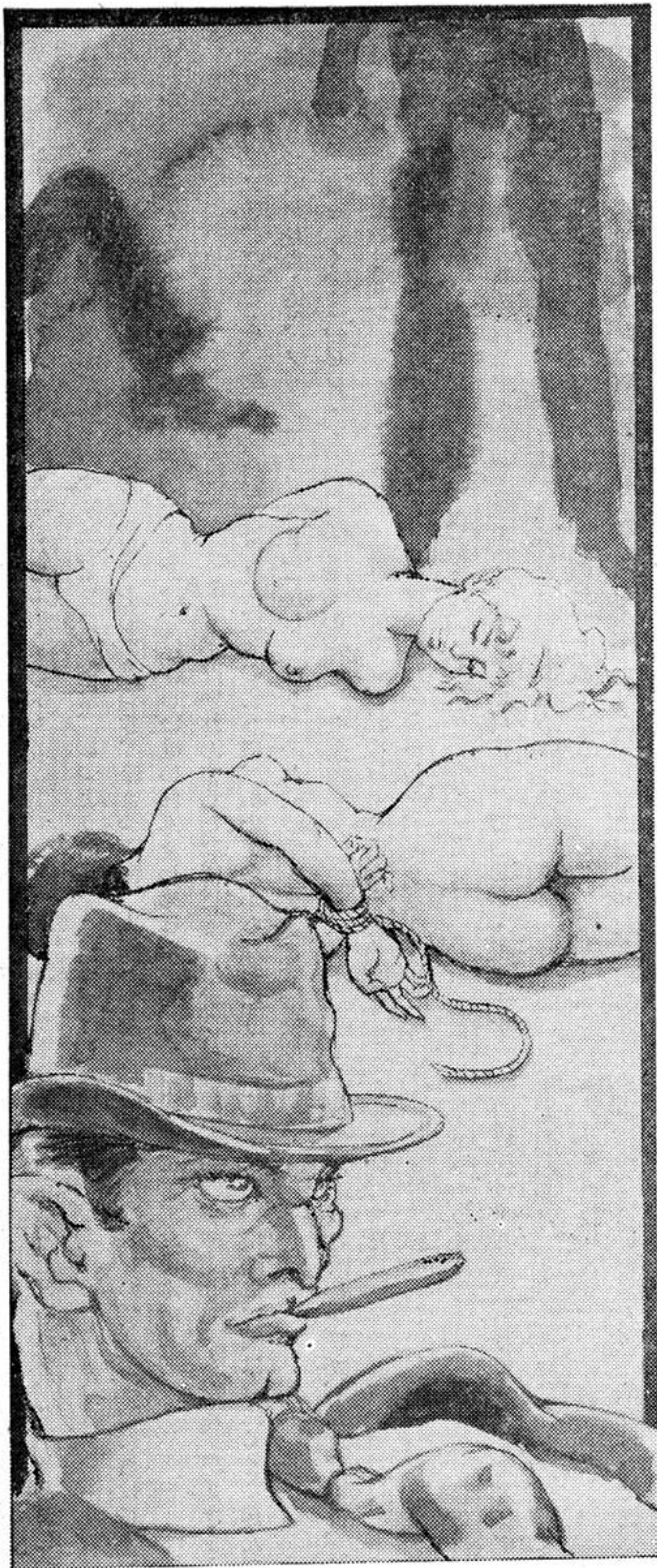
どうしてもドロをはかねえってエなら、そのぶん、たっぷりとやらかしていただくぜ……。

「エディ、マックス。ピン・アップだ！」

五分後——。

そして、きみようなことがおっばじまったのだ。

アンナの右あしとカレンの左あし。アンナ



の左あしとカレンの右あし。それぞれが、まず、びったりとくっつけられる。

くるぶしと十ぼんの足ゆびが、強じんな針がねできっちりとしぼられる。

エディがロープをとりあげ、そのいっぽうのはしを、カレンの金髪にゆわえつける。

アンナの髪の毛の先たんには、マックスがべつのロープをむすぶ。

それがすむと、ふたりの手したがカレンを

だきかかえ、空中にからだをうかせる。

ボスが窓のところへいき、カレンの髪をゆわえたロープをひっぱり、そして、もういっぽうの先たんと、おもい真ちゅうの窓ワクに固定させる。

ついで、アンナがかかえあげられる。

そのあいだに、ボスは、アンナの髪をしぼったロープをひきずって、さっきの窓と、ちようどむかいあわせのところへいく。

そこにあるラジエーター・パイプに、ロープのさきを固着する――。

それは、なんと！ なんとという奇怪な光景だったろう！

いまや、カレンとアンナは“人間ハンモック”でしかなかった。

からだぜんたいのおもみが、髪の毛に、むきだしの両あしに、くるぶしに、足のゆびに、ふかい、おもいいたみをともなつてのし

かかってくるのだ。

一秒だって、たえていられやしない……。

それでいて、ふたりのどちらかがほんのすこしうごくだけで、それがなん倍ものいたみに変化して、すくいようのないなかまを苦悶においやるのだ。

「フッフッフッフ。これこそ、美人写真をかべにとめるってシロもんだ。フッフッフ、手はどきたア、まさしく、このピン・アップなのよ。ヒッヒッヒッ……」

ボスの手ににぎられたピン・ボックス。これ以上、なにをやるうってコンタンなのか？

箱からピンを一ぼんぬきとり、エディはカレンのよこにたつ。

こげあとがいったいのレカンの胸。男はそこにピンをあてる……。

チクッ、チクッ。

つぎの瞬かん、男はピンをさしこんだのだ……。

「ウーッ!! ク、ククク——」

アンナの胸には、マックスのピンが……。

「あ、あ、あ——」

かんだかい女の悲鳴は、もうとても人間とおもえない。悲さんに、あらあらしく、のどもとにたまりこむ。

さけたくちびるからは、ヒステリックなさけびが流れでる。

ピンの攻撃は、しつようにおそいつづけた。そのひとつき、ひとつきに、人間ハンモックは、はげしいけいれんをしめした。

ひとりがいれんするたびに、それは、ひかりの反射のように、あいてのからだをゆりうごかし、はりつめた髪の毛をますます緊張させるのだ。

ざっくりと髪がぬけるようないたみ。

髪を、あたまのかわを、キリキリひきしほる……。

男たちは、まだまだ、このピン・アップをやめようとはしなかった。

それどころではない。

へそのあたりにピンをあてがったとおもうと、一直線に、足のところまでかききったのだ。

するどいキズぐちは、なおも侵略をつづけた。ピクピクとけいれんしているふくらみまでもおかし……ついには、あの肉づきのよい部分にまで。

「クク、クッ!」

ピクリッとからだをふるわせて、カレンが失神した。

ボスがすすをたつ。

男は、あつくさきの焼けた葉巻を、ああ、なんということだ。それを、グイッとおしつけたのだ。

こうして、ピンの責め苦は胸からはじまつてひざにまでおよんだ。

娘たちは、のたうち、もだえ、あえぎ……このすまじい煩悶に、顔はみにくくゆがんでいた。

動物のようなうめき声が、たえまなく、くちをついてでた。

「……」

合図がかわされた。

刑執行者たちが、小刀でロープをきりおとす。娘たちは、ものすごいひびきをたてて、あたまから落下する。

それが、ムチをさんさんにうけた尻肉に、たとえようもないさん忍なショックをあたえるのだ。

さいごに、くるぶしと足ゆびのひもがはずされる。

「さあて、ジョジョのやつ、どれぐれエこいつらをしこみやがったか、たつぷりたのしましてもらるか」

男はひじかけいすにもどりながらいった。「エディ、マックス。おめえたち、きょうはよくやってくれたな。さあ、さきにくわせて

やるぜ」

「ク、ククッ！ ウッ——」

（ああ、まだやるの！ ピンだけはやめて、ピン・アップだけは、やめて……）

彼女たちの、やわらかい肌についてきたピンの責め苦——。

（ああ、むりもない……ふたりの娘が、それをピンだとおもったのも）

「あ、あ、あ……」

あたらしくおそってきたこのピンは、おもく、ふかく、腰へ……おもく、ふかく、ふかく……。

「いけねえ……ちがう。ボス、こりや、マズった。ジョジョのやつが、はじめての女つかうなんてこたあねえ……」

「まったくだ！ ボス、こちらです……」

「……なんだと——」

（……こいつら、ちがう？ ちがうって？……なんてこった、けっきょく、こいつらア、ほんとのことってたってワケかい……）

「……」

ながい沈黙がつづいた。

やがて、ボスとよばれる男が、ポツリといった。

「ダイヤはぶじだったんだ。なにも心配する

こたあねえ……」

男はゆっくりと着物をぬいだ。

かすかにすすり泣いているカレンをじっとみおろし、男は、とつぜん、くるったようにのしかかった。

まもなく、男はアンナのほうにからだをよせた。はじめは、クマのように彼女をだきしめてじっとしていたが、あらたにわきあがってきたらしく、はげしいいきおいでみだしはじめた……。

午前四時——。

年おいた夜警が、カールソン家の居間で、はだかのまましばらくにアンナとカレンをみつめた。

電話で警察がよばれ、救急車がふたりを病院にはこんだ。

一週間がすぎた——。

すっかりよくなったふたりは、大学の寮に帰っていた。

「カレン……」

「アンナ」

「どうして、あたしたち、カールソン家からなんにもとってこなかったの？」

■見たもの聞いたもの

日劇ミュージックホール九月公演「七いろの欲望」に特別出演しているイギリス人夫妻、P・マーガレット、P・モリスの演ずるムチの踊りは、まさしく「残酷シヨウ」。

海外のシヨウ映画などに出てくる形式的なムチ踊りとちがって、長い皮ムチを本当に女の素肌へびしっぴしっぴと当て、巻きつけるのである。むろん、白い肌に寸時、赤いムチあとが走る。女は表情にマゾ的な恍惚感をうかべて身をくねらせる。

男のサドと女のマゾを生かして構成し、おたがいの欲望を同時にまんぞくさせながら出演料もとり世界各国を旅行している幸福な一対、とみたのは、あまりにも、うがちすぎだろうか。



体当たられマゾヒズム論

エダ・キリコ

カッターも

体当たりマゾヒスト氏こと水尾究先生とのデイトを、二度も私はすっぱかしました。

そうして、もうほとんど忘れかけていたやさき、先生は、ひょっこり私の前に現われ、三度目のデイトは容赦なく成立させられたのでした。

先生のすさまじいエゴに打ち負かされた私は、戦慄をともないながらも、女王さまとして、ハレムの城へ乗り込むことを承諾してしまっただけです。

ゴム草履をはいた、へっぴり腰のおどおどした、ちびっこ女王さまです。

マゾヒスト氏を前にして、私のなかに潜むサディズムが疼いたわけではございません。

だからといって、自己の可能性を試してみなかったのだなどと、そんなキザな言い回しはよろしゅう。

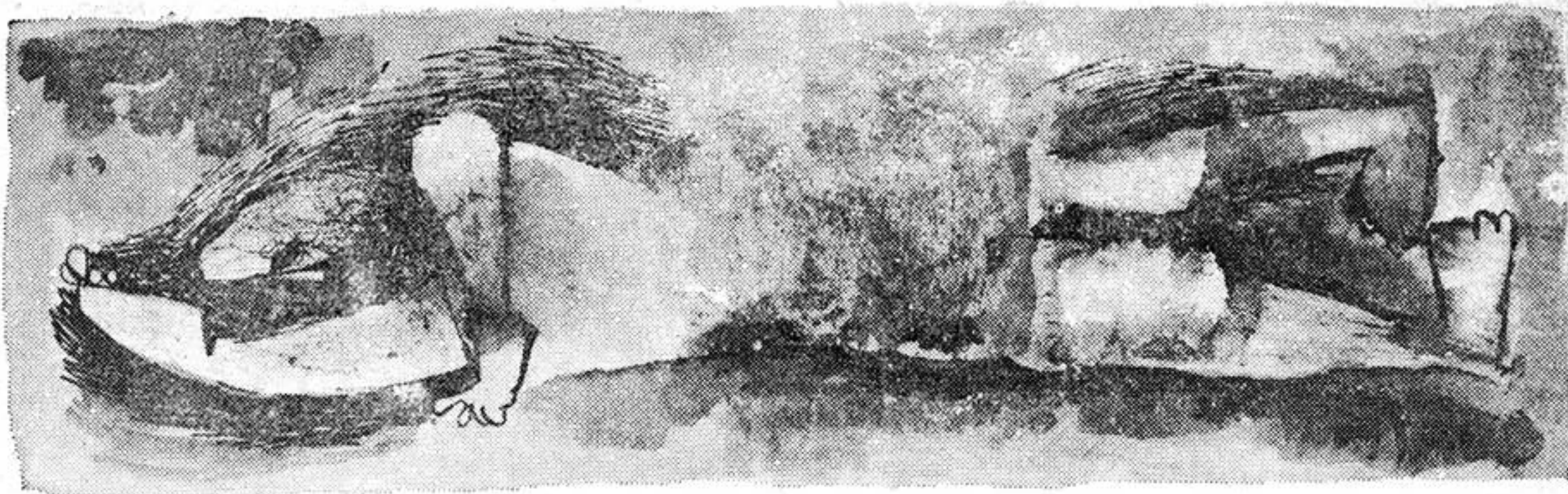
そんなことは、ま、どうだってよろしいのです。

のぞき見趣味でもなければ、サーヴィス精神でもございません。

結局、何が私をそうさせたか、この問いに対しては、わからないと答えるよりほかにはないのです。

きわめて無責任な私のことです。無責任な時の流れに、無責任に合流してしまっただけのことなのです。

私はこのうえもなく人間を愛しているつも



りしております。

でありますから、見たい、知りたい、聞きたいという欲望はとても大きいのです。

そんな私にとって、水尾先生が、そういうくさぐさの欲望を凝集せざる対象となったことは言うまでもありません。

「ありや、気違いだ」などと、一笑のもとにふしてしまふほど私の感受性はひからびてはおりません。

私のささやかなヒューマニズムが、「ああ女・女・女の集団のなかに私を深く埋めて」という先生の切ない吐息に、そうしてそのひたむきなエゴに、なんとかして応えなければ、と疼いたのかもしれない。

かといって、サーヴィス精神とは、まったく違うのです。

サルトルの言葉を拝借すれば、マゾヒズムとは、△自己の客体性によって他人を魅惑するための試みではなく、他人に対する自己の客体性によって自己を魅惑するための試みである▽だそうであります。

「ぼくは物になります。あなたはぼくを物として扱っていただきたいのです。ぼくはあなたの忠実なる下男になります」

なるほど——なんのこたあない、エゴなのです、そうして性欲なのです。

だが、ここで、フロイド先生じゃあるまいし、精神分析など施したところでなんになりましょう。

私は、私の愛の対象を除いた他人への肌の接触を嫌悪いたします。

満員電車のなかで、四方のぬくもりに嘔吐を催したことさえすくなくございません。

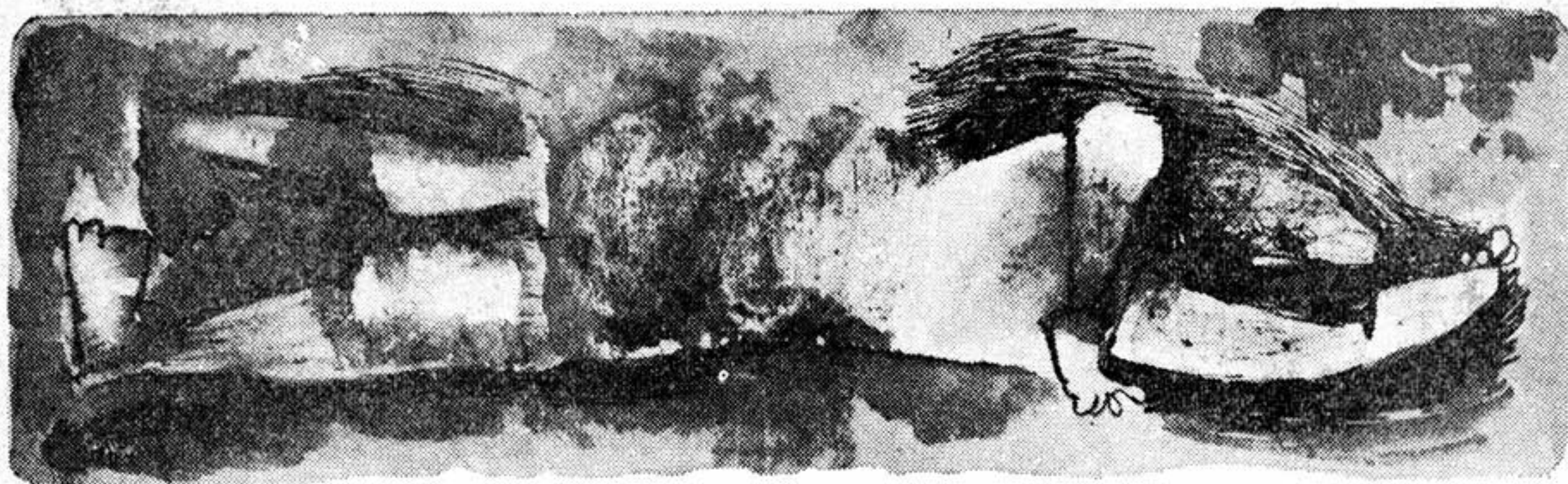
そんな私ですから、足のうらを舐めさせてくれ、ひっぱたいてくれ、馬乗りになってくれ、顔を踏みつけてくれ、……そんな請願には、私、身の毛のよだつ思いをしておりまして、それにいささか食傷きみでございました。

はて、どうしたらよいものかと、次第に卑屈な下男の様相を呈していく先生の一举一動を確めながら、私はとほうにくれました。

奇妙なことに、私達はこれから舞台に立つとして、役者たちのように綿密な打ち合せの儀式をもうけ、そうして、いったんお別れいたしました。

一対一では、どうにも心細かった私、おもしろがって、笑いながら見て呉れる第三者の存在が必要だった私は、親友のE君を呼びよせたのです。

ふたたび、E君と私の前に現われた先生は、すでに、間違いなく、すばかでございます。



した。

二人を従えて、女王さまは、毅然としてハレムの城へおもむきます。

ハレムとは、何を隠そう、私の小さな汚ないお部屋のことなのです。

こいびとの写真、ピンアップ、ギター、スケッチブック、キャンバス、本、レコード、ポータブル、私の体臭の充満したそこで、私には、もうちゃんと、ひとつの計画がございました。

ここで、私はすこし顔を赫らめながら、私が画かきのたまごであることを告白しておきましょう。

ついでながら、すこぶる気紛れなそれであることも。

私の計画、それはパンツ一枚の先生のからだに絵のぐをぶっかけ、足でふみつけ、けとばし、キャンバスに「いろ」をつくること。

さ、そこで、先生にハダカになれと命令いたします。

先生のはだかは、やせて、貧弱で、前かがみの姿勢は、卑しい下男のおいがいたしましたし、こんな汚いやセッポチに手を触れるなんてことは、まっぴらごめんなすって……ふと、私は気づきます。

下着一枚をとおしてみた先生のシンボル。

これだ！

これをつかってやれ。

そこで、あたしは計画をかえましょう。

先生をまっパダカにいたしましょう。

そうして、シンボルをつかって、絵のぐをいってちょうだいな、テナ具合に生先をいじめちゃいます。

汗を流し、からだをツウイストさせ、悶々として絵のぐをとく先生。

あかく、あるいはしろく、みどりに、きいろに……絵のぐの皮膜におおわれてしまう先生のシンボル。

素晴らしい、この男性の象徴を、ひとつの器具としてもあそぶことに快感を感じるあたし。

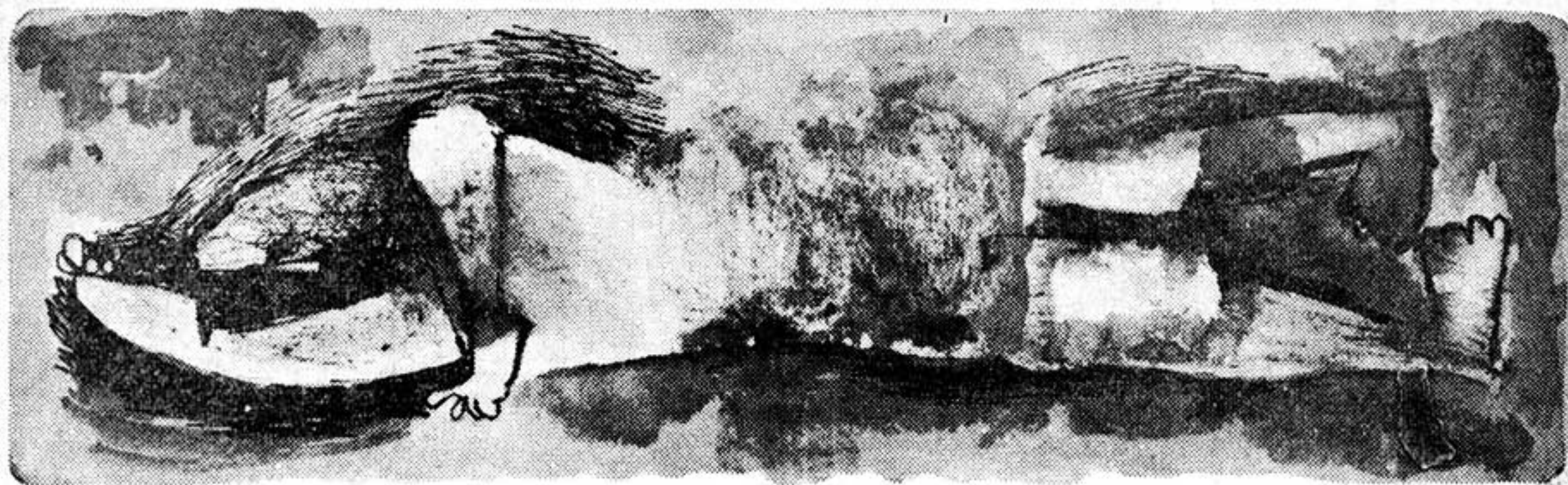
これは、男にたいする、女としてのあたしのコンプレックスなのかしら？

さ、それから、あたし、私を描くのよ、とポーズいたしましょうね。

もちろん、シンボルをつかわせます。

手でシンボルをもたせ、その先たんは筆なのです。

この運動が、先生の自慰運動になっているってことに、あたしは気づいてはいけな



です。

なぜなら、あたし、おんななんだもん？

でも、間もなく、あたしはそれに気づくでしょうし、そこであたしは口汚くののしりましょう。

ちきしょう！

役立たずの筆！

ロクデナシ！

そうして、絵のぐをぶっかけ、足でふみつけ、けとばし……。

だが、もちろん、私はそんなことやりはいたしません。

けれども、私のイメージーションの範囲が、そこまで墮落したとしても、誰も責めたりはできないはずです。

恥をしのんで、私はそこまで赤裸々（？）に告白してしまったわけでございまして……かわいいやつだとも思っていただければ、ほんとに倅せでございます。

さて、とほうにくれた女王さまのやることはといえば、キャンパスの上に匍いつくぼう下着一枚だけの先生のからだに、絵のぐをたらたら流すだけ。

すこぶるだらしない、モタモタした女王さまだったのです。

緩慢な私の動作にももの足りない先生の目はただひたすらに物乞いの表情でありました。

その切ない吐息を、ひしひしと、肌身に受けとめながらも、私は一刻も早く、この下男をハレムから追放しなければと、あえぎ、あえぎ……とても孤独でした。

全身、えのぐだらけの先生に、私はそのまま着衣を命じ、さあ、もうお前の仕事は終わったのだとばかり、残酷にも途中でさじを役けてしまったのです。

快感など、そうして男性へ対するコンプレックスなどもってのほかでございます。

私、先生のエゴをおうらみ申します。

そのエゴに犠牲を払った私を憎みます。

「愛は、対象を得てから初めて起こるものではなく、初めからこのころのうちにあるものが、対象を媒介とすることによって引き出される——」

先生のM論のなかで、私はこのような文章を読んだことがございました。

それでも、私の愛は、——私のなかのサディズムは、依然として影をひそめております。

いまの私はいろんな倅せにとりかこまれております。

勝手気儘な私でございます。

私への忠実な下男など、煩しくてそんなものはごめんこうむりたい。

私の女王失格、それは可能性の欠如でもなければ、水尾先生の演出の不出来でもございません。

水尾先生と私との成り行きが、きわめて不自然なそれだったからにはかなりません。

そうして、その不自然な成り行きが、私の自発性とは関係なく、不自然なお芝居を私に仕向けてしまったのだとも言えましょう。

で、結果としましては、たがいが孤独のまま、どうにも結びつきようのない一人芝居を、気の違くなりそうなほど重々しい雰囲気の中、演じたにすぎなかったのです。

そうして、私と水尾先生とは、このうえもなく淋しい、独りぼっちのふたあり。

いつか、どこかで、自然な成り行きのもとで、私のサディズムという名の花は、けんら

んたる豪華さで見事に花開くことでありましよう。

無理強いされて引きだされた可能性は、にせものでしかないのです。

充たされない思いでいる先生は、なお私におねだりを続けます。

「おじょうさま、どうかもういちど……」

「ダメですあたくし、どうかもうこれ以上いじめないでください」

拒む私に、それでは、ネクタールだけでも……と哀願する先生、ズボンやシャツに隠された絵のぐだらけの先生のからだに、苦い笑いを覚えながら、やはり拒んでしまいました。

後悔への置きみやげなど差しあげたくはございませんもの。

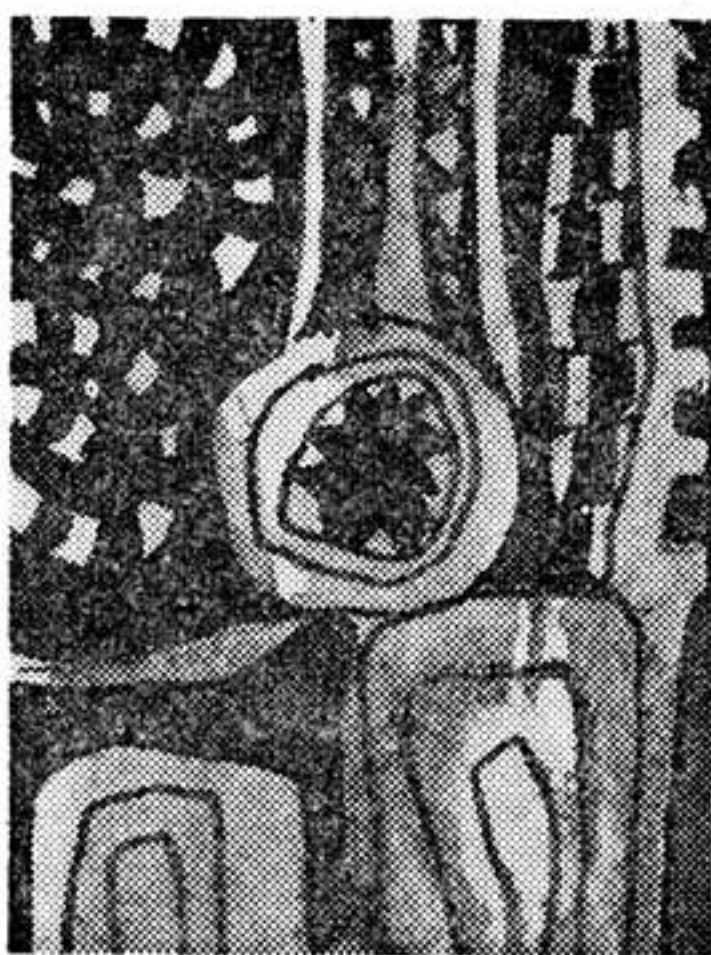
「残念です。あなたみたいな女性には、そうざらにはお目にかかれるものではないだけに、本当に残念です」

お世辞は、もうたくさん。

私のこのいらだちを、どう処理したらよろしいんでしょう。

充たされなかったエゴを引きずって、力なく私から遠のく先生の足どりを、これから先も決して滑らかではないであろうその足どりを、噛みしめながら、それでも、私は先生のエゴを讃美したい。

そうして、からだを大切にしてくださいと一言を、心をこめて差しあげたい。



愛読者のみなさまに急告！

既刊号残部が非常にすくなくなっております

▼三十五年十一・十二月号▼三十六年十二月号▼三十七年二・四・五・八月号はぜんぶ売り切れしました

☆最終ページの詳細をご参照ください

● エダ・キリコさんとの三時間

灰色の夜

水 尾 究

(カット・エダ・キリコ)



1

中野駅の南口、Mという喫茶店で、エダ・キリコさんと会った。飯田編集長が紹介してくれたという、あらかじめそういう約束でその喫茶店に出かけたことのように聞こえるが、そうではない。ぼくがキリコさんと会ったのは全く偶然である。

ぼくはそこにキリコさんが来て居ることを予期しなかった。また飯田編集長も、そこにぼくが来ることを予期しなかった。ふたりながら全くの偶然である。

なぜぼくはキリコさんに興味を持ったか、彼女にかしずきたく思ったか、それは彼女が、その小がらな優姿を『裏窓』の表紙やグラビアに飾って、雑誌の市価を高からしめた

モデル嬢であるという理由によるものではない。それより、彼女がサドの『食人国旅行記』についての感想をとりまぜた雑記を発表した女性であるということに理由の多くはあった。なお、それがサドものでなく、マゾッホものについての雑記であつたら、いっそうぼくの感興はそそられたものと思う。

2

ともかく、サドを読んでサド論をぶつ加賀まり子や、映画のベストテン選出で世界残酷物語を第一位に推した湯川れい子に興味を持つように、サドの『食人国旅行記』を論ずるエダキリコさんに興味を持つ、そういう形でエダキリコさんの持ち方をぼくは彼女に持った。

別にその論が卓越したものであつたとか、

鋭いユニークなものであつたとかの理由ではない。

モデル嬢がサドを論じる、それはあくまで企画のおもしろさであつた。内容のおもしろさとしてプラスするものはなかった。プラスしなくても、企画のおもしろさが読者を引きつけた。それだけで目的はりっぱに達せられた。

つまりこのように、ぼくのキリコさんに対する興味の持ち方は、サド論を書いたモデル嬢(実際は彼女はモデルを職業としている人ではない)に奉仕をするという、その企画自体にあつたのかもしれない。その他のものは何もなかった、といえば極言にすぎようが。だからこの際、キリコさんが、ぼくの本来の好みに合った顔立ちの人か、からだつきの人

か、ということにはあまり関心はなかった。これは本来、面食いであるほくとしては珍しい現象である。

それともう一つ、彼女が美校出たての画家の卵（彼女が実際に、画家志望であるかどうかは別として）だということが、彼女への興味のひとつとなった。マゾ小説、▲燃える薔薇▽の大手エリサが女流画家であった、というだけではなく、絵でも描こうという女性、あの感覚的な、あの奔放なポーズが、ほくを引きつけるのである。ともかく絵に限らず芸術に志向する女性には、それなりのプライドと気取りと反良俗的なポーズがある。彼女らのスタイルは、おおむねズボンを用いるボーイッシュなものが多い。こうしたイメージが重なって、美校出のキリコさんに対してのほくの期待は、かなり高められることになったのであった。

3

ほくの目から見たキリコさんは、女優の奈良岡朋子に似たところがあつた。もちろん年はずっと若い。背も低い。顔は奈良岡朋子の面長に比べ、円っこい。線もあれほどの個性的な強さはなく、実際のキリコさんはもっと弱々しい。初対面だからというだけでなく、

彼女の口数はいたってすくない。地味な人である。

「S派の男性とM派の男性とを比べて、どっちがより多く興味が持てますか」
「どっちがどっちとも、裏窓を読むとおもしろいですわ」

「マゾヒストをどう思いますか」

ほくは彼女の答を迫った。どうしてもマゾヒストのほうが、サジストよりおもしろいと、強引にでも彼女に答えてもらわねば気がすまない性急さで。

「そう、マゾの方、おもしろいと思いますわ。思いどおりに、うんといったぶってあげたい」

彼女は笑った。片ほおにやけどのあとみないなツレがある。そのツレのせいでもなからうが、彼女の笑いも少しツレたように小さな笑いだけで消える。寂しい笑いだ。

「早速今晚にでも、アルバイトしてみませんか」

「いえ。今晚は約束がありますので——」

「あすならいいでしょう。あしたなら——」

「そうですね、あしたなら。お務めが終わって六時——」

「ここに来ています。六時、まちがいなくね」

この確約でほくはあすの期待に興奮した。飯田編集長は、横でそのなりゆきを見聞きしながら、一言の干渉もなしに笑っていた。

地味で小がらでことば数少なく、丁寧で、画学生らしい奔放さはなかった。だがこちらから話すと、小さい声ながら、言うことははっきり言った。たばこを吸い、酒を飲む。彼女はよくアルコールをたしなむそうだった。このひかえめな目立たぬ人が、と思う。またサドやマゾに興味を持つのか、と思う。この切れ切れに断続した妙に矛盾した印象の中から、何が飛び出すか、とにかくキリコさんには、すべてを心得きっているといったようなうなずき方をした。喫茶店を出るとき、彼女の手さげをいちはやくとって、後に従った。

ほくに荷を持たせることを別に遠慮はしなかった。先頭を歩いていった飯田編集長が、お伴のように荷を持って後に従っているほくを振り返って見て、やっぱりね、といったように微笑した。

4

その翌日、キリコさんから電話があつた。せっかくの約束だったけど、今晚急用ができて行けないから、あすにしてほしいという電話であつた。その日の期待にはずんでいただ

けに、その出ばなを軽くなされた格好になった。だけど、急用ならばいたしかたもなく、彼女のいうとおり、あすを待たねばなるまいと思った。翌日また彼女から電話があった。今日も急用ができて行けないので、またあすに延ばしてほしい、というものであった。ほくは仕方もなく承諾はしたが、この二度目の電話で期待に燃えさかっていた胸の火が消えた。余じんのくすぶりだけが苦しかった。三度目の正直というが、もうほくは当てにできなかった。

だが翌日、こちらから電話をかけて、その日の約束を彼女に確認させた。何か居たたまれないような、情性上の気持ちからだけであった。ほくはその時、彼女が、また急用とかでさらに約束を延期するか、あるいは改めて約束を断わるか、どちらかだろうと思った。ところが、今度は機先を制してこちらが先に電話をしたためか、予想に反し、あっさりその日の待ち合わせを承諾し確認してくれた。

約束の六時前からほくはそこに出かけていた。そして七時ごろまで待った。ほくには疑念があった。そのとおり一時間待ったが彼女はついに来なかった。その後、そのことに対して、彼女からの電話も連絡も何もなかった。

それがそのまま過ぎれば、何事もなく終わったであろう。ずいぶん調子のよい女性だったな、というにがい印象だけを残して。

半月以上も過ぎて或る日、ほくは中野のあまとりあ社をたずねた帰り、国電中野駅に出た。中野駅の北口に近く、キリコさんの働いていている喫茶店があった。こういうとき弱いのは男のほうである。つい彼女のところに寄ってみる気になった。もしまた、約束が振り出しにもどり、キリコさんとSMの関係で会う機会が得られれば、やはりそれなりにすばらしいだろうと思った。

彼女は店の奥から出てきて、ほくの前のボックスにすわった。彼女は佐渡島へ旅行をしてきた、という話をした。佐渡の風景は平板でつまらないのじゃありませんか、ときくと、結構いいところでした、と彼女は言った。その間、ほくは待ちぼうけを食わされたあの時の話はいっさいしなかった。彼女からも何の話もなかった。しかし、ほくはひざを進めて、もう一度約束をしませんか、今日はどうです、と切り出していた。こういうとき弱いのは、やはり男のほうである。

5

驚いたことに、今度は彼女のほうが約束の



六時より前に、喫茶店Mに来ていた。半分以上、来ることを予期しなかったほくにとってこれは少しばかり意表をつかれた形であった。コカコーラを注文し、あなたは、というハイボールだと。これも意表をつかれたことの一つか。コカコーラをおとなしく飲むほくを前に、その日の彼女は少しくつろいだ様子でハイボールをうまそうに飲んだ。

「どこか人目につかないところに行きませんか」と促すと、そのことには答えず彼女は、第三者が居てはまずいか、いきなりたずねた。これも意表をつかれることであった。第三者が居たほうが、いじめるにもいじめやすいと彼女はいう。だがこれは、ほくにとって願ってもないことであった。三者関係におけるM、このことはかねがねほくが主張する

Mの極限状況を意味する。

第三者と彼女がもち出したとき、ほくはそれが男性だとは最初思ってもみなかった。彼女の交友関係の範囲内にある、やはり女性を空想していた。ところがややあって、第三者が女でなく、男だったらまずいか、と彼女はまた不意に言った。ほくは意表をつかれ通しであった。と言え、いかにも彼女のほうがすべて主導権をにぎった人のように、テキパキことを運んでいったように聞こえるが、そういう感じではなく、相も変わらず彼女のこゝとば数は少なく、声も小さく、内にこもった小さな笑いが沈んで陰気だった。男、どんな男かしらない。が、とにかく男が立ち会ってキリコさんに凌辱されるほどの醜態を見ていてくれるとは、これは新しい戦慄だった。

第三者が女でも男でも、どちらでも、ほくは上ずった声を出していた。とにかく電話をしてみ、先方のつこうを聞いて、それでどちらかに決めましょう、キリコさんは答えて立った。彼女が電話に立った間、もうすべては最初からそう決められていたのではないか、そんな気がした。第三者の件はもちろんだが、それが女にするか男にするかは、今電話をしなくても、最初からだひとり、男しかいるはずはない、それは決まっていたこと

なのだ。電話をかけてみて、第三者を女にするか、男にするかを決めようというのは彼女の茶番にしかすぎない。それは最初から男以外には彼女は考えていなかった。その男がキリコさんの何なのか、考える必要もない明きらかなことだ。

若い恋人同士の、カップル、そのうちの女のほうが残忍な女王としてひとりのマゾヒストに君臨する。男はだまってそれを見ている。すばらしいアイデアだ。こんなアイデアが、この目立たぬ陰気な女性の、どこからわいて出るのか、電話からもどった彼女の目もとが、ハイボールのかげんでか、うるんで見えた。

「とにかく今夜、あなたを単にモノとして扱えばいいんでしょ」

彼女は念を押した。ほくは深くうなずいた。キリコさんはまずケント紙全紙と四ツ切五枚、黒、赤、白、黄それぞれ二個ずつのポスターカラーを買ってくるようにほくに命じた。彼女の意図が奈辺にあるかほくは知らない。すべて彼女のプランどおりに動くつもりであった。どんなことにも、なぜ、どうして、などときくつもりはなかった。要するにほくはモノであった。

言われたとおりの買物をし、かさばる荷を

かかえて西荻窪の南口の或る喫茶店に行った。後から、ほどなく彼女はやってきた。男がついて来ていたが、彼もほくもお互いを黙殺し合ったまま、あいさつもしなかった。このほうが、いっそ立ち会う者、立ち合われるものとして、行動がとりやすい、そういう理由によるものであった。男はやせて小がらだった。小がらなキリコさんにより、いっそ小がらに見えた。そして陰気にだまっていた。彼はほくをどんなふうに見て見ているのか、突如吹き出して横を向いた。今夜の茶番をこっけいに思ったのか、ほくのような変な男の心がはかりかねて、それをこっけいに思っけ吹き出したのか、どちらにしても、ほくは笑われることは決して不愉快なことではない。特に婦人と同席の場では。

あまり話を交わさず、ほくらは喫茶店を出た。ほくはモノとして、ほとんど一言も口をきかないつもりでいた。そしてモノとなりきることの期待だけがあつた。男は物も言わず、キリコさんの手さげを持つと、サッサと前を歩いた。テれて恥ずかしがって、そして怒っているような様子で振り返りもせず前を歩いた。古い傾きかけた家で、廊下がきしんだ。物のすえたにおいがした。三畳の間の上張りがポコポコに波うち、古びたラジオがミ

ユーシックを低く流した。みんなだまつていた。男も彼女も、目顔で話し合うだけであつた。どちらも打ちひしがれた人のように疲れていた。

うすぐらい燈の下で、顔色がくすんでいた。妙にわびしい、切ないような気配が、室内に満ちた。モノはモノでも、こわれた廃品にでもなつた気がほくにした。だれも何ともしゃべらなかつた。こういう重さをそれぞれに持つて、いったいこれから何をしようとするのか。彼女はトリスのびんを持ち出してきて立ち飲みした。酔え、酔え、うんと酔ってくれ、そしてほく自身酔いたかつた。だが、頭とからだは逆にささええと冷えてきた。

無言のまま、彼女と彼はほくの買つてきたケント紙を上べりの上いっぱいに広げた。それからカラーを水にとくことをほくに命じた。かなり彼女の手もとは、定まらぬアルコールの酔いの色があつた。

はだかになつて紙の上に寝ることを指示された。いわれたとおり紙の上に寝た。パンツだけのうそ寒いやせたわが体に気がひけたが、腹ばいになり、あるいはうつぶせになり、した。彼女は酔いの回つた目でながめおろしながら、ほくのからだにポスターカラーをたたきつけ、塗りつけた。無言劇のように、薄

暗い灯の下で、疲れたような顔の三人の男女が黙々と劇を進行させた。男はそれを傍観していたが、足の踏み場もないほどのところから、カラーの飛沫を浴びないように、隅に脱ぎ捨てておいたほくの洋服をとり、高みへ置いてくれた。その時男はそのポケットをまさぐつた。手帖の中の名刺をとり出してながめている。何のために。ほくはそれでもモノだつた。なされるままだつた。

しかし、言われるとおりにはだかになり、好きなだけ絵具を塗りつけられ、紙の上を転転と反転し、そこにアブストラクな乱雑な色痕を重ねていくことが、モノになりきる事なのか。実感は潮さいの遠のくように遠くの沖合いへとひいてゆくのであつた。それを感じていた。モノでなくとも、こういう方法で抽象画を描く画学生は少くないのではないのか。

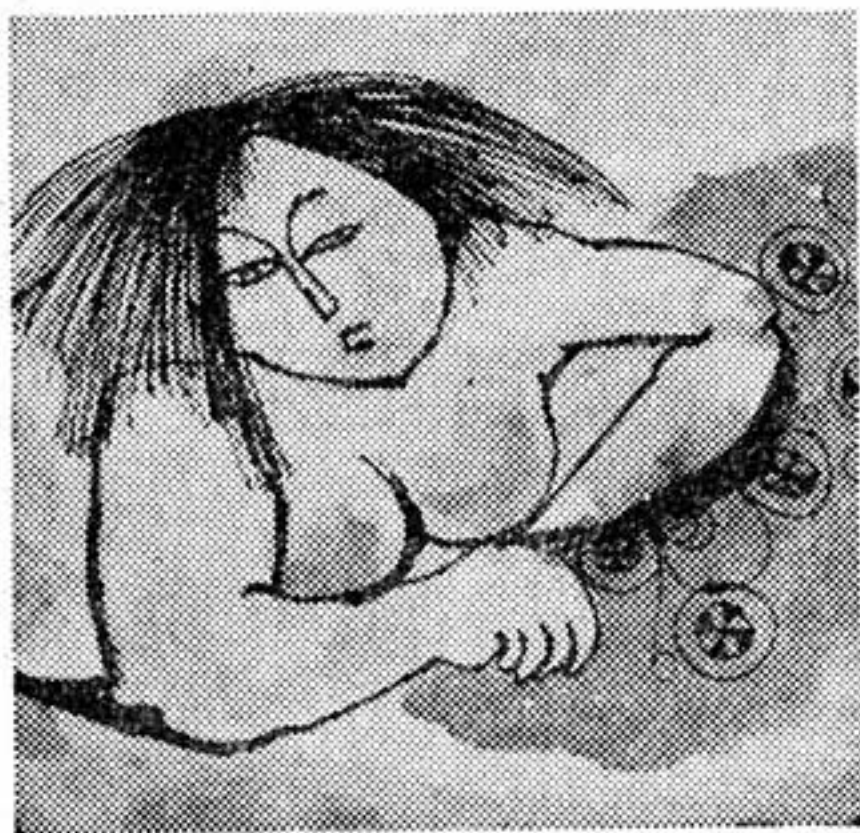
絵具のかわきは遅かつた。ほくのからだは乱雑なシマ馬だつた。そのまま、からだを洗わずに、服を着て帰れますか？ 彼女は聞いた。わずかなためらいは感じたが、そのまますなおに、乱雑なシマ馬のまま服を着た。

「もう帰つて！」

まだ十時にはならなかつた。途中でト切れたフィルムを見るように、夢からまださめき

れぬ頭を持ち上げて、彼女を見た。だが、今夜、結局、この茶番が茶番で終わったことを知らねばならなかつた。何もなかつたのと同じだつた。そこにはこの上なくばかげた男と、何か灰色の宿命を引きずるように、まだずっと若いはずの身で初老のように疲れてしまった女とがいるだけであつた。

それだけだつた。それを傍観するいつそうやせて小がらな男が、細い目を宙に浮かしてまるで何にも考えることを拒否するようなふうにカタをすぼめていた。モノになりきる事が、モノにしおおせることが、どんなに困難なことか、マゾヒズムへの手がかりは一場の幻としてくずれた。いつも、いつも、いつもの場合と同じように。



太陽のない宮殿

北園透一郎
鬼頭暁・絵

1

地上はわずか三階、そして地下はなんと八階というこのアラビアの城の、最深部の八階零号ハレムには、もちろん、太陽はのほらない。太陽のない宮殿である。

十九歳の、美しく清純な弓子の、美と、健康と、そしてこのハレム独得の教育には、規則正しい日課が必要である。

きびしく精密で、なみだぐましいほど教育課程は、彼女の肉体がひらかれたつぎの日から、休みなくはじめられた。

肉体の奥部に変化をあたえられたとしても弓子の表面の清らかさ、におうような肌の白さは、すこしも、そこなわれていない。

朝の九時ごろ、弓子は、Qがベッドをはなれると同時に起こされ監禁室にもどされる。

まず、シャワーをあびて、全身を洗い、かいる化粧をすませてから、朝食があたえられる。弓子が従順に食事をとった。

朝食後のみじかい休息がすむと、弓子は、上半身に、れいの柔軟な皮製の拘束具をほどこされて、地下七階にある医務室へつれていかれる。

ここで弓子は、一時間にわたって、綿密な診察をうけるのである。

強度の訓練、教育をうけた翌日など、弓子のからだの外部、内部にわたって、厳密な検査をおこなう。

医務室には、内科と婦人科を兼任する、ベテランの女医がいた。

Qの目にさらされる羞恥とはべつの、同性の意地悪い目で、細部のひだまで診察される羞恥はまるで針で突かれるようなどい痛

覚を、弓子にあたえるのである。

それから正午までの二時間ほどは、反省の時間と称する、弓子にとっては、もっとも、いやな時間であった。

監禁室には、反省コーナーと呼ばれる、一隅があった。小さな部屋の形になっている。

世話係は、この反省時間をいやがって泣きもだえる弓子に、乳房と腰のあたりだけ露出する拘束衣を着せた。

時には半裸のまま、弓子をこの反省の部屋に運び、家具に固定する。

椅子は、弓子の旦那さまである、この零号ハレムの主人とそっくりの人形が、ちょうど腰かけているようなポーズをした人形椅子である。

弓子は、その人形の上に坐らされ、固定されるのである。

この固定は完全なものではなく、弓子が上半身をもたえさせるくらいの余裕は残されている。
しかし、枷には、一つ一つ嚴重に錠がおろされている。
椅子の上から逃がれることは、絶対に出来ない。

こうして、むりやり弓子を人形の上に坐らせてから、人形には腕が取り付けられる。腕には、弓子の胸を押さえるもの、口を覆うもの、そしてもっと恥ずかしい位置をかくすものなど、さまざまな形のものがあり、その日の教育内容によって自由に切り換えることが出来るのである。

そして、この腕には、巧妙な仕掛けがあるのだ。腕を取り付けてしまうと、この椅子の背後にある自動装置のスイッチが入られる。椅子のみを照らすスポットライトだけを残して部屋の照明を消し、世話係たちは、部屋を出ていってしまう。

一人残された弓子は、カガミに写る自分の恥ずかしい恰好を眺めながら、人形の掌に仕掛けられている装置によって、押さえられた部分をなでられたり、もまれたり、ときには電気刺激を与えられたりして、前夜の反省をさせられる。

むろんこの時に、自分の声の録音を聞かせることもあった。かくしカメラで写された弓子のあられもないもだが、正面に写し出されることもある。

こうして、自分のすべての姿態を知らされることによって、弓子はいよいよ羞恥心の強い、男性にとって魅力的な女性に変わっていくのである。

抱きベッドのほうは、もっとおそろしい。それは、弓子に魅惑的なベッドマナーを教える装置であった。

柔らかなベッドの上に、弓子の旦那さまそっくりの人形が横たえられている。



人形は、弓子が身体を寄せると、自動的に手足が動いて弓子を抱きかかえてしまい、それからゆっくりうごめき始めるのである。

抱きベッドに寝かされるときの弓子には、特殊なさるぐつわがはめられる。

それは、弓子の口の中にゴムの風船をふくませるものである。

人形の口からささやかれる命令通りに弓子がからだを動かすと、口の中の風船は自動的にしほみ、言うことを聞かないと、口いっぱいにはひろがってしまうのだ。

2

正午になると、弓子は反省の部屋から出され、軽い昼食があたえられた後、仕事と運動の時間となる。

弓子がせねばならぬ仕事とは、訓練道具の手入れであった。

黒のぴっちりした、小さいブラジャーとパントリーの作業衣を着せられ、鉄のごつい首輪と、それに鎖で連結した手枷と足枷で自由を制限された弓子は、世話係に連れられて、育児室へいく。

そこに、前夜使われた拘束具や訓練道具がまとめられているのである。

世話係の指示に従って、弓子はさるぐつわ



や枷の手入れをし、またすぐに使えるように光らせてから戸棚に整理する。

つぎに、拘束椅子やその他の家具を掃除して、きれいに磨きあげるのである。

育児室での仕事が終わると、今度は寝室に連れていかれ、ベッドをととのえて、今夜の準備をする。

そして、さらに時間があまれば、オシメや下着の洗濯すらさせられることもあった。

こうした作業は、弓子の心にどれほどの屈辱をあたえるものであったろう。

弓子は、いつも歯をくいしばりながら、これらの仕事をした。

世話係は、いつも柔らかな羽根を持って弓子を監視していた。

時には「旦那さまに言いつけて、お仕置きをしていただくわよ」などと脅かす。

鞭は原則として用いられないことになっていた。柔らかな肌に傷をつける行為は、ハレムの赤ン坊にはふさわしくないと、Qは考えていたからである。

仕事が終わると、弓子は、そのまま運動室に連れていかれ、そこで手の混んだ美容運動をさせられる。

運動室の大きなベルトコンベアの上にのせられた弓子は、かけ足やウサギとびをさせら

れたり、中腰でヨチヨチ歩かされたり、四つんばいで這わせられたりする。

コンベアには、弓子をさまざまの形に拘束しておくための首枷台や腰枷台が取り付けられてあり、天井からは黒い光りの鎖もさがっている。

運動室には、コンベアのほかに、自転車ボート、石臼、ポンプ、エスカレーターなどの、美容体操を兼ねた運動を強制する各種の機械が完備しているのだ。

むろん、これらの機械にかけられて運動させられるときは、その効果がすこしでも早く上るよう皮の搾衣やビニール服が着せられ、なまけると苦痛が自動的にあたえられる、非情で巧妙な装置が用いられているのである。

もちろん、これらの反省の時間や作業の時間の最中でも、呼び出しがあればすぐに日課は中止させてQのもとに連れていかれる。

Qは、昼の時間をたいていハレムの中にある書齋で仕事を片附けたり本を読んだりしてすごしていたが、いつも一人の女を自分の目のとどく所に置いてそれとなく訓練することになっている。

しかし、前夜責めた女は、もう飽きてしまつて、昼間のお相手はさせないことになっている。

二時間ほどの運動の時間がすむと、いよいよ全身美容の時間である。

監禁室に戻った弓子は、よけいなものは一切もとぎられ、小さな手錠と足錠をほどきされ、ぬれてもよいゴムのさるぐつわをはめられてから、風呂に入れられる。

浴槽には、ちょうど洗濯機のような湯をかきまわす装置があつて、自由を奪われている弓子の全身が自然に洗われる。

やがて充分肌が温まり柔らかくなると、弓子は浴槽からひき出され、洗い場のスポンジマットレスの上に横たえられて、香り高い石けんでさらにすみずみまでていねいに洗い上げられてから、二番目の風呂に入れられる。

この二番目の風呂は、せいたくなく目的をもつ特殊風呂であつた。

泡風呂、香水風呂、薬品風呂、牛乳風呂など、日によって変えられるのである。

そして、少しでも体重の増加するきざしが見えると、この後、充分むし風呂でむさされることになっていた。

このような特殊風呂に入っているうちに、さるぐつわもはずされて、弓子の髪と顔が洗われる。

こうして、全身の肌に充分栄養と温みをあたえられた弓子は、そのまま美容室に行き、

すぐにマッサージベッドに寝かされて、全身マッサージを受ける。

全身にたっぷり最高級のクリームがすりこまれ、電気ローラーがかけられるのである。

この間に、顔のほうでは、美顔術が、弓子の意志にはおかまいなしに、同時に行なわれている。

マッサージと美顔術がすむと、かならず一点以上の特殊美容が行なわれた。

これは、顔、腕、乳房、腰、尻、などの、最も魅力的な部分の一つに対して行なわれるもので、さまざまな特殊な薬品と、器具を用い、その部分に進歩的で徹底した美容術が行なわれるのである。

これがすむと、赤外線浴とむし風呂に入れられて、充分肌をはてらせ、ぬりこまれたクリームや薬品を肌にしみとおらせる。

やがて、全身汗びっしょりにさせられた弓子は、シャワー室に入れられて温冷のシャワーを交互にあびて肌を引き締める。

もう一度マッサージベッドに戻され、香りの高いクリームと香油と肌にすりこまれ、所要所に香水を吹きつけられて、やっと苦しい全身美容は終わるのである。

3

こうして、全身の基礎美容のフルコースを終えた弓子は、たっぷりした化粧着にくるまされて美容室の大きな三面鏡の前に坐らされると、全身の化粧を受ける。

風呂とマッサージの心持ちよい疲労感に、前手錠と首輪だけで椅子に坐らされた弓子は、自分の素肌が美しく変化していく過程を三面鏡の中に眺めながら、じっと全身を美容師たちにまかせていた。

Qは、弓子に対し清楚で品のある美しさを要求している。従って、化粧は、弓子の素肌の美しさを強調するように、目立たないが念入りの段階が、顔を始めとして全身に行なわれるのである。

そして、同時に弓子の豊かな美しい髪が、その夜の服に似合うように、可愛らしく結い上げられるのである。

化粧が終わると、今度は首枷台で立たせられ着付けが行なわれる。

下着から上に着る服まで、世話係と美容師が相談して注意深く選んだもので、美しく盛装させられるのである。

羞恥責めの対照である弓子は、夕方からの本格的な訓練開始と同時に、この服を一枚一

枚ゆっくり脱がせられていくのである。

教育方針に従って、巧妙に教育される弓子は、こうした幕あきに慣れることがまったくなく、かえって始めのころより以上に羞恥にもだえ、屈辱に泣くのである。

こうした全身美容、化粧、着付けは、夕方の五時までにはまったく完了する。

肌に傷をつけないよう、全身を細いナイロンの網にくるまれ、皮の玉を口にふくませられた弓子は監禁室の椅子に首輪でつながれたまま、Qからの呼び出しを待たされた。

涙を流すと、化粧がくずれるので、やわらかい目隠しもされ、呼び出しのあるまでは、いつまでも、じっと待っていなければならぬのだ。

待っているあいだに、疲労はまったくぬぐい去られ、新たな気力がみなぎってくる。

弓子は、精神的にも肉体的にもきょうの新鮮な訓練を受ける準備が完了するのである。

すべては、Qの、よりよい玩具になるための休息であり、美容なのであった。

やがて、呼び出しのインターホンが鳴ると、弓子は、Qの指定した教育部屋に運ばれ、そこで拘束具を厳重なものに変えられてから、Qの手による課程が始められるのである。

こうした教育は、趣向を凝らしたさまざまの責め部屋で行なわれるが、弓子の場合にはほとんど、弓子のためにとくに改造した育児室、全身美容室、寝室が用いられた。

全身美容室というのは、監禁室のものとは異なり、Qが羞恥責めの一方法として苦痛をともなう羞恥をあたえるために作らせたもので、ここでは主としてQが美容師の役割りを果たして、弓子に徹底的な全身美容を行なうのである。

Qは、弓子を手の中にとくと、ゆっくりとそ

の反応を楽しみながら、育児服と称する小さなパンティと、うすいスリッパを着せ、本格的な責めを始める。

この育児服は、うすい絹で出来ており、毎夜新しいものが用いられた。最上等の高級品なのだが、いつも最後には破れてしまうからである。

複雑な方法での恥辱と苦痛にうめく弓子を眺めながら、Qはゆっくり食事をし、酒を飲む。

むろんこの間にも、しょっちゅうQは弓子

をからかったり、メカニズムの内容を変えたりして楽しむのである。

やがて、九時頃になると、弓子はいったん休息させられ、夕食があたえられる。

むろん、この夕食は、幼児向けの献立であり、弓子にとっては屈辱に満ちたものなのである。

食後のみじかい休憩ののち加えられる訓練は、一段と激しい。やがて、あふれた涙と汗を入浴して流してもらった弓子は、ぐったりとなって寝室に運ばれ、寝化粧がほどこさ



れる。

たつぷり責め上げられて、羞恥の感情を失い、反抗の氣力を失った弓子は、寢室ではもうおとなしく言い付けに従う赤ン坊になっている。

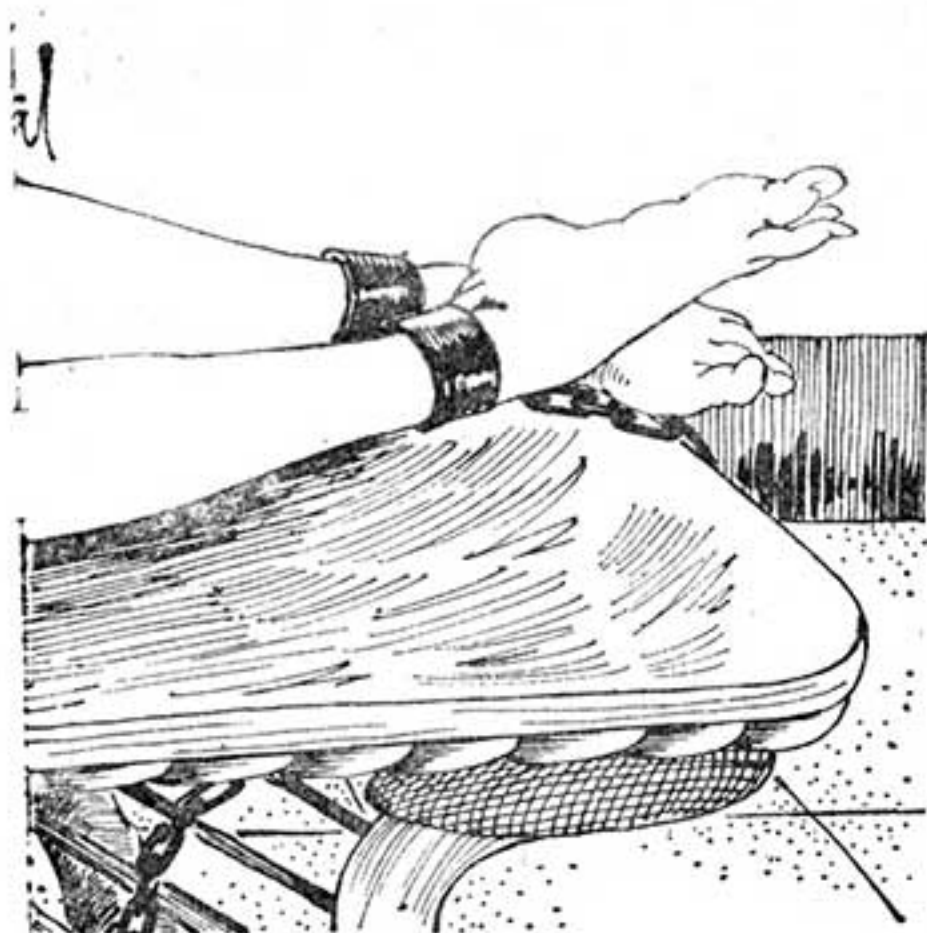
ベッドに寝かしつけられた弓子は、命ぜられるままに四肢をくねらし、声をあげた。

思いもよらぬ自分の声におどろき、顔を赤くそめる弓子であった。

もちろん、このような責めの行なわれない夜もある。

Qから、今夜は用事はないとの連絡があると、弓子は、すぐに着ていたものを脱がされ、シャワーをあびて化粧を落としたあと、自由な時間をすごすことがゆるされる。

やわらかい部屋着にくるまった弓子は、監



禁室の中の小さな居間に連れていかれてから、四肢を鎖で連結した、軽い足錠と手錠に代えてもらう。

居間には、気味のわるいカガミや椅子はなく、安楽椅子と寝椅子が一つずつあり、テレビやステレオも備えてあったし、書棚には、世界各国の高級雑誌や、絵画集などがならんでいた。

この部屋は、弓子に誘拐前の自由な生活を思い出させ、新たな反抗心や羞恥心を呼び起こすための部屋なのであって、ほかの女たちの監禁室にはもちろん見られないものである。

弓子の旦那さまは、こうした弓子をまた屈辱にうめきもだえさせ、征服するのが好みだからである。

家庭的な平和な居間で、弓子はテレビを見たり、本を読んだりして時間をすごす。

あばれたり、泣いたりしない限り、さるぐつわははめられないし、手足の拘束も軽い。

居間の中ならば、自由に歩きまわることも出来るのである。

ただ、分厚い鉄のドアには、外からだけ開閉出来る錠がかけられていて、逃げることはぜったい出来ない。

九時になると夜食である。

こうして、一人で夜をすごす時にのみ、弓子には豪華なディナーがあたえられる。

これも、弓子が育児食に慣れてしまうことのないよう、育児食をあたえられる時の屈辱がいつも新鮮であるようにするための方法なのである。

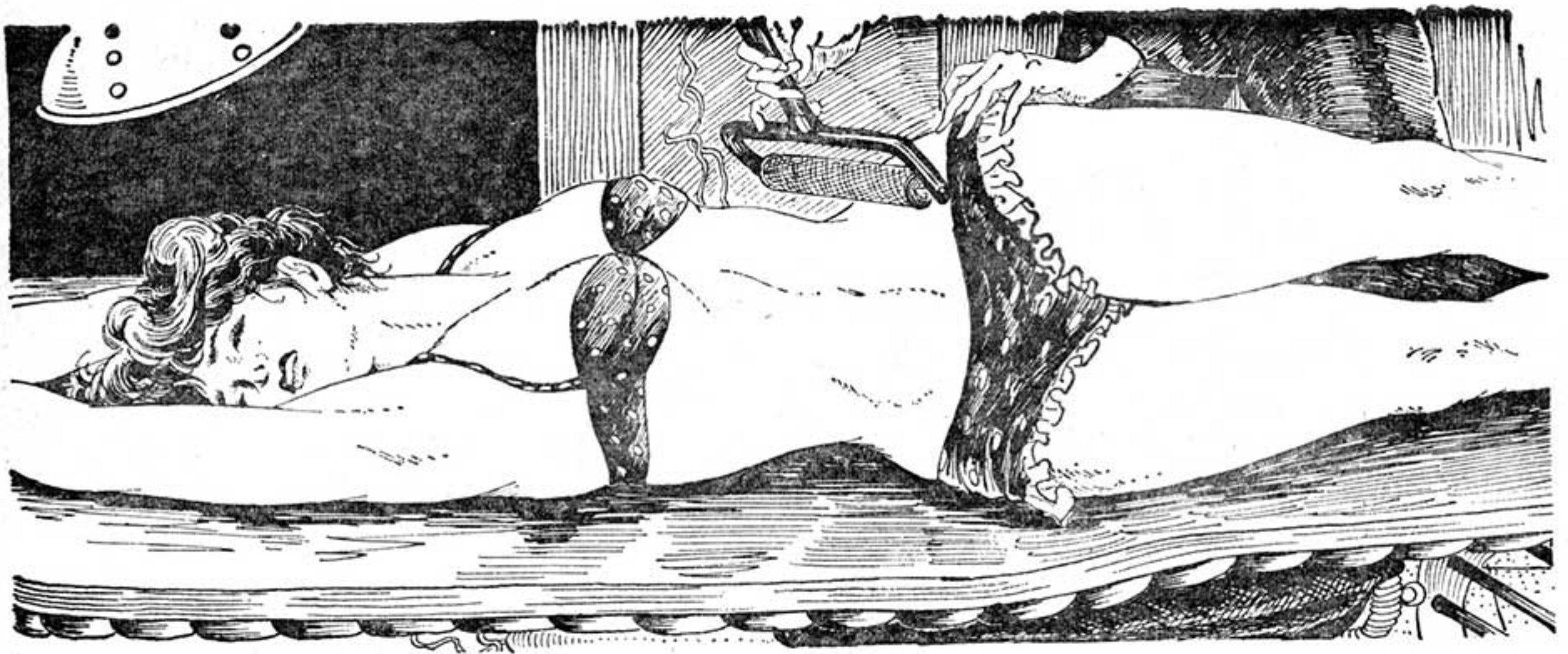
夜食をすませ、十一時になると、弓子は監禁室にある小さな寢室に連れて行かれ、パジャマと称する拘束衣を着せられ、濡れるとベルが鳴る装置を仕込んだオシメをあてられて寝かされる。

ベッドに取りつけた首輪を、ぱちんとはめられて、起きあがれないようにされ、さらに鉄格子の檻が上からかぶせられて錠が下ろされてしまうのだ。

こうした日課が毎日毎日くり返され、弓子は、次第に旦那さまの望み通りの、いつもういういしい新鮮な魅力をもって羞恥にもだえ、屈辱に泣く、可愛いハレムの赤ン坊に教育されていくのであった。

このアラビアの城の主人Qは、日本で、いや世界でも、もっとも優秀な心理学の学者なのかもしれない。

なぜなら、生活のすべてを、これほどまでに変えられた弓子の性格が、過去とほとんど変わらないという事実が、考えてみれば、偉



大なことであつた。

徹底的に自分の好みに合わせたQの馴致の方法は、心理学的にみて、すばらしい成果といえよう。

弓子は、適当にあきらめ、適当に反抗し、そして、羞恥の感情はまったくそこなわれずに教育されているのである。

むしろ、弓子の清楚な美しさ、精神の清純さ、十九歳の肌の光沢は、いよいよ磨かれていくようであつた。

4

弓子が、この零号ハレムにつれてこられて数週間たったある朝のこと。

雲のようにやわらかなベッドのなかで、彼女は目をさました。

弓子の右どなりには、Qがまだねむっていた。満ちたりた寝顔であつた。かすかな寝息がきこえる。

その寝息をききながら、弓子は、のどもとに熱いかたまりがこみあげるのを感じた。同時に、まぶたの裏も熱くなり、なみだがあふれた。

ゆうべも、また私は、思うぞんぶんの玩具にされたのだわ！

ぐっすりねむったあとの朝のめざめには、

理性と人間的な感情が、もつとも素直に回復する。

逃げたい、と思う一瞬である。

弓子は、寝かされたまま、首輪と足輪でベッドにつながれている。

鎖は短く、もちろん起きることは出来ない。

しかし、たとえベッドにつながれていなくても、弓子には、このハレムから逃げ出すことはおろか、寝室から出ることもさえ出来ない。

寝室のドアには外からしか開閉出来ない錠が下ろされていて、Qがインターホンで世話を連絡したときにのみ開かれる仕掛けになっているのである。

このように、Qはたえず弓子を幾重もの厳重な拘禁状態に置いておくことが好みなのである。

弓子は、Qの目を覚まさないように注意しながら、そっと身体を動かし始めた。

彼女をつないでいる鎖は、それくらい手足を動かすことは出来るくらいの長さがあつた。

しかし、いくら動かしないうちに、肩に置かれていたQの手に、次第に力が入ってくるのに、弓子は気付いた。寝息がやみ、Qは、

目を覚ましたのだ。

「アッ、いやッ」

弓子は、思わず小さな悲鳴をあげた。

「フッフ。もう、目を覚ましたのかね」

Qは、ゆっくり眼を開くと、弓子の方に顔を向けた。

「いや、こっちを向かないで」

弓子は、うすいタオルのふとんを引き寄せ、
て胸を隠そうとしたが、たちまちそれはQの
手で奪い取られてしまった。

「ア—ッ、ひどいわ」

弓子は悲鳴をあげ、あわてて手で素肌を隠
すと、Qに背を向けた。

なだらかな、白く美しい肩がぶるぶるとふ

るえている。

首輪と足輪をはめられてベッドに寝かしつ
けられている弓子には、手足を縮めることが
出来ないのである。

「さあ、お手手をのけて、こちらを向いてこ
らん」

「いやです。そんなこと。もう、あっちへ行



ってください！」

「フフフ、言うことを聞かないとお仕置きをするよ。お手手をうしろにおまわし、くくってあげるから」

Qは、サイドテーブルに用意されている、小さな手錠を取りあげた。

「いや、いや、かんにんして。アアッ、ゆるしてッ」

いやがる弓子の白い細い手首を捕えると、もだえを楽しみながら胴体からはがし、背後で組ませた。

弓子の背中で、カチリと固い冷い音がした。「ゆるして、ゆるしてッ」

ぐっすりねむって元気を取り戻している弓子の羞恥心は激しかった。

それがQにとっては、新鮮な魅力なのであった。

「さあ、こちらへおいで。可愛がってあげるからね」

Qは、自由を奪った弓子の顔を自分のほうに向け、引き寄せようとした。

「いや、いやです。かんにんしてッ」

弓子は、身をもだえさせて抵抗する。

「さあ、おとなしく言うことをお聞き。でないと、あっちのベッドにネンネさせるよ」

「そ、そんな。ゆるしてッ」

弓子は、たちまち身ぶるいをして、手足をぐったりとのぼした。

弓子の寝ているベッドの横には、複雑な恐ろしい仕掛けのある小さなベッドが置かれてあった。

その上に寝かせられ、固定されてしまうと、後は操作するボタンひとつで、弓子の全身の恰好は、Qの意のままに変えることが出来るのである。

弓子は、そのベッドの恐怖を知っているのである。

弓子の、ほっそりとひきしまった美しいからだは、Qの太い腕に抱きすくめられ、小さくふるえていた。

「フフフ。ゆうべは久しぶりにおもしろかっただろう。とてもいい子だったね」

「知りません。おとなしくしないと、お仕置きするっておっしゃったのですもの」

「どんなお仕置きが弓子には、そんなにいやなのかね」

「鞭です。私、鞭がとってもおそろしかったの。もうたたかないで」

弓子は柔らかな唇をあまえるように、そつとQの胸に押しつけた。

「フフフ、よし、よし。いい子にしていれば鞭は使わないであげよう」

Qは、満足そうに言いながら、弓子の髪の毛をなでた。

「さあ、もう少しねむろうね。まだ八時になったばかりだよ。このまま抱っこしてあげるからね」

「ハイ」

弓子は、小さな声で返事をする、言われた通り観念して眼をつむった。

5

これまでに数多くの女性を訓練し、教育してきたQである。なかには、三日もしないうちに飽きてしまった女もいるし、一ヵ月間ほどつづいた娘もいる。弓子に対するQの愛着は、めずらしいほど、永続した。

弓子に対する鞭打ち訓練は、彼女の生理が始まった日に行なわれたのであった。

弓子のからだの微妙な変化は、朝化粧をしている時に、美容師によって発見された。

そのことはただちにQに報告され、これが、誘拐前の調査によって予定されていた日であることに彼は満足した。調査は正確である。

いつものように朝食をあたえられ、しばらく休息した弓子は、その後の日課を全部中止されて、ハレムの中にある鞭室に連れて行か

れた。

そこには、Qが待っていた。

鞭室には、鞭打ちのために、美しい犠牲者を固定するさまざまな形の鞭打ち台がずらりと並べられ、大きな戸棚には、長さ、材料、用途のちがういろいろな種類の鞭がそろえられている。

Qは、いやがる弓子をあやしなから、この日のために作らせてあった綱パンティをはかせた。

細いナイロンの網で作られたこのパンティは、弓子のからだの前面を小さくおおうだけで、美しいおヒップには、自由に鞭があてられるようになっていたのである。

「さあ、それではこの柱を抱いてもらおうかね。フフフ、つめたいかな、すぐにあたためてあげるよ」

Qは、弓子を、部屋の真ん中に立っている。太い大理石の柱を抱かせた。

柱は、弓子がちょうど両手で抱きかかえられるくらいの太さがあり、彼女をその恰好のまま固定できるように、鉄の手枷が取り付けられていた。

さらには、弓子の足にも枷をはめて、身動きできないようにしてしまった。

「私をどうするの。苦しいわ」

弓子は、大理石のつめたい感触と、部屋の恐ろしい雰囲気にあがって言った。

「弓子の悪魔の日が始まったから、お仕置きしてあげるのだよ。このハレムでは、それは悪いことになっているのだからね」

「そんな。悪魔の日なんて、ひどいわ。悪いことじゃないわ」

「いいわけなどせずにおとなしくしておいで。すぐに、声も出せないようにしてあげるからね」

「何をやるの、かんにんして」

弓子は、苦しい柱抱きの姿勢のまま、悲鳴をあげ始めた。

Qは、その悲鳴に目を細めながら、戸棚から、しなやかなめし皮の鞭を取りだしてゆつくりしごき、それからヒューと音をたててみせた。

「アーツ、何をやるの。ぶたないで」

「フフフ。始めはゆつくりたたいてあげるから静かにしておいで。そらいくよ」

Qは鞭をふりあげ、傷あと一つない、なめらかな弓子の背中を目がけて打ちおろした。

たちまち純白の肌に一条の線がくつきりとうかびあがった。

「アーツ、やめて。やめてッ」

「フフフ、今度はどこかね」

「ヒーツ、かんにんして」

始めの十回ばかりの鞭は、こうしてからだの背面にあてられた。

鞭は、さほどきついものではなかったが、こんなことには始めての弓子にとっては、充分すぎるほどの痛さと恐ろしさであった。

Qが手を休めるころには、弓子はもう悲鳴をあげる気力もなかった。

Qは、そのまましばらく弓子を休息させておいてから、つぎの鞭打ちに移った。

柱から解かれた弓子は、今度は、鞭打ち用のベッドに、あおむけの大きな字に張りつけられてしまった。

苦痛と恐ろしさに声も出せず、ただ、うめいてゆるしを乞うている口には、さるぐつわがはめられる。

鞭によって顔に傷がつくのを防ぐため、鉄棒の格子で顔面を保護するためのマスクを兼用するさるぐつわである。

それからあとは、Qも弓子もくるったようになった。

世話係と美容師が、弓子の肌をときどき検査して、Qの手をとめる。

しかし、ひといきついで弓子の頭がはつきりしてくると、またすぐに新しい鞭打ち台に移され、からだのすみずみまで新しい鞭が徹



底的にあてられるのである。

それは、冷酷に計算しつくされた鞭打ちであつた。

最後には、網パンティすらちぎれとんでしまい、柔らかな肌はすべて鞭の下にさらされた。

こうして、白い全身の肌を鞭あとで染めた弓子は、昼すぎになってようやく監禁室に戻されたのであつた。

それからあとの生理期間を、弓子は監禁室で肌の手入れと休息に費した。

Qに呼び出されることもなく、美容師の念入りの全身美容は一日じゅう休むことなく行

なわれ、弓子の若い肌は急速に回復していった。

否、鞭による無数の小さな傷口から滲みこんだ化粧薬は、前よりいっそう柔らかくなめらかな、美しい皮膚を作りあげていったのである。

そして、生理の終わった夜久しぶりにQの手もとに運ばれた弓子は、もう鞭のあととひとつない若々しい肌によみがえっていた。

しかし以前と異なった点は、鞭の恐怖を知ったことである。

久しぶりに弓子を手にしたQは、激しい羞恥責めを弓子に加えた。

むろん弓子はそれにできる限りの抵抗をしたが、鞭を見せられると、あどけない瞳に屈辱の涙をいっぱいためたまま、おとなしくなった。

こうして昨夜は、徹底的に責められた末、泣く泣く屈服したのであった。

6

弓子は、Qから髪の毛をまさぐられるくすぐったさに、ふたたび目を覚ました。

「いや、やめて」

弓子は、自分の恥ずかしいすがたに全身を真ッ赤に染めて、身をもだえ始めた。

Qは、そんな弓子と、しばらくたわむれてから、枕もとのベルを押して、世話係を呼びよせた。

「オヤ、お目覚めでございましたか」

世話係は入ってきて、弓子の髪の毛の乱れを見るとニッコリ笑って言った。

「アラ、きょうは朝からお相手していただき

たの。良かったわね」

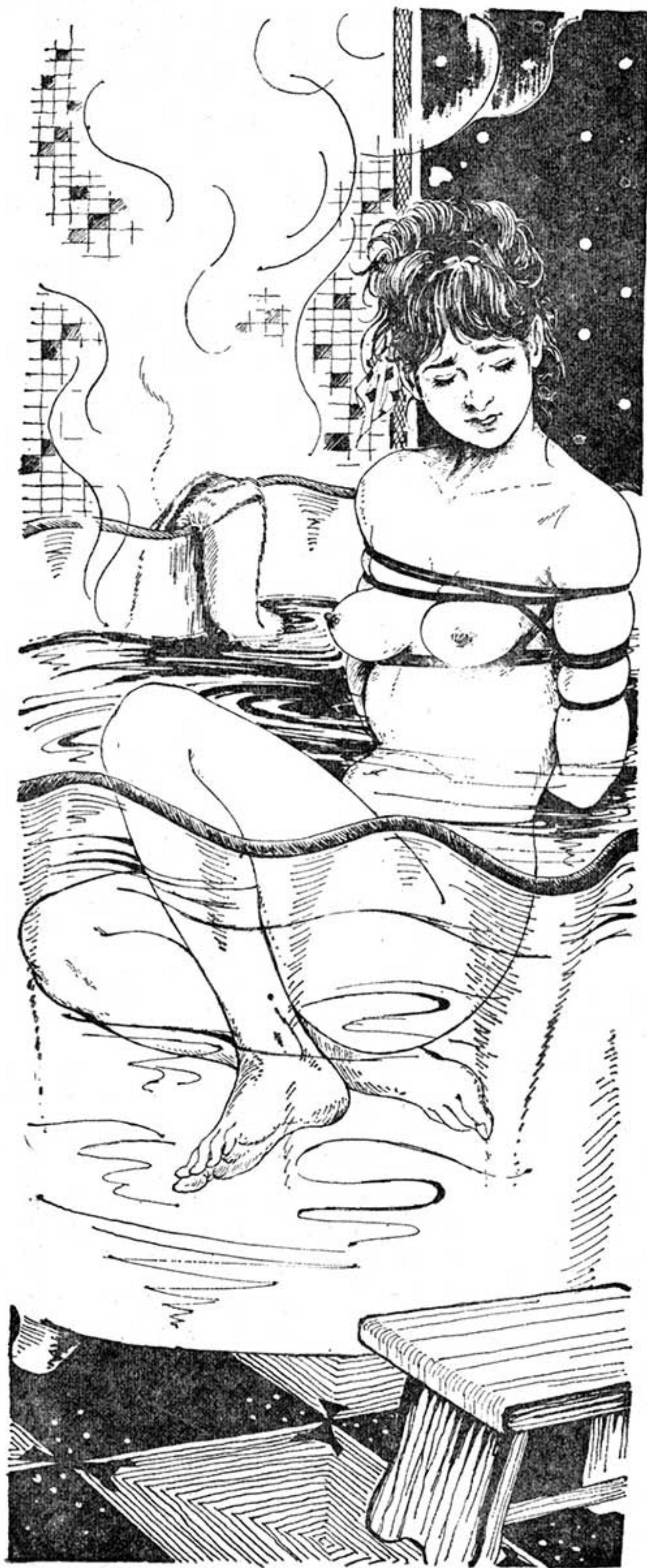
「フフフフ。今朝はとってもいい子だった。

ごほうびに、いっしょに風呂に入ってから朝ごはんにするとしよう。そのつもりで、したくしてもらおうか」

「かしこまりました」

世話係は答えると、従えてきた小間使いの一人に合図した。

小間使いは、頭を下げると、だまって出ていった。



「ああ、かんにんして。お部屋に帰らせて」
「ホホホホ。弓子ちゃんは、そんなに監禁室がお好きなの。でも、今朝はだめよ。旦那さまが、もっとおもしろいことをして下さるわ。さあ、その前にちよつとからだを洗っておきましょうね」

世話係は、いやがる弓子をあやしなから、ベッドから解いて、部屋の一隅にあるビデに固定し、からだを洗い始めた。

その間に、Qはおきあがってガウンを着ると、葉巻きに火をつけ、弓子の哀れな恥ずかしいポーズを、笑いながら眺めていた。

やがて、ビデから解放された弓子は、ふたたびベッドにもどされて、首輪で寝かしつけられた。弓子は疲れ、ぐったりとなっている。

「よしよし、いい子だね。それじゃ、朝のお小用をすませておこうね。オシメをあててあげるからね」

「いや、いや、かんにんして。まだ、ぜんぜん、したくありません」

「フフフフ。だめだめ、じっとしておいで。でないよ、こうするよ」

「ア—ッ。ゆるして。さわらないでッ」

「ホラホラ、じっとして。じっとして」

言いながら、しばらく弓子をもがさせる。

それから、小間使いに弓子の足を押さえさ

せて、オシメをあて、美しい可愛いオシメカバーでくるんでしまった。

「いやです。こんなもの。早くとつて。お部屋に帰らせてッ」

「言うことを聞いて、さあ、早くすませておしまい」

「いや、いやッ」

「フム。じゃ、お風呂に入るまで待つてあげよう。だが、それまでにしなかったら、きょうは一日じゅうオシメを取り換えてあげないからね」

言うのと、オシメをつけたまま、弓子をベッドから抱きあげて、浴室へ連れていった。

浴室に通ずる小さな脱衣場で、弓子は入浴の準備をほどこされた。

入浴用に作られた、小さなステンレスの後手錠と足錠がはめられ、かわいい泣き声をだす口には、ゴムで防水した絹でびっちりさるぐつわがはめられるのだ。

こうして、全身の自由を固定された後、美しい髪をタオルでくるんでまとめられた弓子には、清純ななまめかしさが、ほんのりとただよっている。

Qは、弓子の入浴準備をたのしみながらすませてから、ガウンを脱ぎ捨て、入浴用のパンツ一枚になった。

Qが裸身をみせるのを、弓子が極度にこわがるからである。

「フフフフ。まだ、ぜんぜん、すませていないよだね。お風呂場に入るまでにしなかったら、今夜オネンネするまで、これをとってあげないよ。それでもよいのかね」

言いながら、弓子を抱きあげる。

「むうん、むうん。」

弓子は、腕の中でもがいている。

「さあ、するのならいまのうちだよ。ぬれたオシメのままでもいいのならべつだけだね。フフフフ」

「むうん」

弓子は、涙のたまった大きな瞳をQに向けて哀願していたが、Qが弓子を抱いたまま浴室のほうに歩き始めると、あきらめたように、全身の力を抜いた。

やがて期待通り、オシメカバーの中で小さな音が始まった。

「フフフフ。よしよし、いい子だ」

笑いながら、そのまま、浴室に入った。

Qと弓子の、たのしいたのしい入浴の時間が、これから、はじまるのである。

浴槽にはいる前に、まず、オシメをとらなければならぬ。すでにぐっしよりぬれてい

る、弓子のオシメを……。

恋人たちのオリ

九十 九十郎

山田 彬弘・絵

1

久子が家に帰って来たのは十時頃だった。遅かったのも、ベルを鳴らして女中を呼ばずに、自分の鍵で中に入った。書斎の前を通ると、夫の健吉が中から呼んだ。「ちょっとこちらに入ってくれないか」「着替えをしてから参りますわ」と久子は反射的に答えた。

「いや、今すぐだ。用はすぐすむ」
久子は部厚い櫥の扉の前に立って、和服の肩を落とし、ひと呼吸だけ間を置いてから、その扉を開けた。
久子がソファに掛けると、やっと健吉はスタンドの円い明りの輪から眼をあげて、彼女の方を見た。回転椅子をきしませて、彼女の方に向き直ると、遠いものでも見るような眼つきで妻を見た。

「おそかったね。で、彼には会えたかい」
声も眼と同じように、何の抑揚もない。三十五才にしては老人のような声だった。
「彼って——？」

久子は眼をつとあげたが、夫の視線にぶつかると、あわててそらした。

「山根陽一郎さ。わかってるじゃないか」

「山根なんて、そんな男の人知りませんわ」
せき込んだように久子はこたえた。

「そうかな。知らないのならいいが、実はね。その男、家の地下室にいるよ。興味があつたら行って見てごらん。いつもその男に会いに行つて遅く帰られたんでは、こちらがたまらないからね。そう思って、この地下室においでを願ったんだ」

それだけ言つて、健吉は愛用のブライヤにタバコを詰め始めた。右手の親指と人差し指で、ケースからつまみ出した葉を火皿に乗せ、左手の親指の先で巧みにそれを適当な固さに圧さえる。指先が昆虫の節足のように動いている。

「山根なんて人なんか知りませんわ。それなのに、変なことおっしゃるのね」

感情を押し殺した平板な声で久子夫人が言つた。

「知らないのならいいさ。が、見たかった

ら、地下室の鍵は地下室入口の扉の傍の釘に掛けてあるよ」

火皿につめたタバコにまんべんなく火がつくように、マッチの焰を加減しながら、健吉はチラと久子夫人の方を見た。火がうまくついて、健吉は頭を起こして、大きく煙を吸い込んだ。

「用というのは、それだけなんだ。遅いから先におやすみ」

そう言って、健吉はクルリと机の方に回転椅子をまわした。

久子は、机のスタンドの光の輪の中にタバコの煙が奇妙な模様を描いてただよふのをしばらく見つめていたが、やがて腰をあげて、書齋を出た。足がしびれたような歩き方をしていた。

パイプタバコの甘つたるい香が、久子の背後に渦を巻いて乱れた。

2

午前二時になって、久子はやっと決心をつけて、床を抜け出した。ネグリジェの上にガウンを羽織った。ガウンのベルトをしめる指先がこわばって、何度かしめ直さねばならなかった。夫とはもう長い間寝室を別にしているのは都合が良かった、と彼女は何となく考



えた。スリッパははかずに、跣足で廊下に出た。

地下室はこの家の先代が戦争中に作ったもので、裏の離れの下にあった。離れは夫の寝室になっていた。その寝室の扉の前で、久子はしばらく耳をすました。シンと静まりかえっていた。自分の心臓の鼓動だけが異様に高く耳にひびいた。

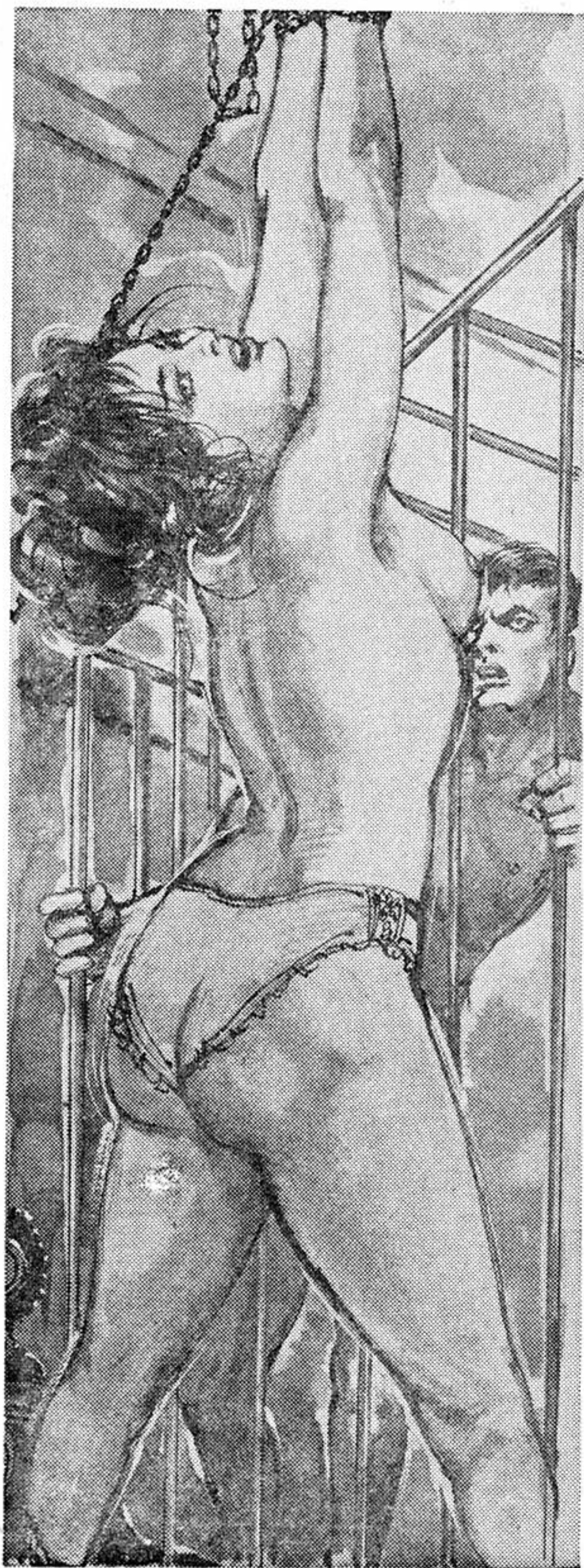
地下室の階段を降りた。降り切った所に重い鉄扉がある。その傍に、夫の言った通り、鍵が掛かっていた。

物音をたてないように、細心の注意を払った。久子が一番気がかりだったのは、この重い鉄の扉が馬鹿でかいきしみをたてはしないかということだったが、意外にもそれはかすかなきしりさえたてずに開いた。扉の背後から突き上げてくるまばゆい明りが、薄暗がりになった久子の眼をくらませた。光に眼がなれた時、久子はじめて夫の言ったことが嘘やおどかしでないことを知った。

はじめ、彼女はそれが何であるか、理解できなかった。地下室には不似合いな、明るす

ぎる程の照明の中にうずくまっている裸形のものが、奇妙な見馴れない動物のように見えた。その動物は、久子の方に背を向けて、膝を抱えるような恰好でしゃがんでいるのである。その周囲を二メートル四方くらいの、鉄の格子が取り囲んでいた。檻の中の猿——というのが久子の直観であった。その猿の肌がすべすべしていて、頭にだけ異様に黒い髪が密生しているのが妙に滑稽だった。

気配を察したのか、猿がふと久子の方に体を向けた。



「ひ、久子さん」と、その猿が人間の言葉で、すっとんきょうに叫んだ。

「陽一郎さん」

久子の声は半信半疑であった。両手で鉄格子を掴んでゆすっている男の方に、おそろおそろ近寄っていった。

「あ、あなたなの？」

「僕だ。山根陽一郎だ。あなたの主人に捕まって、こんなにされてしまったんだ。よかった。出してくれ、さ、早く」

齒をむき出してまくしたてていたのが、相手の当感したような表情に気がついて、あわててそこにしゃがみ込んでしまった。

「あ、あなたなの」

もう一度同じことを口走ると同時に、久子はそこにへなへなと坐ってしまった。山根は格子の間から手を出して、自失したような久子の肩を掴んで激しくゆすった。久子の首が頼りなくゆれ、涙がコンクリートの床に散った。

「ね、しっかりしてくれなきゃ駄目じゃないか。何とかして僕をここから出してくれ。このままでいたら、今に今に——」

「こ、ころされるとおっしゃるの？」

久子は恋人の腕にしがみついた。

「そうだ。そして君も一緒にだ。だから早

く、何か格子を開けるのに役立ちそうなものを見つめるんだ」

「あたし、あなたを殺させやしないわ。それくらいなら、いっそのこと今すぐにでも夫の方を——」

「駄目だよ。君の主人は——」

ここまで言って、山根はギョツとしたように言葉をのんだ。それからおびえたように、「君は、君は僕がここに閉じ込められているのをどうして知ったんだ」

主人が——と言いかけて、久子も声をのんだ。格子越しに、男の裸体にしがみついた。

「罨だ。そう言えば、君がここに忍んで来ることを予測してそんなことを言ったのだ。もう逃げられない。奴は何もかも見とおしてやっているんだ」

山根は久子の肩をしっかりと抱きながら、こめかみをピクピク動かした。

「でも殺せやしないわ。あたしたちを殺せば夫だって当然警察につかまって——」

久子の声は、地下室の扉が激しく閉まる音で中断された。おどろいてふり向いた二人の方へ、パジャマの上にガウンを羽織った健吉が、つかつか歩み寄ってきた。

「二人とも、この上が僕の寝室だということをお忘れもらっちゃ困るな。睦言ぐらい、ひ

そやかにやってもらいたいものだ」

「あなたにこんなことをする権利はない筈です。正々堂々と対決しようとしなくて、こんなことをするなんて卑劣ですわ」

「恥を知りたまえ。僕らは何もうしろ暗いことをしていたわけじゃない。正しい愛が、君のために邪魔されていただけなんだ」

「卑劣？ 恥？ キザな言い方だが、僕の辞書にそんな言葉なんか載っていないね。素っ裸で檻につながれていながらそういうことと言え君の辞書にも恥という字はないようだが」

唇を噛む山根をかばうようにして、久子は夫の前に立ちはだかった。

「別れて下さい。こんなことになってから言い出したくはないのですけれど、あたし達は愛し合っているのです。もう離れたくないのです。あなたのそのとりつくる顔なんか見たくないのです」

激しい久子の言葉に、健吉は背を向けた。

「愛か。便利な言葉だな、愛というのは。男と女がくっつきたい時はいつでも愛だ。粘膜と粘膜をこすり合わせるのが愛か」

違います——と、久子は割り込もうとした

が、健吉はそれを無視して言葉をつづけた。

「僕に愛なんてものはわからないな。お前と

結婚したのも愛なんかではなく、美しいものを自分のものにしておきたかったからだ。愛なんて高尚な感情を持ち合せていなかったのですね。だから、今お前が別れてくれといったって、ちよつと手離せないな。愛用のパイプを五万円出すからゆずってくれと言ったってその気になれないのと同じとき。愛はいつかはさめるが、所有欲というやつは永続きがするものだし、お前はまだまだ美しいからなあ」

久子は唇をふるわせて、本気とも冗談ともわからない夫の話に吸いつけられていた。

「侮辱だ」

と山根が怒鳴った。

「神聖な愛に対する冒瀆だ」

健吉の唇の端をちらと微笑がかすめた。

「実はその神聖な愛とやらを試して見たいと思つたので、ここにこうして二人に寄つてもらつたのだ。愛し合う男女が、素裸で一つの部屋に生活する。他人は一切口をはさまない。理想的なシチュエーションじゃないか」

「ば、馬鹿なッ」

「こんな地下室の檻の中が理想的なシチュエーションだなんて——」

「変人たちは青空の下、車の中、藪の陰、その他二人の体を置く空間と、いくばくかの時

間さえあれば、それで十分愛し合えると言うじゃないか。愛し合う二人の周囲で世界はすべて消え去った、とね。さあ久子、用意だ。裸になりなさい」

「いやです。そんな馬鹿げたこと——」

後ずさる体を、健吉は両手を伸ばして引き寄せた。

「いやでも実験はやめるわけにはいかないのですね」

こう言いながら、健吉はあばれる妻を小脇にかかえて壁際にゆき、そこに掛けてある鎖を外して、それで久子の両手首をひとつに縛つた。久子のがくたびに、鎖の音が地下室の天井に大きく反響した。

縛り終わると、健吉は壁に取りつけてあるハンドルをまわした。久子の両手首を縛った鎖は、いったん天井に吊した滑車を通して、健吉のまわしているハンドルにつながっている。まわすにつれて、久子は徐々に両手を天井に吊りあげられていった。

「止めろ、止めてくれ」

と檻の中から、山根が何度か叫んだ。もう自分の前を隠すことも忘れていた。

健吉は妻の体の伸び具合を見ながら、カラとハンドルをまわした。久子の爪先が床からわずかに離れて、ヒーツと悲鳴をあげる

のを聞くと、その手を止めた。

「責めるのなら僕を責めろ」

と恋人の苦痛の呻きに気もそぞろになって、山根が怒鳴った。

健吉は、ぶらりと吊り下つてゆれている妻の腰からベルトを外し、ガウンの袖下に手をかけると、一気に下の方へ引き裂いた。

久子は夫の意図をさとして悲鳴をあげ、身をもがいた。ピンと伸びた爪先が空を蹴る。

ガウンをちぎり取ると、下から現われたネグリジェの襟元を掴んで、これも一気に引き裂いた。ナイロン製なので、チェーンというような金属的な音をたてて、綺麗に裂ける。

「ゆ、ゆるして——」

と、久子はパンティだけの、吸い込まれるように白い体をゆすって哀願した。両手を上に吊られているので、たわわな乳房が妙な形にゆがみ、なめらかな腹がみぞおちのあたりから臍にかけてくぼんでいる。そのために腰の丸みが一層強調された恰好になり、そこから次第に細くなって爪先に達するなだらかな曲線が見事だった。

健吉は無造作にパンティを引き降ろし爪先から脱ぎ取った。久子はすすり泣き始めた。

久子が吊り下げられた場所は、檻から三センチくらいしか離れていないで、山根には

格子越しに見ようとしなくとも、変人の全裸身がクローズアップされて見えるのであった。山根は見まいとする無駄な努力をさっぱり棄てたかのように、今はじめて見るわけでもない久子の美しく成熟した肌にまぶしげな視線を向けていた。二三日前につけたキスマークが、久子の左乳房の上に紫色になって残っている。久子は激しく頭を振って、声をしのんですすり泣いた。しゃくり上げるたびに、なめらかな腹の筋肉が微妙な陰影を見せてヒクヒク動いた。

健吉は部屋の奥から一メートルばかりの竹竿を持ち出してきて、それを久子の足首にくくりつけ始めた。竿の両端に足を開かせて縛りつけるのである。いくら久子が膝に力を入れても爪先が宙に浮いているのでは、足を割るのは造作もないことだった。

「久子さんをどうする気だ。止めてくれ」

山根が久子の哀訴にせき立てられたように、檻の中から悲鳴をあげた。

「君が久子のヌード、それもちょっとやそつとで見られないサービス満点のヌードに興味を示さないで、止めてくれとは意外だね。恋人の献身的なサービスにむくいてやるのが真の愛情というものじゃないかね、君」
と健吉が静かな声で言った。夫がサービス満

点のヌードと言った時、竹竿を底辺にした二等辺三角形の頂点のあたりが、激しく引きつった。
「あ、あなた、許して。こんな……こんな——」

久子がかすれ声をあげた。

健吉は壁際のハンドルを少し回して、久子の拡げられた両足が床にとどくまで鎖をゆるめた。ほっとひと息入れている久子の髪を掴んで仰向かせると、健吉は妻の涙をいっぱいためた眼をのぞき込むようにして言った。

「お前が涙を流して悶えれば悶える程、お前の恋人はよろこぶんだ。お前の眼にも、それがはっきりわかるだろう。今夜はひと晩こうやっておいてやるから、恋しい男がどうしたらよろこぶか、その体をいろいろごめかしためてみるんだな」

「ば、ばかなッ」

と山根が格子を掴んで悲鳴に近い声で叫んだ。

「山根君、老姿心ながら言っておくが、君はその檻の中から、手を伸ばしさえすれば、充分久子の体に触れることができるんだよ。くすぐるなりつねるなり何なりとやりたまえ。久子も愛する君が何をしようと、それが愛人をよろこばすのだと観念して、いやだとは言

わない筈だから」

こう言いすてて、健吉は地下室から出ていった。こうこうと電灯がついたままの地下室に恋人たちを閉じ込めて、地下室の鉄扉が閉じられた。

3

翌朝、健吉が地下室に降りて見ると、二人は眠っていた。男は檻の中に敷いたマットレスの上に両手を足の間にはさんでちぢこまり、女の方に足を向けて横たわっていた。乾割れた唇の間からのぞいている前歯が黄色くなって、湯灌前の死骸のように見えた。女の方は上の方に吊られた両手に体重をあずけ乱れきった髪の毛を深く垂れて、苦しそうな寝息をたてていた。明け方近くまでここに演技られた、愛欲とも憎悪ともつかぬ二人のやりとりを、ひそかに仕掛けたマイクを通じて健吉は知っていた。そんな眼で見るためか、この地下室にはどこかただれた一夜の後の、しらじらしい夜明けを思わせる空気がただよっていた。

男の眼をさまさないように注意して、健吉は、妻の脚を拡げさせている竹竿を解き、吊り下げられている両手を自由にした。艶を失ったカサカサした女の肌が、健吉の腕の中に

倒れ込んできた。

ほんやりした眼を開いた久子は、ゆるして——とうわごとのようにつぶやいた。

「上にいって風呂に入りなさい」

と健吉は静かに言い、妻の体を支えるようにして、地下室を連れ出した。男は身動きもせず眠りこけていた。

地下室を上った所で、久子はしゃがみ込むようにして、

「美代さんが——」

と言い、哀願するように夫の顔を見上げた。

「お美代には昨日里へ帰らせたよ」

と健吉は言って、素裸の妻の体を更に引立てた。

風呂から上って化粧をすると、先程まで寝床から抜け出たばかりの娼婦のようだった久子は、輝くばかりの美しさにもどった。健吉はスリッパを身につけることを許し朝食の用意を命じた。久子は嬉しそうに立ち働いた。薄紫のスリッパは、その下に何も身につけていないことを強調するかのよう、ほっそりした体の線のあるいは誇示し、あるいはほかに健吉の鼻の先を忙しそうに往来した。先程から眼を光らせて見ていた健吉は、つと手を伸ばして久子の腰を引き寄せ、野獣のうにのどを鳴らして、その場に組み伏せた。久



子は全く抵抗しなかった。

さし向かいの朝食がすむと、健吉は、泣き叫んで哀訴する久子を、再び素裸に剥いて、細引で後手に縛りあげた。

「鬼、人非人、あなたはそれで人間なの」
縄尻を取られて廊下を引きずられながら、久子はののしった。

「僕は、自分がいまにも人間的過ぎるのを残念に思っているくらいだよ。出来ることなら鬼になりたい」

こう言って、健吉は久子のむっちり肉のついた尻を小突いた。

地下室に降りると、眼をさまして呆然と見ている山根の前に、健吉はもう一つの檻を組立て始めた。それが出来上がると中にマットレスを敷き、いましめを解いた妻を追いつ込んだ。

恋人たちの檻は一メートル位の間隔を置いて並んでいた。一方の檻に、

「ホモ・サピエンス、雄、三十才。俗称山根陽一郎」

もう一方に、

「同、雌、二十六才。俗称木下久子」

という木札でも下げればふさわしいような眺めだった。

健吉が出てゆくと、山根は格子越しに久子に声をかけた。しかし、久子は男に背を向けてマットレスにしゃがみ、慟哭するばかりで返事さえしなかった。男は、女の白い背中や脇腹が、しゃくりあげるたびに小刻みに痙攣するのをしばらく見つめていたが、突然、格子を掴んで力まかせにゆすぶりながら、猛獣のように吠えた。

「助けてくれえ。ここから出してくれえ」

しかし、やがて格子から離れると、マットレスの上に膝をかかえて坐り、並んだ膝小僧の上にひげの伸びたあごをのせて、うつろな瞳を汚れたコンクリートの床の上にさまよわせるのだった。

4

それは昼も夜もこうと明りに照らし出された、秘密を持ち得ない生活であった。恋人たちは四六時中、常に格子越しに相手の裸身を見、そして自分の裸身を眺められて暮さねばならなかった。

「奴は僕たちをいつまでこうしておくつもりなんだろう」

と男が、女に自分の正面を向けないように、首だけまげて言った。

「何か実験とか言ったように覚えているけ

ど、あたしたちをこんなにしておいて、二人の気持ちはどう変わるかためすつもりなんじゃないかしら」

女は立て膝で前を隠した姿勢で、部屋の片隅を見つめたまま答えた。

「ばかな。こんなことでぼくたちの心が変わってたまえるものか。ね、そうだろう」
「もちろんだわ」

久子は男の方を見ないで言った。

「悪いけど、ちよつと向こうを向いていて下らない。あたし、おトイレがしたくなったのよ」

男は檻の片隅に置いてあるバケツにちらと眼をやり、それから、立て膝をしているために一層強調されている女の腰の方に視線を移してから、格子を離れて向こうを向いた。

「ああ、せめてひとつの檻だったらな。ぼくたちの愛情をためすのに別々の檻に入れるなんて、実験のやり方が間違ってるよ」

口でそう言いながら、耳は背後から聞えるひそやかな物音に集中されていた。

「耳にセンを置いて」

と女が言った。

「はいはい」

男はため息まじりに言って、両手の人差し指を耳の穴にあてがった。

三度の食事と、排泄物の世話は健吉がやった。檻の格子の目はあらいから、大人の体は抜けられなくても、小さな食器やバケツくらいは、戸を開けなくても充分出し入れできた。バケツを健吉に渡すとき、男はきまって怒ったような顔つきをし、女はそむけた顔を赤く染めた。

久子は毎日きまって上に連れてゆかれて、入浴させられた。出てゆく時は自由の身だが入ってくる時はきまって後手に縛られた姿にされている。湯上りの匂うような肌を後手にいましめられ、美しく化粧し直した顔をうなだれて、久子が再び檻に連れ込まれるとき、もう一つの檻の中で、男の眼がその一挙一動を追って光った。久子が、自由だった頃と違った美しさを、次第に肌に現わしてくるのを、肉に飢えた獣の眼は見逃がさなかった。

それに対して、山根は入浴も許されず、ひげも剃らないで、垢じみてひからびた体に眼ばかりものほしげに光らせている獣になり果てていた。毎朝きまって、男は狭い檻の中で体操をしたり、格子の天井にぶら下って懸垂したりするのだが、男に見るなと言われるまでもなく、久子はそんな男の体を見る気さえ起らなかった。

一度、山根は健吉に入浴をせがんだことが

あった。しかし、それに対して健吉は、「久子は僕の所有物だから、僕の気に入るように磨くんだ。君は僕の所有物にたかる蠅じゃないか」と答えて、取り合わなかった。

二人きりでいるとき、恋人たちの間で交される言葉は次第に少なくなっていくた。

はじめの頃は、鉄格子の間から手をさしのべあって、わずかな指先だけの接触に満ち足りぬ思いを燃やしていたのだが、やがてそれもしなくなった。お互の眼から自分の肌をかくすことも、次第になくなっていった。二人は顔をそむけあって、それぞれの檻の中に何時間も一言も口をきかずに過すことが多くなった。

男はマットレスの上に、女に尻を向けて仰向けになって天井にブツブツ呪いの言葉を吹き上げた。

女は男に背を向けて膝をくずして坐り、マットレスの花模様の数をたんねんに数えた。

そんなところに、たまたま健吉が入ってくると、女の体にそれと気付かぬ程微妙な媚態が加わるのを、男の眼は見逃がさなかった。

「君は近頃つめたくなつたな」と、二人きりになると、男は二センチも伸びたひげの間から黄色い歯をむき出してなじる。

「そうかしら」

「それだけじゃない。奴が入ってくると、君の尾底骨がヒクヒクうごめくのがわかるぜ」
「あたしのビティ骨をのぞくより、鏡で自分の顔でも見たらどうなの」

鏡はこの地下室にはなかった。

「君ははじめから真剣にぼくのことを愛していなかったんだ。ぼくは君の気まぐれの犠牲になつたんだ。本当に愛していれば、こんなことぐらいでそれがさめる筈はないんだ」

「動物園の猿に愛なんか必要ないわ」

「君は自分を猿だと思いたいのか。たとえ素裸でも人間の誇りを持つべきじゃないか」

「人間、裸になつたらおしまいよ。裸で抱き合つたり、風呂に入つたりしている時、しかも、それを他人に見られている時、誇りを持ってて？」

「君は君にその誇りをすてさせた主人に、それでもシッポを振るつもりなんだな」

「あなたにしょっちゅう尾底骨を見られているよりましだわ」

「ぼくは君を見そこなつた」

「けっこうよ」

と女は言った。

健吉はこれらすべてのことを、マイクロホンを通じて知っていた。健吉が不在の時は、



テープレコーダーが忠実にそれを記録した。

5

久子が上で過す時間が長くなっていった。

健吉の命令で、家の掃除や洗濯、台所の始末などをやらされるためである。その時にかぎり、久子はパンティとスリッパを身につけることを許されるのだった。ほとんど肌をかくすに足りない布切れに過ぎなかったが、それでも、それを身につけている時は、人間にもどったような気がするのだ。再びそれを剥

ぎ取られる時、彼女はきまって、健吉の足元にひれ伏して泣き、そして訴えた。

健吉はそんな妻の髪の毛をつかんで引きずり起し、素っ裸に剥いて、縄をかけた。時にはそんな恰好のまま寝室に追いたてられることもあった。

久子はためらいはするが、決してそれを拒むことはなかった。

「近頃は上にバカに長くいるじゃないか。何をしているんだ」

と檻の中の男が詰問した。

「お掃除させられたり、台所の後片付けをさせられたりよ」

と女は男の眼をそらしたまま軽く受け流した。

「それだけじゃないだろう」

と男は女の裸を探るようにねめまわした。

「奴隷は主人の意志に逆らえないわ。それに——」

「それになんだ」

男がわめいた。

「わたしは彼の正式の妻なのですもの」

と女はうそぶいた。

突然、男は爆発したように笑いはじめた。

ひげの伸びほうだいののをふるわせ、やせたあばらを引きつらせて、いつまでも笑いこけた。

「正式の妻か。こりゃあ、いい」

笑いのあい間に、男はこれだけのことをどうにか言った。

女はちらと男の方を見ただけで、笑い声に背を向けて、白いえくぼのできる膝をかかえた。

ある夜のこと、事が終って健吉が久子に縄をかけようとすると、久子は健吉の素足に取りすがって、もう地下室にはやらないでくれと嘆願した。両手で健吉の足を抱くようにして、唇を何度も足指の先におし当てるのである。涙が健吉の足の甲を生暖かく濡らした。

健吉は妻のなすがままにまかせて、眼の下にひれ伏している妻の白い背すじや、欲情の思い出に満ちたまるい腰のあたりを見降ろしていた。

「許してやらぬのでもないが、本当に僕の所有物で満足していられる気持ちになれたのかね」

と、健吉はおだやかな声できいた。

「はい。もう二度と愛とか恋など欲しいとは思いません」

久子は口づけを止めずに、ときれときぎれに言った。

「お前は美しくなった。結婚以来、今が一番綺麗に見える。僕はますますお前を離したくなくなった。僕がお前を所有しているんじゃない、反対に、僕が久子にとらわれているんじゃないか……」

健吉はしんみりした声になった。

久子は涙のあふれ出た眼で、夫を振り仰いだ。

「それ程までに、あたしを愛していて下さるのね」

「いや、僕は愛という言葉はきらいだ。あまりにもまざりものが多過ぎる言葉だから。久子は僕の奴隷だ、所有物だ、財産だ。僕はそれだけで充分だ。僕は所有欲が人一倍強いから誰にもお前を渡さない。久子は僕の奴隷で満足かな」

久子は健吉の膝に取りすがって、わっと泣き出した。硬い歯が健吉の膝頭を噛んだ。

しばらく妻の泣くのにまかせていたが、やがて健吉は静かに相談を持ちかけた。

「下にいる男のことだが――」

男と聞き、久子は顔をあげた。

二人の視線が合った。

「どう始末したものかな」

「二度と顔も見たくありませんわ」

と、久子は何のためらいも見せずに、キツパリと言った。まだ乾き切らない涙の底で、黒い瞳が憎悪に燃え上っていた。

「久子がやってくれるね」

と、健吉は穏やかな眼で久子を見降ろして言った。

眼は夫の眼を外さずに、久子は強くうなづいた。

■当社の町名改称のお知らせ

当社の町名はこのたび下記
のように改称されました
場所は以前と同じです

東京都中野区松ガ丘 2~21

株式会社 あまとりあ社

■見たもの聞いたもの



「女とみればいじめて、殺してニヤリと笑う」というのが先日封切られた米映画「サディスト」の宣伝文句。さて、内容はといえば男女のみさかいなく、誰でも殺すおいろ気のまったくない殺人狂で本誌に登場する愛すべきサディストたちとは全然異質の人物が、この映画の主人公。

野球見物に行く途中の三人の教師（女一、男二）の車が故障し、すでに殺人狂がその情婦と潜伏している修理工場に立ち寄ったところから話がはじまる。狂人はここで二人の男と警官を殺し、あやまって自分の情婦まで殺してしまっただうえ、女教師を追ううち、毒蛇の棲む穴に落ちこんでザエンド。なんのことはない、サスペンス映画としても中級のしろもの。

●外国の資料写真を見ましょう

いま、日本で出版されている外国MS画や写真の十九パーセントまでが、当社の取り扱い商品です。

★取り扱い品目録、見本五枚とで五〇〇円

★他に試注文品M系およびS系

★他に試注文品M系およびS系

いずれも 一、〇〇〇円

やはり「UM」と明記して下さい。

（申込先）

東京都町田局私書箱二十一号

フェニクス商会・東京支社

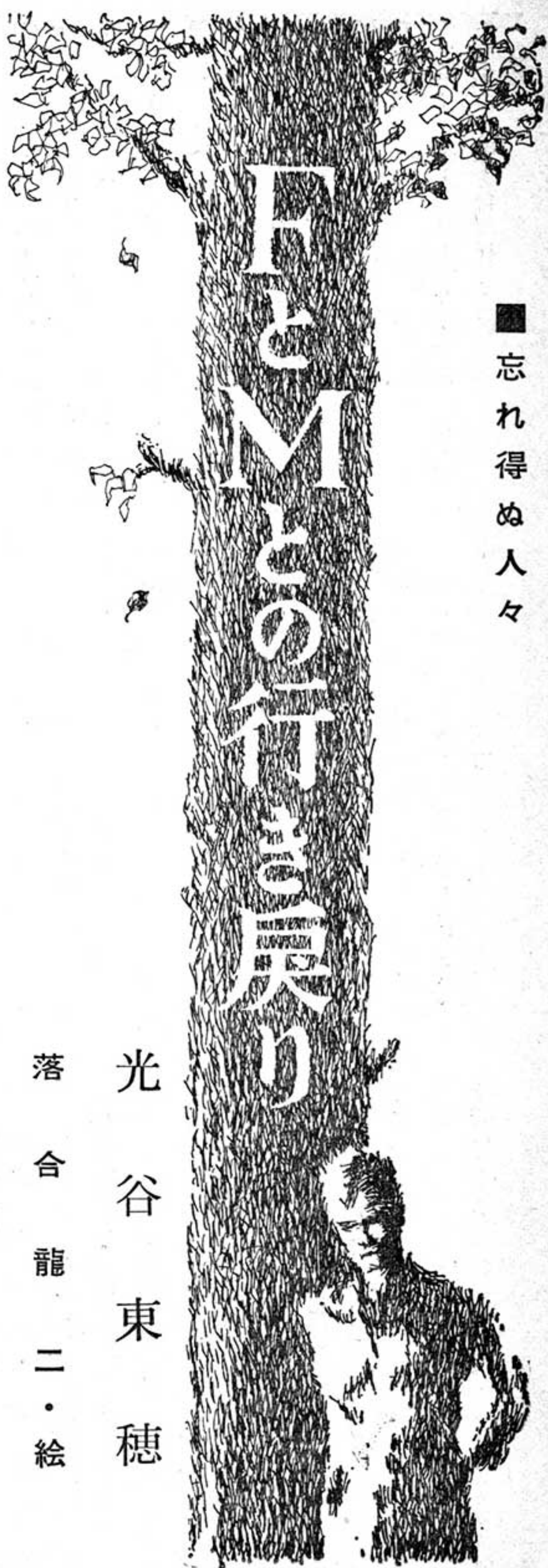
（振替・横浜六〇八番）

なおフェニクス商会・若林分室は、MSの共有会員制で、いつでもご利用いただけます。

時間 午後二時——午後十時三十分

（日曜、祭日は休業）

☆ ☆ ☆ ☆ ☆
くわしいことは返信用切手（二十円）同封のうえ、フェニクス商会・東京支社へお問い合わせ下さい。



FとMとの行き戻り

光 谷 東 穂

落 合 龍 二 ・ 絵

その日までは空白であった——。といえは嘘になる。

事実、それまでの幼い記憶にはさまざまのことがあり、臆気ながら心のどこかに残っている。けれど、私はあえてそれらの事象を、白紙とした。やはり多少なりとも常識を知りそめたころからこそ、本当の意味の「魂の遍歴」だと考えたからである。

三十七才のこの日まで、ある少年は覺らせて去り、健やかな青年は「こと」を教えて戦場に消えた。少女は可憐な恋心を植付けたのみで人の妻となり、ある知名人は美のそこに

あることを示して憧れの心を芽生えさせ、人

妻はまた、その存在を確認させ、極点の美の

「技法」を強い、私から快美の情感を掴み出して遠く北国へ去って行った。

すべて、忘れられない人々である。

私はこれらの人を知って成長した。人並に生活も安定し、社会の一員と成り得た私だが、過去に学び目覚めさせられた奥深い心の想いは、日とともに強烈な求心となり、滾り立つ激しい感情の中で私は今日も、儚ない探求の日を過している。いつまで続くとも知れない……まるで、踏み込んだ泥沼で身悶えす

るかのよう——。

小学校の同級にAという生徒がいた。

父親が重役とかで、紺サージの上衣から白い襟を覗かせ、頭も丸坊主でなく「ポッチャン刈」だった。毎日女中が暖い弁当を運んで来て、寒い冬など、ぼくたちは羨ましげに眺めたものだった。成績は悪く性格も陰気で内気で、少し傲岸なところがあり自然に友達も少なく、何かぼくたちと人種の違った人のように感じたのを覚えてい

そのAと、三年になって机が並んでしまった。男女共学のないところで、男ばかりの教室は、机を二つ付けて並べてあり、廊下側にA、そしてぼくが並んで坐っていた。

夏休みに近い学期末試験の日。その日はぼくの得意な算術(算数)の時間だった。

合図とともに問題を一読したぼくは、「ああ、これなら……」と楽観して鉛筆をとった。

全部で二十問。始めの五つばかりを終えて、ふと、ぼくは隣りのAを隙見した。

彼の用紙は上に小さく姓名が書かれてあり、答えは飛び飛びに四つ出来ていたがその二つが間違っている。

ぼくはまた三問終えて隣を見た。Aの解答は進んでいない。ぼくは頭を廻し先生の方を盗み見て、その存在を安全なものと確認し、Aの腕を軽くつついた。

その時、始めてぼくはAの表情の異常さに気付いた。触れたAの左腕が微かに動いているのも知った。

Aはぼくの合図も知らず目を用紙に据え、右手で固く鉛筆を握み、まるで、今の重大な時間も忘れたかのように一つの運動を繰返していた。

思わず、声をかけたい息を呑み、ぼくはAの左手の位置を目で探った。

Aの左手首は緩んだズボンの中に入っている。そして細かく揺れ動いていた。

ぼくはあきれ顔でAを見た。時間の経つのも忘れAの動く左手と、更に固く鉛筆を握った右手と、意志のないような表情とを興味深く見つめていた。

静かな中でカタリと音を立て誰かが立った。手には出来上がった試験用紙がある。

アッ、とぼくは慌てた。ぼくの答はまだ半分も出来ていないのだ。ぼくは急いで鉛筆を走らせ始めた。しかし、奇妙に苛々した気持ちで簡単な答もなかなか出て来ない。ぼくの心はともすれば隣の気配に惹かれてゆく。廊下側は多少光も少なく試験に夢中で誰もAの行為に気付かない。ようやくぼくは焦り始めた。書いては消し、書いては消しながらもAのようすを見ずにはいられない。

「あと五分。」先生の声がした。ぼくは鉛筆を握り締めたが、まるで、先生の声が合図であつたかのように、Aはとうとう机の上に俯伏してしまった。

ぼくはおどろきの目でAを見つめていた。その時まだ、Aの左手は微かながら動いており俯した背が波打つように動いていた――。

小学校の六年間で、ぼくはこの時ほど悪い点をとったことがない。

Aの行為が何であつたかを知るまでに、ぼくは更に五、六年の月日を要した。小学校三年といえは当時で十才。現代風というなら満八年と何ヵ月か。これがぼくに「性」そのものを感じさせた最初ではなからうか。

この特異なA少年は休み明けの九月には顔を見せなかった。転校した、という。理由は何もわからなかった。

得体の知れない悪夢が続いていた。脅かされたように胸苦しい、重い感じだった。

ふと目覚めたが臉が痛くチカチカしている。暗黒の世界ですぐには現実感がもどつてこなかった。徐々に、異様な気配を感じることが出来た。夢で重苦しいと感じてたのが現実の重量となり胸が圧迫されている。

たちまち現実感が全身に蘇り、怪しく動く「人」を知ってぼくは愕然とした。

ぼくの目覚めたのも知らずその人は、自分の動きに没入している。激しい息使いで、酒の悪臭がぼくの鼻を痛めつけた。運動は一段と激しくなりぼくの息苦しさは続いたが、ぼくはひっそりと堪えていた。知覚だけがその行為の正体を知ろうとしている。ぼくの唇に生暖いものがふれ、それはゾツとする程気味

悪く感じた。更に狂おしくその人は動き、ぼくの脚を外から挟み腕が肩のあたりを力強く抱いた。

「ウムッ」

とぼくは呻いたようだった。すると、その人はガクガクと全身を震わせ……やがて、静かになり、ぼくの全身から圧力が抜けた。

ぼくは、闇の中でカッと大きく目を見開いていた。

隣の布団に移ったその人は嘘のように気配もなく、やがて、呼吸が静かな寝息と変わっていった。

ふと、身体を動かしてみても、ぼくは自分の腿や、その下の寝衣が濡れているのを知り、驚愕に大きく息を呑んだ。その感触は無気味な不潔感となり、ぼくの眠りを妨げた。

その寮は普通六帖に三人の割だが、ぼくは二階の指導員と同室で、八帖に三人と恵まれた。そしてしばらく前からぼくの相棒は痔で入院しており、今は指導員と二人きりだった。

指導員Bは間もなく現役入隊する。その頃の入隊前の若者によくある例で、Bも毎夜の如く遊びに、出掛け、酒を呑んで帰って来た。ただ、性病を恐れてか、あまり女遊びはしなかったように思えた。

翌晩も、Bは軽い酒気とともに帰ってきた。まだ眠っていないぼくを見ると遠慮なくぼくの布団にもぐり込んできて、

「ゆうべはおどろいたかい。かんべんしてくれよなあ……。うっかり遊んで病気をもらい即帰（即日帰郷）なんて言われたら破滅だからな。そのかわり、今夜はいいことを教えてやる」

と言いながら、Bはぼくの身体を抱き寄せた。

元来、ぼくは「可愛いほん」と人にいわれた。小学校の学芸会で主役をやった時同年の女の子に追いまわされた事さえある。Bにとってもぼくは適当な対照物であったのかも知れない。

Bはぼくを抱くと、片手でそこを弄び始めた。すでに、ぼくはその行為を知りかけている。学生時代と違って、今のぼくの周囲にはそういう話が渦をまいていく。しかし、行為そのものは全く始めてだった。けれど、Aの事件以来ぼくにとって忘れられない関心事だった。

全身で激しく抵抗しながらも、心のどこかにそれを望む気持があったのか、あるいは、Bの巧みな誘動にぼくの官能が呼び起こされたのか。

——次第にぼくの力は萎え、快感が衝動となって全身をつらぬき走っていた。

——その夜のBは親切だった。手際良く跡始末までして、ニヤッと笑うと布団を抜け出していった。

ぼくは言葉もなく目を閉じた。動くことが大儀だった。言い知れぬ羞恥の想いと、カッと全身に漲る余感に皮膚の全部を燃え上がらせていた——。

翌日も、その翌晩も……。ぼくはいつの間にか夜を待ち遠しいものと思うようにさえなっていた。羞恥も何も忘れ果て、むき出しの心を抑制することも知らず無抵抗でBに身体を委ねていた。

「Oへ行けば口専門の女がいるんだ。あの味は忘れられない。入隊までにもう一度行って見たいが売れっ娘なのでなかなか時間がとれない」

ある夜、Bは例のごとくぼくを弄びながらそんな事を言い、「口専門とは……」と具体的にその方法を説明して聞かせた。

それは、ぼくにとってまさに「驚き」の一言に尽きた。現実には、そのようなことを行なわれる大人の社会の計り知れない奥深さの一端を見出したように思うと同時に、そういうことの出来る大人の世界への憧れが、ぼくの

心を強く刺戟した。

ほくはすでに教えられて、Bと同時にほくもまた、Bのものを指先で弄んでいた。その話をしながら、自分の言葉にその時の感覚を思い出したのか、Bのそれはたちまち固く變動し始めていた。その見事な躍動は、不意にほくの心に思いがけない衝激を与えた。ほくは感覚を突然襲った激情は、総てを破棄した物凄い感情の嵐となり、ほくの理性を完全に狂わしてしまっていた。無意識の内に、ほくは布団をはねのけて坐っていた。

ほくの手握り締められた、それは、幼いほくのものとは違って逞ましく隆起し、艶やかな光がこの上なく美しいもののようにほくの目を惹きつけた。

——その時のほくの目はきつと異様にギラついていたのではなからうか。Bはおどろいてほくの表情を真険な顔で見守っていた。ブルッ、と心のどこかが震えた感じで、突如ほくはそれに向かって顔を近づけていた。「アッ！」と声をあげたのはBである。彼は狼狽して身体をずらそうとした。

しかしほくは力強くそれを握りとらえて、入っていた——。先程、Bから聞いたばかりの動作を一生懸命に繰返しているほくの姿に、Bは抵抗をやめると片肘をついた半身の

姿で力を抜き、委せ切ったようにほくの行為を見ていたらしい。——やがて、Bの全身は大きく揺れ動いた。ほくは呑んだ——。

「有難う！」小さく言ったBの顔が面恥ずかしげに染まったのを、ほくは忘れない。

間もなくBは入営のため、郷里へ帰った。満洲に行き、更に転身して南方で戦死したらしい。岐阜大垣出身で、養老の滝の話を良くしたBという人はほくにとって忘れられない。

そして十六才（満十五才）のその日からとうとう思い出だけの人となった。

戦中派という言葉はずいぶん昔に使い古されたようだけど、やはり現代でも生きているのではなからうか。誌上で見る諸氏の作品の中に、軍隊ものの決して少くないことがそれを物語っている、といえる。この人達もきつと戦中派であるはずである。ほくもその一人なのだ。大正生れであり、現役兵で入隊した。

戦時統制下のほくたちは、軍人精神なるものの中に鑄込まれて、成長した。日常生活まで制圧された。個人の自由の認められない時代である。だが、そういう中でさえ、やはり夢も希望もあり、またロマンの花も咲いた。現代から見れば、それは、如何にもささやか

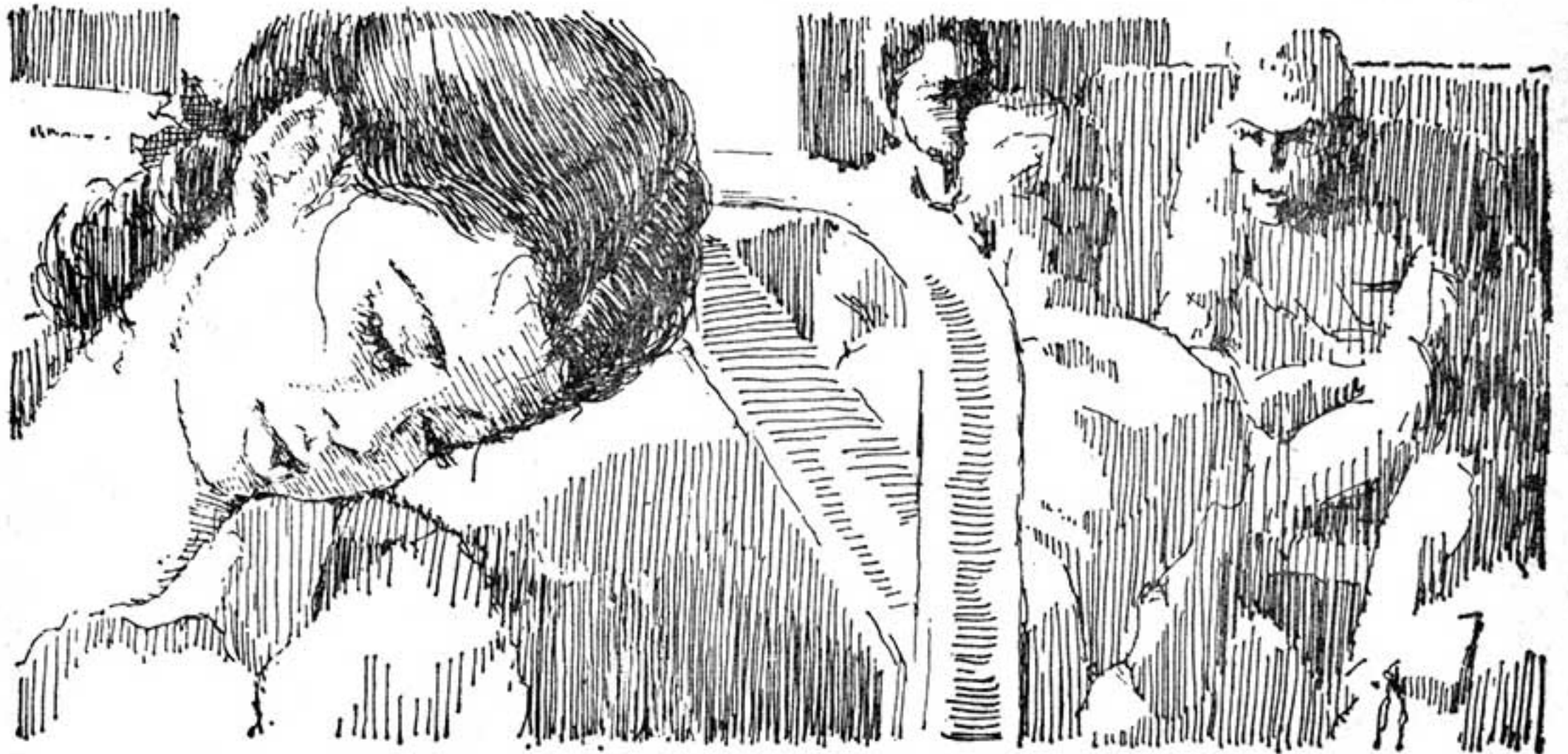


な、つつましやかな日蔭の花のようなものだ
が、当人たちは全く真剣だった。甘い香りにも満ち満ちていた。けれど、若い二人は並んで歩けなかった。少しでも鋳型からはみ出ようとすれば、たちまち特高という恐いおじさんにつかまって「教育」なるものを味わわねばならない。

今から思うと馬鹿みたいなものだが、それが当然のものとして横行し、ぼくたちもそういうものである、と教えられてきた。だから、そういう世相の中で味わう甘いムードは今ならさしずめ「スリル」満点。そういう場面にぶつかって見たいと思う人もあるだろうが……。

C子は女子挺身隊として、学業半ばでぼくの工場に配属されてきた学生であった。戦争末期、そろそろ内地空襲も始まりそうな気配の晩秋、ぼくは、現役令状を受けて故郷に向かった。そのぼくに、C子がまつわりついて来た。

いざ、となると男よりも女の方が大胆になるらしい。ぼくは彼女の冒険じみた行為におどろいたが、それ以上に彼女の思いつめた心はぼくを感激させた。わずか四時間余の車中であつたが、この時ほど、ぼくの心が満されたことはかつてなかった。



満員の車中である。しかし工場での日常と違ったものがお互の心に流れ合うようで、ぼくは幸福に酔っていた。ぼくたちは窓際に向い合い、無言で目を見返しては微笑み合っていた。闇物資の積込みの激しい頃で、通路も人と荷物が乱雑を極め四辺は騒々しかった、がそれでも二人は満足だった。肌寒い日なのでぼくたちは二人の間に荷物を置き、互に足を伸ばし合った上にレインコートをかけて、暖をとった。

「寒いわね」

C子の言葉にぼくは手を伸ばしてC子の脚にふれた。彼女はちよっとおどろいた風だったが、ぼくを見て煩を染めた。ぼくはゆっくりとモンペの上から磨擦し始めた。レインコートが隠蔽となり、その下の行為は他人の目には止まらない。ぼくはだんだん大胆になり、やがてモンペの裾のゴムの間から手を差し込み、そっとC子の素脚に触れた。

ビクツとC子の身体が動いた。ためらいつつ脚を引込めようとする。しかしぼくの熱い視線を受けると、恥じらいつつ目を伏せた。血の色に染まった娘の耳たぶを、ぼくは美しい、と思った。

ぼくの掌より直接伝わってくるC子の素肌の感触は、暖く、ほど良い肉付きが、ぼくの

心を騒ぎ立たせ、すべすべとしたなめらかさが快美の情を燃え立たせた。

健やかなC子の素足！ 何という素晴らしきなのだろう。ぼくは自制を忘れ、更に上へ上へと指先を伸ばしていった。C子の膝小僧は少し冷たい。しかし、その裏の何という暖い心持良さ、しっとりとして豊かな肉！——

これが「女」というものか……。この素適な柔い肌——。それまで悪友に誘われて遊び女とたわむれたことはあっても、女の肌を愛しむ余裕は持ち合せていなかったぼくである。

はからずも生死も知れず行く道で、清純な乙女のC子が、その素肌をぼくに委ねて、頬を染めている。C子にとっては、心を寄せたほくという男に対する必死の餞別でもあったのだろうか……。ぼくは彼女の汚れない肌をまさぐりつつ、その感触に満足し快美さに心を震わせていた。

C子の瞳は潤んでいた。

それを見た時、ぼくは始めて、兵隊……いや、戦争というものを憎む気持を抱いた。

途中で車内臨検があった。荷物を摘発された者も多かった。

ぼくは、ぼくたちの唯一の楽しみをさまたげたその男達を憎悪した。しかし、

「その荷物は……」

という男に、ぼくは素早く令状を示した。男はぼくの手にした白い令状（現役兵）を見るとうやうやしく敬礼した。

「ご苦労様です！」

遠ざかってゆく男を見て、ぼくとC子は声を上げて笑った。

戦時中なればこそ「令状」はそれ程、威力があった。

——C子は室襲中も無事で、戦後、人の妻となった、と聞いているが消息は知らない。復員後、たずねたい気持はあったが、余りにも当時の世相は厳しく、生きることに関わられてついに果せなかった。だが、ぼくの掌はまだあの暖くなめらかな感触を忘れていない。

——ぼくに女性の下半身の美しさを示してくれた最初の女はC子だった、といえる。どこかで、このぼくの手記を読んだなら、あの車中を想い、そっと頬を染めることだろう。

人間は誰でも長い一生の間には、自暴自棄になる時があるもののように、そういう場面に遭遇すると、自分自身が思いがけない変化を遂げるのではなからうか。

昭和三十年。ぼくにもそういった時期があ

った。完全に仕事はゆき詰り、失敗に次ぐ失敗。失意のどん底で、日々の生活に対する苦痛で極度に無気力となり、生きていることさえ億劫になった。ぼくにとって正に危険な時期であった、といえる。

そういうぼくの状態を心配して説き励まし、今日の地位への地盤を与えて呉れたのがD氏である。

D氏はぼくの先輩だった。彼の好意に満ちた援助と助言は、失意のぼくに再び生きる力を与え新しい就職で仕事にハリを覚えるようになり、ぼくはやっと前途に光明を見出した。正規な学歴のないぼくには、D氏の援助がなかったなら、実力はあるながら就職もおぼつかなかったに相違ない。だから、ぼくはD氏に救われた、といえる。

D氏夫人に最初逢った時、ぼくは自分を持て余している真最中だった。ぼくより一つ下だという夫人は、和装の良く似合う上品な人で、何か貴婦人めいた威厳さえあったが、つましい立居振舞と柔和な微笑は、暖くぼくの荒れた心を包んでくれた。ぼくの話聞く夫人の眼差し優しく、容姿もまた優雅だった。

この夫人の姿に、ぼくがぐんぐん惹かれていったのはいうまでもない。ぼくは夫人の和

服に包まれたその中の肌に、美しい肉色に輝く「匂う肌」を感じ始めていた。度重なる訪問の内に、ぼくは夫人に対する自身の恋情を持て余し始めた。あらゆる援助を惜まず努力を続けてくれているD氏に対して、背徳の情に責められつつも、心の奥にある良心を麻痺させつつ溺れてゆく快美さは、何とも避けようもなく、ぼくは夜ともなれば夫人の裸身を夢に見た。

——たまたまD氏は九州方面に出張した。ぼくの心が得体の知れぬものにがんじがらめに締めつけられ、思いがけない方へ走り始めたのはこの時からだ。

『見たい！ 欲しい！』

一体、こんな欲望が、ぼくのどこから沸き始めたのか、ぼくは、ぼく自身の理解に苦しむ。しかし、現実のこの欲望は強烈だった。その行為が、如何に浅ましく破廉恥であるかをよく承知しながら、ぼくは自分の情念を制し切れない自分を嫌悪した。

美しいものを美しいと感じ、そしてその美しいものに触れたい、接したいと思うのは通常の人間の欲望であろう。しかし、その美しいものを、美しいが故に舌で味わいたい、となると、明きらかに異常であった。ついに、ぼくの心はその異常なものへ、とまで発展し

ていたのであろうか。あるいは失意に痛めつけられたぼくの心が自棄とともに助長して、より深い刺激を求めたのか。それともまた、なるべくして成長したぼく自身の悲しい性だったのか。

——ぼくにはわからない、現実にあるのは夫人の前に膝まづいたぼく自身の哀れな姿だけだった。不思議な現象ながら夫人の姿が神々しいものに見えた。とともに、ぼく自身は精神も肉体も醜いものとなり果てていた。

「奥さん！ 見るだけでいいんです、見るだけで……。決して無茶はしません！ 美しいものに魅せられた愚かなぼくを、笑って下さい。見て確かめたい。奥さん、ぼくは……」——これもやはり、ぼくの心の成長なのだろうか？ 愚かしいことながら、事実だった。

D氏夫人の心の中に、そういう異常なものがひそんでいたなどとはぼくは思いたくない。ぼくの余りの無暴さと異様な真険さが夫人の好奇心を呼び起したのだ、とぼくは信じた。でなかったなら、最後に遠く去っていった夫人を追うことをしなかった自分が余りにも哀れである。今までの生活を通じて、それ程、夫人のぼくに与えた影響は大きい。ぼく

にとってはまたとない人であり、今後の行く先でも再び巡り合うことの出来ぬ程遠い人となった。今にして夫人を手離れた痛根事が、ひしひしとぼくの内心をしめつける。

ぼくの言葉を聞くと同時に、夫人の優美な顔は引締った。

「私に主人があるのを承知でその留守にそんなことをおっしゃるものではありません。失礼な方ね！ もうお帰りなさい。そういうことをいう方は家へ来ていただきたくありません」

ぼくは「はっ」とした。確かに、ここでいうべき言葉ではない。

「奥さん、ぼくは……決して……」

「聞きたくありません。お帰り下さい。そしてその言葉を主人の前で言ってご覧！」

夫人の声には威厳があった。ぼくは悄然とうなだれてD家を出た。

諦めることは出きなかった。すでにぼくの心は、自分のものでありながら、自分のものと違っていた。その夜、ぼくは一晚の殆どを費し、長文の手紙をしたためた。

翌朝、ぼくは再びD家を訪れた。顔見知りの女中が出て来て気の毒そうに、「お目にかかりたくないそうです……」

という、当然のことである。ぼくは一旦は



背を向けたが思い切ったように、
「これ、奥さんに渡して下さい」

といった。

女中は妙な表情をしてほくの手紙を受けとった。

「仕事の事です。紹介してもらった先の返事です。」

逃げるようにほくはD家を出た。

その日と、その翌日と、ほくは何をする気力もなく過した。

次の日、ほくは電話をした。

「昨日来るかと思ったのに……。叱られることを覚悟で午後からいらっしやい」

冷たい声だったがほくの心は躍った。もどかしい時間がやっと過ぎ、ほくはD家に飛び

込んでいった。

「あなたのような妙な方は知りません！ 始末に困ります。この手紙を主人に見せます。よろしいこと」

「困ります奥さん。それだけは許して下さい」

「じゃ……なぜこんなものを書いたの？」

黙ってうなだれるほくの頭上で、

「ホホホホ」

と夫人は高らかに笑った。

「足が好きなのあなた？」

「いいえ決して……ただ、奥さんの美しさが……」

「そこにお坐りなさい。本当に……見るだけよ……ね！」

床を指差した夫人の声が、少し優しくなった。

思いがけぬ言葉に、アッ、と思って仰ぎ見た夫人の顔は、常の優雅な表情の外に、軽悔の心と憐みとが混り合っているようにほくは感じた。

ソファに腰かけた夫人の、和服の裾の前がハラリと開かれた――。

ほくの目の前に、夢にまで見た想像通りの、脂の乗った艶やかな足が露出していた。

しなやかに良く伸び、肉付良く締った脚はむだというものがなく、すべすべと暖かそうな

血の色を浮き出させた玉の肌だった。

息を吞みつつ、以後のほくは夢中だった。

「いけません！ いけません」

ほくの唇が触れる度に、夫人は激しく声を交差させた。ほくは、夫人の香ぐわしい脚に酔い魂を宙に飛ばせて、ただ、頬を寄せ固く腕に抱き締めていた――。

果して、夫人の気持はどんなだったのだろう。

「午前中なら来てもいいわ、女中がいなければ……」

夫人は、帰るほくにいった。

――その朝、夫人はまだベッドにいた。水色のガウン姿は夫以外のものの見ることの

出来ぬ妖艶さがあつた。

「お風呂沸かしてちょうだい……」

ほくはいそいそとその命に従う。

湯上がりの肌を薄桃色に染めて、夫人は寝室に戻ってくるとほくを招いた。

「今夜主人が帰ってきます。だから今日限りで忘れるのよ、ね。この手紙は燃しましよ。そのかわり……さあ、両手を前に出して……貴男を満足させてあげます」

絹の腰紐が固くほくの両手に巻きついた。

夫人はその先を持ち、ほくの首がやつとベッドの上に出る位置に坐らせ、縛った両手はベッドの下へ水平に突き出させて、紐の先を固くベッドの足に括りつけた。

すっかり動けなくなったほくを見て夫人は手紙を焼き捨て、ゴロリとベッドに仰臥した。

「こんなことってあるのかしら……」

言いながら夫人は妖しく笑っている。夫人の手指が……足の指が……足首も踵も脛までも……。ほくの頬を、鼻を、唇を……。――なぶり続けた。まるで軟体動物のようにベッドの上でくねる夫人のガウンはしどけなく乱れて、素肌が妖しくうごめく。

ほくは恍惚として時に目を睨りまた目を閉じて、わずかに動く首を急がしく廻して、唇

が追った。

「そんなに……足が欲しいの」

夫人は身をずらしてきた。ベッドから脚を投げ出すようにして、爪先がほくの顔についていた。夫人の体重がほくの腿を踏みつけていた。突立って夫人はハバリと惜し気もなく裾を開いた。

瞬間、息づまる思いで、ほくは凝視した。まだ、まるで乙女のような若い足がそよいでいる。

まばらなひざは一層香わしく、ほくの愛情は頂点に向かって走り始めていた。痛い程、首を前に突出すほくのようなすを、夫人はおもしろがって見る。そして少し顔を引く。好餌を前に見せつつ弄り続ける女！ 女性というものものの意地悪さと、残酷な趣味に躍らされつつほくは喘ぎ続ける。

一瞬間を引いて、ベッドに坐った夫人は、上体を起こさせ、そのまま全身を前にずらし始めた。足の位置は動かない。自然、上体の近づくだけ目が開いてゆく。やつとどいた時、ほくは首の痛さも、顔の上の夫人の爪先の痛覚も感じなかった。ただ、時々目を開いた時、夫人の起伏に富んだ白いスロープの彼方に、形良く突き出た双丘の上の色付いた頂点が印象的で、やがて夫人の足が動きそれに

つれてその丘も激しく、またゆったりと揺れていた。ほくの愛情は余情に震えていた。

D氏が不慮の事故で急逝したのはその年の暮である。

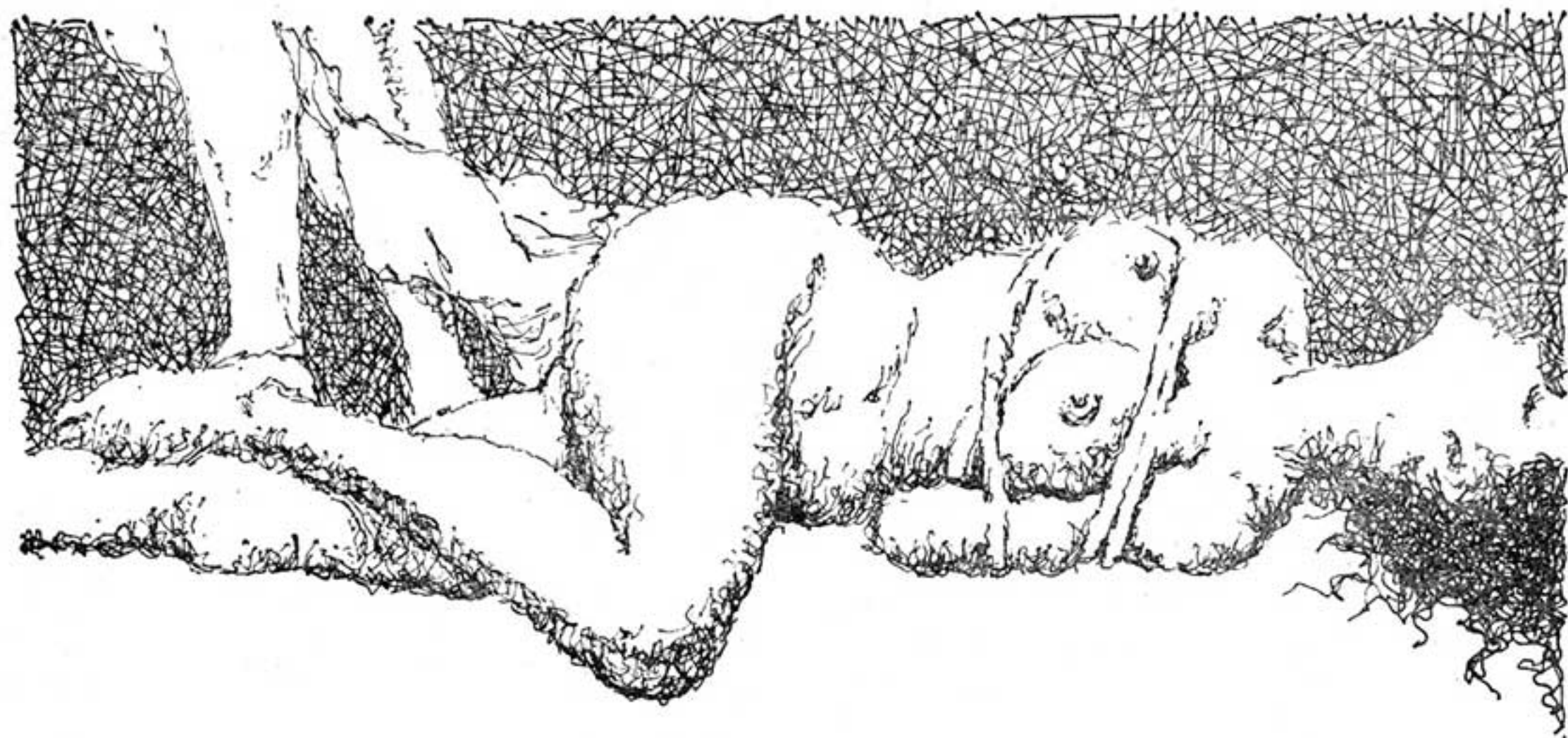
初秋にほくは就職していた。新しい仕事に情熱を傾けることでほくは夫人を忘れようと務めた。ほくにとっては必死の努力だった。

年が明け、年始の休日中にほくは夫人を訪ねた。数ヵ月ぶりだった。夫を不意に失った夫人はさすがにやつれて見えた。夫人との約束で、ほくはその日まで逢うことを避け、D氏の葬儀にさえ顔を出さなかった。正直言うと、D氏の霊前に顔を出すのが恐しかった。それ程、ほくはD氏に対しての背徳行為に責めつけられていたのだ。

今、D家は訪れる人もなく静かであった。女中も田舎へ帰っている。広い家に美しい夫人が一人ひっそりと暮らしていた。

夫人は微笑んでほくを迎えた。その夫人の顔に隠し切れない淋しさがあつた。もう誰はばかることのない二人であるはずだった。ほくの心は火のように燃え始めていた。非礼も道義も忘れ果てた情炎の塊ともえた。

夫人は黙ってほくを浴室に案内した。



「ねえ、約束なさる。私を女として扱わないと……。貴男が、ご自分を満足させるためだけなら許してあげますわ」

夫人の言う意味がわからぬままにほくは同意した。「じゃ服をぬいで中にお入りなさい。俯伏せになって手を背中に廻して……」

夫人はほくの挙動をじっと見ていた。

用意された紐がほくの背の両手に纏い、その余りは足をも揃えて縛った。

浴室の空気は暖い。立ちこめた湯気の中で、夫人は神々しい程神秘的な気配さえあった。不自由な身体を夫人に助けられて充分に暖まったほくは、やがてタイルの上に長々と仰臥していた。後手に縛られて転がることの苦痛を知ったのも始めてである。

手首も、腕も、肩も、すべて自分の体重で押さえつけられて、振じると関節が極度に痛んだ。

「お別れよ……ね」

不意に夫人が小声でいった。聞きとれずに、エッというほくの背中の上に夫人の愛情がどっしりと重なってきた。

一段と増す苦痛より、ほくの神経の方が勝っていた。呻きつつも、ほくは心の中で夢中に吸った。

夫人は両手を前について少し汗を浮かし

た。奇妙な笑みを浮かべてほくの表情を楽しむように見ながら、

「飲んで見たい？」

ほくの乱れた呼吸に髪の毛はゆれながらその先だけが微かに動いていた。真正面に夫人の香りが落ちて来た――。

これが不潔なものだらうか――。

「神酒」とは良くも名付けた。ほくは目を閉じて、ほく自身の情感に耐え続けた。空しく空間に直立して躍動するそれにも限界はあった。激震が走り始めた。

夫人の身体がクルリと向き直ったのはその時である。夫人はほくの心の中心を掴んだ。それに夫人の小さな上品な愛が重なったのをほくは夢心持で感じていた。

――ぐったりとタイルになえたほくは、その感触を……その余情を、またとない尊いものとして忘れまいと思いつつ、余りの激情の連続に動くことも出来ぬ程、疲れ果てていた。

いそがしい日が、二、三日続いた。ほくはその間に心を籠めた求愛の便りを出した。

日曜日、ほくは待ちかねたように早朝からD家へ走った。D家は固く閉ざされずむ人もなかった。

間もなく夫人から一枚の葉書が来た。

『あなたの性は、あなたも、そして私をも滅してしまおうでしょう。かりそめの想い出として……』

ぼくの必死のプロポーズに対しての返事は、たった一枚の葉書だった。夫人は再婚のため北陸の生家に去った。

D夫人はぼくの心の中から、ぼくの求め得る最終極点を掴み出して去った。

果てしない空虚はぼくの心を痛めたが、ぼく自身は夫人によって生まれ変わりを余儀なくされた。半ばは自分から求めたことではあったが、移り変わりゆく自分の心に、ぼくは恐怖さえ覚えた。その恐怖がぼくをして夫人の跡を追うことをとどめた。

都合良く仕事も忙しく、ぼくは次第に実力を発揮し始め、ぼくの頭にあったものが製品となり産み出されていった。一方では仕事に追われ、また一方では女体への幻惑にとまどいつつ、昼と夜との相反した感情の中でぼくは暮した。

夏はぼくにとっての美の対照物がいたるところに散在している。

電車の中は特に楽しい。こんな男を、

やらしい」と非難する女性が多い。しかし、案外女性というものは自分の美点を誇示したい欲望が内面に介在しているのではなからうか。そう思える程、悩ましい露出スタイルが多い。それらを、ぼくはそれと覚られぬ要心深さで観賞させていた。事実、ぼくの目は猥らさよりも敬愛の心を籠めてそれを眺めているはずである。

肌色は白くなめらかで、うっすらと血の色を浮かべたもの程好ましい。その白桃のような肌が、あることにより、更に磨かれ、光り輝き、色付き染めることを想うと、ぼくの心はたちまち夢幻の世界へ飛躍する。

遅く焼けた肌や、むだ毛の多いもの、更に毛穴のブツブツと見えるのは堪え難い。多分、奉仕に対する効果が顕著でない、と思われるためだろう。

脇の下の程長き鬚りはぼくを随喜さる。まれにすべすべしたそこを見ると、ぼくの心は燃え狂う炎のように渦巻き荒れる。

胸のふくらみの丸く形の良いのは限りなき愛おしさを感じ、豊かなものに顔面への圧迫を意識する。腰の肉満ちたものは双丘の荒れ狂う姿を思い、その下で苦悶する自己を想像する。

ぼくの美に対する意識はすべてマゾヒズム

と直結する。かくも変遷した自己の性を嫌悪しつつ、それでもなお、女性の美体を追いつめる心を浅ましいものと、ぼくは思う。

緊縛された女体もまた美しい、とぼくは思う。そこには、ぼくの美の対照物が余すところなく露呈している。しかも、その美の各所は、極度に誇張されて目前に拡がっている。転がされた女体を前にした時、きつとぼくの性はマゾヒズムからそれ以前のフェミニスト的フェチシズムと混り合って奇妙なものになるだろう、と思う。こんな経験のないぼくにはそういう場面の想像しか出来ない。しかし、その空想の、何と素晴らしく素敵なことか――。

とにかくぼくは、美体に対してはすべての意志を失う。

其処に深い叢が有ればそれは、ぼくの顔を洗い清めてくれるだろう。程良い鬚りは寸時にぼくの智性を失わせてしまう。ぼくは自身を空間に孤立させ、唇のみがそれを求めて意志あるもののごとく這い求める。清らかなふくらみを見出した時、ぼくはきつと自分の精神が狂い出すのではないか、と恐れを感じる。それ程、輝く神泉のほとりはぼくを魅了する。

こういう風になったのも過去に接した女性の中で、D夫人の場合が一番清らかに感じたためかも知れない。ぼくの思想の中には、いたるところに夫人の各部位が介在している。

——清らかに無垢の女体は、緊縛された美体を高度に示して転がっていなければならぬ。

彼女を床に押倒したのは妖美な肢態のぼくの女神である。ぼくの女神は、ぼくが男体であり、また、ぼくの性を知悉して、自己の興味を増すために清浄な美体を探してきた。

彼女はぼくと同じく、ぼくの女神の下僕であり、その足下に隷属する物体と化す運命にある。彼女の素肌に喰い込んだ絹紐は、美しい色彩に似合わず冷酷に彼女を痛めつけ、その可憐な乳房を豊かなものに変型させ、胴を蜂のようにくびらせている。美の極点は更に哀れであった。

美しい同性に対する嫉妬の感情は、ぼくの女神さえ放擲出来ぬらしい。あるいは、そのもっとも羞恥の個所を痛めつけることにより、自分が女神であることを確認させようとしているのか……。

——非常の荒縄が縦に一筋割込んでいた。しかも、その荒縄の途中に固い結び目をこしらえていたのをぼくは見ていた。その時

のぼくの女神の残忍な眸の光を、ぼくは美しいものとして、感歎しつつ見ていた。ただ、一筋の荒縄が、ぼくの相棒の動きを封じている。ほんの簡単な方式なのに、彼女は脚を少し開き加減して動かさない。ぼくが女神に奉仕するように、彼女にもそれをさせようと女神は意図する。

しかし憚らないながら彼女は抵抗する。そこで、ぼくの働きが始まる。憧れの美体の憧れのその各所へ、ぼくのしなやかな愛情は蠢き、唇が這う。

彼女は狂気のように悶えて、やがて呻きも絶えだえとする。その時が彼女の女神に対する奉仕の第一歩となる。誓いの盃には彼女の唇がそれに変る。

愚かしい男女の下僕を玩弄しつつ、女神は満ち足りて深い眠りにつく。

ぼくは与えられた愛好物に最大の敬意をはらいつつ、自分のF味を満喫する。

——こんな夢想の夜が多く、D夫人と別れた後も、四年余、ぼくは結婚しなかった。

——二十年。こうして私はたどりついた。曲りながらも歩んできた人生は、ただ、一筋に、“そのもの”を求めて漂流し続けてきたのかも知れない。そして今こそ始めて求道

一線に直進してきていたのを思い知った。

私は一介のサラリーマンである。人並みに家庭を愛し、普通の楽しみを感じる良識も失われてはいない。通俗的には平凡な社会人なのであろう。しかし、その内の内には誰にも知られたくない感情が芽生え、そして育ち、成長していった。求真の心理を否定できない私の心は、私を風俗誌に近づかせ、アブ作品に親しませた。

美しいものに接し、触れたい、という気持は各人共通の欲求心理のはずだが、私の場合は多少激し過ぎるだけだ、と私は信じた。自分を嫌悪しつつも、自分の直情を愛しみ、その気持を大切にしている。

私は技術者である。空想家でもある。

机上の空想は時に機械メカニズムに即応して新しいものを産む。それが仕事である。しかし私の空想力は時には意外の方向に躍進し、私の内面を反映して遊飛する。

繰返している。私の細い指は常に美体に触れたがる。触れる、という感覚は、たちまち私の神経を麻痺させ、私は“美”に支配権を委ねてしまい、“従う”条件のもとで始めて唇が活動し、飛躍するのである。

コレハオドロ記 ⑦

尻に敷かれた男

左次郎



①

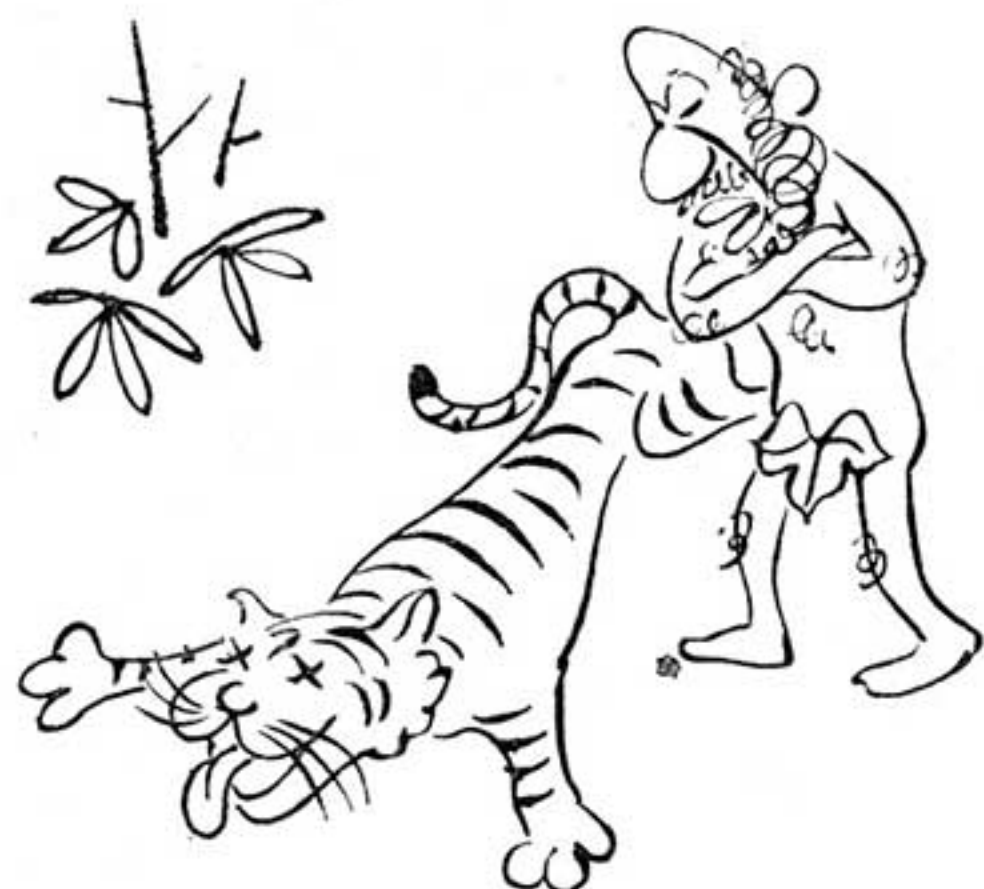
ジュンは女にもてない男



けれど
頭のよい男

②

死んだ虎の皮で



③

たちまち
ニエールック



④

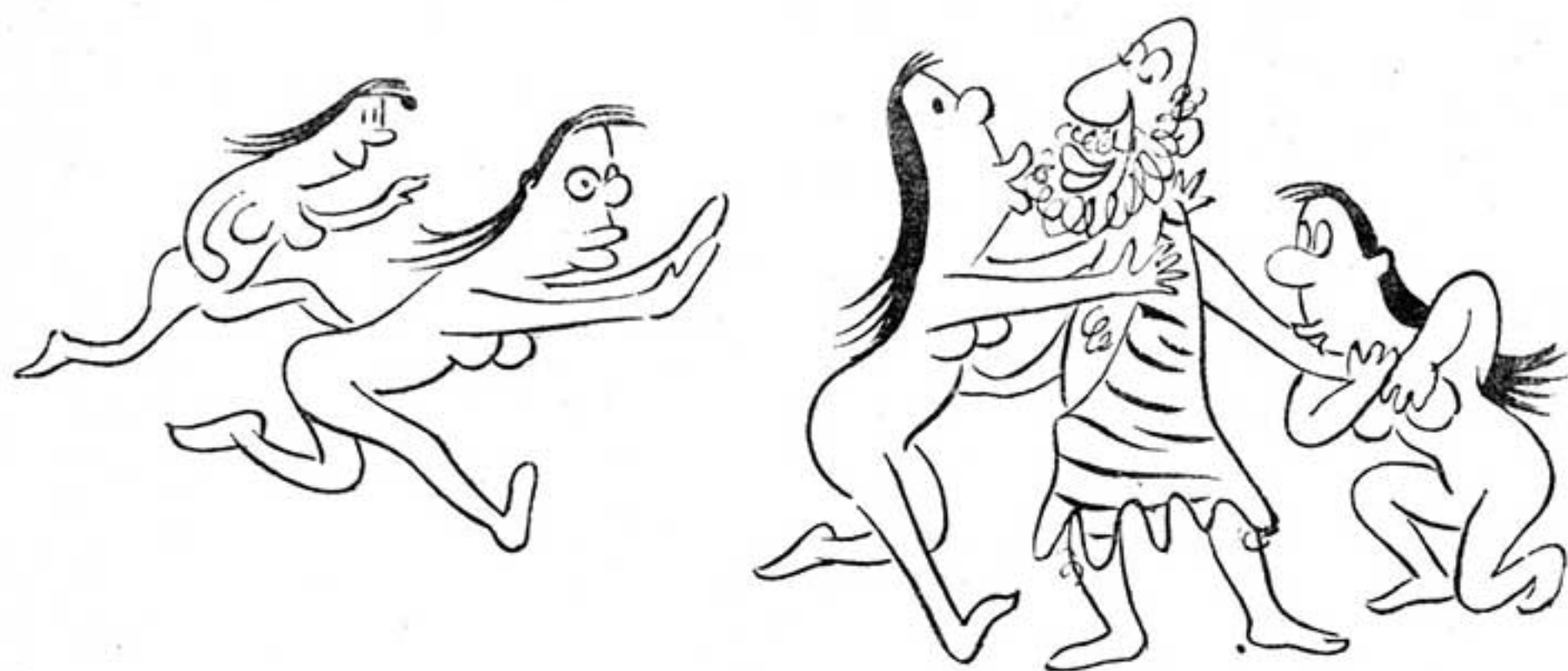
女は
大昔から

キモノに
弱いと
きまって
いる



⑤

たちまちこのありさま
もててもてて困る
とはこのこと



⑥

やわらかき女体を枕に
踊りをながめ



まさに
この世は天国



⑦

おもしろくないのは他の野郎ども
これでは女はジュンがひとりじめ

何とか
しなくちゃあ
と衆議一決

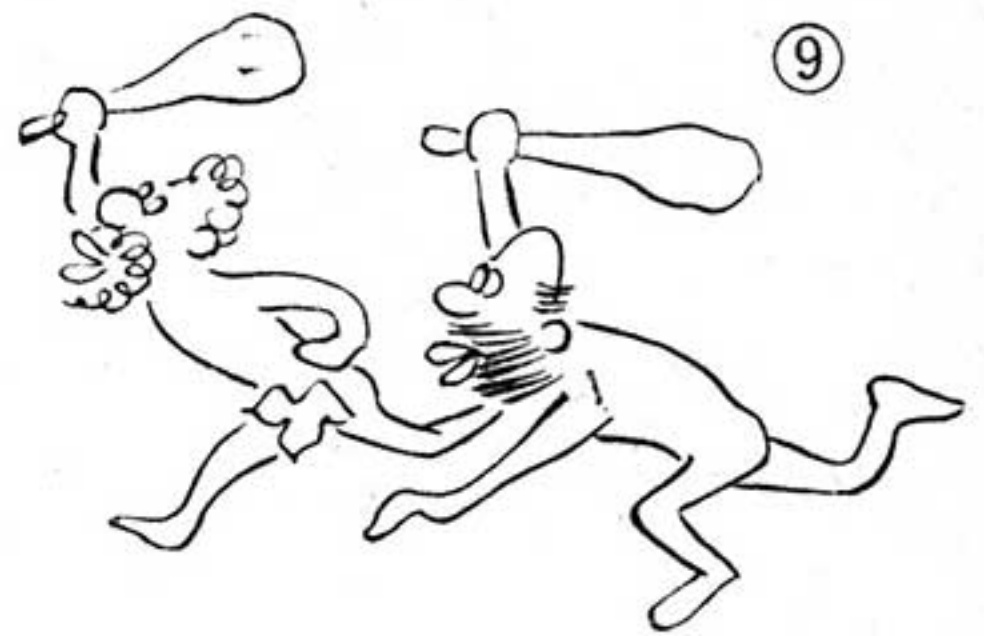


⑧

それ
ジュンを
のして
しまえ



⑨



のされちゃ
たいへん
三十六けい



⑪

たちまち
皮のそうだつ戦



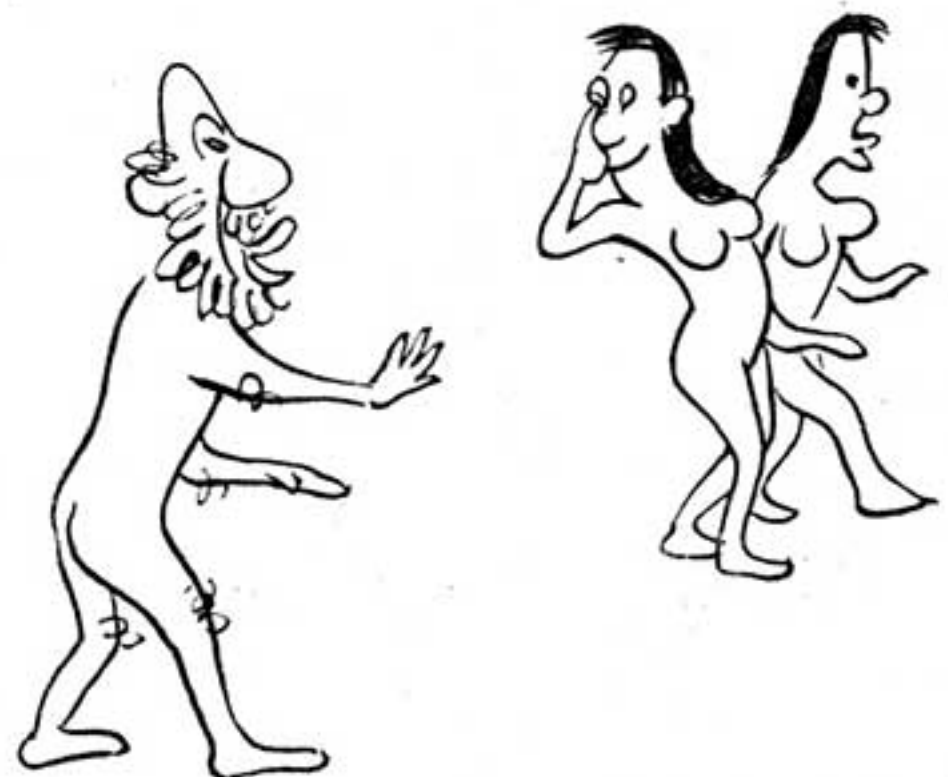
⑩

キキ一髪 最後の
虎の子——いや
虎の皮を投げつける



⑫

命はたすかったものの
皮をなくした男には
何の魅力もない
女とはそういう
もの



⑬

ガツカリ
しょんぼり



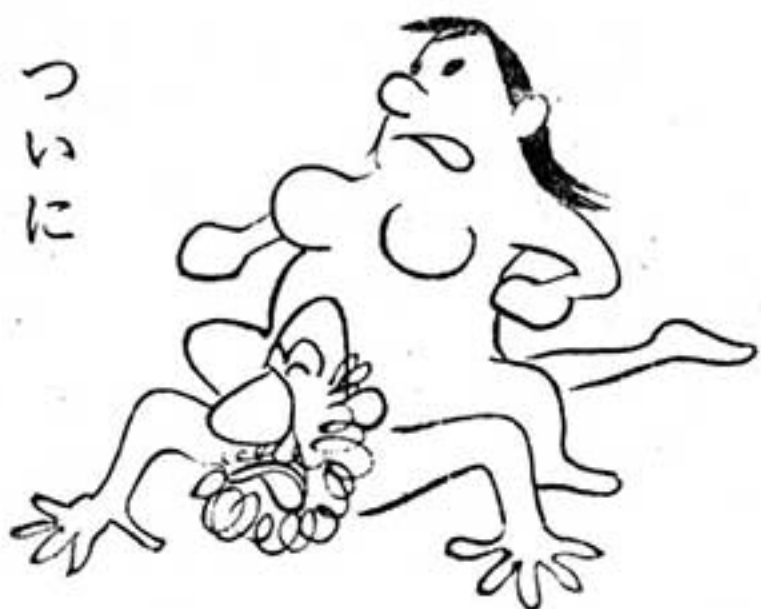
⑭ 捨てる神あらば……



⑮



どす——んと
またがられたとたん
何ともやわからかで
変なかんじ



ついに

⑯

しかし
これじゃ
枕にもならん



⑰

尻にしかれる
よろこびを
発見するにいたる



⑱

せっかくだが
おことわり



⑳

怒った
女は
エイ
すかんタコッ



㉑

そして現代
もう説明までもなからう。





ほも紳士録 ⑫

永遠に

こどもでありたい男

かびや・かずひこ
秋吉 巒・絵

1

H・Dはいつも幽霊のように、夜、音もなく訪ねてくる。

玄関のガラス戸が、カタカタと

微かに揺れる。風かな、と思って

いると、まもなく、ボソボソ……

といった感じの、小さな声、とい

うよりも、言葉のききとれない、

陰にこもった低い声が、する。

——ハハア、Dだナ。

私はようやくそう気づいて、玄

関の戸をあけると、はたして、う

すぐらい門灯のひかりのなかに、

Dがいつもの真つ黒い服で、ニヤ

ニヤ微笑いをしながら、やや前屈

みに佇っているのである。

一糸乱れず、ピッチリと七三に

分けた頭髮。ギョロリと剥いた

眼。とがった、高い鼻。大きな口

といった造作の、面長な浅黒い部

貌で、三十五という年令よりは、

三つ四つふえてみえる。

服装も整然としていて、白のY

シャツに、五十六のいなかおや

じのするような、じみな野暮たい

柄のネクタイを、キツチリと結んでいる。

「ボサボサ髪や、くずれた身装りは、だいきらい」だそうである。

幽霊の現われるような、来訪のタイプであるが、座に馴れてくると、なかなか多弁、そしてそれらがすこぶる独善的だ。

男色者——Dをはっきりと男色者といえるかどうかわからぬが、——には、独善的なものが多いが、Dのそれは、非常にはげしく、自分の説以外はいっさいノー・コメント。貸す耳をもたぬ、という風だ。

そんなふうだから、勤め先きの会社でも、友らしい友がないらしい。なにやかやの宴会に出ても、酒もタバコものまぬし、他の同僚たちと話の合わぬDは、いつも早々に退席する。

「おとなは嫌いです」

とかれははつきりと私に明言している。

そう、Dは、おとなは嫌いで、

こどもが好きなのだ。それも男の児を……。

△大小児科Vという、衆道の通語がある。妙なコトバだが、つまり、△小児科Vを更に小児科化したという意味で、いわば中学生くらの少年を愛の対象とするものの謂である。

Dはそれなのだ。中学の低学年生くらいから、さらに降って、小

学の上級生ほどの少年でなければ、愛の感情を動かされないのである。

だから、厳密に言えば、男色者というよりも、ペドフリー・エロティカに属するのではなからうか。

2

Dはこどものころに、周囲のおとなたちから、ひじょうに可愛がられた。といっている。

「いまはこんな顔ですが、小さいときは可愛いかったのです」

とかれはつけくわえる。

かれはいつも、「ナニナニらし

い」などという推測的なコトバは、ほとんど使わず、断定的に、確信的にいいきるので、私はそれを分析しながらきくのだが、この場合も、いわゆる良家に育った独り子のかれが、こどものころ、両親はいうまでもなく、自家の女中や来客などのおとなから、チャホヤとほめられたり、愛されたりしたのは、事実だろう。

こうしたおとなの過剰な讃辞が、たびかさなり、慣わしとなると、こどもは、自分の「愛らしさ」とか「美しさ」「りっぱさ」という、自信を形成する。

ここから、そのこどものナルシズムが、芽生え、発達し、また膠着もするのだ。Dの場合も、はつきりとそのワクにはめられていたことが、推測される。

Dは少年時代に同性愛の経験をもったということは、語ったことがないが、おそらく、だれしもが経験している程度のおなじしごろの少年との深い同性愛ぐらいは、もったのではなからうか。

どだい、かれは、現在の少年愛のことを除いては、自分から「人を愛した」という話をしたことがない。

これは一種の虚勢で、裏をかえせば、インフェリオリティ・コンプレックスの現われとみてよい。強いナルシシスの裏側に、劣等感が潜在している。証左なのである。

思春期をすぎるころから、Dの身体には、恥毛もくろぐると完全になり、腋毛もふえ、額面にはうつすらとひげさえ生じた。

「わたしは、これが厭でした。だんだんとおとなになるのかと思うと、とてもたまらなかったのです」

とDはいう。

そして、「時」の経つのさえ、恐れた。

が、時間は、そして人間の生理は、こうしたDの苦衷にはおかまいなく、かれは、おとなになってしまった。

Dが低十代の少年に愛を覚えは

じめたのは、それからである。

つまり、かれは、いつまでもこどもでありたかったのだ。が、おとなとなってしまったいまは、いくら地団太ふんでも、「可愛いかった」こどものむかしにかえりようがない。そこで、まだ春草もはえやらぬような、ちいさな少年に、自分のむかしを見、心を慰め、楽しむのである。

だから、かれの少年愛も、かれのナルシシスが因子の一つをなしている、とみてよいだろう。

3

Dの趣味も、その少年愛と結びつくものが多い。というよりも、かれがみずからの趣味を少年愛と結びつける、といったほうが正しい。

かれは旧制の工業学校を出て、ある電機会社の技術課に勤務しているのだが、精密器械いじりは、そのままかれの趣味のひとつともなっている。

カメラいじりが、その筆頭第一

に挙げられる。かれのいうところによると、両親との三人ぐらしの家の中に、写真屋のような完璧な暗室を造り、D・P・Eはいうまでもなく、自分でカメラの組立てもやれば、もちろん修繕もやる。

かれはだいたい、小さな室が好きなのだが、とくにこの暗い、狭い、暗室がだいすきだという。

W・シュテークルの説などによって、これを見ると、Dは子宮内妄想をもっているのではなからうか。真っ暗な、せまい室のなかで、胎児のような格好に、体を丸く固めて、好きな作業をしながら、自分は母親の子宮内にいるという妄想——かれにとっては夢——に耽り、楽しむのではなからうか。

「一人の患者は、巨人の女性の子宮内にいるという妄想をとくに好んだ、と語った。なぜなら、そこでは、かれは自分の思うがままに動きまわることができるからなのだそうである。この子宮内の世界で、かれは前後左右に動き、かつ

どんなことでもしたがるような、すべての便宜があるのである。そのうえ、かれは孤独を楽しみ、かれの母親と固く結びついて離れることがなく、外界のきびしさから保護されているという感じをうけることができる」

うんぬんとシュテークルがいつているように……。

Dのような、情意の発展の小児水準への退行をしめすもの——シュテークルはこれを精神性欲發育不全症とよんでいる——には、子宮内妄想をもつものがすくなくない、ということである。

話をDのカメラいじりののことに戻そう。

Dは会社の休日などには、近所の小学生くらいの男の児を集めて、写真を撮ってやるのが楽しみだ。ひとりひとりにいろいろなポーズをさせて、撮る。

現像し、焼付けしたものは、モデルになってくれた子どもたち、それぞれ与えることはもちろんだが、自分はそれらの写真を飽

かずながめては想像を逞しゆうす。想像の世界では、どんなことでも許されるからだ。

数年前、近所の男の児たちのなかに、Dがもつとも好いている、Vという子どもがいた。小学六年

生で、格別美少年というのではないが、頭髪をクリクリの坊主刈りにした、浅黒い丸顔の、いかにも男の児らしい子であった。

Dは、自分もこのころにそうであったためでもあろう、いわゆる坊ちゃん刈りの子どもよりも、クリクリ頭のこのもののほうが、好きである。かれはVをとくに可愛がり、Vもまたかれに馴つ

いた。

ある日、Vがひとりで遊んでいたとき、DはVを誘って、自分の家へ伴った。Dの家では、父親は中気で臥ているし、外出好きな母親は、そのときもるすだった。

後でも記すが、Dの部屋には、いろいろな精密器械や、楽器がある。こどや——男の児は、こんなものが大好きだ。Vは喜んで、器

械をいじったり、楽器で遊んだりした。

Dはここでの、Vのいろいろなポーズの写真を撮った。そして、「きみの写真をいっしょに現像しよう」

と誘って、とふたりで現像室にはいった。

暗室の薄光のなかで、Vと顔をよせあって、ネガの現像をしながら、Dはこの子どものむかしにかえったように、幸福なひとときであった。

この日を機会に、VはたびたびDの家へ遊びにくるようになった。来ているうちに、Vは、Dの部屋の精密器械の扱い方も覚え、楽器の奏し方もできるようになった。

Dはこの少年のなかに、自分のむかしのすがたを、そのままみるように思った。自分の分身のようにさえ、感じた。

——この子を将来も、自分のしごとの助手にしたい。できることなら、養子にもしたい。

とDは思った。

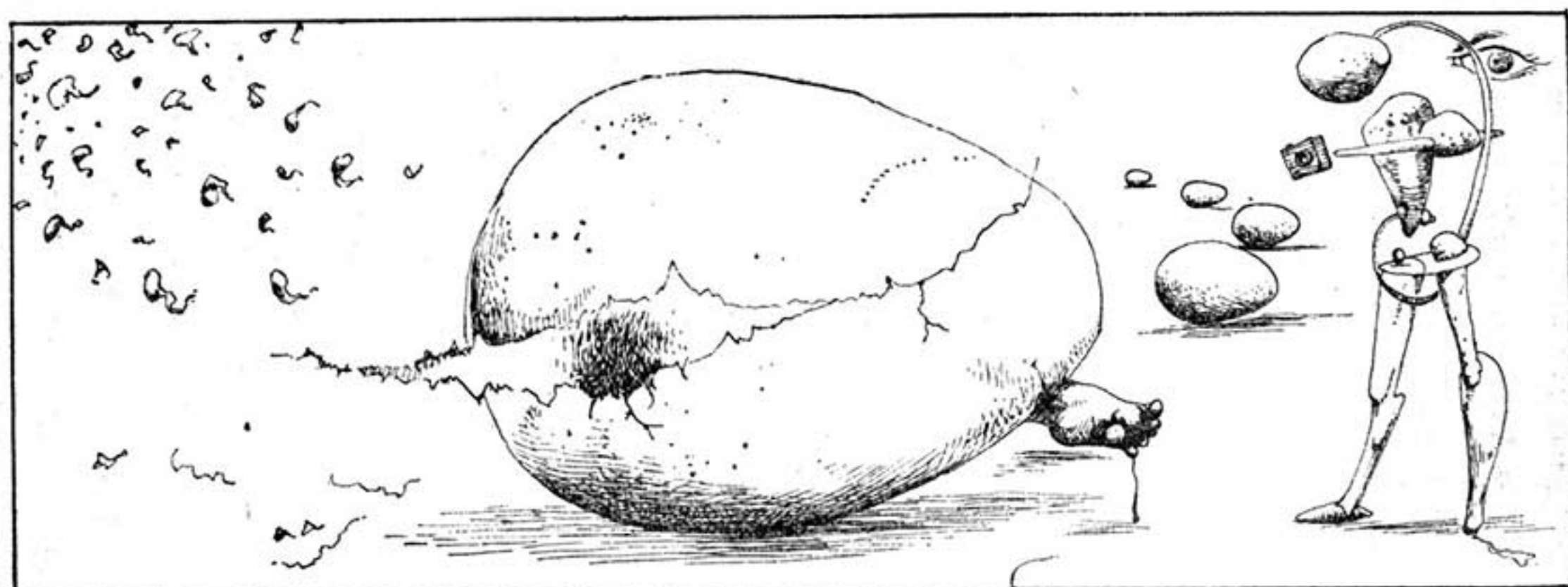
わが子を可愛がってくれるので、Vの母親も、Dに親しみをもちようになった。

Vの母親はそこそこ三十一、二歳、愛嬌のある顔立ちの、みるからに気のよさそうな、開放的な女であった。

そんな彼女であるから、近所では「こどもずきだが、変屈な男」という噂のDにたいしても、すこ

しの警戒の構えもないようすで、親しみをよせ、Dの家へ遊びにきているわが子を迎えにきたときなどにも、Dとひとくさり話をまじえていくことがあった。ときには、おのが家庭内のプライバシーな秘事までも、Dにうちあけることがあった。それによると、彼女の夫はうちをあけることが多く、夫婦関係がまるくいつてないらしい。

はずみというものはおかしなもので、極端に女性嫌忌の念をもつDが、あるとき、このVの母親と情を通じてしまったのだ。



そのとき、彼女はVがDの家へきていると思って、迎えにきたのだが、Vがいなかったので、Dとふたりで話をしているうちに、うなってしまったのである。

「彼女のちょっとしたしぐさに、猛烈に性的なアピールを覚えて……」

とDは語っている。

もちろん、それも直接的な大きな動機であろう。男色者にも、ときどき、女性からそういう牽引を覚えることがある。ということを引きいているから……。

私はそのほかに、Dのなかに潜在していた。心因を、つぎのように思惟する。

Dはほんとうは、V少年の肉体をこそ、わがものにしたいのだ。が、それは社会通念から許されないうことである。いちおう「健全な社会人」であるDにとって、社会通念を無視してまで、そんなことを敢てする気にはなれない。

Vの母親とふたりきりで、話をしているとき、かれは、彼女のふ

としたしぐさのなかに、強く性的な牽引を覚えた。とともに、かれは、Vと肉体的に結合することができないならば、せめて、Vを分身としているところのこの女——Vの母親と結びつきたい、と感じたのではなからうか。

更に、Vの母親とそういう関係をもてば、Vをいっそう固く、自分のもとに、確保できる。——Dのような男は、そういうふうにかえがちなのではなからうか。

Vの母親との関係を、Dはその後もしちどもった。やはりDの部屋において、であった。

が、その後しばらくして、Vの一家は他へ転居のために、その地を去っていった。それきり、DはVと会わない。仮りに、会ったとしても、むくつけき十七、八歳に成長したVの身体には、むかしのようないや、いささかの魅力も、Dは覚えまいであろう。

Dの記憶のなかでは、かれの手に大切にのこされているVの数々の写し絵のように、Vはいつま

でも十二歳のこどもなのである。

4

Dはカメラをもって、街を歩いているとき、このみものところの男の児をみかけると、その少年にカメラをむけることを忘れない。というよりも、カメラもつ手が、悪かれたもののように、少年にむかうのだ。

少年のすべすべしたほほ、くつきりとしたえりあし、そしてまた、ショート・パンツからにきつとでているはだかの脚、パンツのいしきのあたりなどに……。

その意味で、少年の肉体の部分があらわになる夏が、Dはいちばん好きだ。

夏になると、Dは、ひまあるごとに、せっせと街を歩く。繁華街などよりも、なるべく場末の街を……。

場末の町はずれの小川のなかで、ランニングにショート・パンツ姿の男の児がふたり、魚すくいをしている。

Dはその背後にカメラをむけて、パチリとやる。こどもの一人が、それを見つけて、

「いやだなあ、おじさん。おしりを写したりして」

という。

「正面も撮ってやるよ。こっちを向きな」

また、パチリ。

稲垣足穂の詩に、『半パンツをはいた少年のうしろからついていったら少年が歩きたびに、おしりのまんなかのTの字形のしわが、IになったりIになったりするのを見た』というような意味のものがあつたのを、憶えているが、Dがそのとき撮った少年の背面の写真も、まさにそれとおなじような線を狙ったものであつた。

Dがもっともいっしんになって見にでかけ、いっしんに撮影するのは、こども相撲と町の祭礼の情景である。

どこそこでこども相撲をやっていると聞くと、Dはどんな用をさしおいても、そこへとんでいく。

四本柱の土俵をとりかこんで、がしい。

おおぜいのこども力士が、西と東に分かれて控えている。

素肌にキツチリとしめた、白の六尺ふんどし。ゴムマリを二つ合わせたような、丸い格好のよい臀の双丘の谷間に、それがきゅっとくいこんで……。

少年愛の男色者の多くが、そこであるように、臀部フェチシストのDは、そうした少年のうしろ姿にはやくも興奮しながら、いちいちカメラにおさめていく。西側に行ったり、東側に行ったり、いそがしい。

やがて相撲が始まる。呼びだしに名をよばれたこども力士が、東と西からひとりづつ土俵に現われて、取り組む。

躍動するふたつの小さな肉塊。Dはしきりにカメラを構え、しきりにシャッターをきる。

相撲がおわるころには、Dは体じゅう汗みどろだ。

これが祭礼となると、歩きまわらなければならぬので、更にいそ

祭礼は、山の手のそれよりも、下町の「はだか祭」といったふうのそれが、Dは好きである。

祭の行事に加わるものは、男はおとなもこどもも皆、六禪ひとつの裸体だ。

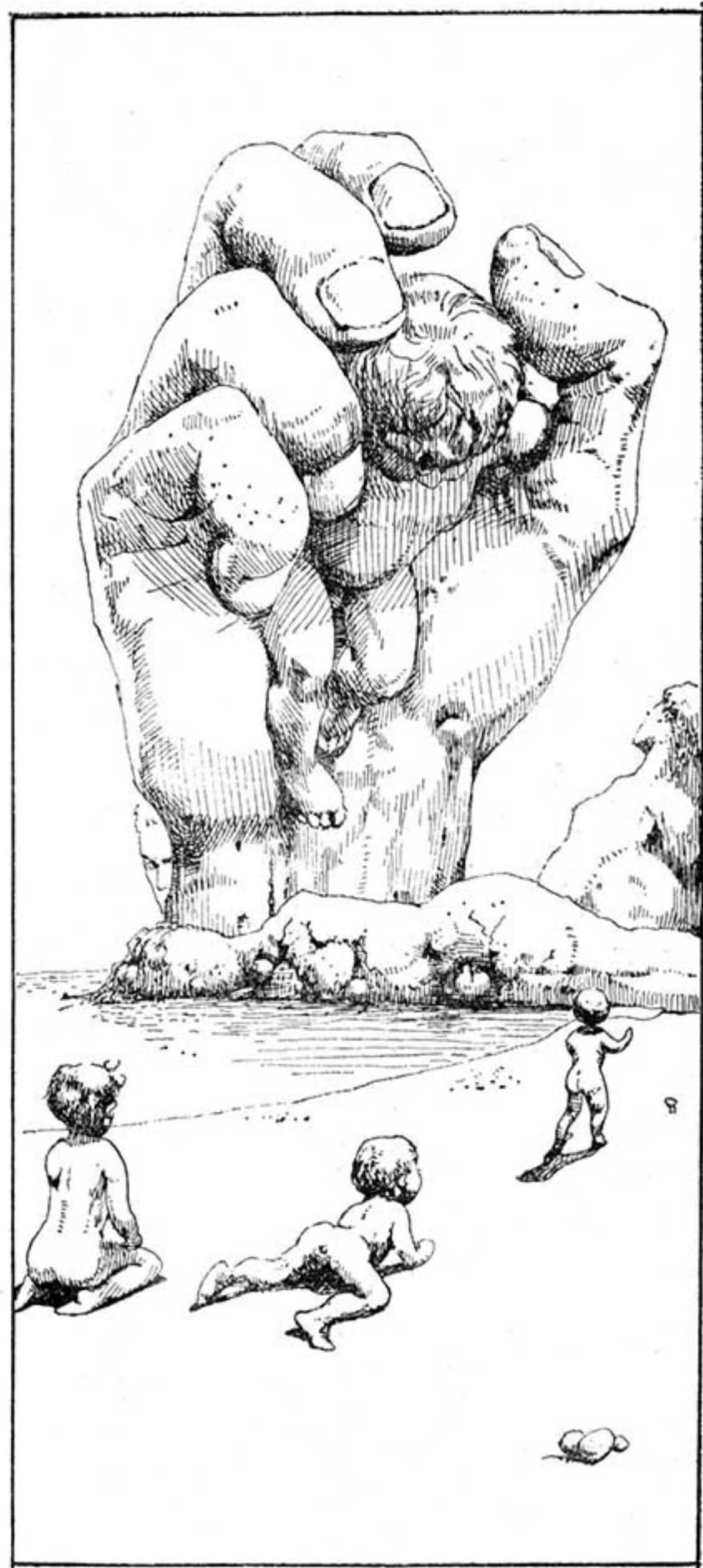
ワッショワッショと、まだ変声

期前の高ッ調子のかけ声をあげながら、こどもみこしを担ぎまわるはだかのこどもたち。それを遠まきにとりまきながら、三々五々と見ているこどもたちも、やはりはだか。

こうした小さなはだかの王さまの姿を、Dのカメラは執拗に、そちこちと追っていくのである。

こども相撲や祭の季節がおわると、Dははじめて、体の疲れを覚える。季節の最中は、ただ夢中で、疲れを知らないのだ。

このようにして、十年余の長い期間に亘って、撮りつづけてきたDのこども写真のコレクションは、じつにぼう大なものであらうと、想像される。



ことしの夏、Dが私の家へ訪ねてきて、示した「こども写真」に説明を加えた。

は、右のような主題のもののかに、いままでと違った被写体を対象としたものがあった。

それは十一、二歳から、十四歳くらいまでと思われる、数人の少女を写したもので、しかもカラーの美しいものであった。

Dはいつもなにか新しい見聞などを語る前にする、特徴的な微笑を満面にうかべながら、これら数葉の写真について、つぎのような

説明を加えた。

ことしの盂蘭盆の前後に、Dはおのが家に近所のこどもを招いて、毎夜「こども」会を催した。

庭のそこここに、五色の豆電球を点けて、そのなかで音楽の演奏をしたり、劇のまねごとをしようという、小児水準のかれらしい、そしてそれだけにこどもの喜びのような計画である。

さいしよの夜は男女約半々くらいの十人余のこどもが集ったが、二日目から、男の児にはおもしろ

くないのか、十歳のAという児を残して、少年たちは出てこなくなった。

が、A少年と五人の女の児は、毎夜、Dの「こども会」に現われた。劇をやるのに、男の児が足りないの、女の児に男役をやってもらうことになり、そのとき、C子という十一歳の少女が、みずから進んで、男役を買って出た。

そして劇を始めてみると、このC子の男役が、じつに颯爽としていて、A少年などよりも、はるか

に「男」らしい。侍役などをさせると、セリフもキツパリと男の意気があり、動きも勇ましい。

Dはすっかりと、C子に興味と関心をもってしまった。正確に言えば、C子のなかにみえる「男」——少年的な「男」のにおいに、惹かれたのである。

少年愛者が少年を好愛するのは、少年のなかの「女」を愛するのではなく、少年のなかの弓矢の道に通ずる「男」をもとめて、愛する。C子のなかには、弓矢の道に通ずる「男」が、窺われた。

Dはさかんに、C子の男役の姿をカメラにおさめた。が、C子ばかりを撮っていては、他の少女たちが、女の児的嫉妬をするので、彼女らの姿も添えものの的に写した、というのである。

5

Dの第二の趣味は、精密器械いじりだが、そのなかでも顕微鏡を、もっとも好む。

顕微鏡でなにを検するのかとい

うと、たとえばかれは、夜陰自室にこもって、自慰をおこなったのち、みずからの Same の微量を、顕微鏡下におく。

鏡を覗くと、そのなかに、無数の精虫が、うごめいている。

この微生物の動きまわるさまを、じっとみつめながら、D はいつもいろいろの妄想を逞しゆうするのが、楽しみである。

自分がこのまま精虫となる、という想定のもとに、想像の夢を拡げたことがあった。

精虫（自分）は、他国の王女の胎内にはいりこんで、王子となつてこの世に誕生し、この世をこども王国にする。

皆、永遠にこどもでいられるから、年をとらないし、死なない。

こども王国では、同性愛が公然と許される。少年同士、少女同士が、おおびらに恋愛を楽しむことができる。

王子の自分は、もちろん好きな男の児をおおせい周りに待らせ、かれらと食事を共にし、入浴を共

にし、遊戯を共にし、そして寝を共にする。

幾人かの使者を、いつも各地に派遣して、新しい愛人をみつつけさせる。——というのである。

また、もっと現実的な想像では、「自分のこの無数の精虫を、いっぴきづつ、人工妊娠を欲する女性に売る」と考えたことがあった。

ザーメは毎日製造するから、じつに莫大もない数の自分のスプロマが、莫大もない数の女性の胎内にいりこむことになる。

そして、更に莫大もない数の、自分のこどもが、この世に出生し、それらのこどもがいずれも自分の血をうけて、少年愛者になる。という妄想だ。

どの想像においても、想像者つまりDが、みずからが少年愛者であることを、すこしも悩みもかなしんでいないことの、はつきりと窺われる点が、注目される。

そう、かれはそうしたことの苦悩らしいことを、いちども私に訴

えたことがない。

自分の Same のほかに、D は、前記のV少年やC子の唾液や Pisse を、たくみにもらいうけて、顕微鏡下に検査したことがあると、私に語った。

もっと秘かなる分泌液をもらいたかったのであろうが、もちろん、そうしたことをいう勇氣(?)はかれにはないのである。

第三の趣味は、前にもときどき触れたように、こどもたちを集めてする音楽演奏である。それもジャズであることが、おもしろい。

演奏のさい、D は、自分のすきなこどもにかならずドラムを叩かせる。その勇壮活潑さが、みたいというのだ。

V少年やC子には、もちろんドラムを叩かせた。そして、自分もいつもサキソフォンである。

好きなこどもに、ドラムの奏法を教えるとき、D はそのこどものうしろに密着するか、あるいはあいてを自分のひざのうえにだきあげる。

そして、手に手をとって教えるのだが、こどもの左右の手が、はげしく動いたびに、その体も躍動する。

「このときの自分の恍惚感は、千万金をだしても買えないものです」

とDはいうのだ。

また、かれは、ジャズを演奏するときのこどもについて、

「どのこどもも、ほんとうにこどもらしく耀きだすようです」と語っている。

ペトフリー・エロティカの男の観察するこども（ベド）観は、それなりに正確かもしれない。



■時代幻術絵物語

破魔姫受難

島本春雄・文 山田彬弘・絵



① 伴天連の奇蹟

晴天にわかに変じて薄墨の黄昏となった。——豊後国主の大友宗麟はじめ、なみいる家臣たちが、思わず声を呑んだのは、この瞬間である。

「天の御子の教えを信ずる者には、奇蹟をおこなう力が与えられる」

西班牙の宣教師ドン・ミカエルはこう宣言し、その奇蹟を実現してみせて、豊後藩を耶蘇教の支配下におこうとした。

「晴天たちまち変じて黄昏となり、無数の鳥つどい舞いて、天女の如き美女、宙天の十字架に苦悶す」

この黒衣の伴天連が予言したとおり、城内の広い庭園では、無数の鳥が群舞して妖気を撒き散らしたあげく、樹林の梢の上に白衣の美女を磔刑にした十字架が、こつぜんと出現したのであった。

異変は伴天連が手にした金色の杖を一闪した瞬間に起ったのである。

畏怖の眼を見開いて薄然となる大友藩士たち……。その姿を見て伴天連ミカエルはニヤリと笑った。

② 果心流飛鎌

「天の御子の祝福を受ければ、姫の胎内に御子の精霊が宿りたまひ、やがて天童の御生誕となる。この天童おわさば、天帝の神意により、わが大友家が天下を統一することになる。足軽上りの秀吉なんぞクソくらえじゃ」

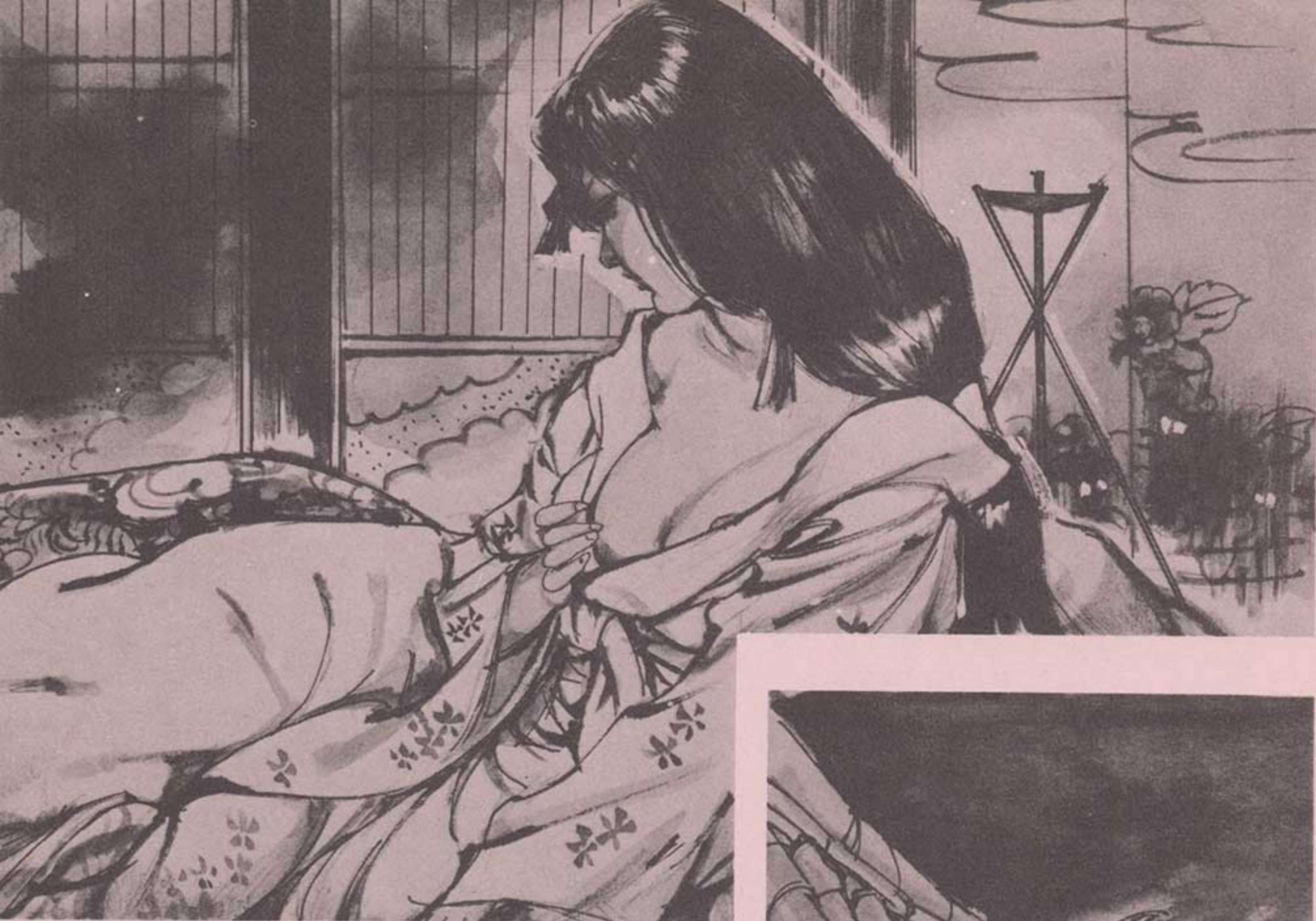
ドン・ミカエルの奇蹟を目撃して以来、大友家の重臣たちは、豊後随一の美貌をうたわれた破魔姫を、伴天連の教堂へ聖女としてさしだすべきか、否か——という宗麟公の下問に対し、「諾」の意見を上奏する結果となった。しかし、伴天連ミカエルの奇蹟に疑問符を投げかけた人間もいた。

半月の夜、黒衣の伴天連を路上で襲った忍装束の武士がその男である。

「待て伴天連、あれくらい幻術は、わが国にもあるぞ。奈良朝の呪師、平安朝の外術——安倍晴明は、紙の鷲を飛ばせて賦を捕らえたし、果心居士は富士の秀峰を京の都に招いて見せた。まこと奇蹟をおこなうならば、この飛鎌を受けてみい」

忍装束の男の手から半月の鎌が飛んだ。その瞬間、白煙と同時に伴天連の姿は消え、果心流の飛鎌は、むなしく夜気を切って、男の手もとに舞い戻って来た。





③ 破魔姫乳房

「破魔姫……」

闇の向うから声があった。今の今まで寢所を照らしていた油皿の火が、フツと消えた、その直後だ。

「何者!？」

気丈な姫は、寝衣の襟元をかきあわせてキツとなった。男の眼にも手にも触れさせたことのない乳房が、それでもチラリと覗いている。明日は聖女となって教堂入りをする身。それを思っで眠られずつい転々として胸元を大きく乱していたのであった。

「伴天連の奇蹟を、ご信用あそばすや、否や?」

闇からの声は、破魔姫の詰問を無視して続けた。

姫は答えなかった。

「姫! あれは奇蹟にあらずして伴天連流の幻術にござります。果心居士の奥伝に、〈眠術〉なる秘伝があり、一瞬にして人々の心の眼を眠らせ、思いのままの戯像を現出せしむと書き残されているのです。姫、伴天連ごときの妖術にまどわされず、心の眼をおひらきくだされ!」

闇からの声は、フツと失せた。

姫の寢所の灯が消えたのに気づいた夜廻りの侍たちが走り寄って来たからである。闇の中で破魔姫がつぶやいた。「あの声は……」と。



④ 風破侍

伴天連ドン・ミカエルの教堂は、朝陽、夕陽に、くっきりと美しく浮き上る。その尖塔の十字架が、キラリと輝けば、耶蘇教の信者は神の祝福を受けたように、胸の上で十字を切って瞑目した。

しかし、教堂の鐘の音を、邪惡な地獄の音ときめつけて、墨絵のように浮き上っている教堂を睨みつけている男もいた。

白哲の美丈夫、仏木繩太郎行輝である。

（神を信ずるはよし。されど西班牙の伴天連は、切支丹を通じてその領土をひろげる本国の手先と聞いた。しかも信仰厚しと見るや、その挙措たちまち驕慢無礼となり、祝福を与えると称して美女を犯す。許し難い！ あるいは破魔姫も……）

大友家の風破侍（忍者）仏木繩太郎は、片頬を歪めてつぶやいた。

「お城の破魔姫さまは、男と契らずに天の御子のタネを宿すちゅうだが、吾十よ、おめえどう思う？」

「バカこけ。男と寝ねえで子供がでてたまるもんか」

「でもよ、子育て観音のマリア様は、生娘のまんま妊んで天の御子を産んだとよ」

百姓たちの口論を小耳に挟みながら、仏木繩太郎は暮色の中にとけていった。もう教堂も樹林の上の尖塔が夜の色に消されている。

そして小半刻……

闇の中から黒い繩が矢のように走って、教堂の一角に巻きついたかと思うと、忍び装束の黒い影が塔の窓にへばりついていた。

⑤ 壁吊り美女

神に支える聖女として、伴天連ミカエルの教堂へ入った破魔姫はその日から囚女同然の身となった。教堂の地下室が修道の場であり、寝所であり、そして汚辱の部屋ともなってしまったのだ。

「楓は？ 於縫は？ 千狹は？ いずくに？」

姫はミカエルに詰問した。教堂に入るとき伴って来た五人の侍女は、姫と起き伏しを共にしていたのだが、三夜のうちに一人ずつその姿を消してしまったのである。

「楓は城への使番、於縫は里帰りそして千狹は逃亡……」

というのが、この黒い伴天連の説明であったが、それなら、夜毎聞こえる女の悲鳴と呻き声は、あれは何であろうか？

破魔姫の疑惑はその点にあった。石の壁を透して洩れて来る女の悲鳴と呻き声……

「楓も於縫も、そして千狹も、わたしに黙って去るはずがない。い

つわりを申されましたな！」

破魔姫は詰め寄った。父宗麟の厳命で教堂の聖女にはなったが、はじめから伴天連ミカエルを不信の眼で見えていたのである。

ご返答次第では、捨ておきませぬぞ！」

姫はすでに壁越しの呻き声と、三人の侍女とを結びつけて考えていたのであった。

「ふふ、どうやら感づいたようだの。三人の女は、神の使いであるこのミカエルの祝福を拒んだのだじや。それで夜毎、神の鞭を受けておる。あの姿でな……」

黒衣の伴天連は、隣室に通じる扉を開いた。

「ああ……」

姫と残った二人の侍女、忍、葉未の口から、同時に恐怖の声が洩れた。

楓、於縫、千狹の三人は、石壁に打ち込まれた鉄環を手枷にして壁吊りとなり、半裸の柔肌に、赤黒い鞭を無数に刻みつけられていたのである。



⑥ 地獄の使徒

神の使徒たるべきドン・ミカエルは、今や悪魔の化身であった。破魔姫の侍女五人を、次々と征服し、最後に姫を寢床の上で蹂躪することが、この男のいう神の祝福なのだと言ったとき、二人の侍女——忍と葉未は守り刀の懐剣を握って、妖笑する伴天連に躍りかかった。しかしミカエルは、その黒衣をひるがえし、反転して金色の杖で両女の手首を打ちすえていた。続いて、この男の魔手が姫に迫る。破魔姫は、とっさに懐剣をおのが首筋に突きつけた。——自害の覚悟を見せたのだ。

と……

「あれっ！」ミカエルが奇声を発し、宙の一角を指した。何やら巨大なものが羽ばたいている。黒い、大きな蝙蝠が宙に浮いた……



⑦ 鉄鎖の囚姫

伴天連流の幻術は、果心居士の眠術を、より高度化した「群集催眠術」や紙細工の手品にすぎなかったが、異国人の神秘さゆえに、人をまどわす力を充分に備えていた。

黒い巨大な蝙蝠の幻舞に自害の意志を削がれた姫は、たちまち邪心の伴天連ミカエルの魔手に屈した。



石の壁と五人の美女……。

破魔姫一人が、丸い石柱に鉄鎖でつながれて、羞恥の裸身を隠すすべもなく首うなだれている。

「姫よ、このミカエルの意のままとなり、寝台の上で祝福を受けるか……それとも、五人の侍女が、一人一人、地獄に堕ちて行く姿をみるか。——さ、いずれじゃ」

黒衣の伴天連は、石壁の半裸女葉末の、美しく盛り上った胸乳の上で、おぞましい鞭音を聞かせた。

「うっ」

のけぞり返って呻く葉末。

忍装束の仏木縄太郎が、塔の窓から黒縄を垂らして礼拝堂の床におり、破魔姫の姿を求めて側廊に出たとき、かすかに女の悲鳴を耳にしたのが、第二の鞭を胸に受けて葉末の発した悲鳴であった。

風破侍の縄太郎は、そくさに悲鳴の所在を感知した。

（——地下？）

音もなく側廊を走り、聖室を抜けて地下への入口を探す。そして、伴天連ミカエルが同国人の悪徳商人たちと組んで、領内から集めた浄財を秘匿する西洋長持の蓋を開けば、床板の一枚が動くことを発見した。





⑧ 地下の争闘

地下への階段をおりると、悪徳商人たちが密談する部屋となる。ここには、赤髪の西班牙商人が三人いた。

闖入した忍装束の仏木縄太郎を見て、そのうちの一人が卓上の短剣を投げた。縄太郎は目潰しを放ってかれらの視力を奪い、風破刀の峰で昏倒させると、次の部屋へ躍り込んだ。そして、ふたたび伴天連ミカエルと対決することになったのである。

半月の路上では、白煙を発する切支丹幻術にまどわされて逃走を許したが、ここは地下の密室であった。

限られた空間であり、投げてふたたび手許に呼びもどす果心流の飛鎌を利用できない不利はあっても、扉を背にしたたかえば、敵の逃走を阻止できる利点もある。

伴天連ミカエルもまた、縄太郎に不意をつかれ、黒衣を投げて怪鳥に見せる幻術を用いる隙がなく、壁に交叉した長剣を握ると、正面から激突した。しかし、剣と風破刀の争いとなつては、勝敗は見えていた。

剣刀三撃。ミカエルは血を吹いて斃れた。豊臣秀吉が切支丹伴天連追放、耶蘇教禁令の布告をしたのは、この直後の事である。

カーテンのある風景



モデル……エダ・キリコ

カメラ……吉田 久















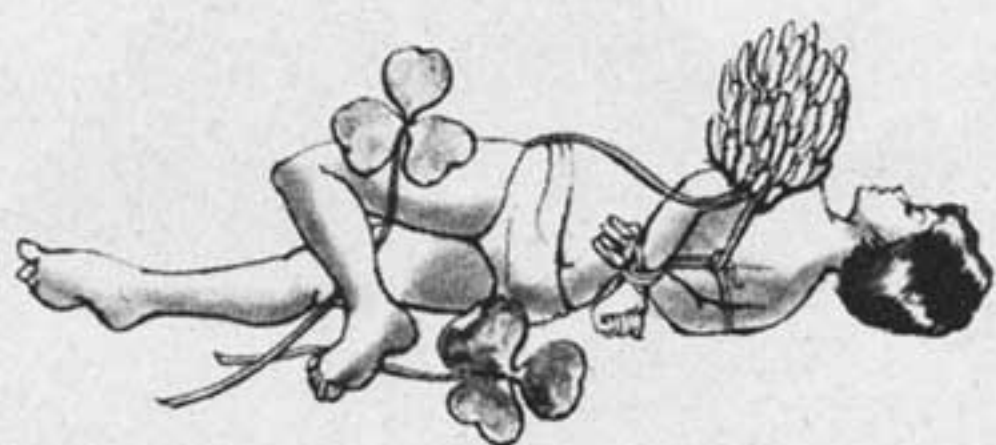


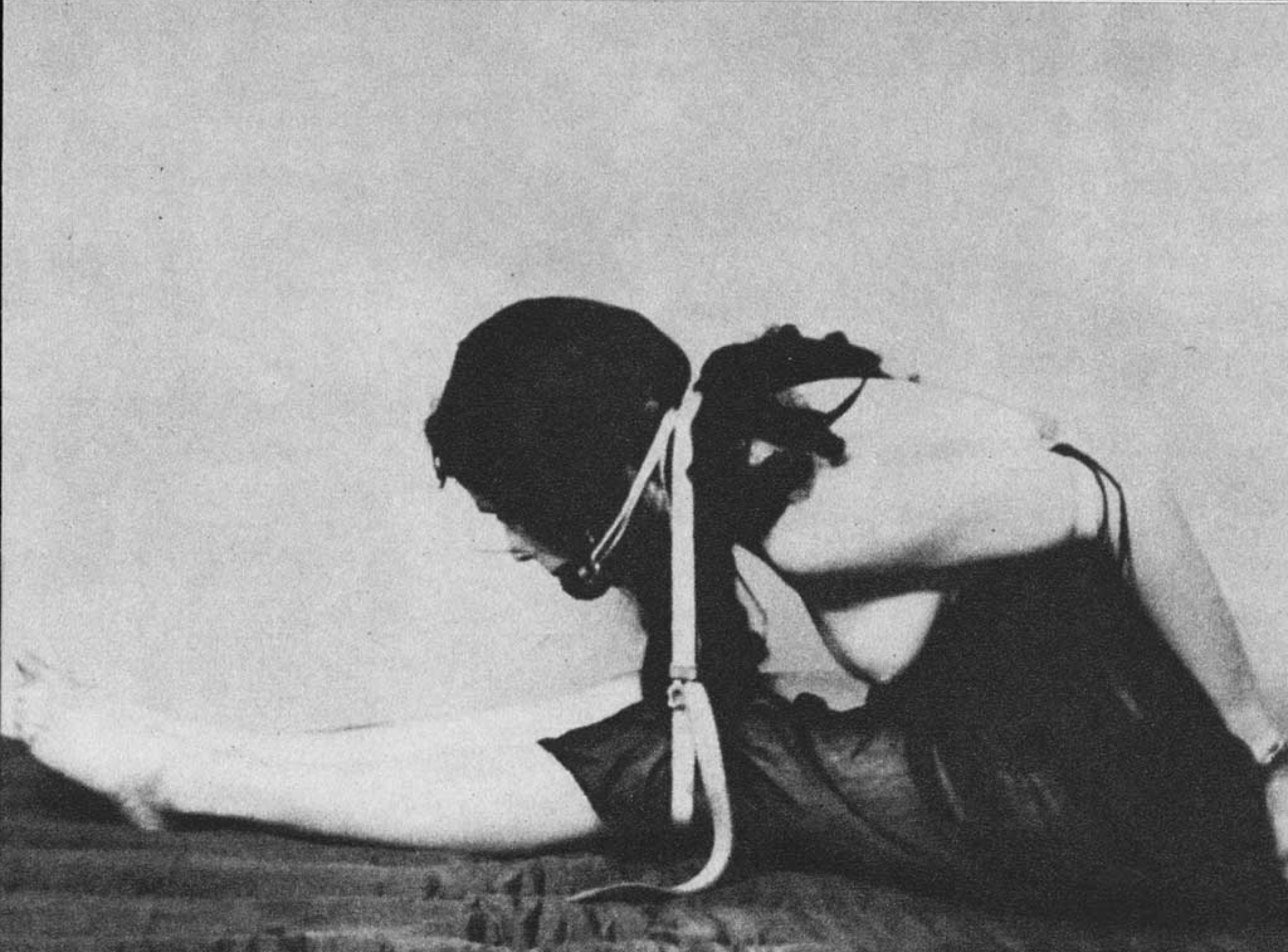


西ドイツ・フェニクス商会・特約

まるい簞口具



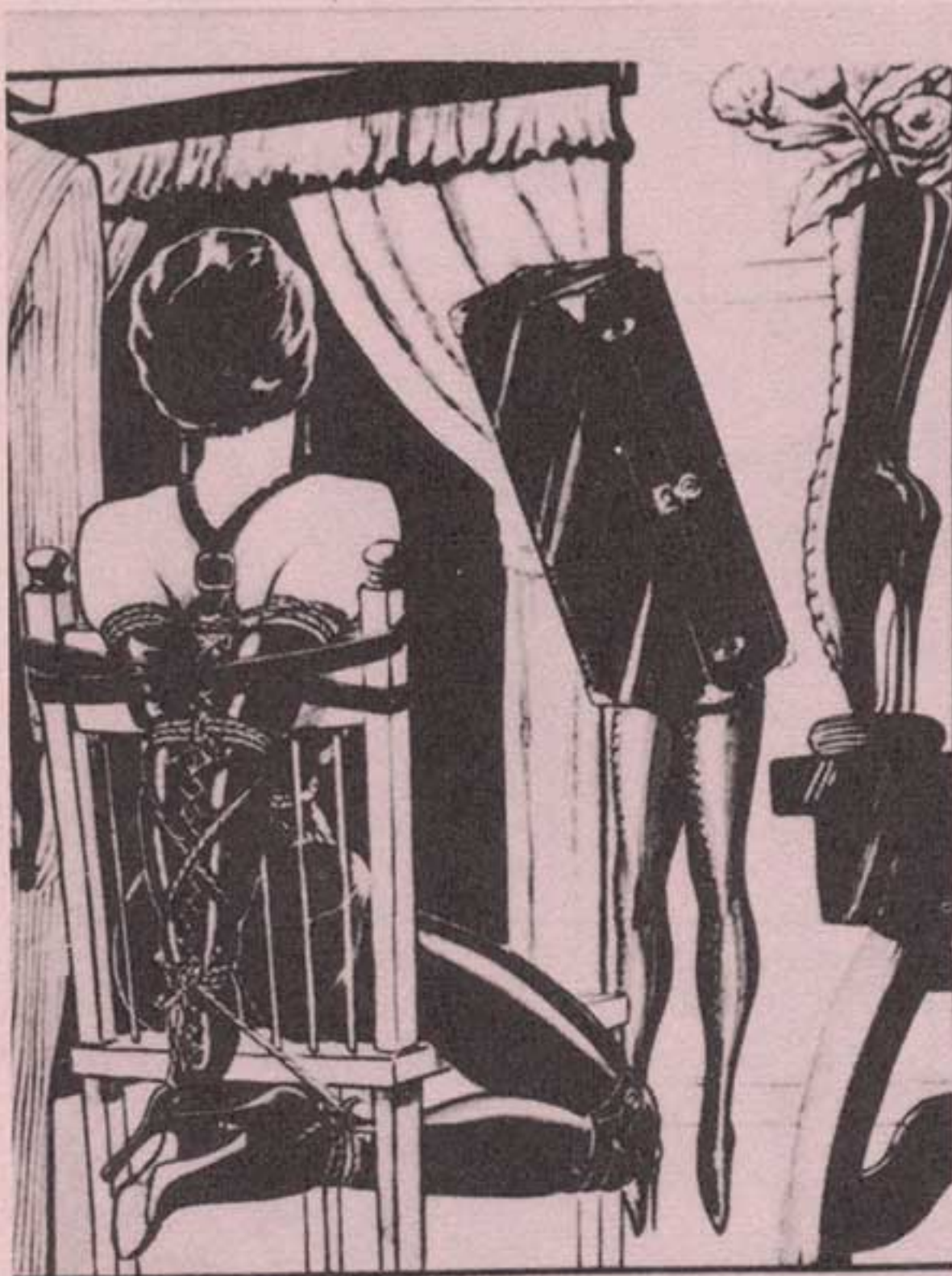




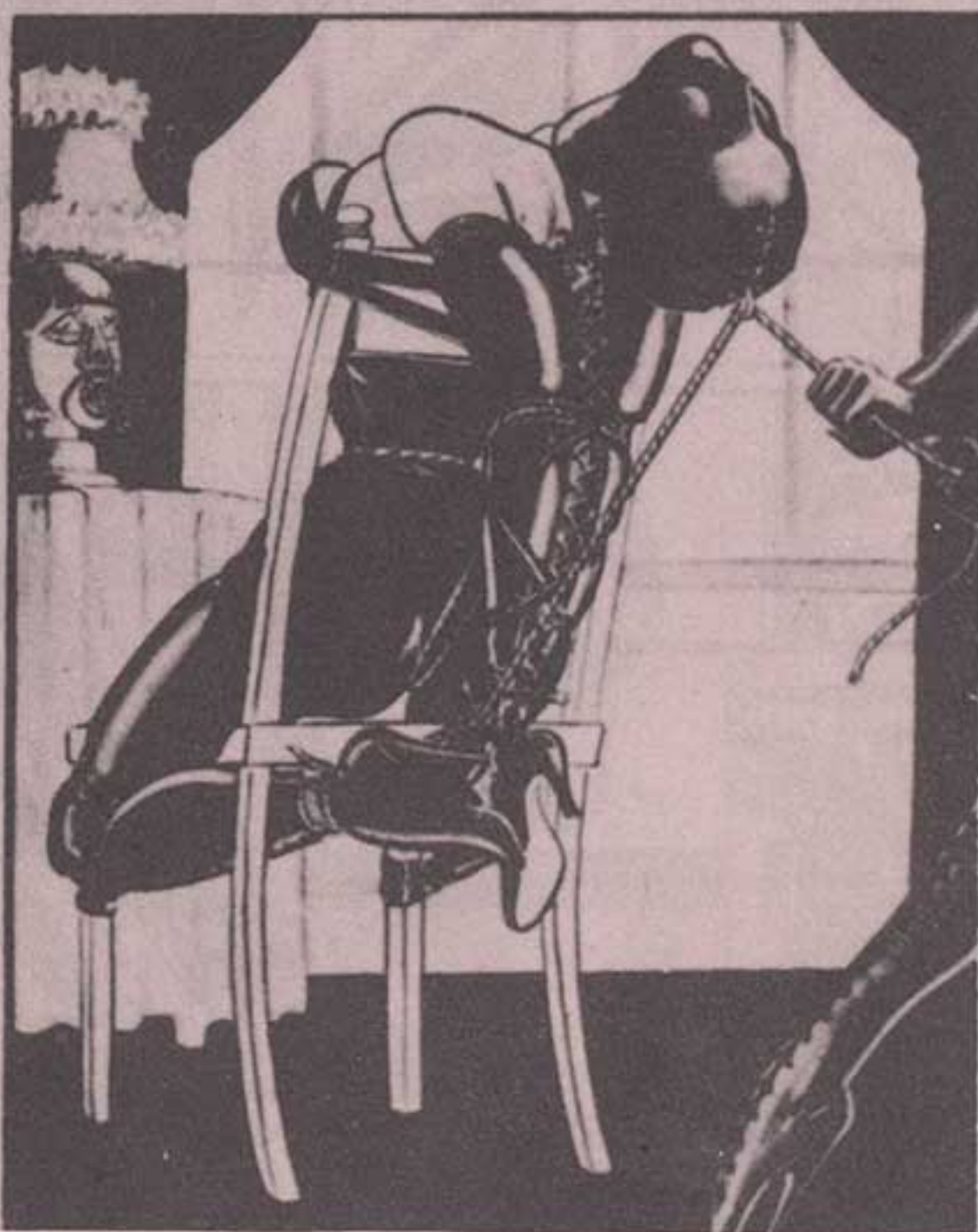
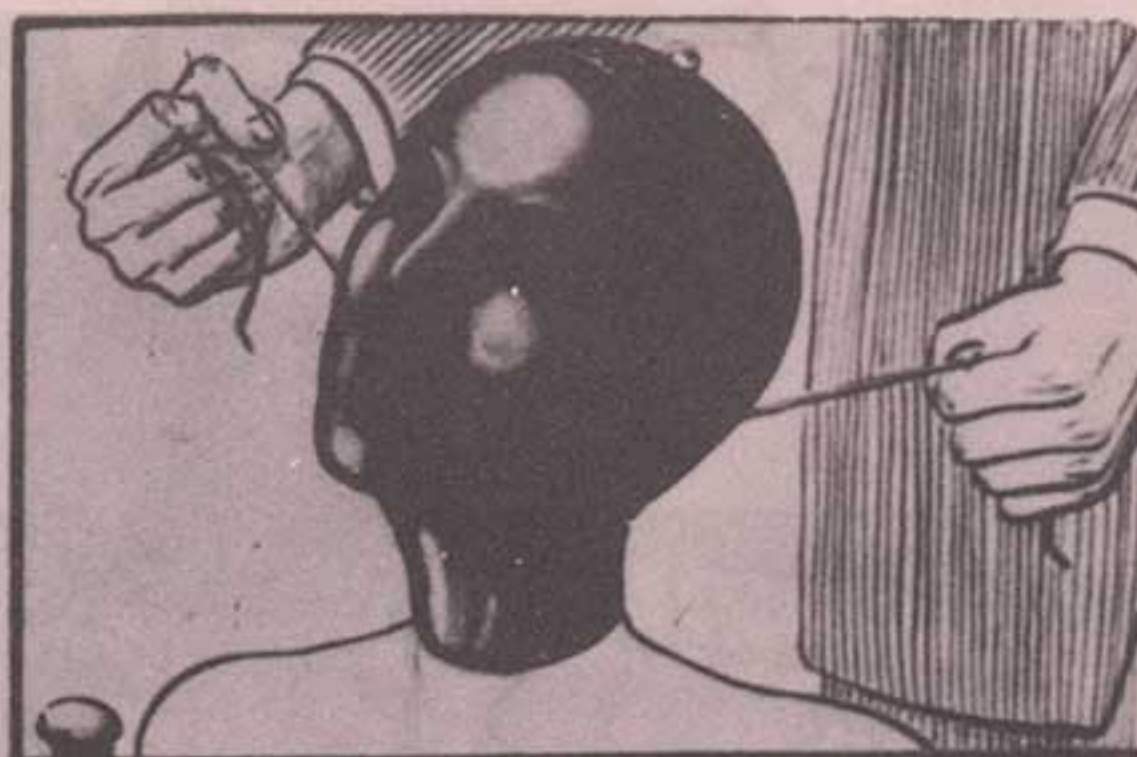




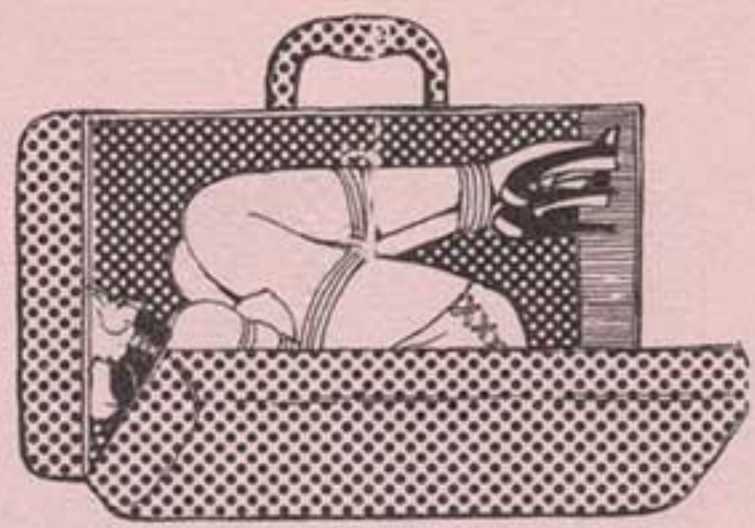
アメリカSM絵物語・ご紹介



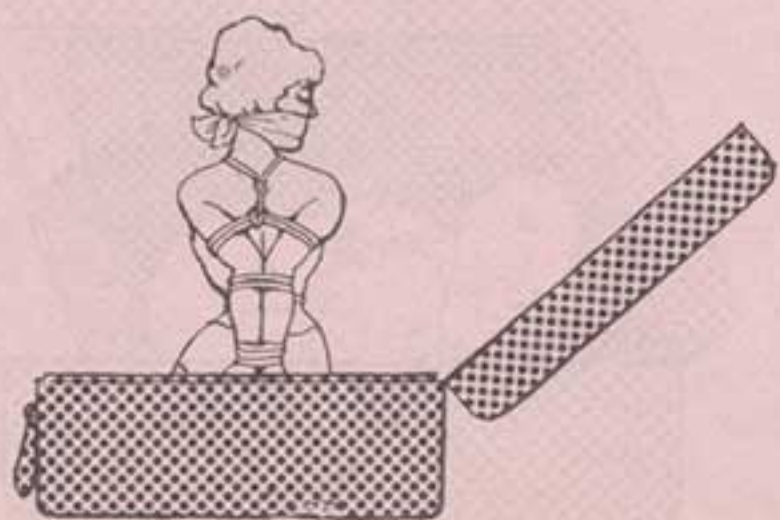
カリフォルニア・フェニクス商会・特約

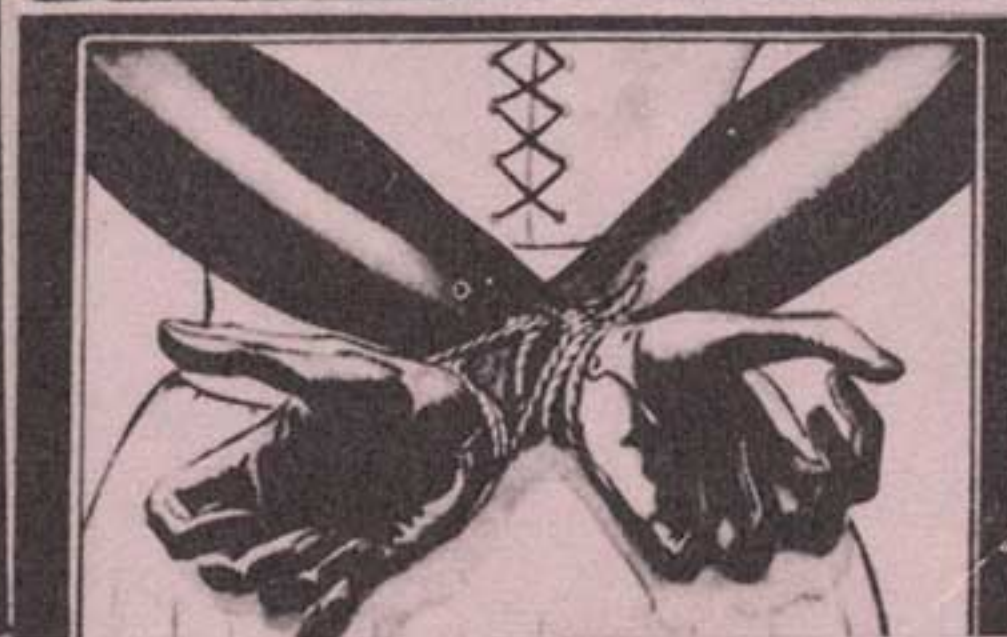


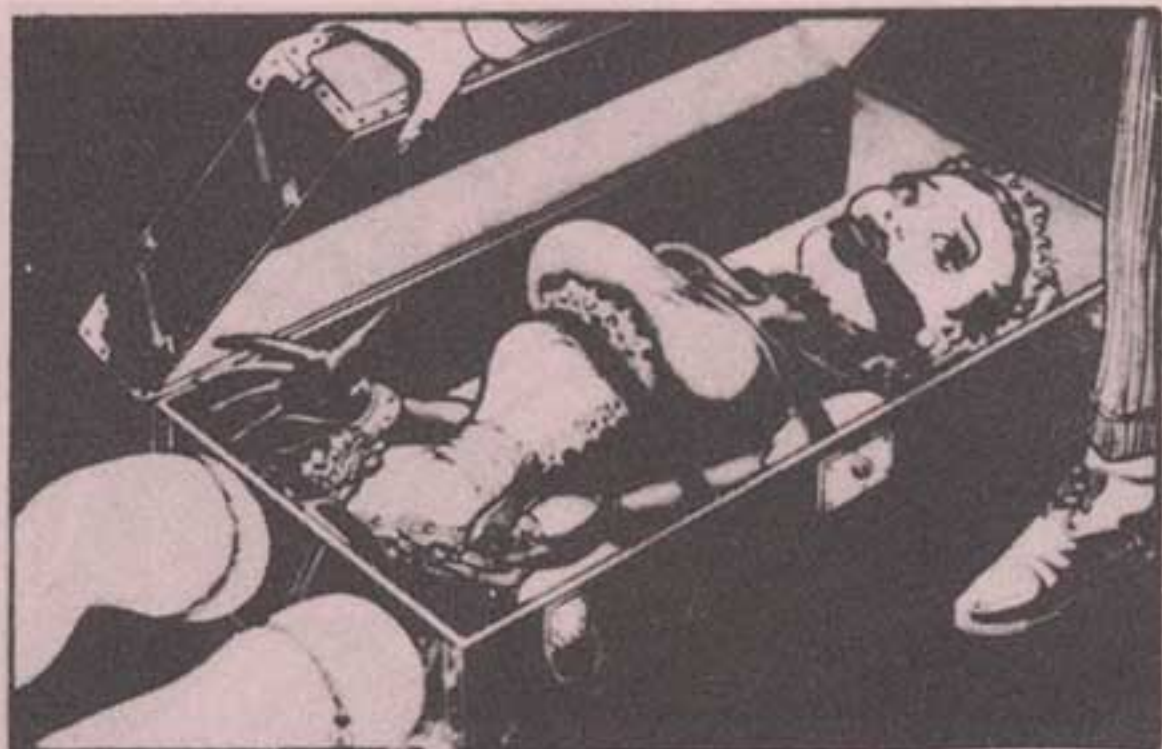
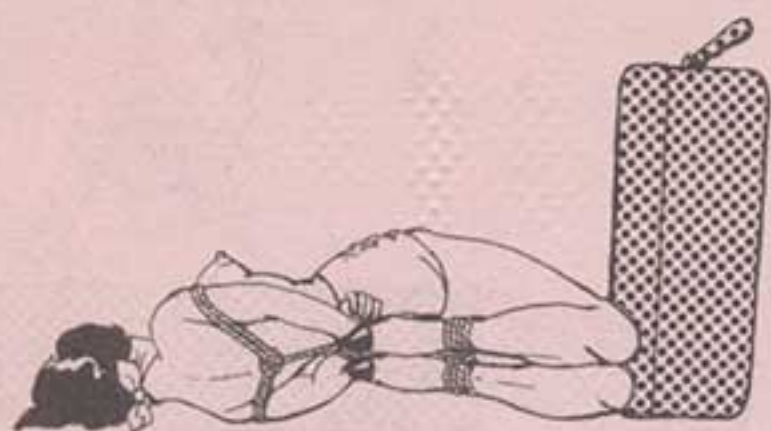




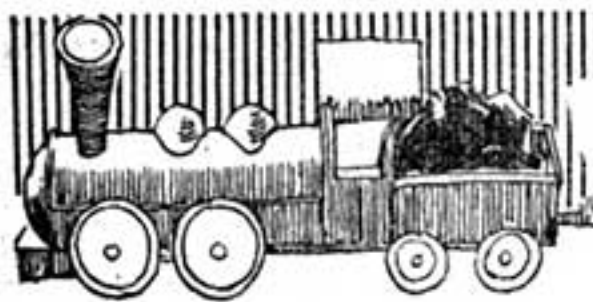




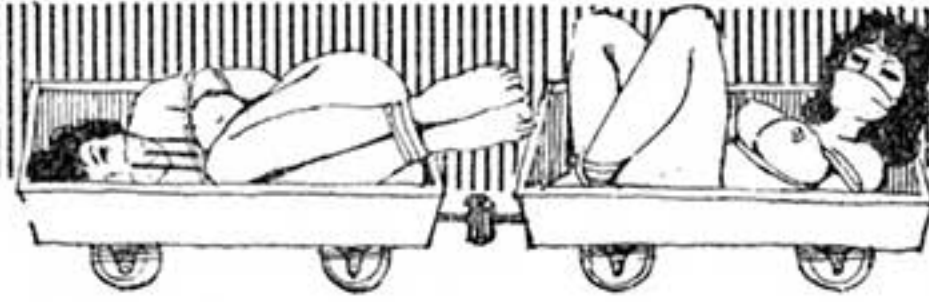








裏窓タウン



貴重な珍映画

「情欲の谷間」

一流映画会社の作品ではないが
繁華街の映画館で、堂々(?)と
上映されている白黒ワイド画面の
劇映画である。

十数年前、ある山奥に、ひとり
の赤ん坊が捨てられる。生後二カ
月ぐらいの女の子である。

なぜ捨てられたかという、こ
の赤ん坊は、二人組の誘拐犯人に
さらわれてきたもの。

二人組は、みのしろ金欲しさに
さらってきたのだが、山奥で熊に
であい、自分のいのちがあぶなく
なったので、赤ん坊をすてて逃げ
だしたのだ。

残された赤ん坊は、熊に育てら
れて成長し、そしてお話は今日に
いたる。

人跡未踏の山奥(といった設定
らしいが、このロケ地ではそうい
う原始林の感じは、あまりない)
で大きくなったのだから、当然、
彼女の格好は、さながら女ターザ

ン(といった設定らしいが、野性
の美女というあらあらしさはあま
りなく、ついさっきまでハイヒー
ルをはいていたお嬢さん、という
感じで、あぶなっかしう岩の上な
んかを歩く)である。

さて、ここにまたまた二人組の
悪党が登場する。むかし登場した
誘拐犯人ではなく、新手の中年獵
師二人組である。

この、いかにも悪党ヅラの二人
組は、ケモノを捕えるために、山
林のなかに罠を二カ所ばかりかけ
る。

ケモノがそこを通ると、罠が、
さっと上にあがってすばまり、生
け捕りになって木からぶらさが
るという、れいの仕掛けである。

この罠に、女ターザンがひっか
かる。

それまで、たいくつで、みてい
て苦痛をおぼえるほどの映画が、
このあたりから、ようやく、おも
しろくなる。

罠にかかった娘は、一度はなん
とか逃げだす。

そのうちに、彼女のかわいがっ
ている熊の子が、二人組の獵師の
小屋に捕えられる。

柱に縛りつけられた熊の子の鳴
き声が、山の中までひびく。それ
をきいて、娘は山刀片手に、敢然
と熊を助けに行く。

ところが、二人組のうちのひと
りが、小屋に残っている。

娘は山刀をぬいて、小屋の前で
男とわたりあうが、この女ターザ
ン、たいへんに弱く、すぐ山刀を
手からはじきとばされてしまう。

「ウヒヒヒ」

と笑いながら、男は彼女におそ
いかり、ねじ伏せる。

そういうねらいの映画だから、
このあたり、フトモモが画面いっ
ぱいにくねりもだえ、監督さんは
一生けんめいサービス。

男は、女の背中に馬のりになり
蔓の縄で、彼女をうしろ手に縛り
あげる。

両腕を背中にねじあげ、手首か
らさきに縛っていくところは、ど
うしてどうして本式。(このとき



彼女は左手を自分から背中になわしたけど、これは不自然で、あまりにもまずかった！」

しかしながら、このシーンには迫力があつた。

蔓縄は、彼女のむきだしの二の腕（これは美しくやわらかそうに撮れている）や胸にも、二巻き三巻きされる。

そして、小屋の前にある立ち木に縛りつけられる。

なぜ彼女が、こんな目にあうかというと、彼女の胸もとに、ヒスイでつくった首飾りがあつて、悪党どもは、

「そのヒスイのあり場所をいえ」と、迫っているのである。

しかし、熊に育てられた彼女は人語を解せず、これはだいたい無理である。

怒った男は、そのへんに落ちている薪をひろって、彼女の背中をぐいぐいこじったりするが、なしろ、口がきけないのだから、仕方がない。（だけど、悲鳴もあげないのは、へんだ）

そのうちに、もう一人の男がもどってくる。木に縛りつけてある女をみて、よろこぶ。

「今夜ゆっくり、ヒスイのあり場所を吐かせようぜ」

と、二人は、にやにや笑いながら相談する。

山に夜がくる。

小屋の中のランプに、火がともる。

彼女は、うしろ手に縛られたまま、ムシロの上ところがされていく。仰むけにされて、身動きもしない。

「裏窓」のグラビアが、そのまま数十倍に拡大されて、そっくり大型画面におさまった感じのポリウム。しかも、呼吸しているのだから、たまらない。

「白状させるのには、どうしたらいいか」

と相談して、天井から吊るすことにする。

哀れや彼女は、うしろ手に縛られたまま、小屋の天井から吊り上げられる。

左右の腕が、うしろ手の手首をはっきりとみせて、思いきり背後からななめ上に吊られて、これは努力賞の迫真的演技。

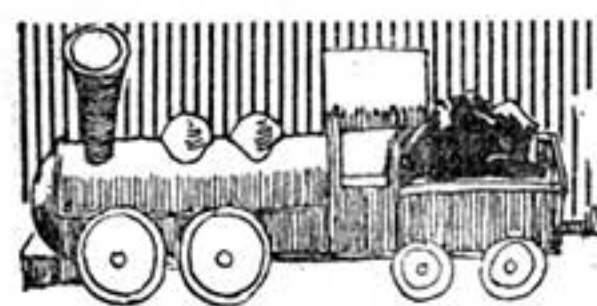
宙吊りにしているという演出なのだが、彼女の両ひざの力のいれぐあい、足の下には、なにか踏み台があるということはわかる。

カメラは、すねから下を撮らない。しかし、若い半裸の女性が、背中にまわされた両腕を、ななめ上に引きあげられ、首を前にがっかり落として責められているポーズは、けっしてトリックではなくおそろく、映画史上空前（？）の責めシーンではないだろうか。「おい、このまま吊りつづけると息がとまって、モトも子もなくなるぜ」

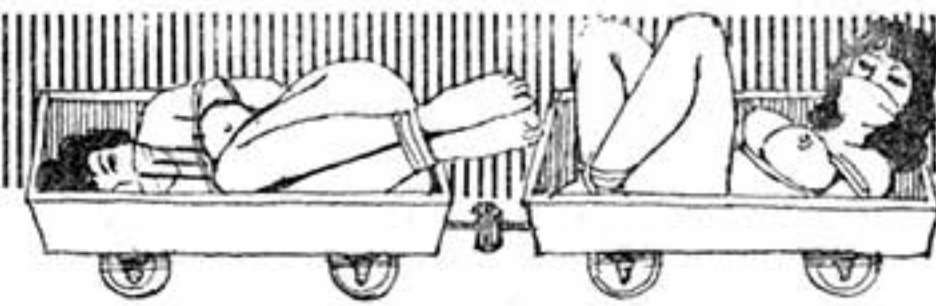
というようなセリフがあつて、男のひとりが、柱にとめてある縄じりをゆるめる。

彼女は、どきりつと、ゆかに倒れる。

この、どきりつという効果音には、ひどく実感があつた。あんな



裏窓タウン



に縛られて、吊られていて、いきなり吊り縄をゆるめられて投げだされたら、ずいぶん痛かろう、という実感である。

彼女は、縛られたまま、またムシロの上にねかされる。

このときは蔓縄ではなく、シュロ縄のような、黒っぽい縄。胸にぐるぐる巻きになっていて、乳房があえいでいる。

男二人は、ようやく、いくら責めても無駄だということをさとったらしい。

「山じゅうを歩きまわって、ヒスイのあり場をさがそう」と、決意する。

朝になって、二人は小屋をあとに出発する。

娘は、前日縛られた小屋の前の立ち木に、同じように縛りつけられ。

そこへ、リスが一びき現われて彼女を縛った縄を噛み切ろうとする。ようやく一本切れたところへ男が一人もどってくる。

「ちくしょう！」

といって、リスを追い払う。

男は、娘のすがたをみて、むらむらと欲情する。相棒のいないのをたしかめてから、娘の蔓縄を解く。

「よしよし、痛かったろう」

などといいながら、自由にした娘へ、おそいかかる。

娘は抵抗しながら、ふともをみせたり、乳房をあらわにみせたりして、SM観客ではない、「一般」の観客へも大サービス。

あわや、というときに、相棒がもどってきて、

「くそ、おれのいない間に、自分だけいいことしやがって！」

と、悪党同志のケンカになる。ケンカしているあいだに、娘は逃げてしまう。

けっきょく、悪党はほろび、山奥の谷間には、ふたたび平和がよみがえって、メダシ、メダシで終わり。上映時間は約一時間。

こういうレッキとした(?)劇映画で、こういう、いわゆる「縛りシーン」を意識してつくられた

映画というのも、めずらしい。

みどころは、じつに、ソコだけなのである。

監督さん(お名前は失礼ながら失念)は、あきらかに、そのミチのケのある方であろう。

演出技術そのものは(たいへん失礼だが)かなり稚拙で、縛りのクライマックスまでは、前にのべたように相当な忍耐を要する珍映画なのだが、そこさえガマンすれば、裏窓派にとっては、まことに貴重な映画であることは、まちがいない。

それぞれの好みもあるが、武智鉄二監督による、れいの「女・女・女物語」の一場面よりも、この「情欲の谷間」のクライマックスのほうが、一段とすばらしいという方も多いことであろう。

機会があったら、ぜひ、ごらんになるよう、おすすめする次第。

主役の女ターザンになるお嬢さんは、峯和子といい、どこかみだことのある顔だと思ったら、日本テレビで以前放送した連続映画



「ピロンの秘密」で、ミラという名前前の肉感的なロボットにふんした女優さんであった。(豊)

「黒の商標」

「商標」のわきに「トレードマーク」という、ふりがながついていゝる。大映の「黒」シリーズ映画の最新作。

ラスト近く、藤由紀子が、悪役の高松英郎に、さんざんな目にあうシーンが現われる。

藤由紀子は、高松悪党の悪事のかずかずを、さんざん目撃しているので、高松としては、どうしても生かしておけない。

逃げる由紀子(役名もユキコ)を捕え、自分の車の後部荷台に積みあげ、車のなかでうしろ手に縛りあげる。

細引きでまず腕と胸にぐるぐるまわし、最後にうしろへねじあげた手首を縛る。

抵抗してもがくはずの由紀子の手が、つかまれてもいないのに、自分から背後へまわるのは、やは

りお芝居。しかし、縛りあげられてからのリアルな描写は、ちかごろの映画のなかでは、格段に光るものがある。

高松の車には、特殊な殺し装置がしてある。排気ガスが充満して荷台に積みこんだ人間をチッ息させるという仕掛け。

由紀子は、縛られた上、ガス中毒のため、チッ息寸前という危機におちいる。

しかも、宇津井健ふんする一流ワイシャツ・メーカーの調査員の車が、高松のあとを追ってきて、二台の車は猛烈なスピードで走りまくる。

車上に積まれている由紀子は、うしろ手に縛られたまま、ごろごろころがる。しぜん、うしろ手の手首もみえる。

ガスがしゅうしゅう音をたてているような感じで充満していく。苦しげにもだえる由紀子。

二台の車は、ぶつかりあつてとまり、由紀子はようやく救われる

が、すでに半死半生。縛られたまま、宇津井健の腕に抱かれる。

藤由紀子は、やや瘦身の美人。

テレビの「人間の条件」の美千子役で人気がでたが、大映では、山本富士子のあと釜に、彼女を売りだす方針という。

お色気にもう一步、というところだが、それだけに縛られたポーズに清新の感じがある。

監督は弓削太郎。

黒白・ワイド。

(新)

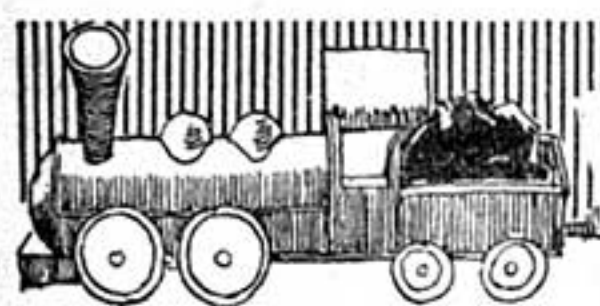
「命を賭ける三人」

柴田錬三郎原作「おれは侍だ」の映画化。

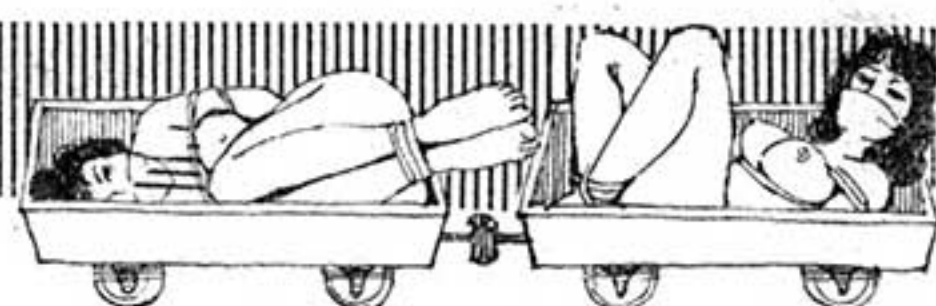
関ガ原のいくさで敗れた石田三成の娘(新国劇の高倉典江がふんする)を、大阪城へ送りどけて恩賞をもらおうという三人の侍のものがたり。

その三人には、大友柳太郎、里見浩太郎、江原真二郎がふんしてとくに江原が好演。

この江原は、上流階級の娘が好きて京都の公郷の娘(北条きく)



裏窓タウン



には、マゾ的奉仕をする。

男が、女に惚れて惚れて惚れぬくと、しぜん、マゾ的奉仕をするようになる、ひとつの典型かもしれない。

この映画の場合、男のマゾ的行動が、誇張されたユーモアで描かれているが、実感はある。

さて、石田三成の美しい姫を三人で守って敵中を突破していこうというドラマだから当然、危機がやってくる。

徳川方の侍に発見され、大友柳太郎はものすごく強いんだけど、姫の胸に刀を突きつけられるという、れいの手を使われ、捕われてしまう。

奉行所の裏庭に、竹矢来が二カ所組まれていて、ひとつには大阪方の落ち武者が、みんなうしろ手に縛られて押しこめられている。

もうひとつの中には、これも大阪方らしいが、女ばかり 数十人うしろ手に縛られて坐っている。

そのなかに、捕われた娘もうしろ手に縛られている。

女だけをこんなにくさん、うしろ手に縛って登場させた映画はこの二、三年、ちょっと記憶にない。

大友柳太郎は、首を切られることになって、竹矢来の外にひきだされる。

それをみた娘が、縛られたまま立ちあがり、

「修理之介さま、修理之介さま」と、絶叫し、身をもだえながら見送るという、痛切な場面。

姫のうしろ手のあたりを、もうすこし、ていねいに描写してくれたら、絶好のシーンになったろうと思われるのだが。

東映映画。白黒・ワイド

(映)

刺青施術をみて

さきごろ——九月半ばのある日、彫り師S氏の好意で、はじめて刺青施術のさまをみた。

S氏は、本名をいえば、芝居ずきの者ならばたいに記憶しているであろう元芸能人。以前から刺

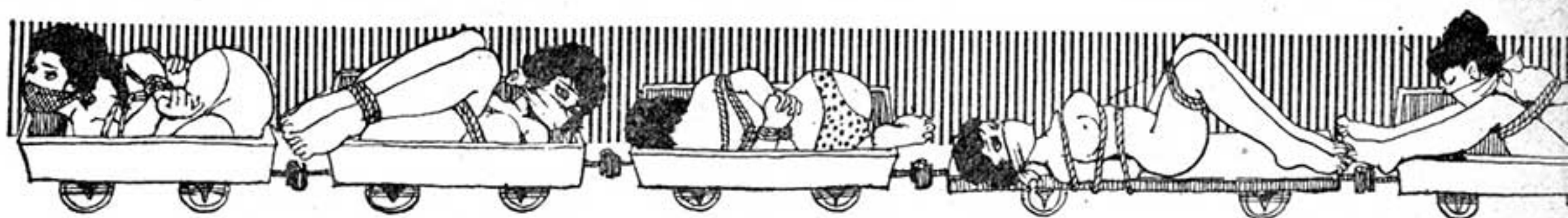
青針をいじくることが好きだったが、戦後は全く彫り師に転向している。彫り師というよりも、老紳士というタイプである。

そのときの被術者は、博徒Q組の二十一になる若いもので、五尺七寸、十九貫、身体はわりあい均斉がとれているし、なによりも、刺青師にとっては彫りがいがあるであろうキメのこまかな、はりのある膚。六尺ふんどしひとつの裸体で、ふとんのうえにあおむけによこたわっていた。

S氏はその脇腹の近く正座して、わかものの腹部一帯に、盤若の面の絵柄の刺青をいれていた。さいごの仕上げらしくみえた。

わかものの胸部、上膊部、大腿部等には、左右ともそれぞれ、ひよつとことかおかめその他の面の刺青が、完成していた。つまり面づくしの構図である。

現今の刺青は、ほとんどが電気彫りときいていたが、S氏のそれは、むかしふうに、絹針を十本二十本、束ねたもので、皮膚を突き



刺しながら、墨または朱をいれていく施術方法である。

刺青施術は、被術者にとって、相当痛覚の烈しいものと聞いており、殊に腹部、それもヘソの周りは、身体中でももっとも痛覚度の鋭敏な箇所であるというのに、意外なことには、このわかものにはすこしの苦痛の表情もみえなかった。両の腕を頸の下に組んでまゝ、眉ひとつしかめず、平然としてゐるのだ。しかもときどき、S氏と談笑したり、タバコをふかしたりなどすら、している。

私はさいしょ、これは他人に傍観されていることのやせがまんかな、と思っていた。が、およそ三時間ほど休みなしの施術中、かれはこの表情をすこしもくずさなかった。これはとうてい、やせがまんではできないことではない。

このとき私は、往時の「市井の博徒」ともいうべき田中香涯氏の書いていることを、おもいだした。それは、いわゆるゴロツキ・博徒などのなかには、不仁身つま

り全身病覚脱失という特殊体質の者が、すくなくないと記していることである。そしてその典型的な例として、会津の、小鉄こと高阪仙吉が、敵手の前でおのが腕をカミソリで切り放ち、これを喰へ、とさしだしたことが、また、腕の喜三郎こと角田屋喜三郎が、片腕をなかばほど切られたとき、みぐるしいといつて、その腕をノコギリで引き切つてすてたという話（『近世奇跡考』による話）を挙げてゐる。

この刺青被術者のわかものの場合も、かれが痛覚の鈍麻乃至麻痺の体質だということ、そのあまりにも平然たる表情を、証明できるような気がする。

つぎに、このときもうひとつ気づいたことは、S氏のような、劇界的衆道趣味のあるとき、初老の彫り師にとっては、このようなわかもの、膚に刺青を施すことは、みずからにはすでに失われたもの——たとえば若々しいはりのある膚、にたいする郷愁、そして

皮膚フェティシズム、多少のサド的快楽をまじえた、ホモ・セクシユアルな快感を覚えるのではなからうか、ということである。

因みに、刺青の施術中に女性と接すると、膚にいれた朱の部分がすぐに変色するということが、施術中のコイツスは厳禁されているのが通説（心理学者寺田精一氏などもそう記している）となっているが、S氏によると、それは彫り師の営業政策的な詐言であつて、事實はけつしてそんなことはない由である。

（か）

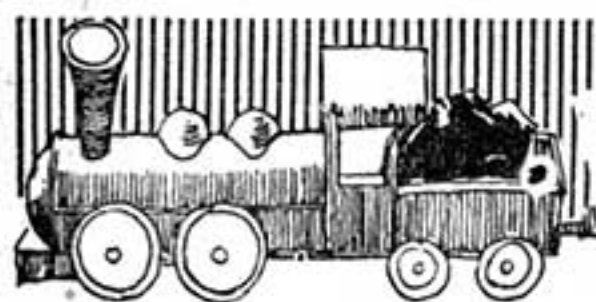
「悪名波止場」

勝新太郎の朝吉親分が活躍する大映「悪名」シリーズのうち。

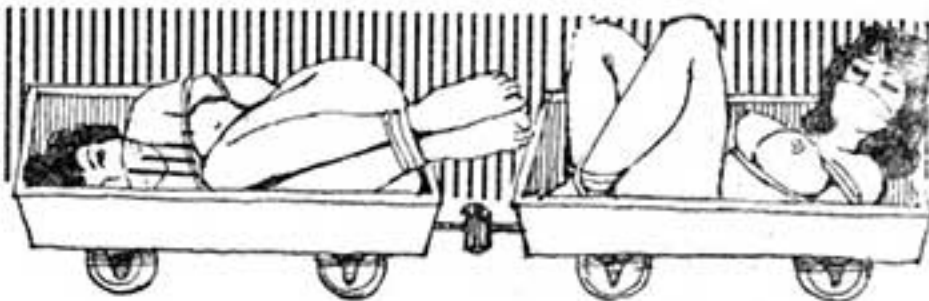
吉田義夫、天王寺虎之助ふんする波止場の悪ボスとたたかうのが今回のお話。

滝瑛子が、キャバレーのホステスで、姉の生んだ混血児の娘を育てる、ややニヒルな女の役で初登場。

「裏窓」の三、四、五、六月号の



裏窓タウン



表紙に活躍した紺野ユカが、麻薬中毒でありながら、美しい恋を失わない女、という、きわめていい役で登場。

密輸されてきた麻薬の運搬を拒否したために、悪党どもに取り囲まれ、自分の若い亭主（水原弘ふんする）に、縄束でなぐり殺される。

さて、縛られるのは、勝新太郎とともに、悪党一味に捕われた滝瑛子。

ふとい縄で、うしろ手のぐるぐる巻き。

はじめは、海岸にある運送会社の事務室のソファに坐らされている。

勝新太郎を縛った縄と同じ縄で縛られているらしく、勝が身を起こすと、滝も苦しうに身を起こす。

背後からも、ながながとうつしソファの背のために、うしろ手首はみえないが、わりあい緊縛感ある。

それから、捕われの二人は、夜

になって、モーターボートで沖に運ばれる。

うしろ手に縛られたままである。このシーンの滝瑛子も緊縛感はある。

二人は縛られたまま、海中へ投げこまれるが、うまいぐあいに、救いの手が現われるのは、定石通りである。

監督は森一生。カラー・ワイド映画。

（新）

強い強い

女性たちのお話

愛知県知多半島の師崎（もろぎき）海岸へあそびにきた大阪のある男性（二十七才の工員）が、夕方、帰宅途中の若い海女さんをみて、ムラムラといったずら気がおきた。

彼は酒をのんでいて、いい調子だったらしい。

海女のそばへ寄ってからかいはじめた。

ところが、若い海女は、

「ちょっとみんなきてよ、へんな

男がいるのよ」

と、仲間を呼び寄せ、逆に男をとりかこんだ。

「若い海女をからかうなんて、んでもない都会の男だ」

と、男は袋だたき。

しまいには、

「かまわないから、ハダカにして松の木に縛りつけちまいな」

ということで、哀れや男は、手どり足とりされ、ふとい縄で松の木にがんじがらめに縛りつけられてしまった。

そのまま、海女たちは去っていったので、男は縛られたまま救いをよび、やっと通りかかった七十七才の老人に助けもらったという、強い強い女性と、哀れな男のおはなし。実話です。

（武）

×

×



1

実話物という名の作り話がはんにしすぎたために、読者のさい疑心が強まるという傾向が見られる。

実際の話や生々しい体験までが、ホントかな、という疑いのまなこで見られる。

無事平隠なせまい日常的な生活範囲の経験からだけそれを考えて、そんなことがあるはずはない、そんなことは到底考えられない、というふうに、思ってしまう。どうせあれは映画の話さ、どうせあれは小説の話さ、どうせあれは実話物さ、ということであっさり片づける。堅実な小市民は、おおむねそういうふうを考える。

自己の生活の範囲や理解の行き届く己のせまい体験からだけ割り出して、その守備範囲内の平隠無事な日常性に添った出来事や思考方法しか信用しなくて、それ以外のことはみんな映画の話、小説の話、実話物という作り話、ということに済ましてしまう。

でなかったら、それは昔のことだから、外国でのことだから、戦争中のことだから、であって、今ただ今、現実自分が呼吸している今の世に、そして身近な周囲には、何もないと信じている。とうてい理解できない、だからあり得ない、である。

文芸春秋的知性度、あるいはリーダーズダイジェスト的モラリストに安んじる堅実な小市民は、この信じないということをむしろほこりに思っている。物に動じないことを、むしろほこりに思っている。流行から流行に目移りして、ジャーナリズムのあふりに右往左往する大衆を、度しがたしと眼下に見下している。

といったところで、いくら彼らでも、アウシュヴィッツや南京事件の大虐殺事件を信じぬわけにはいかない。小説や実話物をバカバ



■体当たりマゾヒズム論・18

ああ、ぼくの欲望は貪欲に
どこまで生きれば満たされるのだ

水 尾 究

江 渕 晃 夫 ・ 絵



かしい一笑に付す彼らも、帝銀事件や松川裁判の生々しい事象から目をそらすわけにはいかない。日常三面記事をにぎわす社会の断層を、暗い暗黒面を否定するわけにはいかない。

小説や実話物のこしらえ方やその書きぶりがお粗末で、読むに耐えないとしても、そういう事がらまでを信じないというわけにはいかない。

春風たいとう、平隠無事な日常は、ただ偶然に、仮りに、その人たちの周囲がそういうぐあいに見えるだけで、実は、社会の実相というものは、より作られた、より非日常的な、小説や実話物から成り立っていることから目をそらすわけにはいかない。もっと深い、複雑な実話の累積から成り立っていることを知らねばならない。

荒とう無けいな、読むに耐えない実話があったとしても、それはそういう実話そのものが、荒とう無けいなのではなく、表現がチャチなだけである。実話は、そういう話は、必ずどこかに、現実の社会にはあるものだ。人間の欲望や空想力がどんなに飛躍した考えやこしらえごとを作り出したとしても、それが、現実以上にはみ出ることとは考えられない。

現実には常に実話以上の世界である。現実ほどに実話に満ち満ちた世界を、ただ貧相な身の回りの自分だけの経験や感覚から、ああ、そんなことがあるもんか、それは作り話さ、というシタリ顔で片づけるのは、本当はとてもできることではない。何事もありうるし何事も起こりうる、これが現実の社会であり、人間の姿なのではなからうか。

「ぼくはマゾヒストです。正統派のマゾです。今まで一貫した生き方をしてきました。突拍子もない生き方です。ぜひ先生にお会いして、この特殊な、徹底したマゾヒストとしての生き方、ならびに考え方について、ぜひお話し上げたいのです」

という電話を受けたとする。

それをその作家は、二つ返事で、

「わかりました。お話しをお聞きしましょう。よかったら今日でも会いましょうか。それほど時間はとれませんが、渋谷のTフルーツパーラーまでご足労願えませんか。いや、私はとにかく、猛烈に好奇心が強い男なものですから——」

と答えたとする。

こういう電話の応答は、ごく自然にありうることである。これさえ信じられないという、いわゆる常識に毒されてめくらになつている人には、これから書くこうとする事がらをば、改めて読む必要はないと思う。どうせこしらえたものだろう、というぞんざいに読みとばされそうだから——それほど今回の話は、いわゆる実話物くさい実話である。

信じられない人には単純な作り話に思われるだろう。今さら弁明はしないつもりだ。こういうことがやはりあったのだ。そしてありうるのだ、ということだけは、しかしやはり、念のため付言はしておきたい。そしてそれからご報告に移すこととする。

3

「猛烈に好奇心が強い男」と自称するその作家のことばは、実に率直で感じがよかった。好奇心が強くなって、なんで小説なぞ書いていられよう。何かがどこかで、自分の知らぬうちに行なわれてい

る。どこかに何かが、自分の知らぬことが、自分の信じられぬかたちで存在する、といった可能性への期待、何事もありうるし起こりうることへの確信、この率直な好奇心ほど謙虚な心はない。一つでも多くの事象や事件の目撃者となり、参画者でありたい、と願う率直な経験主義ほど謙虚な心はない。

たとえそれがのぞき趣味と浅薄に言い捨てられても、見たい、知りたいことへの食欲は、一面謙虚な心を表明するものである。そういう食欲が、すべて小説家の創作活動を内側から醸成するエネルギーとなることを思えば、そのことをは容易に理解できる。

おれは何もかも知っている。わかっているとシタリ顔で収まっていようと思ひ上がりからは、のぞき趣味は産まれない。好奇心もわからない。おれはあまりにも知らなさすぎることに悔恨と自信のなさ、そう謙虚な心が、好奇心を産みのぞき主義を派生させる。何かがありうるし起こりうることへの真摯な信頼と期待を持つ者には、当然正体不明の男からの、曰くありげな電話には心をときめかすものである。

いったいだれだろう、どんな話なんだろう、と、いろいろ想像をめぐらす間の楽しさは格別である。またスリルに富んで大きな冒険の楽しみでもある。

言い方によれば、実に子どもっぽい、たわいのない興味からであったのかもしれないその作家は、間違いなく自分の指定した時刻に、自分の指定した場所に長身の姿を現わした。男、つまり水尾究はとつて来て待っていた。Tフルーツパーラーの二階である。

特に目印になるようなものはお互いに持っていなかったが、作家は雑誌等でおなじみの顔であったし、水尾究、つまりぼくは目ざとく作家のE氏を目に留めて、あいまいな微笑を浮かべながらスイ

と立ち上がり、腰を折ってあいさつを送ったので、言わず語らずのうち、このふたりの間には、初対面の警戒心よりも以上に、秘密を分かち合う者同士の、あの打ち解けた親近感で結ばれたのであった。

4

秘密を心に持つ者は、それをひとり、だれにも語らずに腕の中にしまいこんでおこうとするのは苦痛である。いつかは、だれかに語りたいものだ。特に、語ることを、それがどんなに非道德的なことであっても、マユをしめたりせずに、自己の世界観のせまい範ちゅうに捕われることなしに、それはそれとして理解し、納得してくれる相手に語りたいものだ。ぼくはその相手として、作家のE氏を選んだのであった。

だもう一つ、もっと正直に本音のあるところを白状する。相手が理解し、納得してくれ、しかも秘密が保持されたとしても、それだけの一方交通ではやはりつまらない。せちがらい世の中のこと、マゾヒストだとして、その道での実利を追う気持ちには変わりはない。酒飲みが酒にいきたくないように、いや、麻薬患者が手放して薬を求めるように、マゾヒストがマゾ的狀況を待望する気持は激しい。ぼくは氏の作家としての好奇心に訴えることで、彼の好奇心を満足させてやることで、こちらの要望がかなうよう、一びの力を貸してもらおうと思ったのである。

E氏の作品を手がかりに考えれば、彼はそれだけの理解と、協力を示してくれるに足るだけの、十分な資質を持った人がらのように思えた。また事実、電話で意を通じると、あっさりこちらの言うことをまに受けて、ぼくは好奇心の強い男だから、と、警戒の色もな

く名乗り出てくれた。

これはうれしいことであつた。E氏の嗅覚が、電話をかけてきた男の秘密が本物であることを敏感にかぎとつたのであろう。ぼくもまた、E氏の作品から、彼がともあれ、内部に秘密めいた背徳の世界をいだいて生きていることを、敏感にかぎとつていいのだ。

秘密を分かち合う者同士のあのなつかしいうずくような親愛の情愛のこまやかさはどうだろう。ぼくらはお互いに、少し離れたような笑いで黙礼を交わし合うことで、いっさいのあいさつは成立したのであつた。

「お呼びたてしまして、ぼくはマゾヒスト、水尾究です」

「Eです。電話でも申し上げた通り、いたって好奇心の強い男で」卓上のコーヒーカップをまず手にとつた。ふたりともお互い相手を探り合うように、コーヒーを飲みながらも、じっと視線を傾けたカップ越しに注ぎ合ったが、それぞれ心のうちでは、もう期待でわくわくしていたのであつた。

5

店内が十分に広いため、勤め人らしい客の数は多かったが、それほどどの困難には感じられなかった。あたり前に、ゆったりとくつろぎ合つて談笑している分には、だれもことさらに耳をそばだてる気づかいもないのだ。いっそ人殺しの計画について話し合つても、安全なほどだ。

ぼくは自分の大胆さに、半ばあきれ驚いた。かつてのぼくは、極端に自分の秘密を恥じらい、それを語ることをはばかった。ずっと以前、ぼくは「週刊サンケイ」に原稿を売り込みに行ったことがあつた。



その時、ほくの顔色から、よほど重大な情報を売りにきたとでも錯覚したらしい若手の編集員が、話を聞くために、人目を避けて、新装成ったばかりの産経ビルの中を、グルグル案内して回った。

喫茶室ではどの店にも必ず他の客が居た。閑散としていて、片寄

った席にすわれば声など聞かれないで済むような状況にあった喫茶店でも、ほくは編集員のソデを引張り、ほかの場所でないかと、と、ダダをこねた。要するに密室がほしかった。

女の足の裏をなめたい、ツバを飲みたい、馬になりたい、といっ

たたわいのない話が、どうしても人の目のあるところでは口から出ないのである。聞こえる、聞こえないの問題ではなかった。マゾの話をすることはなかったのだ。

結局ぼくと編集員は、屋上に上がった。屋上のさらに尖塔のように立った小さな密室状の部屋の中で、やっとふたりは落ちついた。「よっぽど重大な話があるに違いない」編集員の張り切り方がつつ抜けにわかるようであった。編集室はもちろん、応接間でも、喫茶店でも人目があるからいやだと言った。ごく内緒の話だと言った。それで適当な場所を捜して、産経ビル中を歩き回った。エレベーターも使わず、階段を上った。そうしてやっと屋上の密室にたどりついた。その部屋は、一般の人は入れないことになっていた。ビル全体の冷暖房の装置機器が中には設置されていた。

もう逃げ出すわけにはいかなかった。期待に胸ふくらませた編集員を、ここまで引っぱってきてしまったのだ。「私はソ聯からの潜入スパイだ」といった告白をでもない限り、ひっこみがつかないような場面であった。ぼくは追い詰められたネズミのように、半分は泣き顔で、

「女の人の足の裏がなめたい、馬になってムチでぶたれたい」

といったとんでもないばかげたことを、大まじめに、トットツと、もう半ばヤケソの気持ちでしゃべったのだ。相手の顔がどんなふうで、どんなふうに変わっていったか、もう眼にはなかった。

編集員の身にしてみれば、期待はずれというよりまるでばかにされたようで、腹も立たないというところであったのかもしれないが、ぼくの身にしてみればやはり必死の思いであった。処女が、衆人の前で恥部をさらすに等しかった。

四十女の厚かましさと図々しさほどのものはほかにない、と言われる。でも彼女らにも、あの花もはじらう思春期があったのだ。一度純潔を失うと、女は一挙に羞恥心までもなくしてしまう、と言われる。でも彼女らの純潔時代、あの消えもいりなん羞恥の風情は、またまぎれもない同じ当人のかつての姿には違いない。

ぼくは、かつては純潔時代の思春期のマゾヒストであった。花も恥じるというほどに、己の秘密を恥じたものだ。変質者のひとりであるという背徳意識ではなく、ひとえに羞恥心からであった。

そういう羞恥心をかなり捨てた現在、ぼくは既に、人の前でどんな話をするにも平気になっていた。このことは、マゾヒストとしての成長を意味するのか、墮落を意味するのか、今、答えることができない。

「あなたの作品の中のマゾヒストが、肉体的苦痛より、精神的凌辱の道をこそ選ぶ、と言っていることに感銘したんです。もちろん、女性から受ける苦痛はマゾヒストにとっては福音です。ですが、どんなすばらしい肉体的苦痛よりは、精神的凌辱のほうがこそ至上のものです。あなたの作家的眼力が、肝心のマゾの本質を、苦痛より凌辱の線で見事に捕え切られたことに、敬意を表したいのです」

E氏は、一々だまっとうなずきながら聞いていた。何も口はさしはさまなかった。ところどころ、いかにもわが意を得たような、大きなうなずき方をさえた。それに力を得て、ぼくは隣のテーブルの人たちに、話が聞こえる、聞こえないのシンシャクを抜きにしゃべった。

「そうするとあなたは、どんな女の子からもそんな仕打ちを望まれますか」

E氏はひどく丁寧な口のきき方をした。それは色が黒くて、どちらかといえば、あまり男ばえがしないただ長身なだけの彼の体軀と比べ合わせると、不似合いなほど優しい口調だった。

「たとえばね。ぼくは小説書きのかたわら、或る大学の講義を週一回受け持つてるんです。学生はほとんど女子です。実際このごろの女の子は、ハシにもボウにもかからないものが多いですからね。それだけ面白いといえば、面白い。大学の女の子は、うぬぼれが強くて生意気だ。いいですか。あなたにとっては、実に願ってもない傾向と言えるわけですね」

「そうです。女性が生意気になり、大いに男性をしのいで活発になったということは、ぼくにとっては歓迎すべき傾向です。男と同じに車の運転もする。柔道もやる。馬にも乗る。大いに生意気になる。うれしいことです。ですが、やはり女の好みは限定されます。やむを得ないんです。ぜいたくなわけではないのです」

「わたしには女の子の生意気なのは、どうもハナについていただけませんが。だがあなたの場合だと、それがうれしい、——その気持ちには納得できますね」

E氏は、そう言いながら、隣のテーブルに目をやった。やりながら、からだを前に傾け、声をひそめて言うのだった。

「ああいう女性は好みに合いますか」

隣のテーブルには、BGらしい女性がふたり、とりとめない話題に興じていた。ふたりとも、スポーツシャツまがいのきわめて大胆

なデザインのブラウスを着ていた。袖がなく、腕の付根からむき出しであった。小麦色に焼けてツヤのある皮膚が、内部に活力をみなぎらせる筋肉の勢で、はじけそうであった。

「元気な娘さんたちですね」

ぼくは自分の内部に火がつくのを感じた。テーブルの下に交互に組み合わされた足のあたりに視線をすべらせるとつばを飲んだ。

「ぜいたくなことは、言いませんよ。お隣の娘さんたちだって、それほど美人というのじゃないようです。当たり前前の娘さんです。でもぼくは、今、あのテーブルの下にもぐりこんで、あの娘さんたちの足の先に口づけができれば、あるいはあの椅子に顔を乗せて、娘さんのおしりの下で窒息できれば、と、そんなことを猛烈に思うんです。特別むずかしい注文はないんです。ごく普通の娘さんでさえあればいいんです。いえ、娘さんに限らず、奥さんでも何でも」

これはしかし、やはり哀しい妥協であろう。あきらめであろう。女王の資格は、選ばれてあらねばならない。豊かな知性とその知性を色彩豊かに表現するつづらなひとみと。

だがそれを今E氏に強調して、それはむずかしいかと、首をかしげられたら困るのである。こちらの要望に力を貸してもらうためには、忙しいE氏の負担を、できるだけ軽減し、しかも早々に手近に実現できることでなければならなかった。

「サジズムとマゾヒズムと、どちらのほうがあなたにとってはおもしろいですか」

「そうですね」

E氏はあごのあたりに手をやってしばらく考えるようであった

が、
「ずるい言いかたかもしれませんが、両方ですね。わたしにはいろんなものの血がまじり合っているようですね。サジズムもあるしマゾヒズムもあるし——だがそれより強いのは何度でも繰り返すよう

ですが、好奇心です。その意味での食欲は大変なものですよ」
そうしてE氏は笑った。ほくは彼のことばを疑わしく思った。ほくにあるものは、ただただマゾに対しての強い欲求だけであった。こういう欲求に捕われているときのほくは、もう思考状況は盲目で



あった。人はだれでも自分と同じ感興、同じ興味に捕われることが必然であった。こんなにも激しく男の心を魅するマゾヒズムがたんに好奇心の一つの分野であってよいものか、そんなことはない。

E氏だって、マゾヒストであるに違いないのだ。マゾヒストとしての生活があるに違いないのだ。それを彼は隠しているのだ。彼には彼の社会的立場というものがある。作家として世間にも広く顔が知られている。また知られることで生活の道を立てる以上、それをぶちこわすほどの秘密を明からさまにすることは、やはりはばかれることには違いない。だから氏は、はっきり自分をマゾヒストだと、定義することをためらったのだろう。

これは、あまりにもほく本位の、あまりにも索強付会の強引な推論であった。これはあまりにも勝手な、根拠のない解釈であった。

9

だがぼくは、その彼の立場に妥協する意味で言った。彼のいわゆる好奇心を迎える意味で言った。

「あなたがお知り合いの女性の中で、だれかを選んで観察するとして、どんな面から観察をしたとしても、その女性があなたに見せる面には限界がありますね。それをですね。ぼくが完全な精薄児としてですね。その女性に接する。相手が何の判断も思考力もないばかりであって、しかもその場所が完全な密室性で保証され、どんなことだって外部にはもれない、という安心が得られたときですね、女性はどう変わるか。あなたのご存知よりの女性がそれまであなたが気づかなかったどんな隠れた面を見せるか。好奇心はわきませんか」

「興味しんしん、大いに好奇心がわきますよ」

E氏の態度には熱があった。そして率直な言い方だった。「引き出された隠れた女性の一面とは、それこそ女性のサジズムですよ」

「なるほど」

E氏は、ぼくの意図するところをよくのみこんだようであった。「じゃね、きょうはまだ仕事もののこしていますしね。そろそろ失礼させてもらうとして」

E氏は卓上の伝票を手に取りながら、「明後日、銀座で会いませんか。そこはバーなんです、少し心づもりもあるので——」

高速道路沿いのバーの位置を紙片に地図で示して言った。

ぼくはE氏の言うまま、それ以上は何も聞かなかった。しつこく彼の心づもりというのを聞いてはみたかったが、こちらのさもしい心のうちを、あまり露骨に見すかされるのもいやだった。

だが期待することがあるということは楽しいことだ。明後日への期待がぼくの心をうずかせた。期待しすぎて、その時失望しないように、つとめて気持ちを落ちつかせようとしたが、むだだった。どんなにやっても心が高ぶった。明後日のためにだけ、そのときのぼくは生きているようなものだった。E氏の心づもりというのは何であるか、期待で胸はふくらむ一方であった。

10

E氏に言われたとおり、ぼくはその夜、八時ごろ、銀座のバーを尋ねた。

宵闇の銀座はネオンの色どりではなやいでいた。だが、一步高速道路沿いの裏通りへ歩を入れると、表通りのはなやかさは陰をひそ

め、建設中のビルの鉄骨などがぶきみに夜空に突きささって、荒涼とした印象を通行人に与えたりした。

バーはその一画にあった。あき家のように店を閉ざしていた。閉業どころか、廃屋のような感じさえした。同じならびに、同じような店があったが、それらは皆表の軒燈にも燈をともし、店は開かれた。

どうしたことだろう、と、ぼくは内心の焦燥を押えかねる思いで立ちすくんだ。

E氏が見えすいたうそを言ったとは思えない。あの時の打合せは、お互いにまじめなものだった。今日、夜八時、この店で会うはずだった。はっきり約束をしたのだ。E氏が言外に、におわしたあの時の様子からでは、この店に、何かしかるべき女性が居るはずなのであった。

約束はまじめなものだった。時間に遅れるということはあるとしても、完全なすっぱかしはあり得ようはなかった。ところが、肝心のその店が、まるで人気もなくなりましたままなのである。この時刻なら、もうとっくに開いていねばならぬはずだった。

やりきれぬ思いがした。泣くにも泣けぬ気持ちだった。期待が無残にも深い傷跡を残すようにしてしぼんでいった。

E氏はもしかしたら、店がしまっているのを知らなかったのかも知れない。そうなのだ。それは当たり前のことだ。偶然にも運悪く、臨時に店が休みになった日を、ぼくらはうかつにも選んでしまったのだ。

いくらか元気が出たぼくは、しばらく待つつもりで、店の前の道ばたにうずくまっていた。だが時間は遠慮なしにたっていた。どこからとも彼は現われない。次第に何とも言えぬ失望がぼくの心を閉

ざし始めた。

その時、小型の車がギーッときしんでぼくの前に止まった。顔を上げると、E氏の額があった。薄闇の中にもその判別はすぐについた。

「やあ、ほんとに済みませんでしたね。大分お待ちになったでしょう」

E氏は車から降りてきてぼくの前に立った。本当に申し訳もないといった低姿勢である。

「今日は、この店は休みなんです。それを知らなかったものだから、——それに実はわたしも少しほかに用件ができてまして。どうでしょう。また明晩にでもTフルーツパーで会いませんか。具体的なお話もできると思いますが」

車の中には若い女性がひとりE氏を待っていた。E氏の肩越しに彼女のきつい目がこちらを見つめていた。ルームライトのあわい光の中で瞬間に見た印象は強かった。



現代マゾヒズム文化時評 ②①

森 下 高 茂

西ドイツ誌

『ライカ・フォトグラフィー』

これは、かなり古くからの写真雑誌で、第二次大戦前から出ていたように記憶します。この『ライカ・フォトグラフィー』一九六三

年二月号に、ここにかかげる写真が出ています。

美しい横顔を見せる女調教師、彼女が振っている鞭、そして炎の輪の中をくぐりぬけているライオン——もちろん写真A・H・V・ハイト氏撮影Vとしても、すぐれたものでし



ライカ・フォトグラフィー誌

ようが——M派にとっても興味あるものです。

支配者の美しさと、隷属者の危険と恐怖と決断との瞬間です。

この女性を何かで見かけた覚えがあると思つたのですが、以前に本誌「裏窓」で紹介したこともある、オランダ生まれの女調教師によく似ています。

米国雑誌

『アップ・トゥ・デート』

この雑誌の旧号（一八九九年—一九〇一年）を、アメリカから入荷したので、この欄でなんどかに分け、おもしろい写真を紹介してゆきたいと思います。

写真（A）は、『アップ・トゥ・デート』

誌一八九九年十二月二七号（第一巻第八号）

二ページ目に掲載されているものです。いわく▲幸運をそしてよい新年を▼とあります。

いまから、およそ六十年以前の、女騎手の衣裳が、こういう現代風のものになっている点は注目してよいです。というのは、当時は多くの女性が婦人鞍（横騎鞍）に乗っていたのですから、▲男乗り▼とされていた▲またぎ乗り▼は、女性にとっては運っぱな、フラ

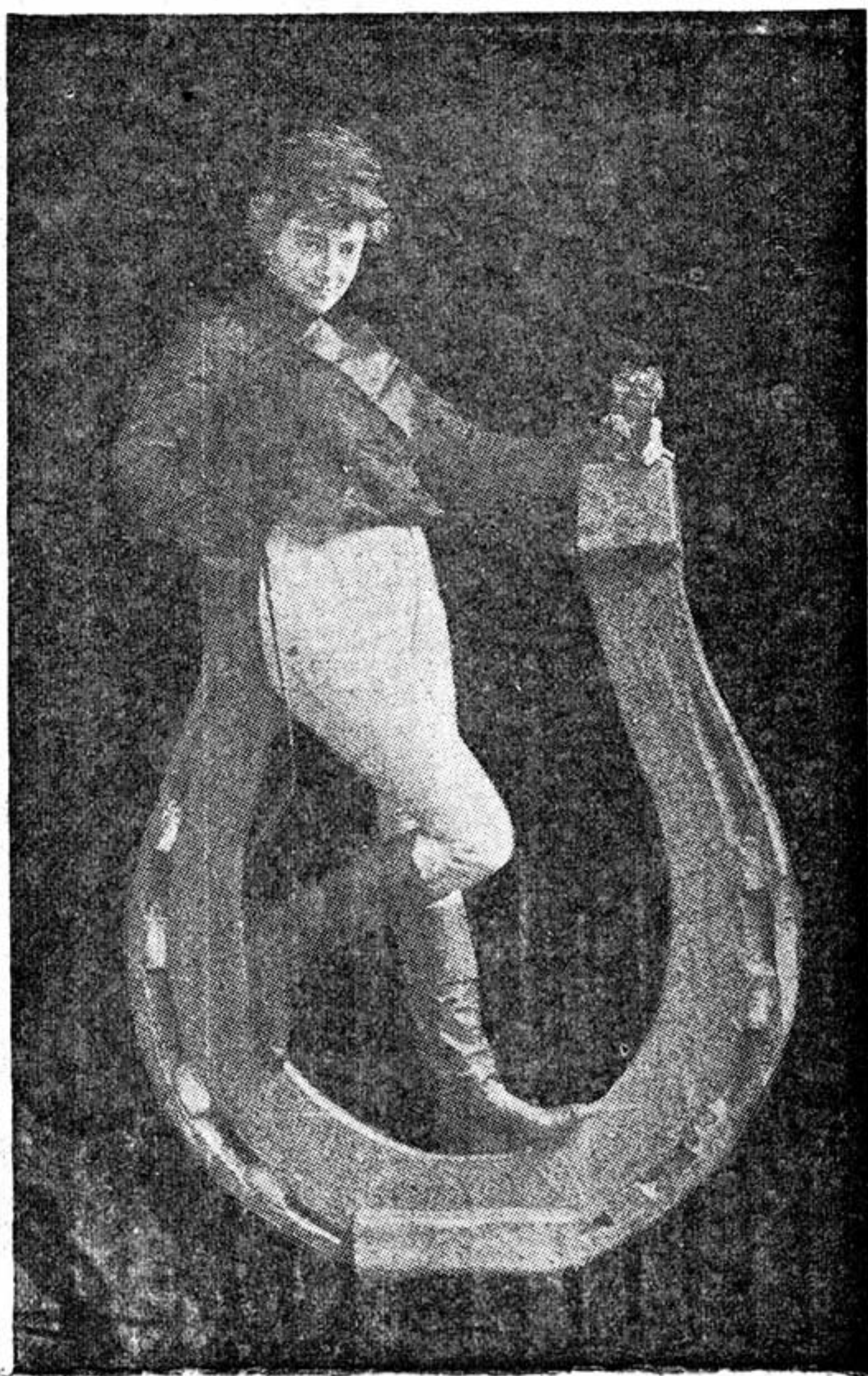


写真 A

ッパーのすることと考えられていました。

よく中性的な女性をさして▲男のように馬に乗る女▼という言葉が用いられました。そんな時代の背景を考えると、この写真が当時のズウミミク（畜獣化）にとって、いかにシヨッキングであったかが、わかると思われるます。

写真（B）は、同誌一九〇〇年三月二十一

日号（第一巻二〇号）の十ページ目に掲載されていたもので『野心の強さ』というタイトルがついています。

“軍服を着た女性”が、どんなに多くの崇拜者を持っているかについては、以前（裏窓・三八年五月号）に書きました。これは写真としても美しく、じゅうぶん鑑賞にたえるもの



です。

写真(C)は、同じ号の十一ページに『子どもの悪戯』とタイトルがついています。

これは説明を必要としないでしょう。こういうおかしさを伴った表現で、SMを暗示することは往々にあります。

たとえば同号七ページに写真(D)があります。首切り役人の斧の下で笑う娘——しかし彼女は愛を捨てるよりは死を選んだ!と説明してあります。

写真(E)は、同誌一九〇〇年三月二十八日号(第一巻二二号)の裏表紙です。

タイトルには『本命』とあります。四つん

写真 B→

写真 C↓



ばいになった女性の上に、またがった女性がムチを振り上げているのです。こういう構図になると、もはやうたがう余地もなく、マゾ的な嗜好に投ずべく作られたものと考えてよいでしょう。

写真(F)は、同誌一九〇一年二月十六日号(第三卷六七号)の二一ページに掲載されている『女奴者』です。

これはデラ・フォックスという軽演劇女優ですが、当時あまりめずらしくはなかった奴者にしろ、それに案を持ってきたのは、おもしろいと思います。

(以下・次号)

『白い女奴隷』

フランス映画

この映画のストーリーは、国際売春組織をつぎからつぎへと身売りされてゆく田舎出のフランス娘をえがいている。最後に彼女は香港で麻薬にとりつかれ、母国フランスに帰りたいという希望すら捨ててしまう。売春と麻薬のおそろべき害毒と魅力とをえがいた作品である。

ところで映画としての出来ばえは、ずっとひどいものである。まず各地に一人か二人の

写真 D ↓



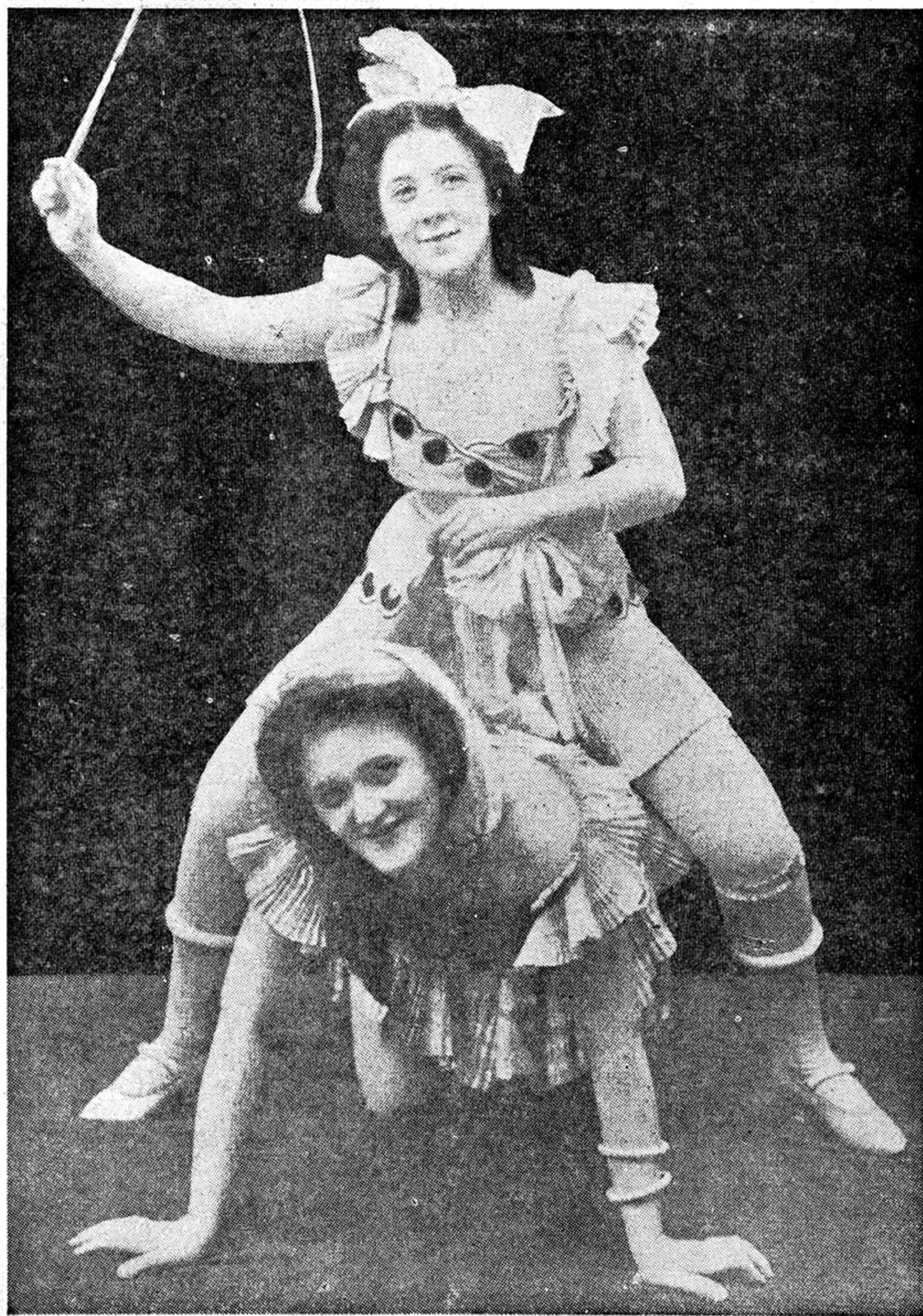


写真 E



写真 F

ヒモ的な男や怪しげな女が出没するのだが、何十万フランという高値で女を売る話がなされる。それにしても買ったはずの人物が一体どうして資本を回収するのか、その辺がまるっきり分らない。

ヒロイン（女主人公）が稼いで、パリにいるマリオというチンピラに金を送る。みつ

ているということが、じっさいくどいくらいえがかれているのだが、このマリオという男は、彼女がパリに出てきた当時に甘言をもって自分の女にした上、街角に立たせたり、コールガールをやらせたりしてみつがせ、し

かもロッテルダムに売り飛ばしてしまう男なのだ。そのさい彼は一時金をまきあげているはずだが、どうして転々と身売りさせられて行く先々から、彼マリオに金を送る必要があるのか、その点が説明不足である。



映画＜白い女奴隷＞

それにもう一つ、この女主人公は余りにもバカではないだろうか——ということ。こんな女なら、ハンブルグの公娼街につれてゆかれたときなど断ったりしないはずである。そんな自確を感じさせない女に見えるのだが、しかし何かといえど変に正義感や清潔感をみせびらかせる。

だからこの映画は、一口に言えば近ごろはやりの「8ミリのとり方」を読んで作り上げた素人の作品といった感がある。とうてい映画館で金をとって見せる作品ではない。

ところで右のような説明不十分で、出来ばえがわるくて、役者がへたで、ストーリーがめちやくちやであるけれど、そこには素人なりに、ちょっとおもしろい描写というかエピソードを二つはさみこんでいる。

その一つはパリの話である。コールガールをやっているとき、あるドイツ系の紳士（フランスはどうして変態性欲者が英国人やドイツ人でないと納得しないのだろう）が、二倍の金を払うからと言い、S的な遊び、おそろくはスパンキングをやろうと持ちかけるところである。

結局彼女は、わかったのかわからないのか金を叩きつけて帰ってしまうのだから、そのくどき方が実におもしろい。じっさいS派の人

で女給や売春婦に持ちかけたことのある人なら、この辺の会話が実行派の経験のある人によって書かれたことに気づくであろう。この辺の金を払ってからの会話――。

「きみは子供みたいだ」

「子供みたい？」

「その子供っぽさが、ぼくにはぐっとくるんだよ」

「……………」

「きみは、ぼくが言ったことわかるかい？」

「だって、子供っぽいつて言っただけでしよう？」

「じゃ、きみは子供が学校をなまけたりすると、どんな罰を受けるか知っているかい」

「そうねえ、ご飯をたべさせてもらえない」

「いや、もっとわるいことだ。たとえば泥棒をするとか……そう言ったひどくわるいことをだよ」

「きっとお尻をぶたれるわ」

「そこで、いまきみのやっていることは罰にあたいますとは思わない？」

――彼女は自分の売春行為を責められたのだと思ひ込み立ち上がる。そして、

「お説教はたくさんよ！ お金返すわ！」

こう紳士は彼女からきめつけられ、おいてきぼりをくってしまうのだ。この会話はS派

の人が、じわじわと相手の反応を見ながら話しかけてゆく技法を、じつによく模倣していてもおもしろいと思う。

「縛り」のときはどうするか。もっと遠回しにはじめるだろうが、そのさいどんな小道具を使い、どう会話を切りだし、もし断られたならどう切り返してゆくか、ということ想像してみるのも興味ぶかく思われるのだ。

この映画の中で、もう一つの画面は、マゾ向きのシーンである。場所はハンブルグのキヤバレーやナイトクラブが軒を並べているレーパーバーンの一軒、その「ヒポドローム」である。

この店は、かつて在独中に沼正三氏がさんざん通いつづけたようだ。ここの「シユティフェル・ディルネ」▲長靴をはいた娼婦▼と、思いとげたという意味でも、またじつさいに店内で馬を乗り回す娼婦を相手にえらぶこともできる、というおもしろいやり方からも特筆すべき店である。

この映画『白い女奴隷』のヒロインは、公娼街で働くことを断ったために、この店につれてこられる。

アミタイツをはき、コルセットとブラジャーだけで曲馬のように場内をぐるぐる回る。その光景はうす暗く、わけのわからないもので

はあるが、この店のじつさいを知っている者にとつては、ヒポドロームの内部が撮影されているというだけで十分である。そのM的な魅力はつねに語りつたえられているのだから。

■見たもの聞いたもの

▼週刊「漫画サンデー」(実業之日本社発行)の九月二十五日に載っていた座談会記事から――

平岩(犬科生態研究所所長)

「アメリカの話ですがね、ある夫婦が山小屋に住んでいたんです。そこへ猟師が訪ねてきた。主人が『ゆうべ夜つびてオオカミガウチのまわりで吠えやがって困った』

といった。すると猟師が、『じゃア、あんたの奥さんメンスだね』亭主がおどろいて『実はそうなんだ』。猟師が『あんたの奥さんの小便を、一リットル五ドルでゆずってくれ』。ゆずってもらったものでワナをかけて、猟師はオオカミを三十七頭獲った。実話ですこれ」

杉浦(漫画家)女「の小便買い集めて、毛皮屋でもやるか」

その夜は不気味な感じの闇夜であった。こ
と甲賀屋敷の奥まった広い一室には、緊張し
た空気がみなぎっている。集まっているのは
甲賀三十六番組の三十六人の頭領たち、そし
て彼らに陰々とした声で語りかけているのは
甲賀の長老、甲賀半斎であった。

「今宵そなたたちにこのように集まってもら
ったのは、この甲賀屋敷、ひいては幕府隠密
衆としての甲賀忍者全体の浮沈に関わる重大
事がもち上がったからじゃ。そなたたちも知
ってはおろうが、今江戸城中では二つの勢力
が陰に陽に激しく争っている、老中筆頭、と
ぶ鳥も落とす勢いの柳沢出羽守と、柳沢の専
制を憎み、これを倒そうとしている堀田信濃
守との二つの勢力じゃ。その柳沢と堀田の両
側から、時を同じく内密に甲賀屋敷へ数名の
忍者を送ってくれとの依頼があった。もしこ
れを断るなら、あるいはまた一方にのみ忍者
を送るなら、他方が勝って実権を握った時、
われわれ甲賀衆は危機に陥る。この甲賀屋敷
に圧力がかかってくることは必定じゃ。——
そこでわしは、この甲賀屋敷を存続させるた
め、幕府隠密衆としてのわれわれの地位を安
泰に保つための苦肉の策を考えついた。それ

は、柳沢側にも堀田側にも忍者を送るのじ
や。そして勢力争いに負けた側についた者た
ちは甲賀を裏切った者として処断する。それ
がこの甲賀屋敷を守る唯一の道なのじゃ。そ
こでそなたたちにこのクジを引いてもらお
う」

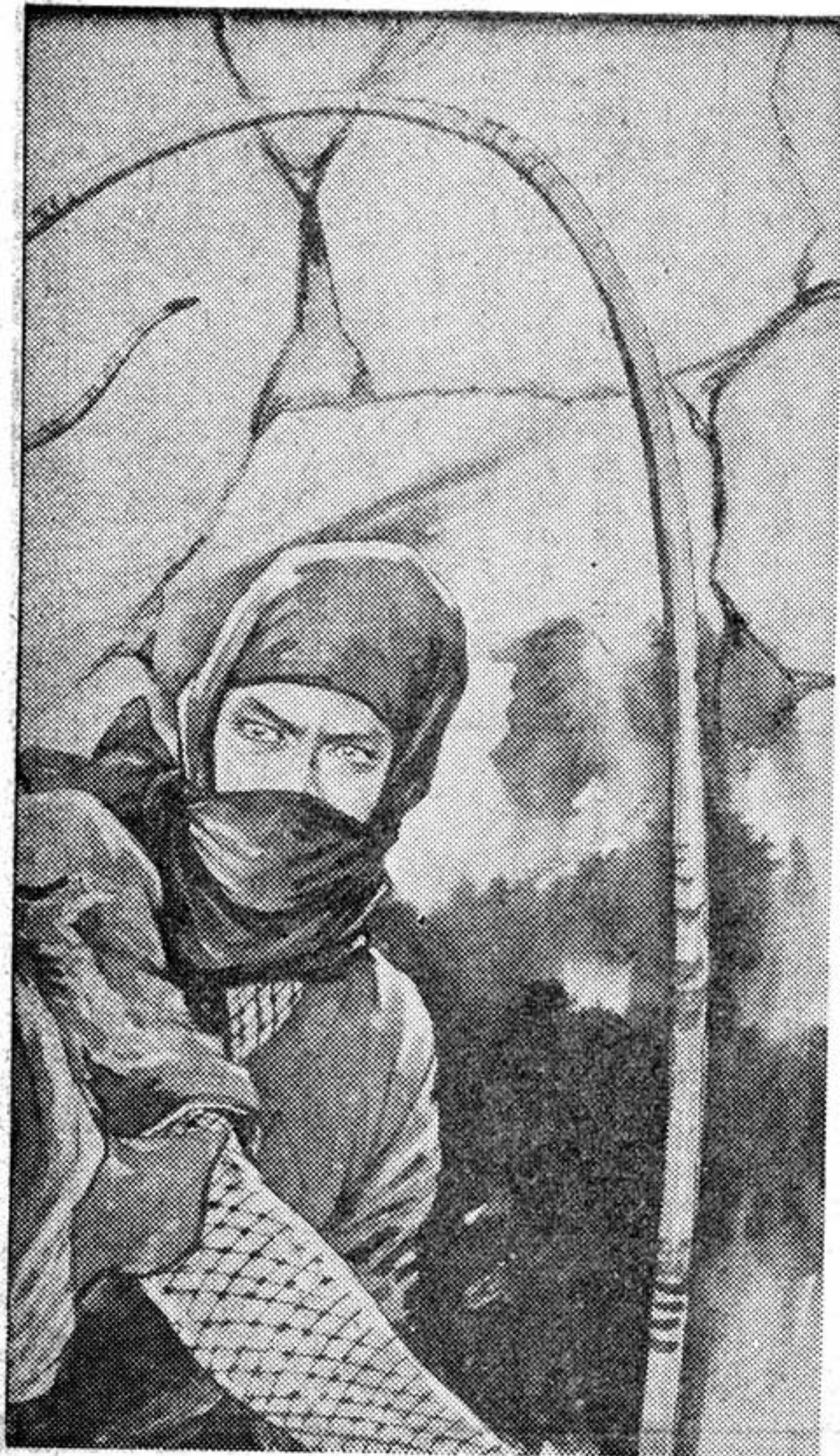
半斎の手には、三十六本の白いかんぜより
のクジがあった。そしてそれはやがて次々に
三十六人の忍者の頭領たちに渡っていった。
「柳沢側のクジを引いたのは、誰じゃ？」

半斎の声が重苦しく響く。

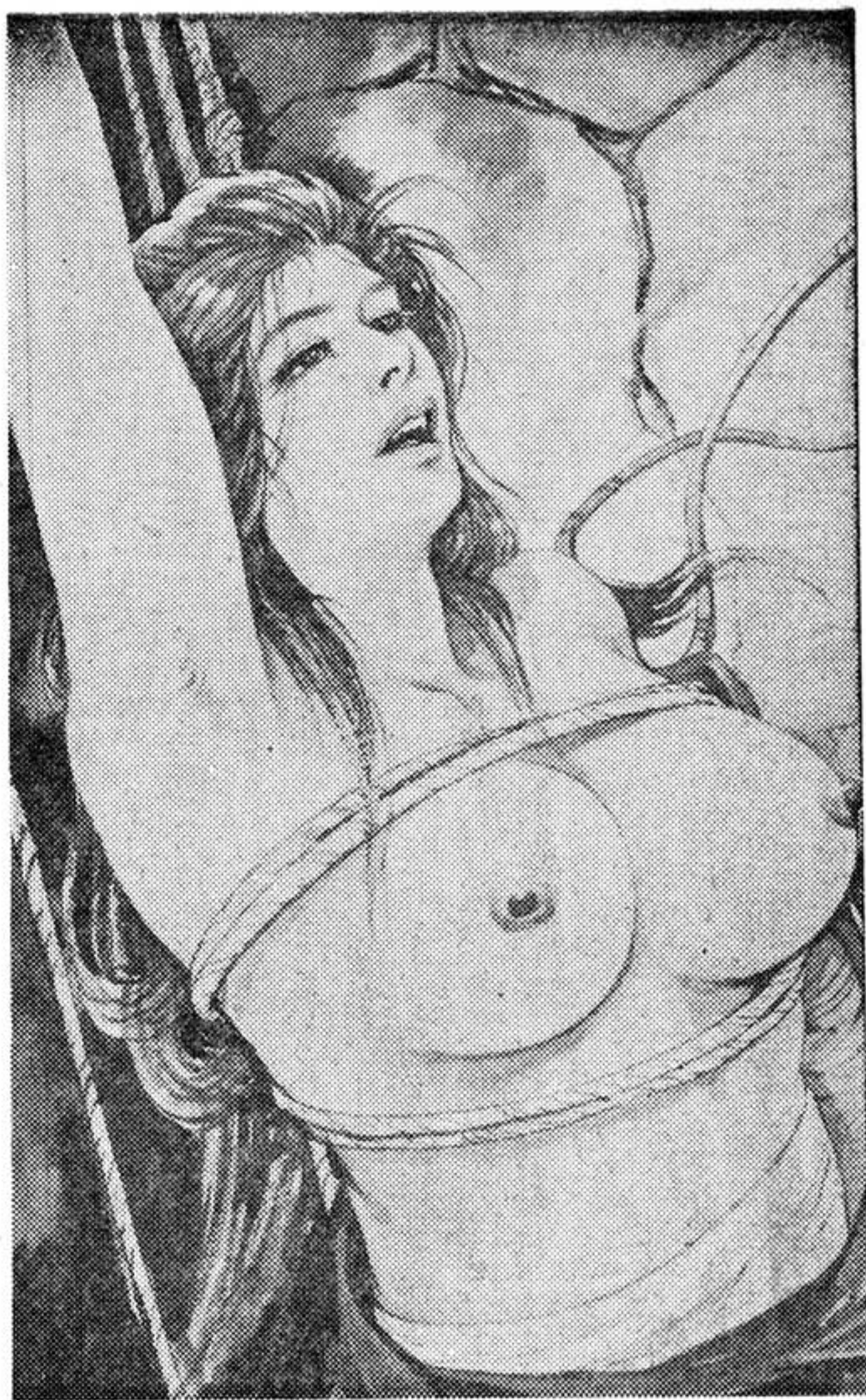
「は、甲賀二番組、茨三郎次。柳沢方へ参り
ます」

佐藤達四郎

豊田みのる・絵



崖の上の墓標



「うむ、配下の者を連れて即刻行け。では、堀田信濃守側は？」

「甲賀女忍組、甲賀霧姫、配下四名と共に堀田屋敷に参ります。――」

甲賀霧姫の低く澄んだ声であった。

「よし、三郎次に霧姫、しっかり働いてもらいたい。柳沢、堀田の手に加わったのちはそなたらはもう敵同志だ。よいか、もう一度断っておく。負けた側の者は裏切者として処断する！」

女忍四人の姿は、堀田信濃守好忠の江戸屋敷の中にあった。堀田好忠は、夜半すぎというのに自ら起きて来て霧姫たちを迎えた。

「よく来てくれた、礼を言う。わしは今常に柳沢の刺客の手に狙われている。どうかわしを護って欲しい。柳沢を倒すまでは、わしは死ねぬのだ。わしと共に、専制をほしいままにしている柳沢を倒して欲しい」

三十を過ぎたばかり、老中としては最若年の彼の言葉は熱に充ちていた。

「は。……」

二
それから一刻ほどのち、甲賀霧姫と配下の顔を上げて霧姫は、見下ろしている好忠の顔を見て、ふと不思議な感情にとらわれた。

（似ている?!……）

彼女がその時好忠の顔に思い浮かべたのは、あの白百合左近の顔であった。

「そうじゃ、そなたにひきあわせておかねばならぬ者がいる。今までひとりでわしの身辺の警護にあたっていてくれた者じゃ。これからは一緒にわしを守って欲しい」

好忠がそう言うのと、次の部屋から影のように入って来た一人の忍者が、つととその場に控えて霧姫を見て、低い驚きの声をあげた。霧姫もまた思わずハッとした。それは、かつて霧姫とたたかい右腕を失った伊賀の女忍、闇ノ葉だったからである。

「これは意外なところで、甲賀霧姫どの」

そう言う闇ノ葉の目は敵意に燃えていた。

「殿、殿の警護は霧姫どのたちにおまかせして、私、これから柳沢屋敷の様子を探って参ります。あわよくば柳沢の数々の悪事の証拠の品を……」

「待て！ 闇ノ葉、危険だぞ」

「なんの、柳沢屋敷にもおそらくは甲賀の手の者が送り込まれておりましょう。殿と柳沢に二股をかける、甲賀の者どものやりそうなことです。甲賀のひよろひよろ忍者の四人や五人、大したことではありませぬが。……」

あとの半分は霧姫に向けて吐きつけるよう

に、闇ノ葉は言いすてると風のように消えて行った。

だが、それからまた一刻の後、闇ノ葉は、柳沢屋敷を守る茨三郎次たち甲賀衆の手にとらえられてしまっていたのである。大言を吐いた手まえ、何か大きな獲物を、と深入りしすぎたのが闇ノ葉の失策であった。三郎次はじめ甲賀衆の精鋭の手からついに逃れきれなくなってしまうたのだった。

「頭領、こやつ女で、しかも片手です」

「うむ」

と三郎次はうなずいて、ひきすえられた闇ノ葉を見おろしながら言った。

「だが、甲賀霧姫の配下でもない。それにどうやら貴様、伊賀者と見たが、どうだ」

「ふん、不具のくせに我々のいるこの屋敷へ忍びこむとは身のほど知らずな奴だ」

配下のひとりがそう言って、足でぐいと闇ノ葉の膝のあたりを踏みにじった。闇ノ葉の美しい眉がかすかに歪んだ。

「まあそうあわてるな。いろいろ吐かせることもある。しわじわと締め上げてやるのだ」

茨三郎次の頬に、陰惨な笑いが浮かんだ。やがて、闇ノ葉の半裸のからだは、庭の松の大枝に片手吊りにされていった。手首をしばったナワがじりじりと引かれて、足が宙

に浮くと、全身の重量を支えている右腕に鋭い痛覚が襲ってきた。だが、それにも増して闇ノ葉にとって苦痛だったのは、今まで誰の目からも隠し通してきた自分のひじまでしかない左手を、明かるいかがり火の中にさらけ出していることであった。

「ふふ、どうだ、そのぶざまな姿で耐え通すか、それとも洗いざらい吐いてしまうか。尋ねることは次の三つだ。一つは堀田屋敷内部の好忠の秘密の居室のありかとその警備の様子、二つめは、好忠はいついつ屋敷外へ出るか、三つめは好忠はどのくらい柳沢の殿に関する資料を集めたか、この三つだ」

「……！」

「ふむ、まあよい。今に吐きなくなるだろうさ。やれ！」

三郎次の声と共に、空気を切る鋭い音が闇ノ葉の乳房を襲った。ビシッという肌を切りさく音……ムと低いうめきをもらして宙にゆれる闇ノ葉のからだ。――

ビシッ、ビシッとして闇ノ葉の裸身を前後から襲い続けるその鞭は、甲賀者たちが「蝮」と呼んでいる革の鞭だ。革に特殊な細工がしてある拷問用の鞭で、蛇のようにとろきらず肌をかみ破る。しかも責められる者にはふつうの革鞭の何かの苦痛を与える。



激しい鞭音のたびに、闇ノ葉の吊られて宙に浮いた足の指がヒクヒクと反りかえり、胸のあえぎと苦悶のうめきもしだいに高くなつてゆく。

「どうだ？ まだ吐く気にならないか」

まむし鞭の柄が闇ノ葉のあごに差し込まれてぐいとこじ上げられ、凄絶なまでに白く美しい闇ノ葉の顔がかかり火の明かるみの中にさらされる。そしてまだかたくなに閉ざされた唇。――

「ふむ、ではやむをえぬ。最後の手段を用いるか。甲賀女責め、地獄の、苦の味をたっぷりと味あわしてやろう」

三郎次の命令一下、闇ノ葉はこんどは地面にうつ伏せにしっかりと固定された。三郎次はその白いからだの傍にかがみこむと、一方の膝がしらを闇ノ葉の腰のあたりにのせて、それに全体重をかけると、ぐいとえぐるように押しつけた。

「う、あ、あっ！」

背髄から脳まで太い針で貫かれたような激痛が走り、闇ノ葉のからだは弓のように反りかえった。その髪の毛を左手でつかんで引きしほり、闇ノ葉の苦痛にゆがむ顔をのぞきながら茨三郎次は暗い笑みをもらすのである。

「ふふ、…… どうした、これはまだほんの序の口だぞ。いいか、女には男にない急所がいくつかあるのだ。よく見ている」

三郎次はまわりの配下にそう言うのと、左右二本の手の十本の指を、闇ノ葉の白い背の上に置いた。

「う、うっ、う、……ああっ！」

三郎次の指はまるで鉄の棒のように、闇ノ葉の背すじをつきこね、えぐるのである。闇ノ葉のくいしばった歯の間から思わずもれるうめき声と荒い息使いが、かがり火の明かるみの外の静まり返った夜の闇の中へ流れていった。

しばらくの時間が流れていった。三郎次の十指は、しつように闇ノ葉の背すじから脇の下へ、あるいはまた腰のあたりを責め続けた。

彼の指はある時は十本の錐のように、ある時は十本の羽毛のようになった。そしてまた締め木にも、やっ、とこのようにもなった。激しい苦痛が、しかも何種類かの形の違う苦痛が、休むひまなく闇ノ葉のからだに加えられ

た。彼女は、右手の指で土をかきむしり、わずかに自由のきく足の爪先をそりかえらせ、全身から汗をふき出し、口からはうめきとかな悲鳴をもらしながら、そのおそろしい苦痛に耐えようとした。だが、今はもう惑乱の中へおちこみつつかある自分をおさえるすべは尽きていた。

(あ、ああ、……もう駄目。……)

心は強くても、からだか三郎次の魔手に敗北してしまったのである。

「や、やめて！」

闇ノ葉の唇から今まさにその哀願の悲鳴がもれようとした時である。ドドドッという激しい爆烈音が表門の方で聞こえた。
「あ、何だあれは!？」

「む、霧姫たちのしわざだな」

さすがに三郎次も顔色を変えて立ち上がった。邸内は武士たちが右往左往しはじめ、騒然とした空気が流れている。

「ええい、バカめら。コケおどしにのって勝手に動きまわるとは! 甲賀死人固めも破れた。——おい、お前こいつを見はれ。あとの者は俺と来い!」

風のように三郎次が走り去ったあと、一人残った三郎次の配下のうしろから、音もなく迫った黒い影があった。急所を突かれ声もなく気を失って倒れたその男を見返りもせず、影は闇ノ葉のいましめを解いた。

「闇ノ葉、あの三郎次の地獄責めによく耐えた。屋敷のまわりを固めていた、甲賀死人固

めも今は破れている。さあ!」

声は甲賀霧姫であった。

「霧姫、お前は私を助けに?!……」

信じられぬ顔の闇ノ葉のからだを抱いて、霧姫は闇の中へ消えた。

三

それから、二ヵ月あまりの日がたった。事態は一進一退だった。そして、堀田信濃守と柳沢出羽守が、江戸城中で全てを賭けて対決する日が、刻一刻、近づいていた。

霧姫は少しあせっていた。一日も早く、柳沢の悪事の証拠を見つけ、奪いとらねばならなかった。そして、柳沢屋敷へ出した二人の配下、もみじとお柳はついに帰って来なかった。むろん、発見され、たたかって倒されたか、或はとらえられたか、そのどちらかに違いなかった。

そしてある夜、霧姫自身もまた、堀田屋敷を出たままもどらなかった。そしてついに、堀田、柳沢の対決の日は来てしまった。

その対決の日の午後、突然霧姫は堀田屋敷へ帰って来た。髪は乱れ、美しい顔にはおおいにかくせない疲れが見えた。屋敷から消えて以来、六日めであった。

「殿は? 江戸城内でございますか?」





老臣三隅十太夫はそんな霧姫をじろりとながめて、

「そうじゃ。柳沢と対決の最中じゃ。だがそなたどうしたのだ。逃げたのではなかったのかな」

皮肉な口調だった。が、霧姫は黙って汚れた紙包みを取り出し、十太夫の前に置いた。

「何じゃ、これは？」

「柳沢数々の悪事の証拠となる書類です。これさえあれば、殿はきつと。……これをさっそく殿へ。——」

「何？」

あわてて中身を開いて読む十太夫の顔に驚きと喜びが走る。

「む、でかした霧姫、さっそく城中へ……」

十太夫が言いかけた時であった。突然あわただしい足音と共に、大勢の家来に囲まれて一人の武士が、息も絶えだえにとびこんできた。

「何事じゃ。その方、殿お付き添いの者ではないか。どうしたのじゃ」

「はっ、い、一大事にございます。と、殿は柳沢の卑怯な手段について勘忍袋の緒を切れ、殿中にて、ご忍傷！……」

「何っ?!」

「柳沢は悪運強いかすり傷のみ、殿にはそのままお身柄を上尾豊後守さまお邸に移され、今夕切腹のご沙汰。……」

全ては終わった、と霧姫は思った。柳沢悪事の証拠を片手に、彼女はよろめく足を踏みし

めながら自分の部屋に帰り、呆然とその場にすわりこんでしまった。

「殿！ たとえどんなことがあっても、どうしてもう少し、もう少しお待ちになれなかったのですか？ この書類さえあれば、必ず柳沢を打ち負かせられましたのに。……」

霧姫は堀田信濃守の顔を思い浮かべた。するといつの間にかそれは、白百合左近の顔と重なってくる。感情の動きを知らぬはずの女忍霧姫の心をかすかに動かした二人の男の顔は、いまはもう彼女には見わけがつかなくなっていた。甲賀霧姫のいつもは冷めたい光を宿している瞳に、もの心ついてから初めて、ひとすじの涙がその時にじんて来た。

四

「霧姫を探せ、書類を取りもどすのだ！」

今や幕府の実権を一手に握った柳沢出羽守が、甲賀屋敷の甲賀忍者たちに非常命令を発したのである。茨三郎次の率いる一団は、たちまちのうちに江戸と五街道の要所々々を固めてしまった。だが、堀田屋敷から消えた霧姫は、どこへかくれたか、ついに行方が知れなかった。

だが、その代り、霧姫の配下の二人の女忍が、三郎次たちの網にかかってとらえられ、

柳沢屋敷へ送られて来た。月江、菊乃の姉妹忍者、甲賀女忍組、甲賀霧姫の配下の最後の二人であった。

「霧姫はどこにいる、どこに行ったのだっ。言えっ！」

柳沢出羽守の怒りはこの二人の女忍者に注がれた。

屋敷の地下の拷問蔵で、二人の女忍に苛酷な拷問が加えられた。何枚もの伊豆石に責められ、後手に吊られて足に重りを付けられ、長時間に及ぶ海老責め、逆海老縛り、どれも二人の口を開かせることは出来なかった。ただ何回か気を失わせただけであった。

「手ぬるい！」

茨三郎次がいつの間にか拷問蔵の中に姿を見せていた。

「このような責め方では、とてもこやつらは口を割りません。ふつうの女でもしづといと女は耐えぬくもの、ましてこやつらは女忍ですからな、……殿、私の甲賀女責め、ごらんにいれましょう」

三郎次は、月江を往生柱を抱かせてかたく縛りつけて、その後に立った。

「菊乃、よく見ている、姉の月江が苦しみ悶える様をな。お前が霧姫の行方を吐くか、或は月江が自分で吐くまでは、月江を地獄の苦

しみの中でのたうちまわらせてやろう」

「卑怯な！ 責めるなら私を責めるがよい。なぜ姉だけを」

「月江で駄目ならお前も責めてやる。だが、おそらくその必要はあるまい」

と、見るまに三郎次の十指が、月江の白い背すじに食いこみはじめた。まるで機械のように非情なその十本の指は、休みなく月江のからだを苛み続ける。

月江は、頭をガクンとのけぞらせ、少しでも魔の指から逃れようときたい縛めの中で身をもだえさせる。うめき声は悲鳴にかわり、そしてそれはついには絶叫になり、拷問蔵の中いっばいに響いては消えた。

「やめて、やめてっ！」

たえかねて、菊乃が叫ぶ。

「言うか、霧姫の行方を」

「……！」

すると又三郎次の指がうごめき、なかば意識を失っていた月江のからだに激しくもだえはじめる。鋭い悲鳴、手の自由を奪っている鎖の鳴る音！

「待って、言う！……き、霧姫さまは、伊豆の山中、地獄谷に。……」

五

伊豆山中、地獄谷。――夜である。

うしろに深い谷のある崖の上の平地に、茨三郎次たち十数人の甲賀忍者たちが野営していた。

霧姫は彼らにとらわれていた。不意を襲われ、しかも三郎次以下精鋭の忍者達が相手では、どうしようもなかった。彼女はかたわらの大木の梢から吊るされていた。見張りの男はいつの間にか居眠りをはじめ、たき火も消えかけていた。

「霧姫！」

その時、かすかだが鋭い声がした。霧姫はその声に聞き覚えがあった。

「闇ノ葉か」

「今ナワを切る。逃げるなら今のうちだ」

闇ノ葉の助けを得て、脱出は簡単に行なわれた。二人は夜の山道を急いだ。崖の上の平地から五、六町も離れたところで、闇ノ葉は突然霧姫をふり返って言った。

「霧姫、借りは返した。だが、私は、この左手を奪ったのはお前だということは忘れてはいない。さあ、いつかの勝負のけりをつけよう。私は斬る。お前の左腕を！」

闇ノ葉は霧姫に一本の忍び刀を投げ、自分も右手に忍び刀を構えた。一瞬、二人は闇の中にとび違った。白刃がきらめいた！……。

二人はしばらく凝然と立ちつくしていた。

霧姫は左の腕から血を吹き出させていたが、右手には忍び刀がしっかり握られていた。そして闇ノ葉の右手には、忍び刀はもはや握られていなかった。

「霧姫、私の負けだ。この前の時のように逃げはせぬ。好きなようにするがよい。私にはお前の腕にかすり傷を負わせるのが精一杯らしい」

「闇ノ葉、そなたが私をうらむ心はわかる。

だが、この位で許して欲しい。私はこれから三郎次たちとたたかわねばならないのだ」

「霧姫、お前は私を斬らないのか？　そして三郎次たちとたたかうとは。……」

「私がそなたを斬った時、私たちは敵同志だった。私がそなたを救った時、私たちは味方だった。そして今日はそのどちらでもない。

……月江も菊乃も殺されたであろう。甲賀女忍組で残るのは私ひとり、このまま逃げても三郎次たちはどこまでも追ってこよう。それよりも、今ここで全てを決めてしまいたい。勝ちめは少いが、勝てばもはや私を追う者はいなくなる。負けても、悔いはない。……」

「待て霧姫、お前は今死んではいけない。今お前が死んでは、一度に二つの生命が失われてしまう。お前のからだには、堀田の殿の子

が。……」

「何と?!——闇ノ葉、何故それを!」

「さっきお前を救った時、知ったのだ。お前が殿の身辺警護に当たっていた夜のことを、私が知らぬと思つてか。——私のお前への憎しみには、あるいは嫉妬がまじっていたのかもしれないぬ。——」

「闇ノ葉、そなた私にどうせよと言うのだ」

「三郎次とは私がたたかう。勝てばそれでよい。負けても、むこうには甲賀霧姫が死んだと思わせれば、もうお前を追いはすまい」

「そのような事は出来ぬ。どうあつても私は行く。三郎次とたたかう」

身をひるがえしてかけ去ろうとする霧姫を追って、闇ノ葉も又走り出していた。三郎次たちのいる、あの崖の上の平地へ。……

六

半刻のち、崖の上の平地では、血みどろの争闘がくりひろげられていた。すでに六人の忍者を倒し、全身血に染まった黒装束の女忍者に、茨三郎次はじりじりと迫って行った。

「霧姫、どうやら左手がきかぬらしいな。怪我でもしたか。右手だけでこの俺に勝とうというのは少し無理だぞ。いいか」

女忍者は、少しづつ後ずさりしていた。三

郎次の忍び刀が彼女を圧迫していた。そしてついには崖のふちまで追いつめられてしまった。

三郎次の頬に暗い笑みが走る。彼のからだがおどる。白刃が空気を切りさく!　充分に自信のある一撃が女忍者の頭上に振りおろされる。

だが、次の瞬間驚くべきことが起った。三郎次の刃を浴びながら、女忍者は一跳びすると三郎次の体にびったりとくっついて、小柄を三郎次の脇腹につき立てたのである。そのまま、二つの黒い影はそこに立ちつくしていた。やがてゆっくりと二つの黒い影は傾きはじめ、崖の上からまっ黒な深淵の中へまっさかさまに落ちていった。三郎次の配下数名はただ呆然とそれを見ているだけであつた。

翌朝、惨々たるたたかいの跡、崖のふちのあたりに、誰が立てたか、字も何も記されていない粗末な木の墓標が、朝日の光を浴びて立っていた。その前には名も知らぬ小さな野の花が数本、手向けられていた。
死んだのは霧姫だったか、闇ノ葉だったのか、誰も知らない。

奇妙な実験

八 卷 令

都 築 峰 子・絵



車を降りる時、私は妻の景子に、いいな、と、も一度念を押した。

景子は重たげな島田のかつらの陰からちらと眼をあげて、うなづいた。濃いドーラン化粧のために表情の動きはなかったが、眼が長い睫毛のかげにうるんでいるのがわかった。(興奮しているな、景子のやつ)と私は内心おかしかった。しかし、それは私自身にしても同様だった。何しろ、自分の妻を縛りあげて街の中心を一時間にわたって練り歩こうというのである。平静でいられる方がどうかしている。

最初この話を持ち出したとき、とんでもないと簡単に一蹴されてしまった。結婚以来、二人だけのプレイ、誰はばかることもない二



人だけのひそやかなプレイになら慣れていても、それを公然と行なうとなると、話はおのずから違ってくる。妻の拒むのも当然なことと思って、それ以上固執しなかった。ところが、幾日かたって、景子の方からその話をむし返してきたのはおどろきもし、意外にも思った。しかし、考えてみれば相当のマゾである妻としては是非やってみたいプレイには違いない。非常識として最初は拒んだものの、そのアイデアが心に強い印象を残し、日を経るにつれて次第に醗酵してゆき、ついには彼女のマゾの血をゆり動かすに至ったという事は、充分に考えられることである。それを言い出した時の景子のはじらいに満ちた表情を、私は美しいと思ったものである。

今、眼の前に見る景子は、厚化粧のために眼に表情が集中したせいか、本当に火刑場に向かうとしている八百屋お七もかくやと思わせる程の凄艶さがにじみ出ている。景子は、もうすでに身も心もお七になり切っているのかも知れない。

ふたりが八百屋お七と、彼女を刑場に引立てる非人に扮することは計画の最初からきまっていたことだった。このような扮装の陰にかくれるのでなかったら、私もこんな虎の尾をふむようなプレイを云い出すわけがなかった。

たのである。厚化粧はふたりの顔を変え、誰が見てもそれと判るようなことはなかった。ふたりは、その扮装の陰にかくれて、思うがままに自分の嗜好を嗜みしめることができるのである。

「じゃ、そろそろ行くとするか」

私は景子の額にうっすらとにじんだ汗の玉をハンケチでおさえてやってから、景子を背後から追い立てるようにして車を出た。

縄尻を右手に取り、左手に捨札を高くかかげて、わらじばきの足で歩道に立ったとき、大地が一瞬足元に消えてなくなり、眼の前がまっ暗になるように思った。衆人環視の中で素裸にされ、一斉にののしられずかしめられているような気持ちだった。

白足袋はだして私の前に立った景子が、うなだれたまま、そろりそろり、と歩きはじめた。私もどうにか気を取り直して、ふるえる足を踏み出した。

私達が奇妙な行進を開始した場所は、映画館や、娯楽センターなどが密集している所から三百メートルほどはなれた所で、大通りとはいえず、人通りはさほどではない。ここから少しずつ気分を慣らしていきながら、繁華街の中心に乗り込もうという寸法なのである。はじめの百メートルばかりは全くの無我夢



中だった。周囲の光景は一切が夢の中のもののように現実味を失って、ただ眼の前をトボ

トボと歩いて行く景子の本縄で背中にくくし上げられた両手と、縄目が縦横にからんでいる浅黄に碁盤縞の振袖の背中、少し抜き衣紋になった黒襟からほっそりとのびている白いうなじだけが現実的なものとして眼に入るだけであった。耳に入ってくる物音や人の軀も、ひとつひとつ聞き分けることができず、皆いっしょくたになって、ワーンと頭の中であんなに履きなれない足の裏にチクチク刺さるのが心地よく感じられる程、体全体がしびれたような、宙を浮遊しているような感じだった。

景子のお七はどんな気持ちなのか知らないが、自分のつま先を見つめるようにしおらしくうなだれて、そろりそろりと白足袋を踏みしめるように頼りなげに歩いて行く。足を踏み出すたびに、長く引いた裾のつまから真白な足袋はだしのつま先がこぼれるのが、黒いアスファルトを対照的にいたいたしくも美しい。景子もうなだれながら、そんなところを観察しては、うっとりとして自己陶醉にひたっているのかも知れない。

そんな事を考えると、ちよつと妻にいたずらをしてみたくなってきた。心にそれだけ余

裕が出てきたのだろう。手にした縄尻をグイと引いた。

「あれッ」

と口の中で小さく叫んで、景子はたたらを踏む。後によりめいて、私の胸にもたれるような姿勢になったとき、うつむいたまま、「なにするのよ。よして」

と小声でなじった。その声を聞いたとたんに、私はすっかりうれしくなってしまった。それまで私の五感をすっぱりとおおいかくしていた薄膜が、サッと取りはらわれたような感じだった。

（そうだ、これは遊びなんだ。大衆を前にしての演技なのだ。そのつもりでやればこっちも楽しめる。景子のやつ結構楽しんでるじゃないか。こっちも変な羞恥心なんか棄てて、とっくり楽しまなくちゃ）

見られることばかり意識してすくんでいた時とちがって、こっちが見る立場になって見ると、なかなか愉快である。（もちろん景子の方は見られることに、周囲の好奇の眼に自分の屈辱の姿をさらすことに被虐の快感を得るのだから、私とは立場がちがう）道行く人は、老いも若きも、女も男も、みんな馬鹿みたいなにアングリ口を開けて、この白昼夢のような行進を見送る。まず本縄に縛られ、非人

に引立てられるお七の痛ましくも美しい姿に息をのみ、次に私のかかげている捨札に眼をとめて、ハハンといった顔でうなづき、もう一度二人の姿をじろじろ見直す。よく観察していると、みなハンで押したように同じ反応を示すのが滑稽なくらいである。しかし、何といってもみな視線が集中するのはお七の方で、私は端役、お七の引きたて役にすぎない。

華やかな衣装をまとった美しいお七と、その身にまつわりついている太縄の対照。風にも耐えぬなよとした、たえ入るばかりのお七の風情と、むさくるしくいやらしげな非人との対照。大人なら誰知らぬ者としてない八百屋お七の悲恋物語の哀れさと、火あぶりの極刑という残酷さの対照。

そういったものが、見る者の無意識の底に眠っている何かをゆり動かし、心を打つのだろう。実際、景子のお七は、こんなプレイに慣れている私の心をさえときめかさずにはおかない程、巧みにこの役をこなしていた。

日曜の午後なので人混みは増すばかりである。さすがに後にぞろぞろついて来るような人間はいなかったが、デパートの近くになるにつれて、身辺の雑踏は増すばかりで、ほとんど身動きさえ出来ないようになってしまっ

た。人に押されて、ともすれば縄尻をもぎ取られそうになるので、私はお七を抱きかかえるようにして人波を押し分けて行かなければならなかった。お七処刑当日の雑踏もこんなだったに違いない。こんな事なら、どこから馬車馬でもいいから貸りて、それにお七を乗せて練った方が良かったと冷汗を流したが、もう後の祭だった。

人間は大勢の中にまじると、急にあつかましくなるとみえて、変なそぶりを見せる者が多くなってきた。奇声をあげて、しおらしくうなだれたお七の気を引こうとする者がいるかと思えば、群衆に押されたふりをして、お七にしなだれかかり、うなじのあたりにいやらしい息を吹きかける者。着物の裾をわざと踏みつけて、お七をよろめかせてたあいなく喜ぶ手合い。遂にはお七の足袋はだしを靴でふみつけて、痛いッとお七に悲鳴をあげさせる奴まで現われる始末。子供たちは無邪気な眼をマジマジと見開いて、この奇怪な行列をあきず眺めている。

「このオバチャン何悪いことしたの」

と傍の母親にあたりはばかりぬ大声でたずねて、母親を赤面させている女の子がいる。父親のズボンをしっかり握りしめ、ペソをかきながら、それでもお七のあわれな姿を食い

入るように見つめている末おそろしい男の子もいる。

「ええ、ごめんなすって、これなる罪人を、ちつと通してやって下せえまし」

こんな言葉が思わず口から出たのも、私自身が大分周囲に同化されていた証拠だろう。眼がさがって、唇の筋肉がすっかりゆるんでしまっているのが我ながら情なかった。

私がもつとも細心の注意をはらって観察していたのは、若い女の見せる反応だった。

「あら、いやあね」

「女性を侮辱しているわ。真昼間からこんな事して見せるなんて、いくら何でもひどいわよね」

「ちよいと。お七の着物イカスじゃない」

「かわいそうね。でも綺麗だわ」

「どんな気持ちでしょうね。大勢の人の前に縛られた姿をさらして。あたし考えただけでもたまらないわ」

「火あぶりになるところもやって見せないかしら」

まあおよそ予期していたような言葉ばかりだったが、おもしろいのはその表情である。中には気取った若奥様とかご令嬢然とすまして、鼻もひっかけないという風に、チラと流し目をくれるだけでけがらわしいといった表

情で足早やに行き過ぎる女もあったが、大抵はお七の姿をマジマジと見つめて一様に顔を赤らめ、傍の友だちと袖引き合って何か耳うちしては、またじろじろ見つめる。

ハイティーンは群をなしてお七の周囲にたかり、たもとをつまむ、縄に指を突っ込んでみる。私をからかう、ケラケラ笑う、果ては前にしゃがむようにして景子の顔を下から見上げる。中にはなれなれしく、景子に話しかけるやつもいる。これには景子も苦笑していた。そして一様に感嘆の眼差してお七の姿を見送る。

「すごいわね」

「イカす」

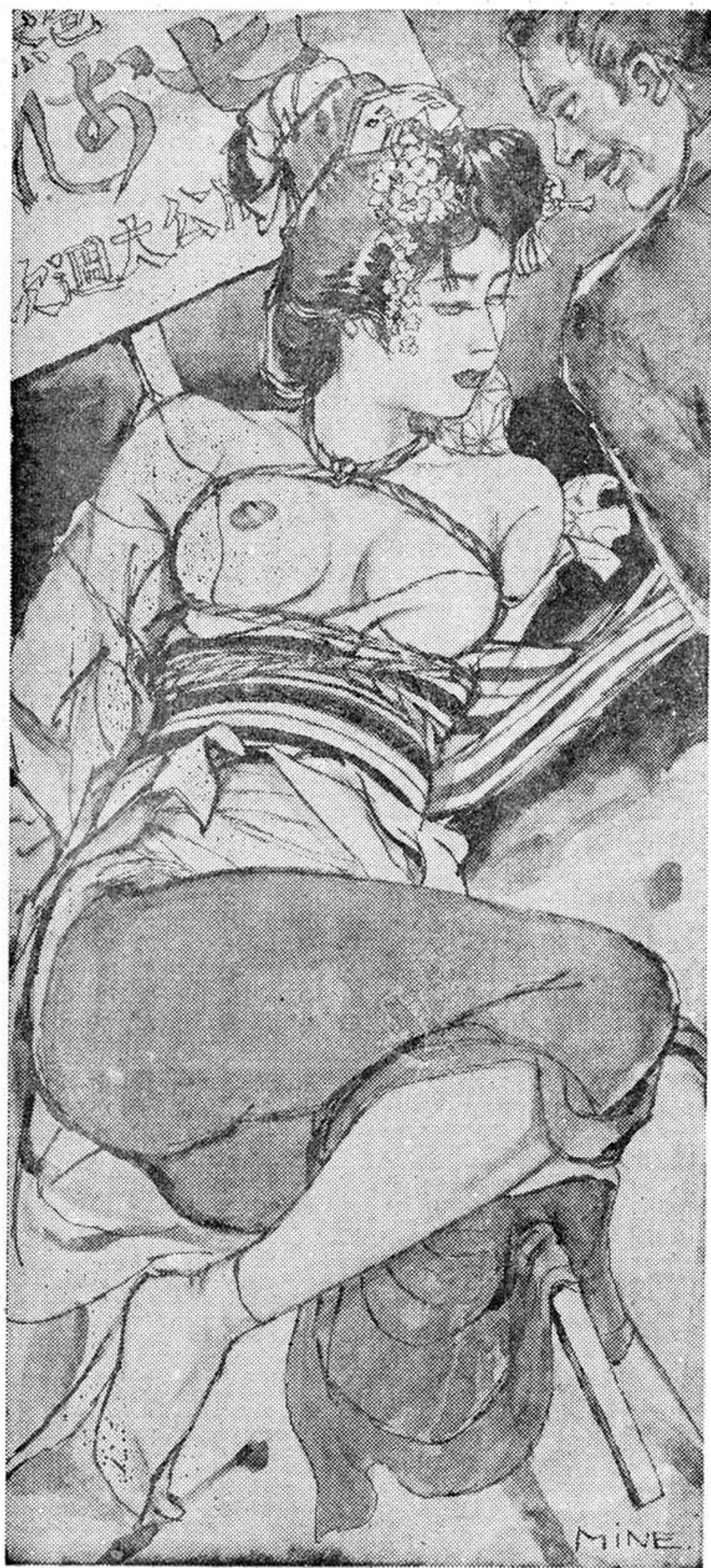
「あたしもやってみたいわ」

「お七って何をしたのかしら」

というわけである。

アベックの二人連れは、女の方がはずかしがって眼をそらし、足早やに通り過ぎようとするのを、きまって男の方が引き止め、わざとらしく説明してやったり、批評を加えたりして、女が頬を真赤にしてもじもじしているのを楽しんでいる。

こういったあいだ、もつともにくまれ役は私だった。女の見物人に憎まれるのは、まあ我慢できるが、男までが羨望のまじった憎悪



の眼差しで私を見る。まるで私が本当の非人で、今これから実際にお七を刑場に引立てて行くのでもあるかのような大人気ない憎み方である。しかしこれは反面お七に対する同情をも意味しているから、景子のために我慢してやることにした。

大人の憎しみには何とか対抗できるが、一番こたえたのは、母親に手をひかれた三つば

かりの男の子が、

「このわる者、死んじまえ」

と叫んで小さなこぶしを振り上げ振り上げ、私に打つてかかったときであつた。これには参ってしまったて、ごめんごめんと頭を叩いて平あやまりにあやまったものだ。後で景子の言うには、その時の私の困惑の表情が滑稽で、笑いを噛み殺すのに汗を流したそうで

ある。

景子はほとんど顔をあげない。紅のてがらがほどけて、しっとり汗ばんでほんのり色づいたうなじのあたりにたれかかってゆれてるのが、何ともいえず風情がある。群衆の間からハツとするような言葉を投げかけられるたびに、後手に握りしめた両手の白い指が悶えるように痙攣する。ときどきホッと大き

なため息をつく。どうやら彼女もこの屈辱的な状況を結構楽しんでるような風である。

後になって聞いてみると、当時は無我夢中で、何も聞こえず、何も見えなかったそうだが、無我夢中というのはマゾヒスチックな興奮のためと解釈した方が当たっているよう。

本通りを左に折れると「××銀座」と名のついたアーケードつきの商店街がある。そこに入ったとき、思いもかけぬ事件が持ち上がった。チンピラが三人、からんできたのである。こんな事がないように、あらかじめ手を打っておいた筈なのだが、そんな幹部からの指令なんかとどかない程の下っ端だったのであろう。追い払うのは簡単だったが、もう少しというところで今までの演技を中断するのも業腹だったし、少し景子をいじめてやろうといういたづらっ気も起ったので、黙って見ていることにした。

「おお、ねえちゃん、いやさお七さん、ちょっと顔をおがましてくれよ。どうせ死んでゆくお前さんのこった、功德をほどこしてくれよ」

と三人の兄貴分らしいキュウリにズボンをはかせたような奴が切り出した。

「ああら、およしあそばして。あたしやはずかしゅうて」

すかさず黄色い裏声で茶化したのは、真赤なシャツの胸元からゴム編みの腹巻きをのぞかせたゴム草履の男である。今一人の奴はベルトに親指を引掛けて、サングラスの奥でだまっている。

景子のお七は恐しげに肩をすくめて私に身をすり寄せた。

周囲に人だかりが出来はじめたが、この場面が私たちの芝居の続きのように見えるのが、好奇心の眼を光らせて押し合っているだけで、迷惑防止条令に協力しようという素振りさえ見えない。こんなことなら、いっそのチンピラどもにもかつらを貸して、この場面を完璧にしたいと、妙な考えさえ頭をもたげてきた。

「ええ、親分がた、この場はこの捨札にめんじて、何卒お見逃がしを。なにしろ定め limitsに刑場に着きませんと、あっしの首があぶねえんで」

ひとまず下手に出たが、相手はユーモアを解するような連中ではないから、いい気になり出した。

「てめえのきたねえ間抜けづらに用はねえ。こちらのお七さんの美しいお顔をおがみてえのよ」

キュウリがそう言ってすごんでいる間に、

他の二人はもそもそとお七の両わきに寄りそって、彼女の胸に食い込んでいる縄目に手をかける。縄に締め上げられて盛り上がった景子の乳房を弄ぼうという魂胆である。

「よししてッ」

景子は小さく叫んで身を振りもがいた。縄尻をとおして、彼女の心の悶えが伝わってくるようである。

「テへへ、こいつあ、こたえられねえな」

サングラスが低い鼻からずり落ちるのを忘れて、あたりかまわず景子に抱きつき、細い首すじのあたりに口を寄せにかかる。自分の腕の中の景子の身悶えを、手籠めにしようとしている女の身悶えと錯覚しているつらである。

「この世の名残りに、せめて一度のお情を」
反対側からは、例のゴム草履が芝居もどきの歯の浮くようなセリフを、雲助然としたつらでがなる。

景子はどうとう両わきから抱きすくめられ正面からはキュウリにあごをしゃくり上げられて、身動きもできない状態に追い込まれてしまった。野次馬は手に汗を握って見ている。

「こいつあ飛び切りの別嬪だなあ」

あごをつかんで無理やり仰向かされ、固く

眼を閉じている景子の顔に鼻をすりつけんばかりにして、キュウリが吐息をつくように言った。キュウリでなくとも、この屈辱に耐えて美しいまゆをひそめ、かすかに身悶えあえていっているお七の風情には胸を打たれるものがあった。

私は思わぬ眼の保養にホクホクしていた。野次馬の輪が一段とちじまった。

「おゆるし……おゆるし下さいまし……」

紅の唇をふるわせ、絶え入るように言ったのは、景子もお芝居に陶醉しているらしい。長い睫毛がふるえて、小鼻があえいでいる。非人どもに手取り足取りされて、火罪木にくくしつけられる場面を脳裏に描いているのかもしれない。

チンピラどもも、この美しい悶えに毒気を抜かれたように、柄にもなくモジモジしている。

「どうです。ここから〇〇劇場まで、お七を引き立ててみませんか。面白いですよ」

もう切り上げてもいい頃だと思って、私はこう提案した。

「何だと。バカなこと言うな」

キュウリはあわてて拒絶した。ドギマギして周囲の野次馬を見渡したところなど、案外ウブなところがある。

「もうゆるしてやる。行け」

威厳をつくらってそう言っただけに見たものの眼には明きらかに残念の色があった。やってみたいのは山々だが、土地のヤクザとしての誇りが許さない、といったところなのだろう。

「へえ、ではごめんを願って行かしていただきやす。はい、ちよっくら道を開けてやって下せえまし」

ヨダレをたらしそうな顔のゴム草履とサングラスを尻眼に見ながら、私は、ざまあ見やがれ、キサマたちにやこんなまねはできない、と内心であざけた。

「よかったわ、あたしどうなることかと思っただわ」

しばらく行ってから、景子がホッと肩を落としてささやいた。

「嘘つけ。結構楽しんでたじゃないか」

と私。

「いじわる。あれも予定の行動なんですよ」

景子はうなだれたまま、横眼で私をにらんだ。

私は答えなかった。勝手に想像させておけばよいと思ったからである。

やッと映画館についた。ころげ込むように

支配人室に入る。支配人が喜色満面に出迎えた。

「やあ、ご苦労、ご苦労。大変だったろう。だが、反響はすごいぞ」

映画館の前に人だかりが増してゆくのが支配人室の窓越しに見えた。しかし、私は緊張が一時にほぐれて、もうしゃべる気も、ソファから立ち上がる気さえしなかった。もうこんなことは二度としまいと欲も得もなく思った。景子も同じなのだろう、縛られたままなのを忘れたかのように、ソファにくずれ込んで、肩で息をついている。

私は、支配人のそうぞうしい話し声もそらに、床に投げ出した捨札をボンヤリ見つめていた。

総天然色超大作

『哀れお七』

〇〇劇場にて次週大公開

乞御期待

好きでやった事とはいえ、宣伝部員もまたつらいかなである。



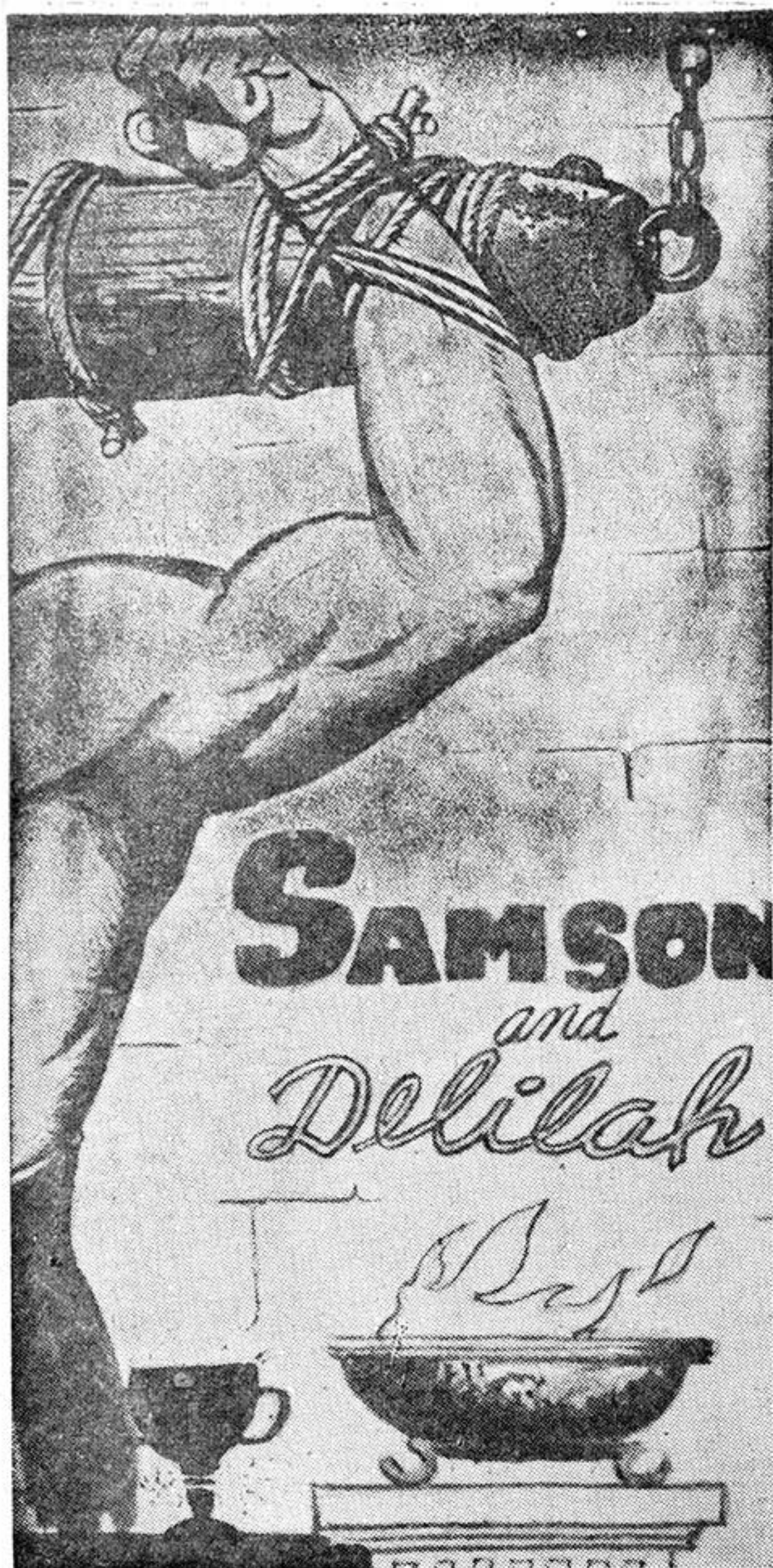
特集★マゾヒズム画廊

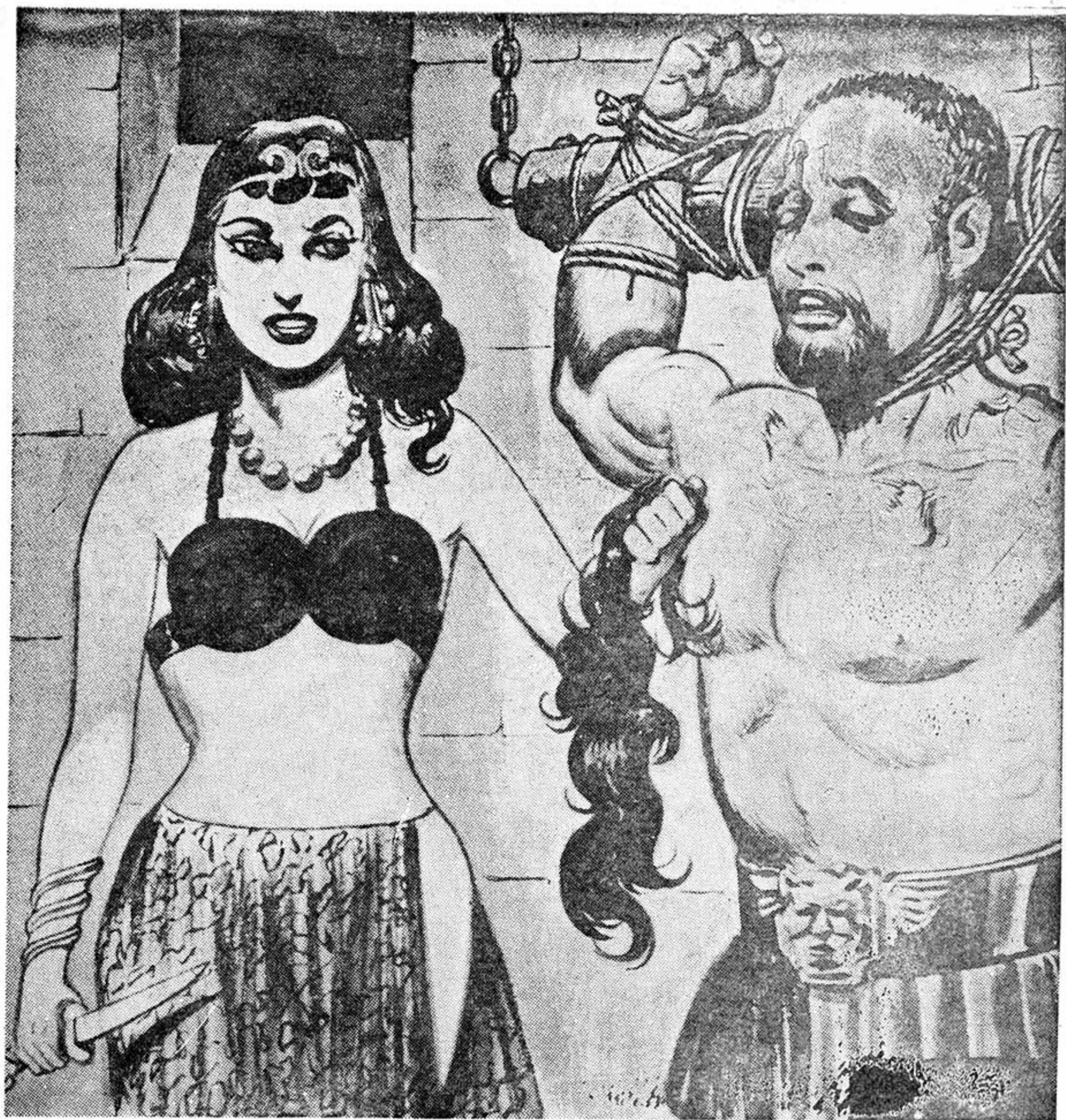
「貴誌を毎号愛読している者ですが、どうもちがごろS派ばかりを優遇して、M派にはつめたいように感じられます。『体当たりマゾヒズム論』の連載だけが、現在の私の渴を癒やしている状態ですが、写真、絵など、もうすこしMものを増やしてください」

というご趣旨のお手紙を、ときどきいただきます。編集部としては、M派読者をけっし

て冷遇する気持ちはなく、海外の絵物語などを毎号掲載して、白人女性のS的ポーズを多く登場させております。（海外もののほとんどはM派読者のためのページという次第なのですが……）

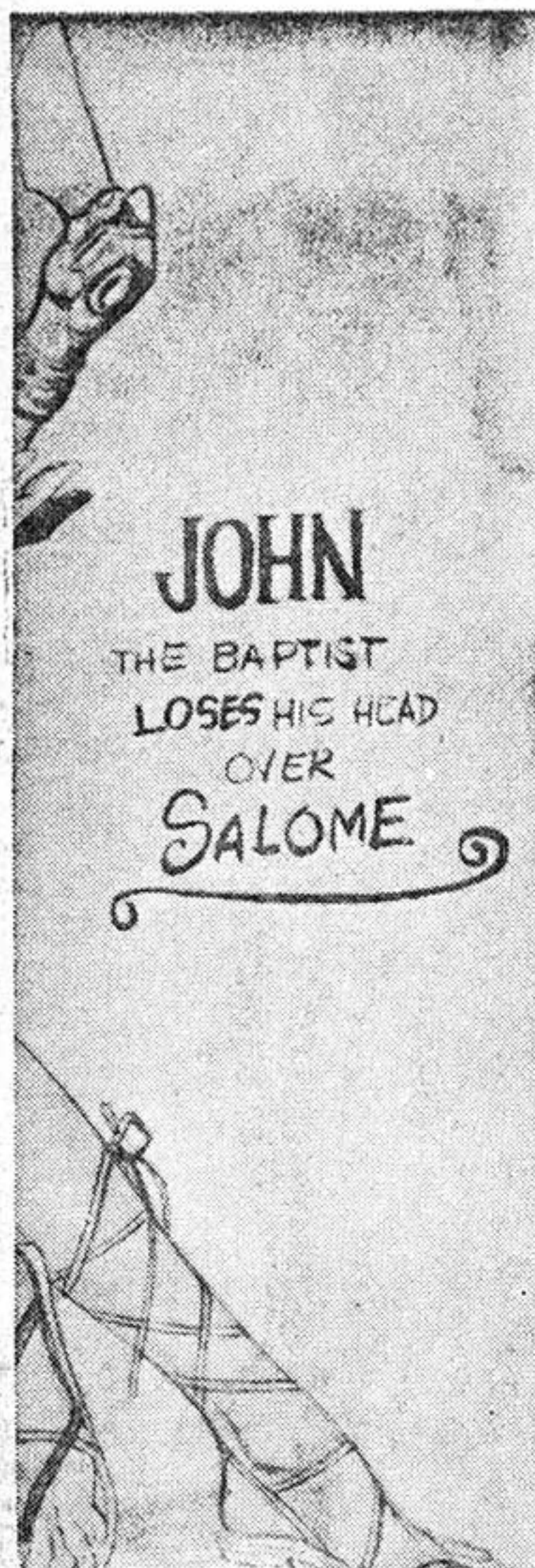
そこで本号では、特集として、女対男をテーマとした絵をあつめてみました。すこしもよろこんで頂ければさいわいです。





■サムソンとデリラ

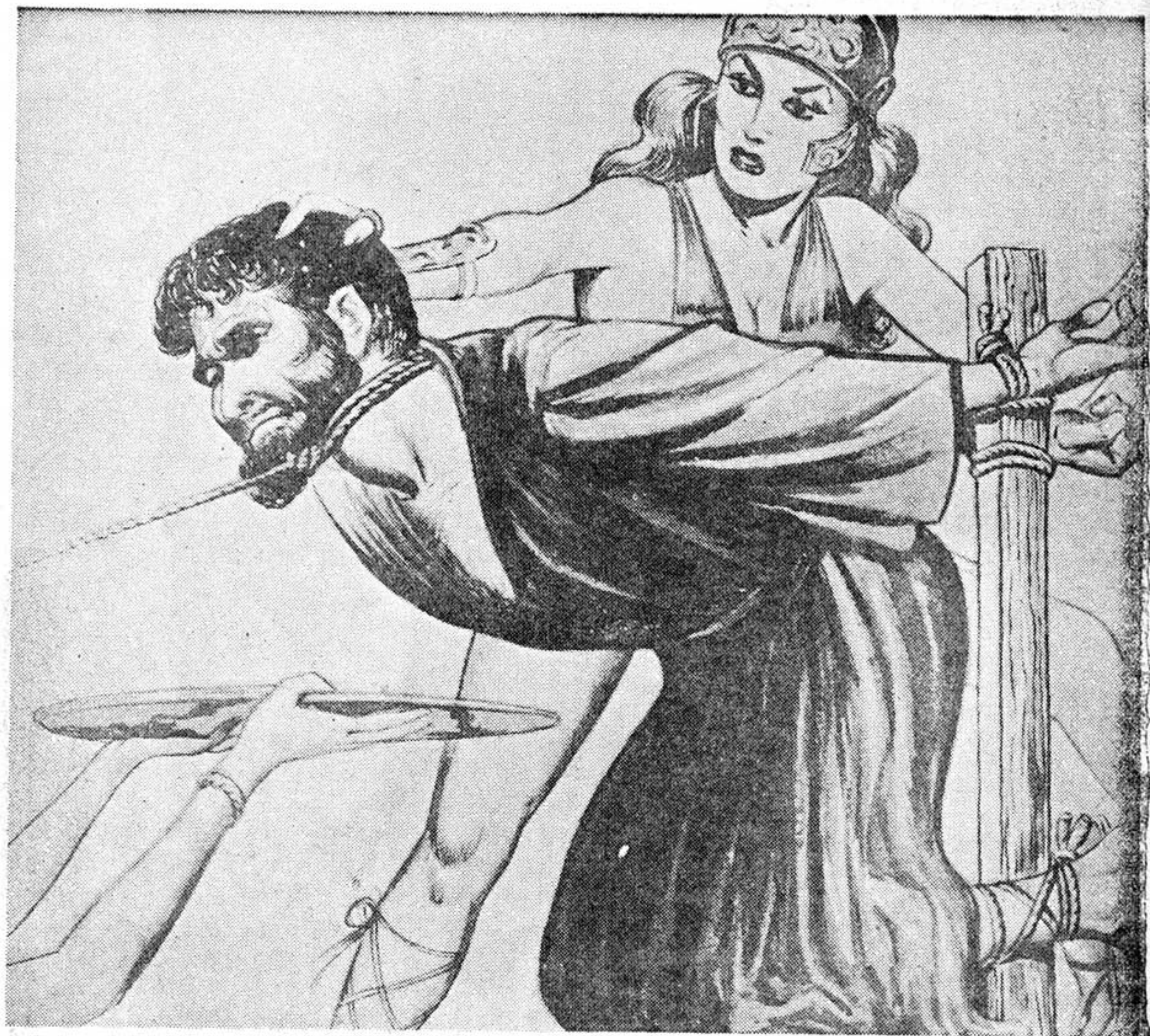
北米・フェニクス商会・特約



■シーザーと

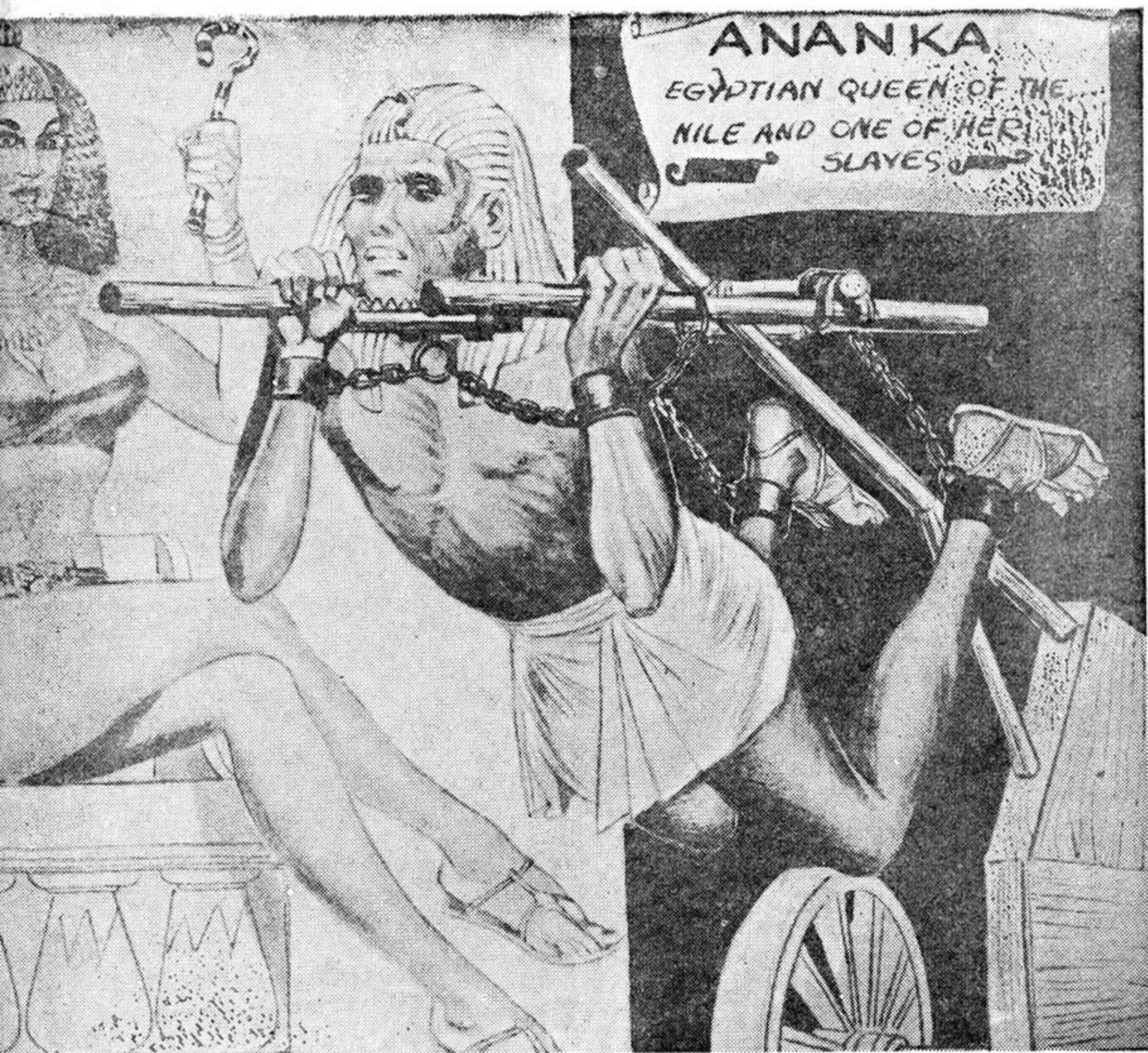
クレオパトラ





■ヨハネの首を斬らんとするサロメ



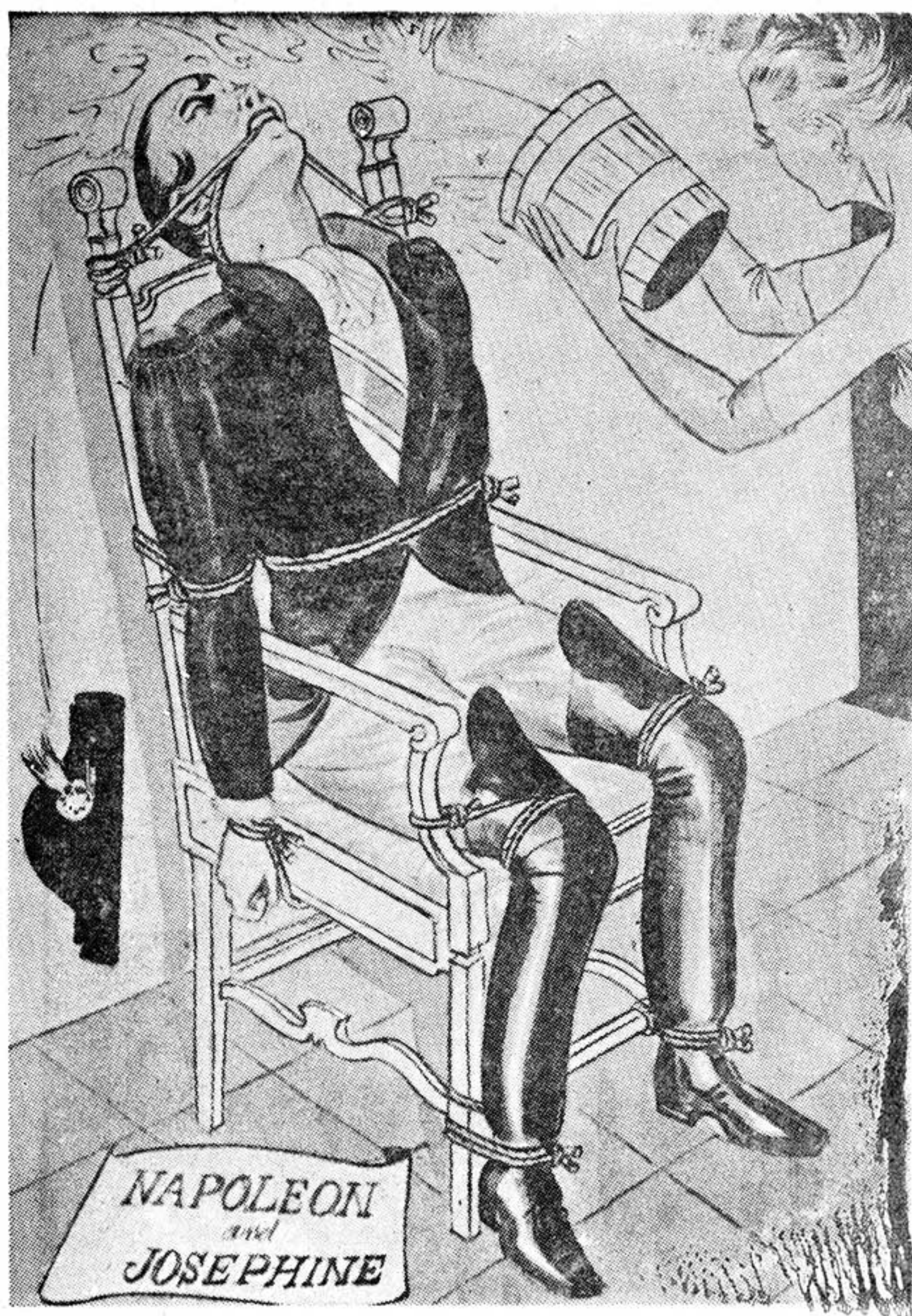


■エジプトの女王と哀れな男奴隷



■ナポレオン皇帝と

ジョセフィン





■毒薬の女王ルクレチア・ボルジアに
よって殺された男
→



■インデアン少女のとりことなり

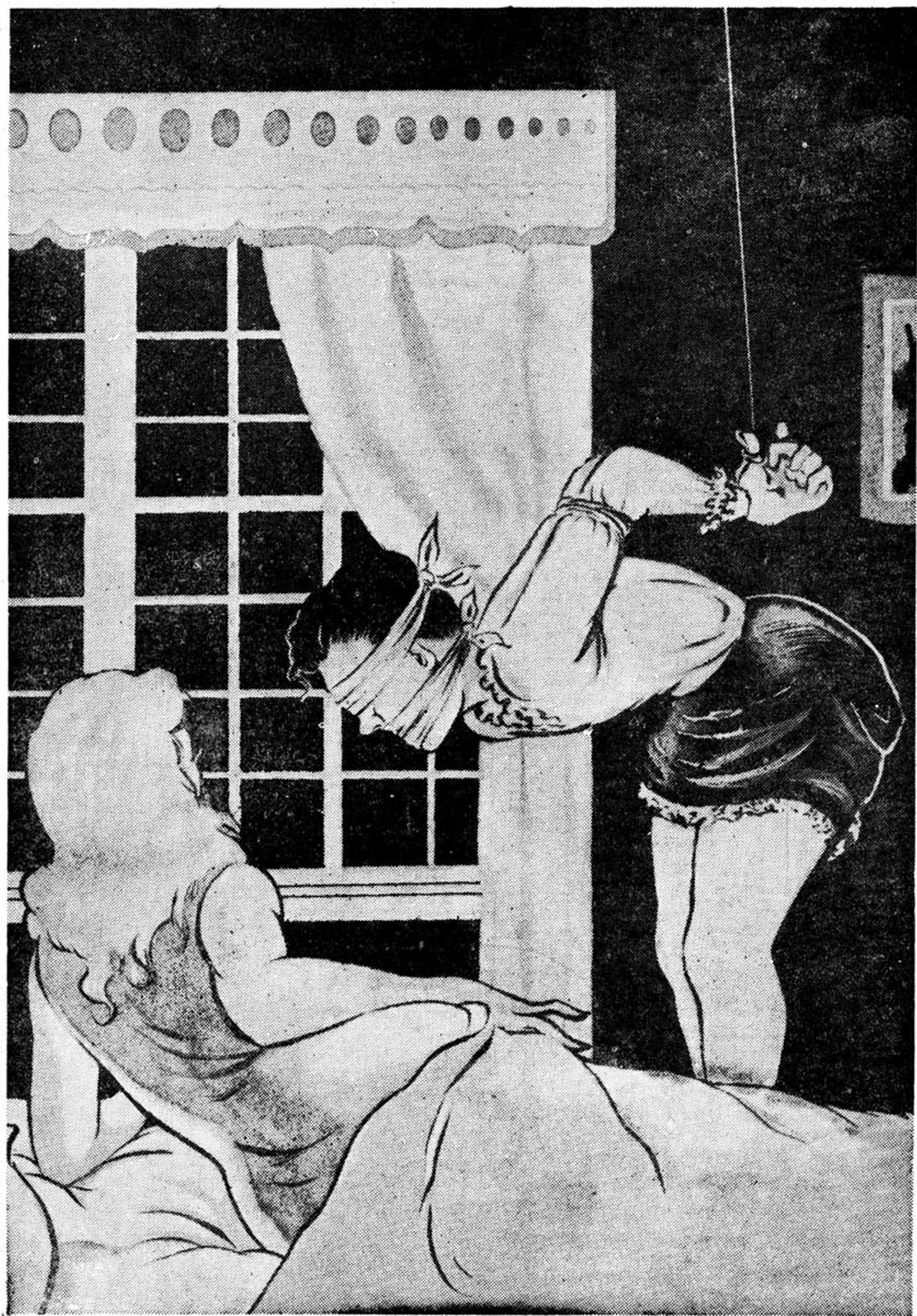
奴隷にされたキャプテン・ジョン・スミス



おてんば娘と女装男



特集★マゾヒズム画廊











★おてんば娘と女装男★

女の子のすべすべした肌着をこっそり身につけたときのこちよさ……。うっとりして頭のとっぺんから、足のつまさきまで、電気にふれたようにしびれてしまう。

しかし、サムは気の弱い青年だから、女の下着を洋服屋で買うことなんかできない。自分の家に女のきょうだいもないから、女の子の服なんか、とても手にはいらない。

しかたがないので、ガール・フレンドのケイトにおどおどしながらたのみ、彼女の着るものを借りるのです。

「ええ、いいわよ、サム。貸してあげるわ。あなたって、ほんとにおもしろい遊戯を知ってるのね。それじゃ、あなたの遊戯と、私の遊戯をいっしょに合わせて、すばらしい二人の時間をすごさないこと？」

ケイトは、いたずらっぽい目をかがやかせました。

うしろ手に縛られたサムは、乗馬スタイルのケイトを背中のにのせて、馬みたいに林のなかを走りまわらねばなりません。

「はしれ、はしれ」

すこしでも足をゆるめると、皮靴についた

拍車が、サムのしりを突くのです。

しかし、ケイトの体温が、サムの背中や腕につたわり、女の服を着たこの珍妙な馬は、けっこうたのしんでいるのでした。

馬あそびに飽きると、こんどはしりたたきあそびです。なんでも自分の意志どおりに従う男というものは、女の子にとって、かなりゆかいな道具です。ケイトのてのひらが、ぴしぴしとサムのしりに鳴ります。

「さあ、こんどは私の足をおなめ！」

ケイトの足は美しく、えもいわれぬ芳香がただよっているのです。

いぬと二人の女



特集★マゾヒズム画廊



★いぬと二人の女★

色じかけでギャングどもの秘密をききだそうとしたのが、まちがいのもとだった。

ボスを情夫にもっているだけあってリンダは頭のするどい女だった。

「はじめから、くさいとにらんでいたのよ。どう、このへんで、おれはいぬだと白状したら。すなおに白状して、あたしたちの本当の仲間になったら、いのちを助けてやってもいいんだよ」

トッドはだまっていた。口をひらこうにも固いさるぐつわがかまされている。

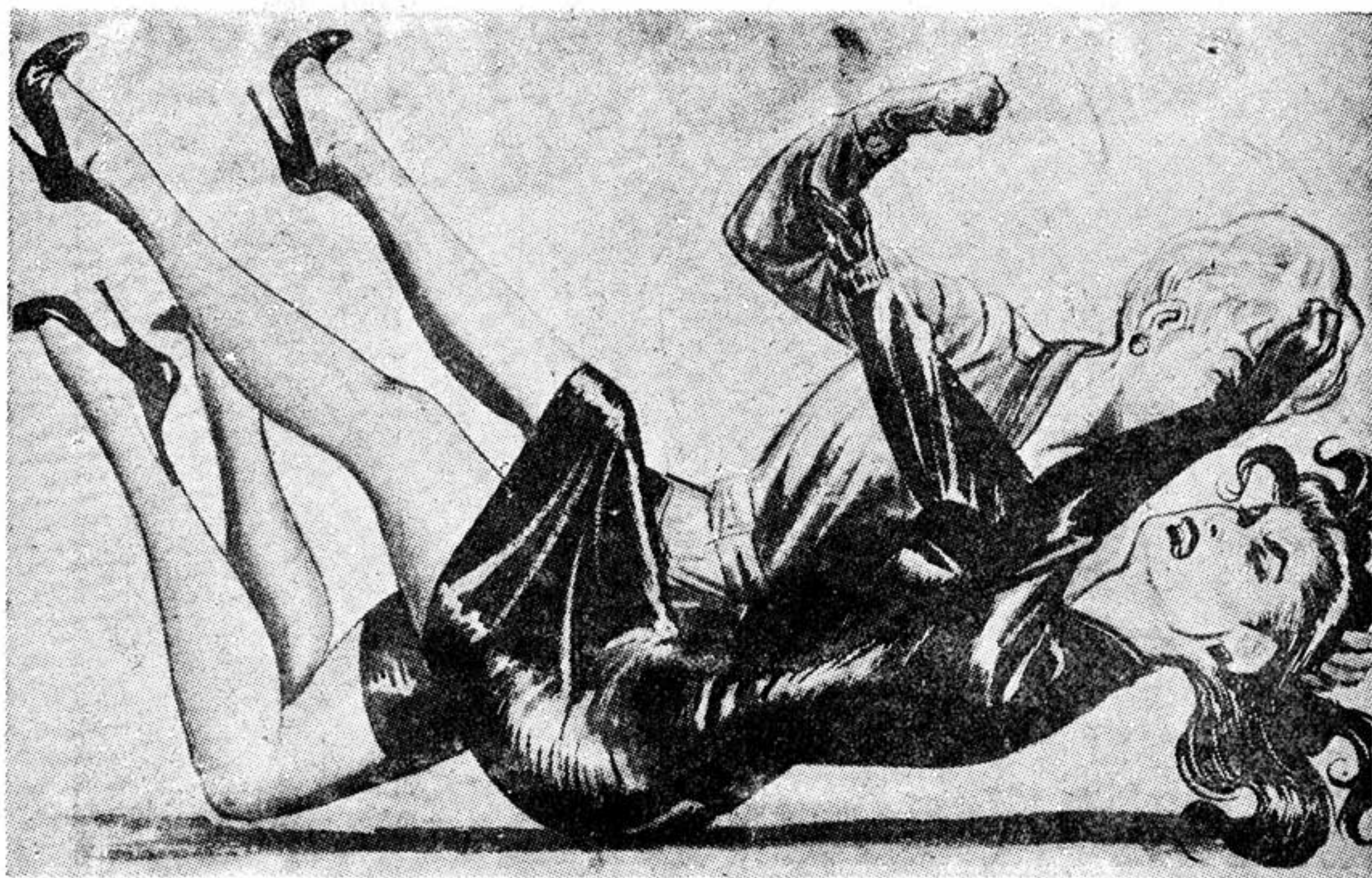
リンダの白い手が、トッドののど首をしめあげた。美人のくせに、すごい腕力だ。

だが、こんないい女にしめ殺られるのならそんなにわるくはないぞ。一瞬、トッドはそんなことを思った。

ふいに、ドアがあいて、拳銃片手の女がとびこんできた。婦人警官のベギイだ。トッドを助けにきたのだ。

まずい、とトッドは思った。無茶だ。

案の定、ベギイも、リンダの敵ではなかった。拳銃をもぎとられたベギイは、リンダの腕力の前に屈伏した。いすに縛りつけられ、ベギイもまた、ギャングどもの非情なリンチを受けるのだ、ああ……。







退屈な宿直の夜

ハワードにとっては、まったくの寝耳に水だった。

「ほ、ほくがM国の原子力スパイだって？」

と、と、とんでもない！」

「とほけてもだめよ。とにかく地下の取り調べ室へくるのよ」

二人の婦人将校にひきずられて、ハワードはつめたく殺風景な地下室までおりてきた。

ハワードは、この原子力秘密研究所ビルの五階にある食堂のコックだ。今夜は宿直なので、同じ階にある宿直室のベッドで、ようやくねむりについたところなのだ。

それなのに、黒い皮の服をまとった二人の闖入者は、まったく横暴だった。用意した縄で、すばやくハワードを縛りあげると、いやもおうもなく、地下室へ――。

「なにかの誤解ですよ。ほくはそんな」

「うるさい、おだまり！」

縄じりが、ハワードの背中をぴしりッと打ち、彼はとびあがった。

それからもう、めちやくちゃだった。

二人の女性は高級将校だから、ハワードも習慣的に抵抗できない。それをよいことに、二人はさんさんの凌辱を、無力なハワードに加えるのだった。

犬のまねをしろ、といったり、皮靴のさきをなめろ、といったり、二人のベンチになれといったり、乱暴のやり放題である。

「も、もう、ゆるしてください。ぼくは絶対にスパイなんかじゃありませんよウ」

ハワードは泣き声だった。

「ふふふ、いくじのない男ね」

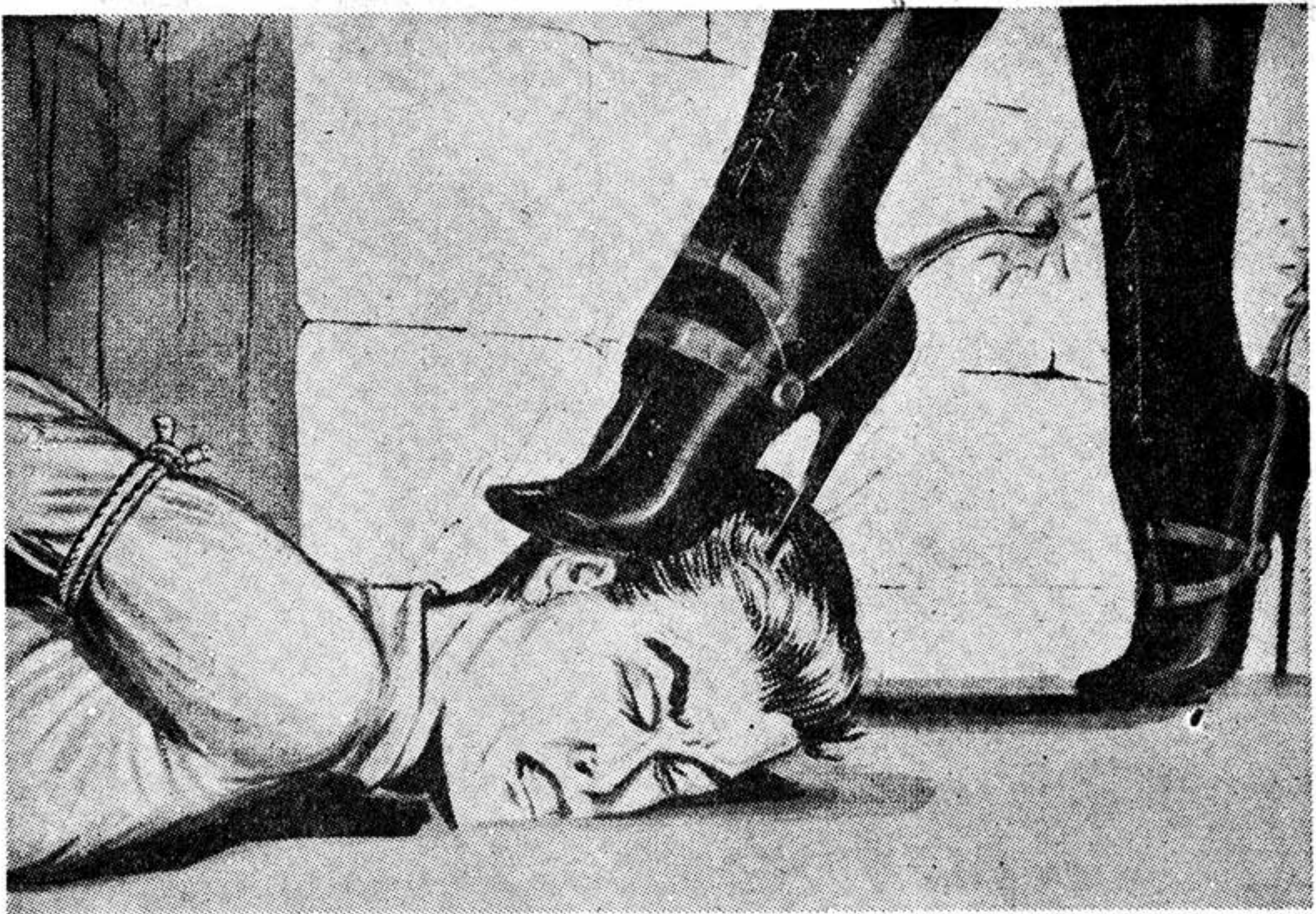
金髪の将校が、笑いながらいった。

「ちよっとかわいそうになってきたわ」

と、黒髪の将校がいった。

「しかたがないわ。当直の夜は、こんなねむけざましでもしなけりゃ、たいくつでたいくつで、死んでしまうわ。あしたの朝になったら、この男は釈放してやるわよ。容疑は晴れたからかえってよろしい、といってね」

金髪の美しい将校は、ここで声をあげて笑ったが、彼女の皮靴の下で、苦痛にうめいているハワードの耳に、二人の会話は、すこしもはいらなかった。







☆裏窓・十二月臨時増刊号・予告☆

表紙絵・喜多玲子

みなさまのご要望におこたえして、十一

月初旬に発行と決定いたしました。オー

ルグラビア、オフセットの豪華判で、かな

らずご満足いただけるものと思います。

(価三八〇円・一八円)

■絵物語

「戦国餓狼記」……島本春雄文・小日向一夢絵

「美女菊忍法」……京 剣児文・豊田みのる絵

☆ご予約がいちばん確実です。書店で売り切れの場合は直接当社へお申し込み下さい。

■グラビアページ

○中島喜美・時代妖美画集○部屋をまちがえた旅

行者・山田彬弘○まぼろしの手術室・秋吉轡○あ

るドイツ・フィルムから○白い女奴隷○黒い皮の

貴婦人○フェチシズム・フォト・ギャラリー○吉

田久・藤沢修フォト作品集ほか

■オフセットページ

○幸福なけものたち・江淵晃夫○女宇宙士の訓練

室・鬼頭暁○きもの五態・都築峰子○人買い南蛮

船・古正英生○女囚行列・東桂吏○現代鳥獣戯画

・落合竜二○吉田久・藤沢修フォト作品集ほか



せた民主主義への反逆者) このチカンする男が、車内で、女が拒めば拒むほど、勇みたつ。

ところが、相手が容易に受け入れてしまったり、逆に女が手を握りかえし、温泉マークへつれこまれてしまったりすると、そのこっけいな男はがっかりし、うなだれてしまう。

この感じは、SMにおける男女関係にも、いささか似ているようです。

しかし、これは絶対論であつて犯罪、革命などには、そんな場合はありえないし、ゆるされもしないから、やはり、空想の世界にこもるわけです。

世間をずいぶんさわわせた、サヤマの女高生殺しは、なんともいやな、あと味のわるい事件でしたが、犯人はSM的感觉とはなんの関係もない、きわめて卑俗な、ノーマルな俗物でしょう。

殺してしまうなんてのは、どう考えても、SMとは無関係です。妻が、ああいう事件には興味が

あるんでしよう、と冷笑しました。が、冗談いうな、あんなものと同視されてたまるか、と怒鳴りました。

あんな事件の犯人に対しては、心から怒りと憎しみをおぼえるだけです。

SMの好きな者は、こう考えます。

実際にその行為をしている者はたとえ遊戯であつても、第三者的つまり、それを眺めている者の楽しみの大きさがわからないでしょう。

強盗なんぞに至つては、金品が目的であり、生死を賭けた仕事である。チカンは、社会人としてはおむり去られるか否かというスリルに、神経を集中させている。「ジャミラよ、朝は近い」における軍人たちも、目的がまったたくちがう。SMの感覚とは、無縁でしょう。

SMというものを、とくに異常視し、分化し、ただのSEXのみを正常という社会観念は、現代そ

して過去の社会が、そういう方針をとり、社会への反逆、結婚制度(その九十パーセントまでは資本主義にとって大切な武器であり、制度です)への反逆とみなすからです。

人間から、経済生活、老後の不安、血縁の存続、経済のための結婚、子弟教育などなど、そんなわずらわしい問題がなくなり、共產主義的理想社会(現今の共产体制とは関係なし)ができあがり、男女の結合が、金からも家からも解放されたとき、はじめて、結婚とはなにか、純粹な結論があらわれるのではないでしょう。

あるいは、現在の結婚制度が、ぜんぶ破壊されてしまうかもしれない。

そのときこそ、SMは、もはやSでもMでもなく、単なるノーマルな感覚として、とくべつに意識されぬものになるかもしれない。

以上はまったくの空想ですが、ひるがえって、SMが、社会制度と、過去の歴史からいかに密接に

つながっているかという事実を示すものと思います。

社会が生みだし、そのくせ厄介なものは罪悪視し、アブノーマルに押しつけておいて、人間の本能自然な生理も、自分たちの社会制度に都合がわるいと、圧迫しようとする。

現代のゆがんだ社会においてはSMが別個扱いされるのも、ひとつの意味で必然なのだとおもいます。

三十八年十月号の「文学界」で奥野健男氏が、やはりだれかの文献をとりあげて書いておられましたが、それによると(ちよつと今その雑誌が手もとにないが)性交のみを一部切り取って、正常のみを強制的に押しつけたことについては、やはり政治権力の介入があったように思います。

ところで、フランス・ポール・ガール・プロ映画の「いぬ」という映画をみました。

「週刊新潮」十月七日号に、この映画について、おもしろい紹介の

しかたをしています。

——フランス映画の暗黒街ものは、人間臭さがあふれて味のあるものが多いが、ジャン・ピエール・メルビル監督の「いぬ」は、そういった点では、まったくの異色作。原作は新鋭の推理作家、ピエール・ルズの「ル・ドゥーロス」で、題名のドゥーロスとは、ギャング仲間の隠語で、警察の回し者のこと。

この「いぬ」に、目下人気さかんなジャン・ポール・ベルモンドがふんし、ギャングの組織にもぐりこんで、ボスの情婦をつぎつぎにモノにしていくというのがあらまじだが、見どころはすぐに承知しない女に加える酷薄非情なリンチ・シーン。

「すべて実際に行なわれているリンチを参考にしている。フランス警察の刑事は、ギャングを上回る強さと非情さをそなえている。だからこそギャングを撲滅できるというのがテーマ」と、ナルビル監督もいっているが、情婦の一人に

なるモニク・エネシーのリンチ・シーンなどは、手足をロープでしばり上げられ、サルぐつわをはめられて、殴るけるの乱暴、髪は乱れ、鼻血は流れ、かたわ同然になるというすさまじさ。

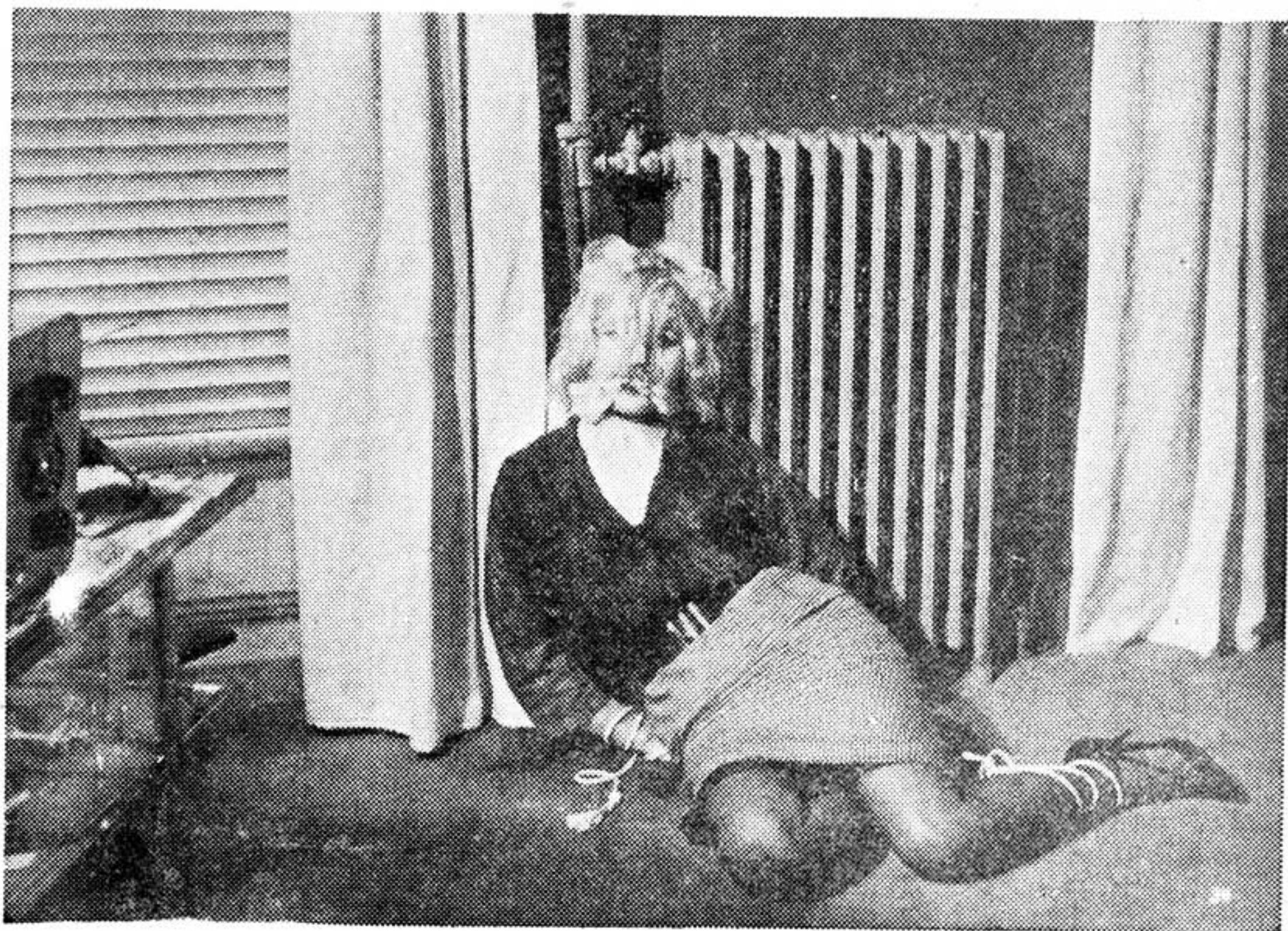
公開に当たっては、「拷問シーン」はカットされてしまったからわずかに残っているシーンで想像するしかないが、いじめ役のベルモンドは、日ごろから円満な家庭人。しかし、「平和を守る刑事の命がけの仕事なんだから」と、気持ちよくOKしたそうである。

(以下略)

とにかく、このシーンには、目の玉がとびでるほどのショックを受けました。息もつけぬほどの迫力でした。

まず、刑事が猛烈なパンチで女を倒す。横にぶっ倒れた女をうしろ手にすばやく縛りあげる。

さっと引きさがると、縄をしごいて、女のエロチックな足首、黒っぽいストッキングの足をぐるぐる縛り、ぐいっと、くの字縛りに



フランス映画・いぬ



フランス映画・いぬ

する。

何かで首をつるすようにして、口に白い布（夢中でみていたのでなんの布がよくわからなかった）をぎゅうぎゅうおしこむ。

びしびしたいて、白状しろとどなる。

女の口のなかのつめものを、ずるッとききだす。その間の女の表情のすばらしさ。

口の中につめものを入れられ、また、ひっぱりだされたときの、美しくあやしい口唇のうごき。

まったく迫真的で、ショッキングなシーンでした。

この迫力シーンをカットしてしまっただけ、まことに残念でたまりません。

おそらく税関では許可されたのに、だれかが、理由をつけて、切ってしまったのだと思います。

カットしたあとのフィルムをみても迫力があつたのですから、ノーカットのをみたら、どんなに

手に汗にぎることでしょう。私が考えるに、この監督のねら

いは、はじめから、そのシーンを撮りたくて、この映画を撮ったのではないか。

悪漢が美女をいじめると、いろいろ、うるさい方面からの横槍がはいるから「善人」が「正義」の旗のもとに女をいじめるなら、安心だろう、という計算が、この映画をつくらせたのではないか、とこれは、私だけの勝手な推理ですが……。

なにはともあれ「裏窓」は最近ますますスマートになり、内容もまじめに専門的になり、読者としては、安価な価格で大きいものしみを得ることができる事実、ありがたいと思っています。

表紙が美しいと、店頭で買うのも、なにか気もちがラクです。

たとえ細くとも長く、いつまでも長く、この雑誌が私たちのものとして永続できるよう、心から念じています。

いろいろとつまらないことばかりのべました。十二月号の発売をお待ちしております。

ゴルドンの記憶

9

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵

害者の身もと

「ですが、ちょっと信じられんような話ですね」

訪問客が帰ったあとの捜査一課では、ただならぬ興奮がうずを巻いていた。

「もしもですね。今の男の情報が当たっている」と、さつき課長がおっしゃっていた、

犯人は女だ、という推理が、見事的中ということになりますね」

坂崎警部は、考え深そうにくちびるを結んだまま、興奮に誘われたようにしゃべり合う署員たちのことばを、だまって聞いていた。

「課長！ とにかく、そのエテルナとかいうバーを当たってみますか」

せっかちに勢こんで言ったのは岸本刑事だ

った。熊本の出張から帰って、まだ間もなかった。それだけに、杖立川溪谷でのあの不可解な殺人事件の印象を、だれよりも強くからだで感じていた。その興奮の最中にまだ身を置いていた。

「そうしてもらうか」

と答えはしたが、坂崎警部はあまり気乗りはしたようではなかった。それでも気のは



やい岸本刑事は、早速飛び出す格好で立ち上がるのだった。

「エテルナには八木君と長沢君に行ってもらおう。岸本君はここに残っててくれ」

岸本刑事は、意外なというような、不満そうな顔で、上げた腰を半分及び腰の姿勢で、坂崎警部のほうをうかがったが、反問するとはあきらめたように腰を落とした。

「じゃ、さっそく行って来ます」

八木、長沢の両刑事が待つてましたと言わ

ぬばかりに立ち上がり、出かけようとした。「ちょっと待っててくれ」

坂崎警部は目顔でふたりを呼び止め、「まだエテルナがどうこうという線がはつきりしたわけじゃないんだからね。それより、害者の身許が先決だ。流しのギターひき、そのほうを重点的にな。それから星山君、熊本県警にすぐ連絡をとってくれ」

坂崎警部は、しかし阿麻哲郎という訪問者が、杖立川殺人事件の被害者の身許を知らせ

前号まで
わたしは大阪商船の上島氏と、彼の知合であるふしぎな女予言者サレアとの妖しい運命のもつれに巻きこまれてゆく。そしてふしぎな世界を暗示する『ゴルドンの伝説』に関する古文書を、上島氏はわたしに

いわくありげにあずけ出航する。美しい上島夫人、芙美子とその出航を見送った時の思い出が印象的だ。わたしの心は芙美子に傾いていた。

『ゴルドンの伝説』の古記録の、本当の持主、人文学者の相馬博士に会う機会をうる前に、留守中、正体不明の女に記録を持ち去られ博士も行方不明となる。東亜日報の小林春吾などは博士の行方不明について初め関心を持たなかった。ところが航海勤務

中の上島氏がキューバ近海の洋上で、突然消えたという事件の知らせを受ける。同時に奥多摩の秋川溪谷で相馬博士の腐乱死体が発見される。死因は餓死。事件はさらに急転回をはじめ、九州・熊本県の山林の中で全身に無数の切傷、刺傷を受けた男の死体が発見された。死因はやはり餓死。以前わたしは上島氏と出入りした新宿のバー・エテルナに、それとなくおいをかぎつけ、ギター弾きの流しに探りを頼んでおいた。流しの男はホステスのひとりに近づき逆にとりことなる。

二つの事件のホシは女かもしれない、という坂崎警部。そして新しく西司男という人物が芙美子のポートレートとともにわたしの脳裏に浮かんでくる。

に來たついでに、エテルナと、相馬博士事件のつながりについて、きわめて暗示的な話をしていたことが、まだ頭にひっかかって残っていた。まるで雲の中に放り出されたような落ち着かない気持ちだった。

推理？ 推測？

警視庁の建物を出ると、午後の日ざしが暑い濠端の散歩道を日比谷のほうに歩いていった。歩きながらわたしは、今後のことについて思案した。流しの男が、二週間以上も連絡を断ったことについては大いに気がかりで、それとなくエテルナの情勢を探りに出かけたりもしたのだが、現実には、不安があまりにも適中して、こんな結果になろうとは、あまりにも無残な気がした。というよりソラ恐くさえあった。また同時に、あの流しの男に、大変悪いことをした、と、どうにもならぬほどの後味の悪さが残った。わたしが、エテルナの様子を探ることを頼みさえしなかったら、あの男が、こうも無残に殺されることはなかったはずだ。

流しの男が消息を断ってから、そしてエテルナにおいて何の異状が認められないにもかかわらず、それだからなお、そこに事件の予感を感じた。といって、だれに訴えるすべも

なかった。警察とて、そういう不安をまじめにはとりあってくれないことはわかっていた。だからわたしは、ひとりでおびえていた。ふがいない話だったが、仕方がなかった。それだけに、新聞は注意して読んだ。特に三面記事に目を配った。

そしてついに、八月十八日の夕刊に、恐れていたそのことが、小さく夕刊の隅に出た。『熊本県阿蘇の山中に変死体！』間違いなくそれはあの流しの男の変わり果てた姿に相違なかった。西日本新聞の東京支局に出かけていって、そのことを確認した。

だが、このことはまだ人には知られたくなかった。知ったところで、事件の根の容易ならぬ深さを、本当に理解する人は何人だろう。それを思うと調べに行った新聞社でも、当たりさわりのないごまかしを言って引きさがるしかなかった。

だが、杖立川事件には責任はわたしにあった。それにその事件に、バー・エテルナが、直接関係しているのがこれではつきりした。東京・新宿にあるエテルナと、熊本県阿蘇との地理的結びつきが考えられない、というのは、普通、人間界の事件での常識から言っていることだ。

では、エテルナのマダムたちは常識上の人

間ではないのか。そんなことはあるはずがない。少なくともわたしは、魔女たちが出没したという遠い中世紀に生きているのではなく、原子力時代の二十世紀に生を受けるものだ。

わたしは考えた末、警視庁に坂崎警部を訪ね、最小限必要なことだけを語った。ことによったら、あんまり雲をつかむようなとんでもない話のために、自分が妙な目で疑われるかもしれない、いや、疑われることを覚悟していた。相馬篤太郎事件とエテルナとの関係、それからエテルナと流しの男殺害との関係、いずれもが推測であるにすぎなかった。だが肝心の上島氏失踪事件や、サレアにからまる奇妙な推理については、わたしは一言もしやべらなかつた。その必要がなかつたこと、それをしゃべるとあんまり話が神がかりになつて、自分の証言の信びよう性がいよいよ失われる、そのことを恐れたからであつた。

クロレラを調べる

「しかし課長、今の男をあのままほっておいてもいいんですかね」

岸本刑事はシリシリしていた。被害者の素性が本当に彼の言う流しの男であるのか、どうか、そうであれば今の話だけでは不十分だ。

もっとよく調べ直さなければ、一番あやしいのは阿麻哲郎とかいう、今の男ではないのか。

その時課長の机の上の電話ベルがなった。「はい、こちら本部——あ、八木君か。ちょっと待ってくれ、課長と代わるから」

岸本刑事は、立ち上がっていた位置から、受話器を坂崎警部に手渡した。

「被害者を確認しました。まちがいないようです。通称六さん。歌舞伎町かいわいを流していたギターひきですよ。——そうです。写真を見せたら、みんな六さんにまちがいないと証言してます。エテルナのほうは、まだ時間が早いので店は開いておりませんが、今のところこれといったあやしい聞き込みはありません」

電話が終わったところで、警部は岸本刑事に声をかけた。

「君、熊本県警からこられる前に、ひとつ調べておいてもらいたいんだ」

「何ですか」

「クロレラについてできるだけ詳しく。K大の中村教授がクロレラの研究家だということだから」

「阿麻のほうはどうしましょう」

「今のところ、ほっといてもいいだろう。お



かしな話かもしれんが、あの男の言ったことはそうであらうとも思えない。また必要な時には来てもらって協力してもらうさ」

久し振りに芙美子と

濠の水は緑がかって見えた。日が水面に輝き、そしてその向こうのこちらよりいっそう高い土堤の芝生に活気を与えていた。その日、ざしがいっそう強くまぶしくさえあったこと

が、かえって、夏の盛りを過ぎたことを示していた。凋落の前の盛んな燃焼がそこにあった。

夏の日の感傷——そう自分で思いながら不意に後を振り返ってみた。尾行がついている気配はなかった。とすれば、警察は簡単に自分の申し出た情報を信じてくれたのだろうか、提供者の身もとを確かめることもせずに。

思わず苦笑がわいた。警察ではわたしの申

し出したことなぞ、本気には聞かなかったのだ。もちろんに証拠は何一つない、話の内容はまるで神がかりみたいなことばかりだ。まじめに聞こうにも、聞きようがないではないか。

日比谷の交差点を過ぎて間もなくのことだった。わたしは通行人の中に思わぬ人の姿を見かけてどきりとした。上島芙美子に違いなかった。白いレースあみの帽子をかぶり、白い上着を着ていた。わたしは人ごみを抜いて

前へ進んだ。思いがけぬほど上気し、妙にうわついた晴れ晴れしい気持ちになっているのが、いかにもゲンキンで恥ずかしかった。

「芙美子さん」

呼びかけると彼女は立ち止まった。

「あら」

微笑がこぼれた。深いまなざしが笑っていた。帽子の下顔がまぶしかった。

「どちらにいらしたんですか」

「会社に行ってきたとこなんです」

そういえば上島氏の勤めていた大阪商船はこのすぐ近くであった。わたしたちは肩を並べて歩き出した。

「上島さんのその後の様子が何か――」

「いえ、まだ何にも。いろいろ手は尽くして下さってるようですが。ともかく、あのとき同じ甲板上に居らしたという、森本さんがお帰りになれば、何か新しいことでも聞けるんじゃないかと思えますけど」

「でも森本さんは十一月でないとお帰りにならないということでしたね」

「そうです」

芙美子のひとみが幾分かげりを帯びたようにうるんだ。

「もしよろしかったら」

と、芙美子のほうから言い出した。



「久し振りに私のうちへお越し下さいませんか。毎日ひとりで、心細くしておりますので」

肩がふれあうほど近々と、ふたりは寄り添っていた。何か一瞬、戦慄に似た感情がわたしの心をつっぱしった。

ネズミ

西荻窪一帯の家並みを見おろす、きちんと整理の行き届いた四階建の寮、その三階の窓からながめる広々とした風景は、最初の訪問以来のものであった。

家に着くと芙美子は、活気づいたように陽気になって振る舞った。

「ゆっくりしてらして。今日はうんとごちそうしますからね」

いたずらっぽく笑ってから台所のほうに立っていった。わたしはその後姿に上島氏を感じた。なぜとも知らぬが厳肅な気持ちであった。芙美子がことさらに陽気に振るまわって、わたしを歓待しようとする姿勢の中に、かえってひたむきな上島氏への愛が現われているようであった。

「あら」

芙美子は台所のほうで大きな声をあげた。つられてわたしは立ち上がり、



「どうしたんですか」

とのぞきにいった。

「ネズミがかかっているんですの」

半分おびえたような声で芙美子は言った。見ると成程、キッチンの隅に置いてある金網のネズミ捕器に、丸々と太ったネズミがかかっていた。ネズミは赤く小さな手足のハラを網にかけて、せわしく動き回っていた。

「ここんところ、ネズミが出て困るものですか」

困惑顔だった。ちょうど食事の仕度前に、不潔なネズミを見たんでは、料理もできづらいつという顔だった。かといって、ネズミをこのままにして仕度にかかるんでは、それも何だかできづらいような、案に余ったような様子だった。

「いっそ食事前の血祭りに、今殺してはどうですか」

わたしはこの時、ふと猛烈に、芙美子がネ

ズミを殺すところを見たいという欲求に駆られた。

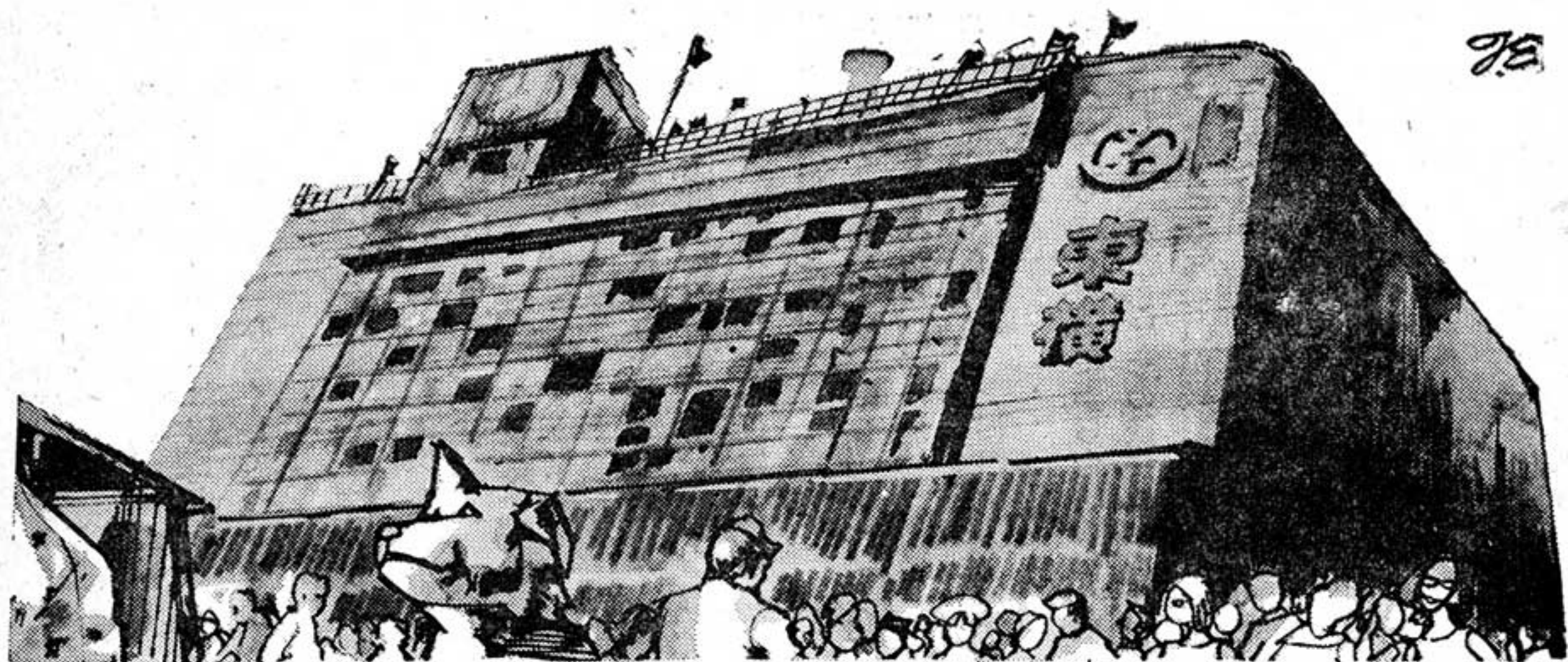
「でも——」

彼女は網の中のネズミと、わたしのほうとを交互に見るふうであったが、わたしは彼女をばげますように、ニッと笑って見せた。それでネズミの運命は決まった。わたしはわざと手を出さないでいた。

ネズミを殺して

芙美子は深目の雑巾バケツを湯殿に運び、水をいっぱいに張った。そうして、ネズミ捕器の金網をたてにしてその中にそろそろと入れた。作業にかかるともうためらいはなかった。彼女は殺すことに熱中した。というより、興味をそそられているふうに見えた。

網の中のネズミの動きが、それで急激に激しくなった。少しでも水からのがれようと、狂ったように金網の上部で手足を動かした。



とがったハナ先と小さな手足の腹が、桜色をして血に染まっているようであった。時々まるいクリクリした目をすえて、じっと網越しに芙美子のほうを哀願するように見上げた。

芙美子はいちどきに殺すことを惜しむように、網を水の中にそろそろ入れてはまた半分ばかり引き上げて楽しんだ。ネズミは水中で断末魔のあがきをする。網の中を前後左右に走り回る。だがどう動いても水の中だという恐怖と、息がつけないう苦痛から、見るも無残な暴れ方をする。芙美子は笑いながらまた網を半分ばかり上げてやりながら、

「往生ぎわの悪いことですわね」と言っただけでおえんだ。ネズミがかかっているからといって、さっき見せたあの困りようはうそのようであった。

「さあ、それじゃ今度でお願いしますしうね」

網は深くバケツの中に押し込まれた。その上部が水面すれすれに見えていた。そこへ、ネズミはハナづらを上向きに押しつけて、けんめいに手足を動かした。すぐそこは、自由に空気が吸える水面上だった。だが、ほんのわずかハナづらは届かなかった。小さな桜色のハナの穴が、貝殻のフタのように開いたり閉じたりした。そしてやがてそれは動かなく

なった。芙美子は物も言わず、恐いほどの目をしてネズミの最期を見届けていた。

「上島は、どこへ行ってしまったんでしょうか」

ぼつりとつぶやくように言った。

「阿麻さん、教えて下さい。上島はどこに行ったんでしょう」

芙美子は網から手を放すとわたしのほうに向き直った。目に光があった。バケツの中のネズミ捕器は外へはね出して、その中のネズミの死体をぶざまに見せていた。

わたしは力づけるようになだめすかして彼女をばげましたが、そうしているうち、ふと思ひ出して、何気なくたずねてみた。

「あなたは、西司郎という、京大の教授を知りませんか」

「存じませんけど」

「じゃ最近、羽田に行かれたことはありませんか」

「どうして、そんなことお聞きになるんですか」

芙美子は顔を上げた。不審気な面持ちだった。

「いや、何でもありません。わたしの友だちがあなたをお見かけしたというもんだから、西教授という人を送りに行ったんですがね」



芙美子の目が、思いなしかキラリと光ったようであった。

「お友だちは何という方ですか」

「小林春吾といつて、東亜日報の記者ですよ」

わたしは深くも考えず、つい何の気もなしに答えた。

似た女性

深くは考えなかったが頭のどこかにはひっかかっていた。だから小林春吾とその後間もなくして会ったとき、ほかの話をしているうちそのことが出た。

「そうか、だけど君のうちで見せてもらった写真の人とそっくりだったがな」

小林春吾は納得しかねる様子だった。だが彼も深くは考えなかった。わたしは飛行場のその美人を見たわけではない。小林もまた直接上島芙美子と会ったことがない。だからこれだけでは結論の出しようがない。当の芙美子自身が、それをまっとうから否定するのだから、これは小林の見まちがいであろう。ふたりとも深くは考えなかった。

「西教授というのは、どんな人だい」

「温厚な紳士だよ。古代人類の研究が専門のようだが、なかなか博識で運命論者でもあ

る。ただどうしたことか、五十幾つにもなるのにいまだに独身さ。学者にはありがちだね」

小林のこうした説明をもわたしは別に注意して聞いたわけではなかった。それより、何の関連もなしに、網の中でもがき苦しんでいたネズミのことが生々しい鮮度で思い返された。

わたしはあるとき、芙美子がネズミを殺すところを猛烈に見たかった。突如ふき上げてきた熱湯の噴出のように、芙美子に殺されるネズミの苦しみを見たい欲望に突き上げられた。我ながら妙な気持ちだった。

ナゾの女

校了明けの休みの日、下宿のおばさんに頼まれて買物のお伴に出かけた。近所の池のある公園で、花火大会があるとかで、何だかざわついたような人出があった。

ふたりは電車で渋谷に出た。本当はどこかで逃げ出したかったが、やはりそれではおばさんが気の毒だった。

東横百貨店の、これ見よがしの大きな建物に、『夏季物総ざらえ謝恩セール』として、屋上からぶち通しに一階まで届く大垂れ幕を見ながら、

「デパートなんかで買物すると、高くつくよ」
持ち前の百貨店きらいから、わたしは言っ
た。

「そう言ったって、デパートのものなら安心
だものね」

おばさんは楽しそうだった。目を細めて、
娘のように浮々した表情で、今からはいろいろ
という東横百貨店の建物を見上げていた。屋
上には、アドバルーンがゆったりと浮かんで
いた。

ハチ公の銅像付近から、ガード下のほうに
歩を移し変えた時、おばさんは、おや、とい
うように歩を止めた。

「おばさん、どうしたの。早く行こうや」
せきたてるようにすると、

「いえね、あの人、どこかで見たような」
首をかしげながらも歩き出したおばさんは
またすぐ立ち止まった。そして強くわたしの
手を引っ張った。

「ほら、いつかあなたのお使いだとかいって
若い女の子が大事なものを持っていったこと
があったでしょう。何だか紙袋にはいった書
類を——」

わたしは思わずドキッとして、おばさんの
手を強くにぎり返した。

「確かにあの人にまちがいない」

おばさんの目色で示された方角の人波の中
に、若い女の横顔があった。だんだら模様の
ワンピースを着ていた。一度も見たことにな
い顔であった。

「そうか、あの人かね——」

とっさにわたしはおばさんの耳もとに
「悪いけど、ぼくはあの人の後をつけてみ
る。きっと借は返すからね。おばさん、悪く
思わないで」

と強くささやくなり、おばさんをその場に
置き去りに、女の後を歩いていった。

どちらかといえば小がらの女である。どう
いう筋からの女であるのか、まるで見当がつ
かない。どういう理由で相馬博士の古文書を
だましとっていったのか。

わたしは、それをもしかすればエテルナの
女たちのひとりではないかと想像していた。
だが、その想像ははずれていた。まるつきり
見知らぬ女なのであった。

西司郎の家

女は、尾行者が居ることには気づかぬ様子
であった。後をも見ずに渋谷駅のフォームか
ら山手線に乗った。向こうはこちらの顔を知
っているであろうか。用心のため少し離れ
た位置の、背中合わせの吊皮につかまってい

た。幸に車内は適当にこんでいたので、こち
らの様子がわかるはずはなかった。

女は代々木で降りた。代々木駅の正面の、
広い並木道を都電通りのほうに降りてゆく。
そこは、ワシントンハイツから来た、ゆるや
かな坂道をなしていた。二十メートルほどの
間隔をとって、何気ない足どりについていっ
た。女は通りを右に曲がった。邸町の細い小
路である。シンと静まっていた。そのあたり
で女の姿は不意に見えなくなった。

いくらかあわて気味に、わたしは小路の左
右を見回しなから、注意深く進んでいった。
するとわたしは、土塀に冠木門の古風な家の
前で、思わず足を止めた。それほど大きな家
ではなかったが、門の内側は竹やぶなぞ見え
て、ひっそりと静まっていた。門の表札に、
行書体で、西司郎とあるのが思いもかけぬシ
ョックをわたしに与えた。西司郎、これは京
大の西教授だろうか。とすれば——女が消え
たのはこの家だ。くぐり戸に手をやると、戸
は何の雑作もなくあいた。だがこのままはい
ってゆくことはためらわれた。

西教授だとすれば、五十幾つにもなるが独
身でひとり暮らしのはずであった。とすれ
ば、今の女はだれなのか。女中かもしれない、
女中だとすると、それを使ってわたしのとこ

ろから古文書を持ち出させたのは、ほかならぬ西司郎その人でなければならぬはずだ。何のためだろう。

彼も何らかの形で『ゴルドンの記憶』にながる人なのか。古代人類の研究者というのであれば、それもうなずけぬことはない。今は、学術調査隊長としてアフリカに渡ったいるはずだ。小林春吾が羽田で彼を見送っている。そしてもうひとり、それは上島芙美子なのだろうか。それはほんのかすかな疑念にすぎなかった。

女の残酷

バー・エテルナでは、何も知らぬ小林春吾が、ルミやキクを相手に盛んに気炎をあげていた。

「女っていうやつはね、そりや体力が男より劣るものだから、ひっそりおとなしやかに構えているがね。もともと残酷なんだよ」

「そんなことないわよ。わたしなんか血を見ただけでふるえちゃうわ」

これはルミである。ふっくらした、肉付きのよい丸ぼちやの顔をしている。

「わたしもそうよ。こういう客商売で、少しはこう、男まざりに見えるところがあるかもしれないけれど、シンは女よ。女って弱いも

のだわ」

これはキクである。やせぎすでボーイッシュなタイプである。

「わかつちやいねえんだな。ほら、見なよ。」

南ベトナムのシンター夫人なんていう偉い女の人がよ。焼け死んだ坊さんのことをバーベキューだなんて、あの神経はやっぱり女のものだよ。とにかくね。今残酷、残酷のブームなんだけど、女性の残酷を特に取り上げてみると面白いもんだよ。女族残酷物語、この企画は絶対当たるんだけどな」

小林春吾は、ひとりでくやしがっていた。

相馬博士の殺害事件以後、何とはなしにその名企画が、いつのまにか立消えになっているのをくやしがっているのである。

客がほかに何人か居た。カウンターで、その相手をマダムがしていた。黒っぽい着物がよく似合い、改めて見直すほど美しかった。ボックスでの話が聞こえたとき、カウンターの中から声をかけてきた。

「小林さんあなた、ひどく女性の残酷さに興味をお持ちのようですね」

「そうさ。マダム。男の残酷なのは当たり前で、あんまりゾツともしないが、女の子がね、残酷さに取りつかれて、目の玉キラキラ輝かしてね。あられもなくこう、ヒステリッ

クに振るまうところなんか、興味があるね」

小林春吾はいくらか酔い加減であったしするので、それだけ大きな声でわめくように言った。

「そう、わかつたわ」

マダムは目を細めて声のない笑いを笑った。

「だったら、あなたのご興味を、満足させてあげてもよいことよ。そして、女族残酷物語という、その企画にも、お手伝いしてよ」

それは冗談ととれぬ、真剣なものがこもっていた。





読

者

コ

ー

ナ

ー



★他にも多くのご投稿がありましたが、スペースの都合で掲載できなかったことをおわびします。このらんのご投稿はハガキでも結構ですからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌次号をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所、氏名はお書きください。（読者コーナー係）

★編集部の方々がたにはお変わりなくご活躍の様子、何よりおよろこび申し上げます。この夏はあまりの暑さ続きで、少々バテ気味でございましたが、発売を待ちかねて入手いたしました十月号のお蔭で、私も久しぶりの楽しさを味わうことが出来ました。寝室には清潔な夜具と、スタンドのほのかな灯に「裏窓」が一冊あるだけで、一筋の縄も責め具もありませんの

に、私は責められるよろこびにふるえ、夫はそんな私をいつくしみます。中島喜美先生の時代妖美画集の数葉の挿絵、私にはあれだけで今月号の価値の一〇〇パーセントをしめてしまいました。土牢の絵など、私の宝です。もし、原画が手に入るようなら、私の大事なエンゲージ・リングを差し上げてもいいと思います。ずっと以前の「裏窓」には中島先生や喜多先生のすばらしい絵がたくさんあるので、好きな絵ばかりスクラップしてたいせつにしまっておこうと思

っています。何しろ三十余冊の本ではカサも高いし、第一、どこに好きな絵があったのかわからなくなってしまうものです。主人は幸せな眠りについていますが、私もいまだに目が覚めて、とても眠れそうにもありません。それで、ついペンをとりましたけれど、私には他の方々のように、批評や読後感を書けません。絵本が幼児の心の糧であるように、「裏窓」は私どもの寝室の糧なのです。ただそれだけです。感情のままに、恥ずかしいことを書いたようです。どうぞお見捨て下さいませ。では、益々のご発展をお祈りします。（大阪・若柳）

★十月号拝見安東泉先生の評論は、いつもたいへん興味をもつて読ませていただいております。「アラビアの城」いろいろ批判があるようですが、私はお伽話として楽しく読ませていただいております。慾をいえばQと弓子の言葉のやりとり、少し馴れ合いじみた感がないでもありませんが、やはり、血を流さないで羞恥心だけをさいなむのは私には魅力です。この小説

がそうした魅力に支えられているのに対し、「裏切り」の九十郎先生の本格的な筆力にはまた別の魅力を感じます。頭脳的な秋吉先生の絵がまた、たまりません。「異端の城」ごく普通の小説が九十ページ下段六七行の一言によって、目を見開くほど活々としたものになりました。その他「お転婆学園」は軽妙なやささがありますし、十月号はいつもにも増して楽しい小説揃いでした。しかしグラビア、殊に海外ものは淋しく思いましたけれど、いつも、何もかもよく、というのは、慾が深すぎますので、来月号を期待することにしましょう。（北九州・ゆたか）

★十月号拝見、久しぶりに読物が充実していました。少し誇張したい方だが、今年になって初めての「裏窓」らしい片鱗をのぞかせた号だといえるのではないのでしょうか。といっても、決して満足しているわけではなく、また、時代物、S小説ばかりを歓迎しているのではありません。現在連載中のものはそれぞれ独特の味があってもよろしい。また、最近文芸評論や新刊紹介に力を注がれているのは良



い傾向の一つとして、高く評価できると思います。諸先生の力筆によりSM心理というものがかなり鮮明に、そして純粋な高度なものとなり浮き上がっています。評論であるため、諸先生の意志や思想が表面化して、文章に多少堅さのあるのは避けられませんが、それだけに原作者の意図も明確で、そのテーマやモチーフまでも感じとることができます。「裏窓」の性格やムードが文壇にまで浸透しつつある世相に触れ、そしてつい今まで見過ごしてきたものまで読んでみたくなる。読む量の増す度に教えられるところも多く、かなりアブな面を理解し、消化したつもりでも、なお、性的性格の奥深さ、というものを感ぜられます。SにしてもMにしても、普通、読者の求めているのは「現実夢」ではないでしょう。時代物の場合はすべてがフィクションと理解できるので、嗜虐と被虐による「血―死」というものはそれ程身近に感じず、実際に長い刃物を持ち歩いた昔の侍というものを考えれば、当然そこに「血―死」という点も想起できます。しかし、現代物の場合、たとえ心で求め

ていたとしても、一応避けたいのが現代人ではないでしょう。現実には毎月のように殺人事件が報導され、スリラー小説が歓迎されていますが、病的でない限り「血―死」はいやなものでは。「月光のドミナ」における「苦痛よりも凌辱を」という叫びこそ、まさに現代人にマッチした最高の表現といえるのではないのでしょうか。その意味で「アラビアの城」や「お転婆学園」等は、夢を抱かせるに足る読物といえそうです。海外のSMフォートが新風を吹き込んでいるのは事実です。が、今月号のSM絵物語のように小さなものをたくさん盛り合わせるのはどうかと思えます。それよりも、大きな画面で数少くした方が効果的ではないでしょうか。とにかく、海外物は徹底した機械化で複雑なものが多いだけに、その一つ一つが明瞭で理解しやすく、空想もし得るものの方が好ましいと思います。先月号から本格的な「妖美画集」が発場してきました。鬼頭氏といい、中島氏といい、すばらしい作品です。欲をいえばグラビアかオフセットページにしてほしいものです。文章のぜんぜんない絵、

というのもまた、私たちには楽しい夢を描かせます。

(京都・光谷)

★人にはそれぞれの好みがあり、十人十色の読者は全誌面に満足感を感じてくれるものでなく、その点、編集なさる方々のご苦労はたいへんなものでしょうが、その反面、読者からの「楽しませてくれた」という反響は大きければ大きい程、ファイトが湧くことと思います。さて、私の好みとしては、十月号では裏窓文芸評論の「女の『魔』をまさぐる舟橋聖一」および「現代マゾヒズム文化時評」と「裏窓タウン」などが私を楽しませてくれた、といわせてもらいました。また、表紙、グラビア写真ともに気に入りました。

(石川県・能登半島)

★十月号、早速拝読、その読後感として書いてみました。プロ野球の巨人軍に「ON」砲というのがありますが、私は好きな画家を三人（クリンアップ・トリオ）選んでおります、春日章、山田彬弘、落合竜二の各先生方、名づけて裏窓の「K・Y・O砲」です。前号では、この「K・Y・O砲」のトリオが、その持ち前の「華麗」な画風で

誌面を魅力つけていました。当然十月号もこのトリオが描いた絵が出るものと期待していたところ、どうでしょう、「Y・K砲」が不発で、「O砲」のみが巻頭を飾っていただけでした。フアンとしての私は、本当に物足りなく失望しました。しかし、考えてみれば山田画伯などは今やどの雑誌をみても必ずと言ってよいくらい、挿絵を執筆されております。いかに山田画伯の絵が「裏窓」のみならず他の大衆誌愛読者にも愛されている人氣の程が伺えます。ですから何も裏窓十月号に載らなかつたらといって、編集部を責めるわけにもまいりません。不発だった「K・Y砲」に異り、裏窓専属の「O砲」こと落合竜二先生の絵は、例月のように載っていました。巻頭——しかも私が望んでいたオフセット印刷による美しい絵でした。色紙ページの鬼頭先生絵ですが、技巧に申し分のない先生の絵も、顔（特に女性）の魅力に乏しいのがマイナスになっていると思います。妖美な迫力があります。まず女性の顔の美しい方が読者にうけるのではありませんか。ともかく、十月号は都築、山田、



読者コーナー



春日の各先生方の絵にお目にかかれず残念でした。表紙ですが前号、十月号とも、全く素晴らしいの一言につきます。吉田久氏の巧さでしょう。こんな見事な美しさは他誌にはありません。色彩感といい、人物を小さく扱って背景をグッととりいれた構図、立派なものです。記事ではエダ・キリコ嬢のモデル随想記が八月号同様、興味をひきました。また「お転婆学園」も私の好きな小説です（今月号はどうした事が挿絵が入っておりません）。「裏窓タウン」の興味ある話題は、毎号楽しく拝読しております。ともかく、十月号は主力画家が欠場で、挿絵陣は低調でした。私だけでなく、他の読者諸氏も挿絵に興味がある人が多いと「読者コーナー」の欄をみて感じております。小説陣の強化、は一番重要な骨組ですが、その上に化粧、つまり魅力的な挿絵をつける事もたいせつでしょう。いうまでもありませんが、次号こそ挿絵陣の強化を切望しております。

（和歌山 Y・M生）

★前略——読者コーナーへ一言申しあげます。このごろの世相のように脅迫事件や暴力行為等

が相ついで起こっているとき、じつはそれが人口の過度集中や生活難にも一端の問題、政治問題があるにもかかわらず、いたずらにマスコミなどが、変質者の業ということにすりかえていく点は、十分考えてみる必要があるのではなからうか。また、こうした世相の中で貴誌の発展も大きな壁に突き当たっている事と思います。ですから同人誌発行も、その一つの案と思いつ成します。ところで十月号の表紙など、じつにきれいな出来であり値は高くともカラー写真であることは望ましいです。グラビアも、ただの裸体ばかりではなく、衣装（和服・洋装）にも工夫していったほうがいいです。また外国もののページ数は少し多すぎはしないでしょうか。最後にモデルさんについて一言、こうしたモデルになられること自たい、大へんな努力がいると思いますが、もう少し表情に演技を見せていただけたならとも考えます。今まで私の印象に一番強く残っているのは本年五月号と、三六年五月号「悪夢」のモデルさんでした。では今後の発展をお祈りします。

（東京・中山茂）

編集後記



▼先日、わが編集部近くの古本屋さんを、なにげなしにのぞいて、びっくりしました。

▼「裏窓」ことしの八月号が二百五十円。同じくことしの七月号も二百五十円。去年の十二月号が二百円という値段がついています。

▼つまりこれは、新本の値段と、まったく同じなのです。数年前発刊された出版物で、現在は絶版となって手に入りにくいものなら、話はべつですが「裏窓」の場合、その値段で、新しいものをすぐ手に入れることができるのに、この現象はどういうわけでしょう。

▼古本屋のご主人にきいてみますと、

「だって、売れるんですからね、仕方ないでしょう」

▼ここで宣伝めいて恐縮なのですが、本誌の既刊号が、毎日減っていきます。ということは、毎日毎日「既刊号を送ってくれ」というご注文をいただきます。

▼売り切れになった号は、今後お手にいれることが非常にむずかしくなります。お買い落としの方は、いまのうちにぜひ、おそろえください。

▼本年度は、このあと十二月臨時増刊号を発行する予定ですが、なにとぞ、ご期待ください。現在の情勢のなかで、最高度のものを、ただいま編集しております。自信をもって、おすすめする次第です。

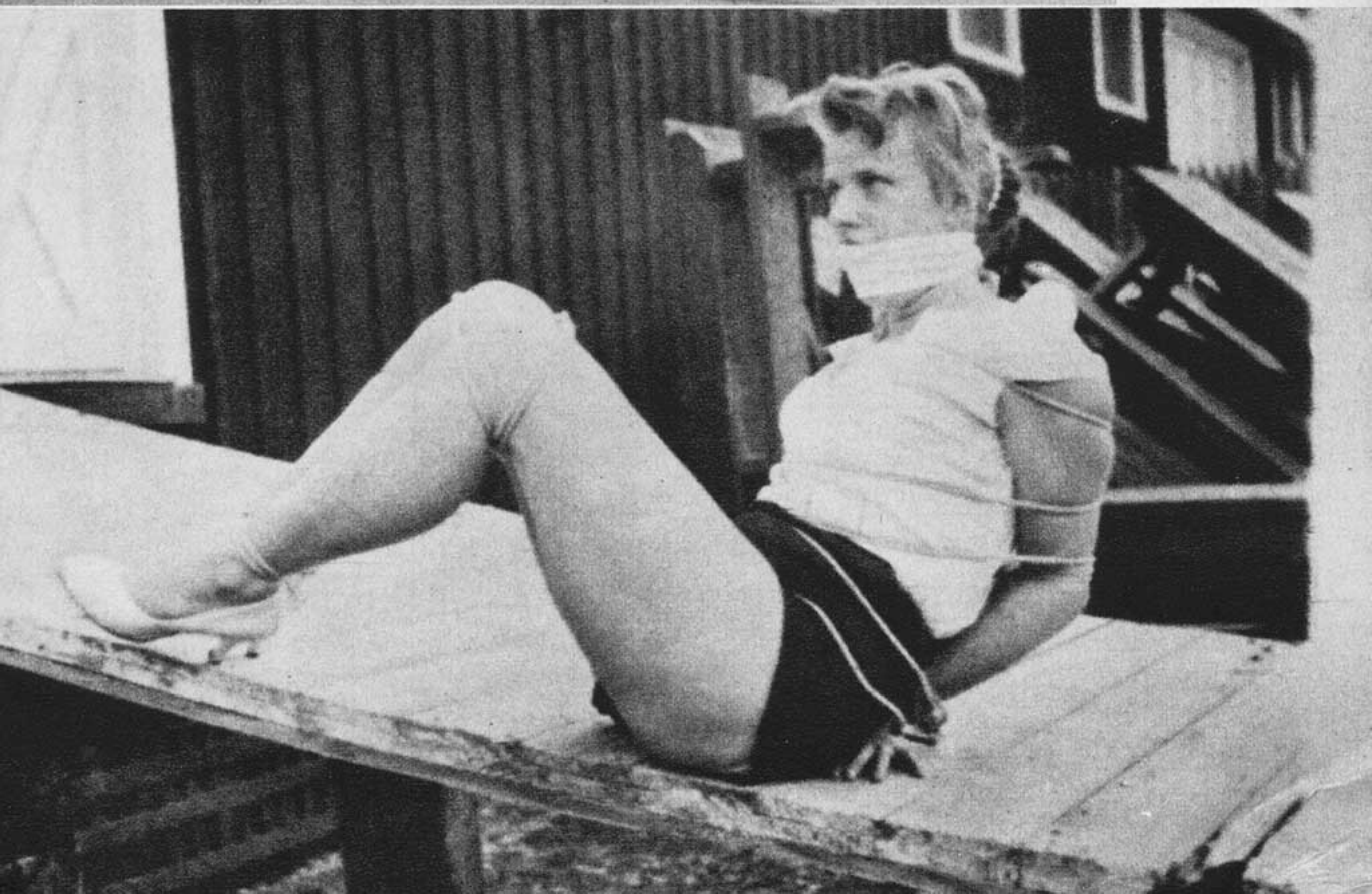
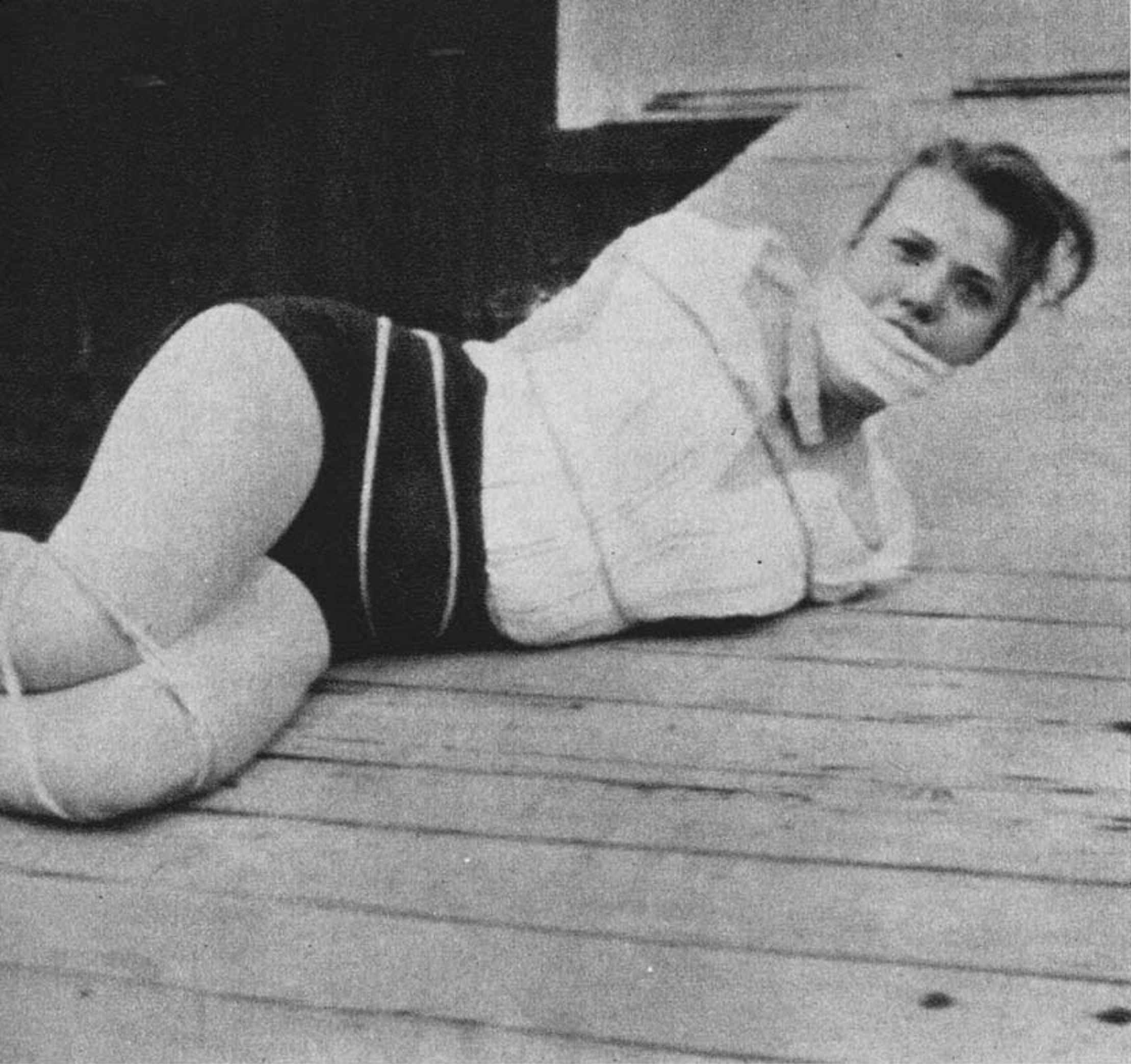
（飯田）

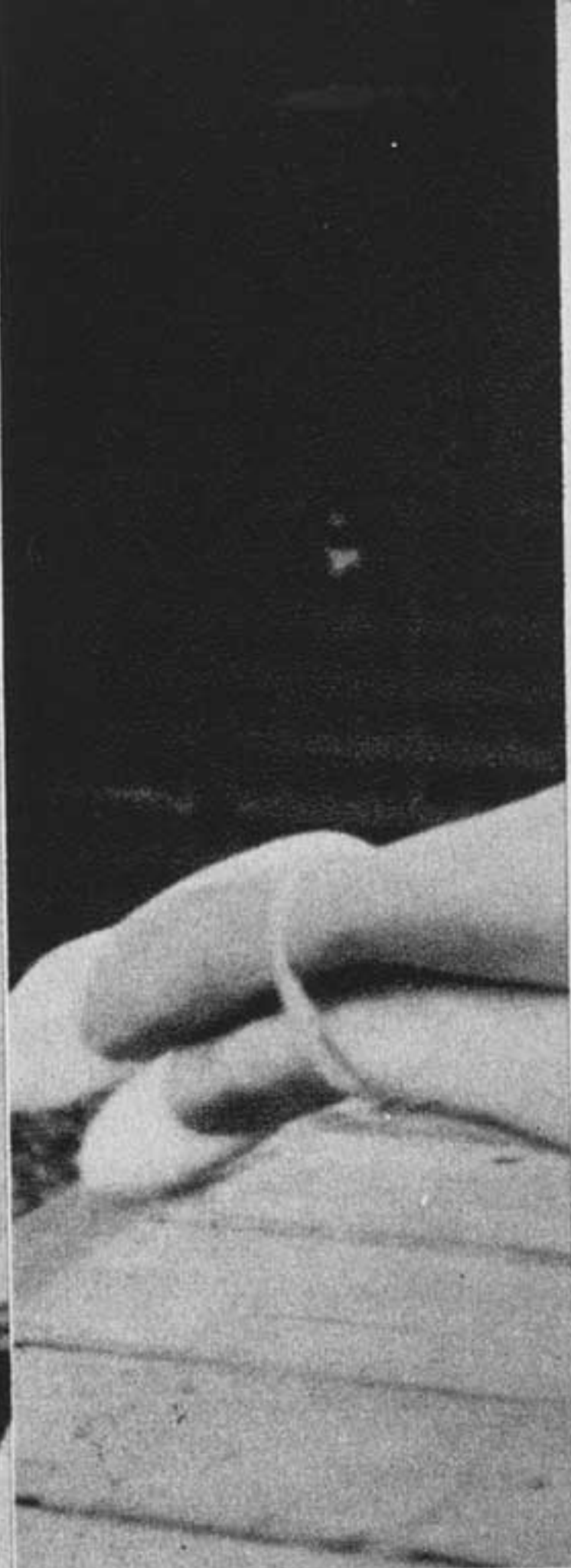
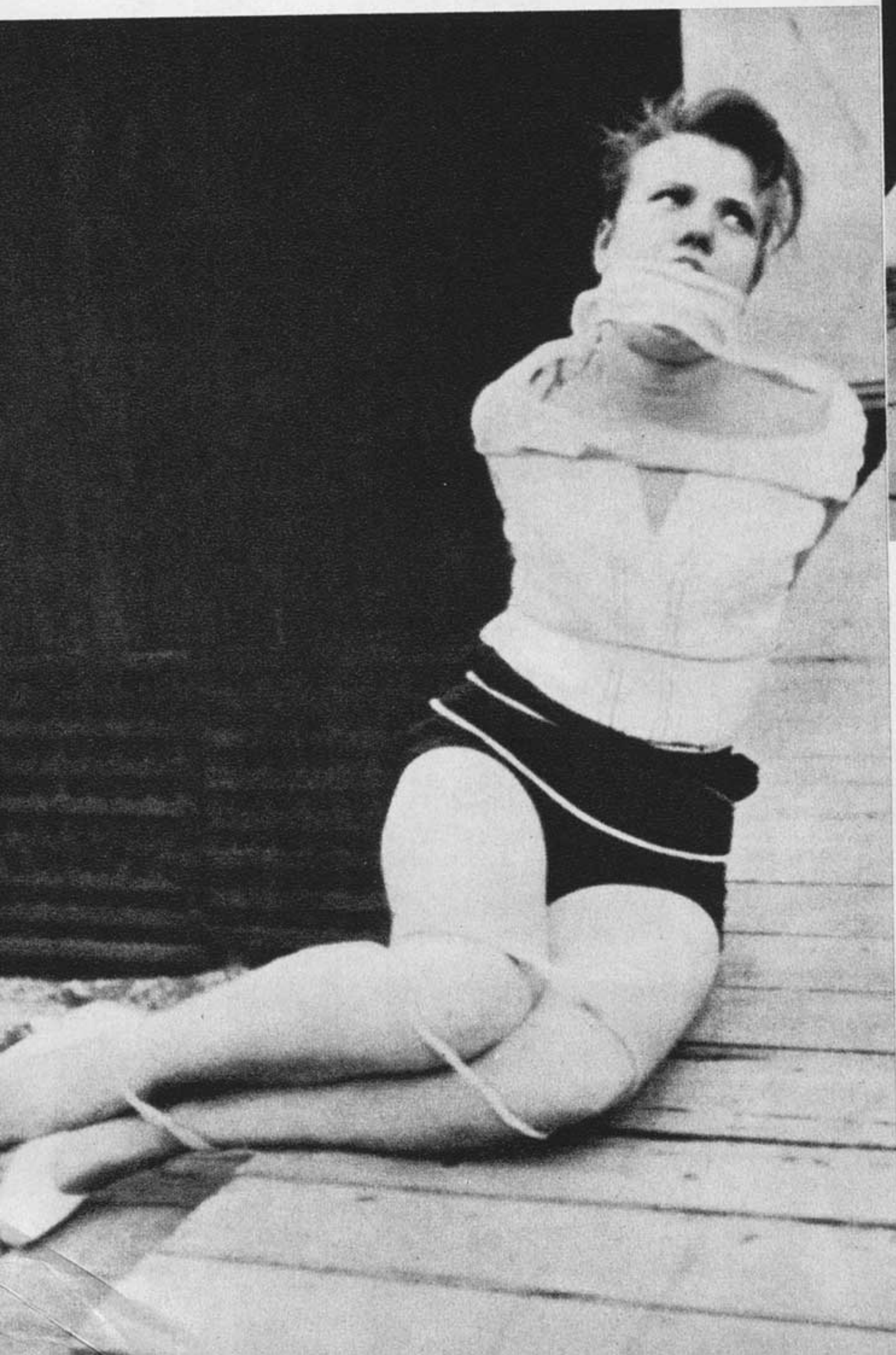


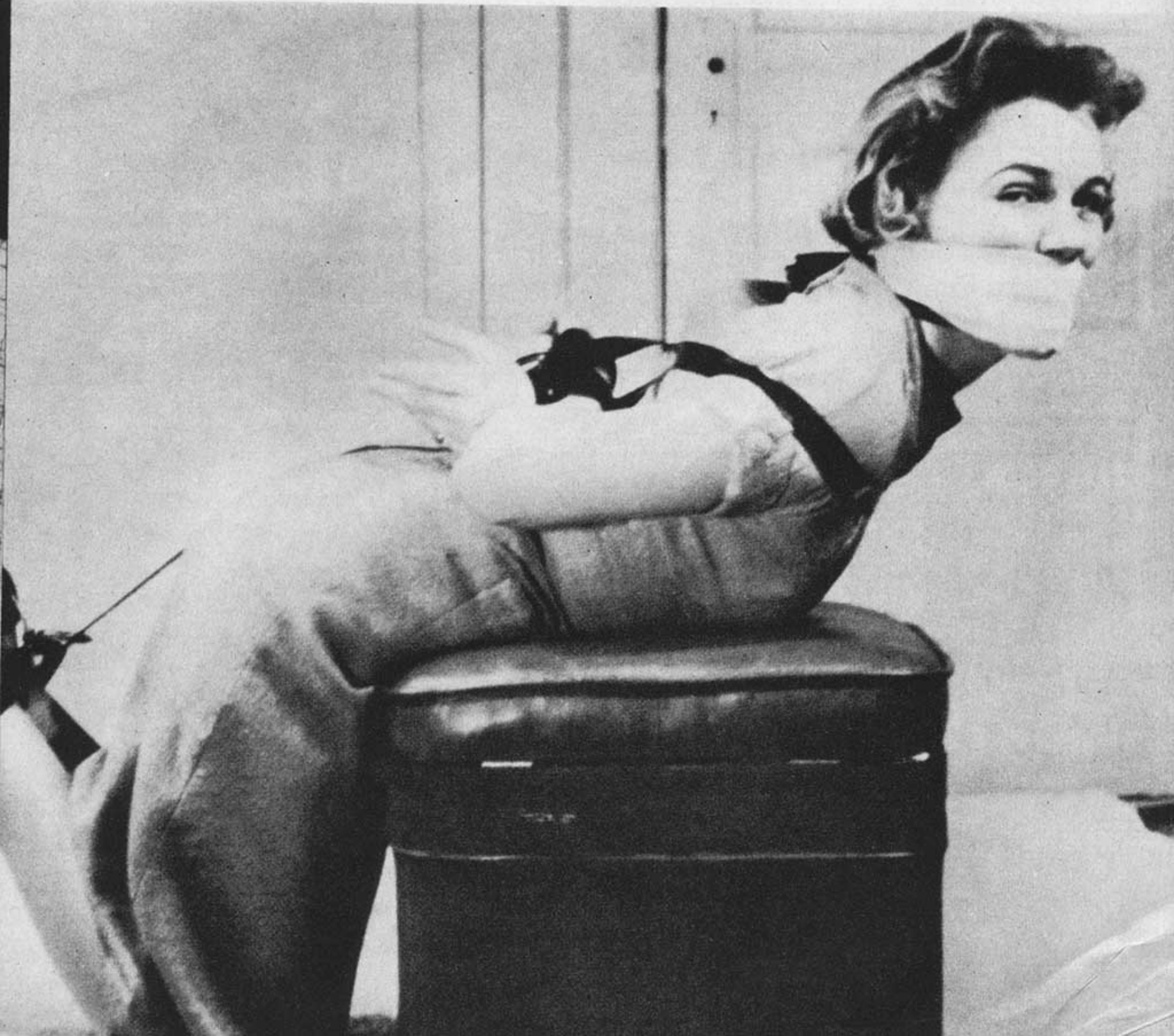
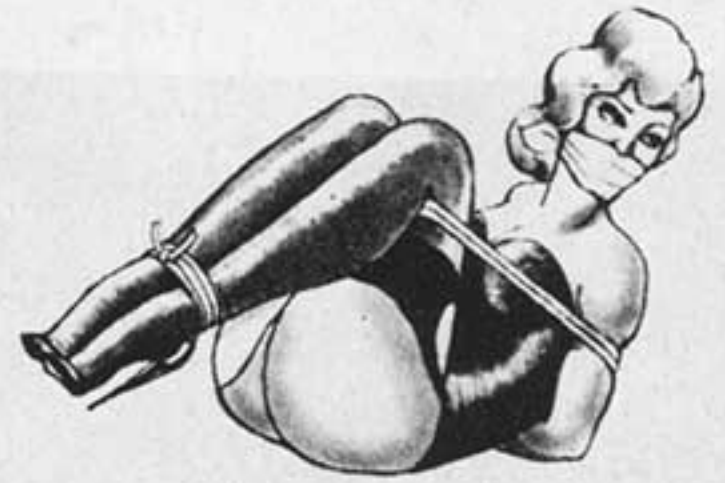
SM
フォト
ご紹介②

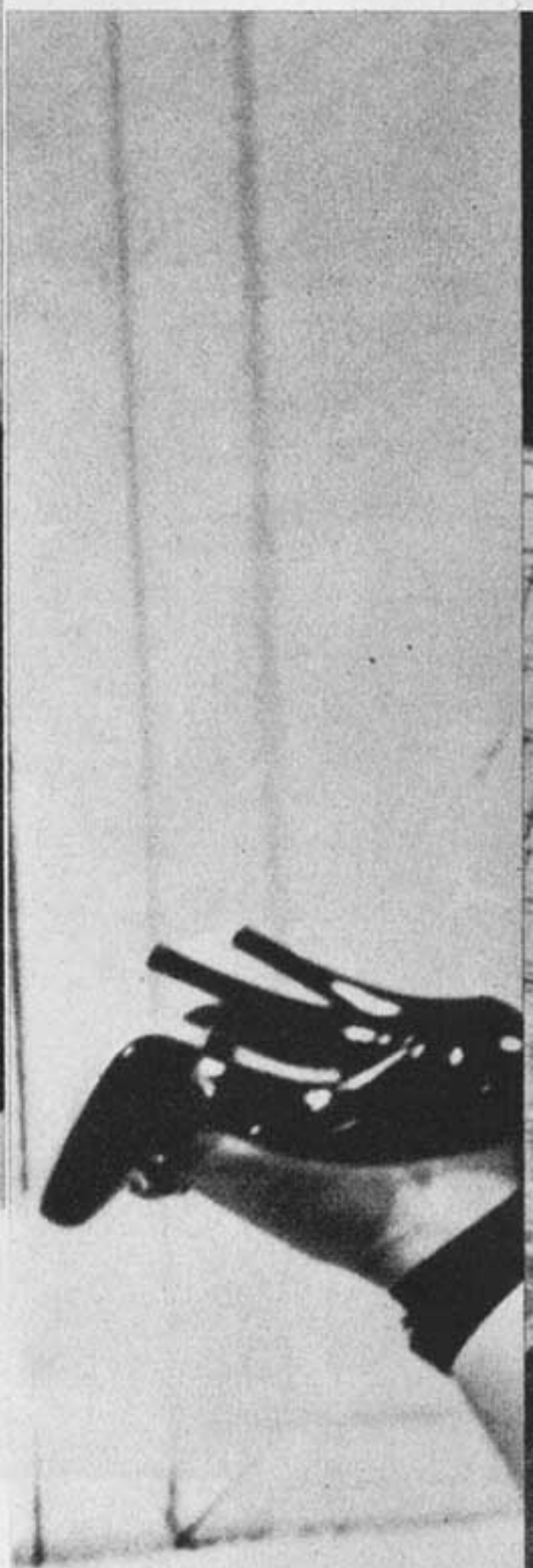
海外の公刊誌より

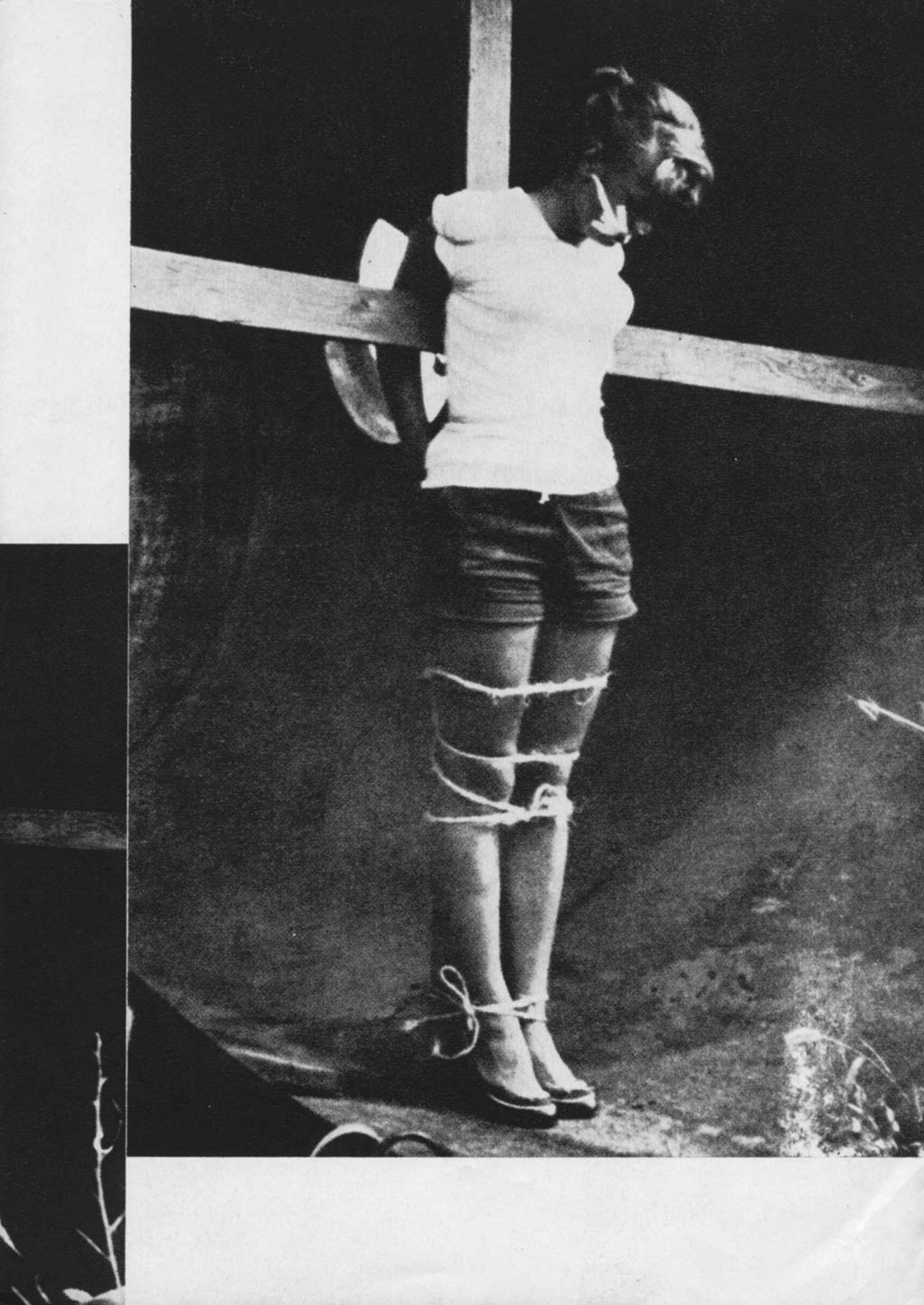
カリフォルニア・フェニクス商会・特約

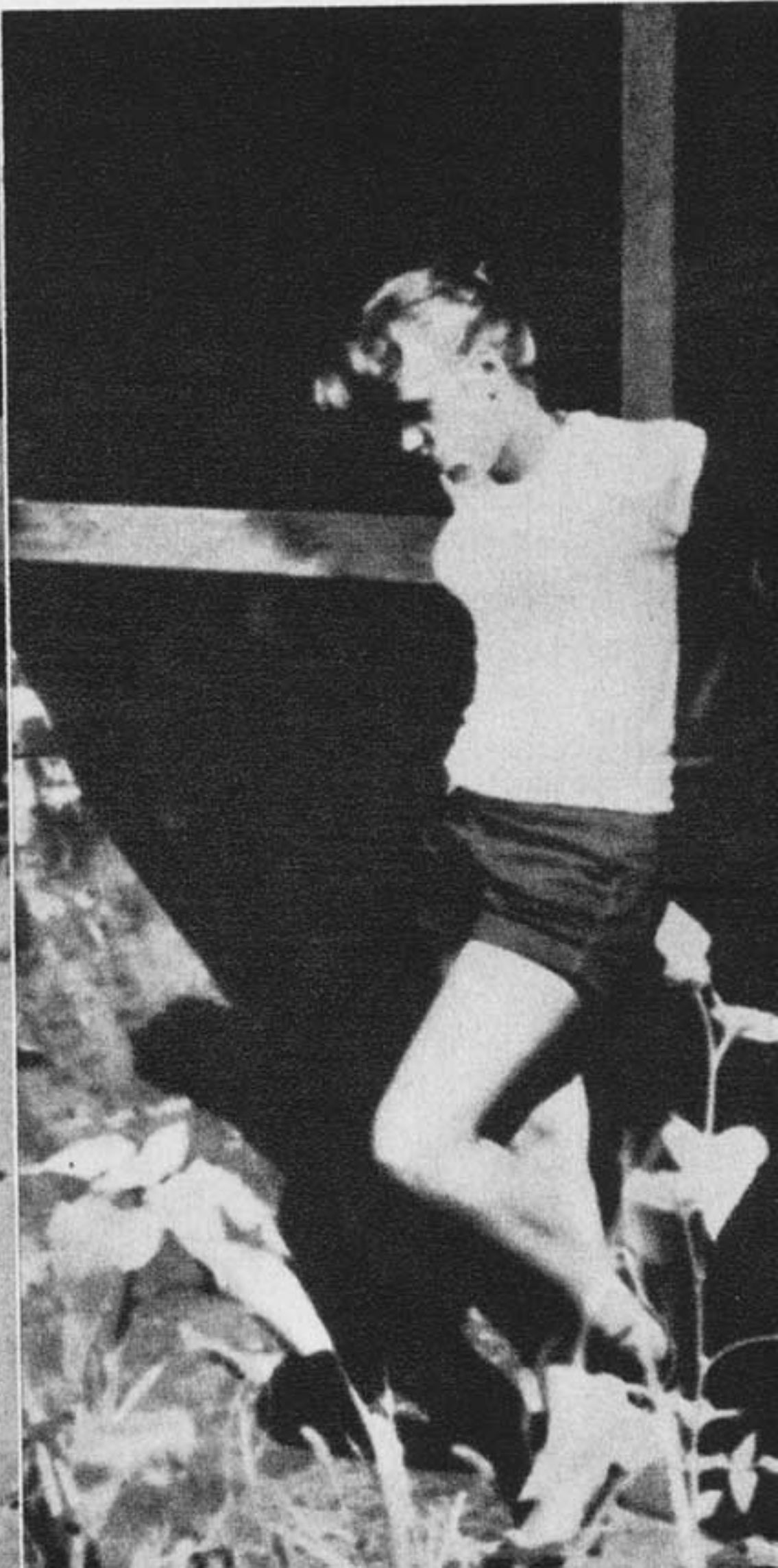
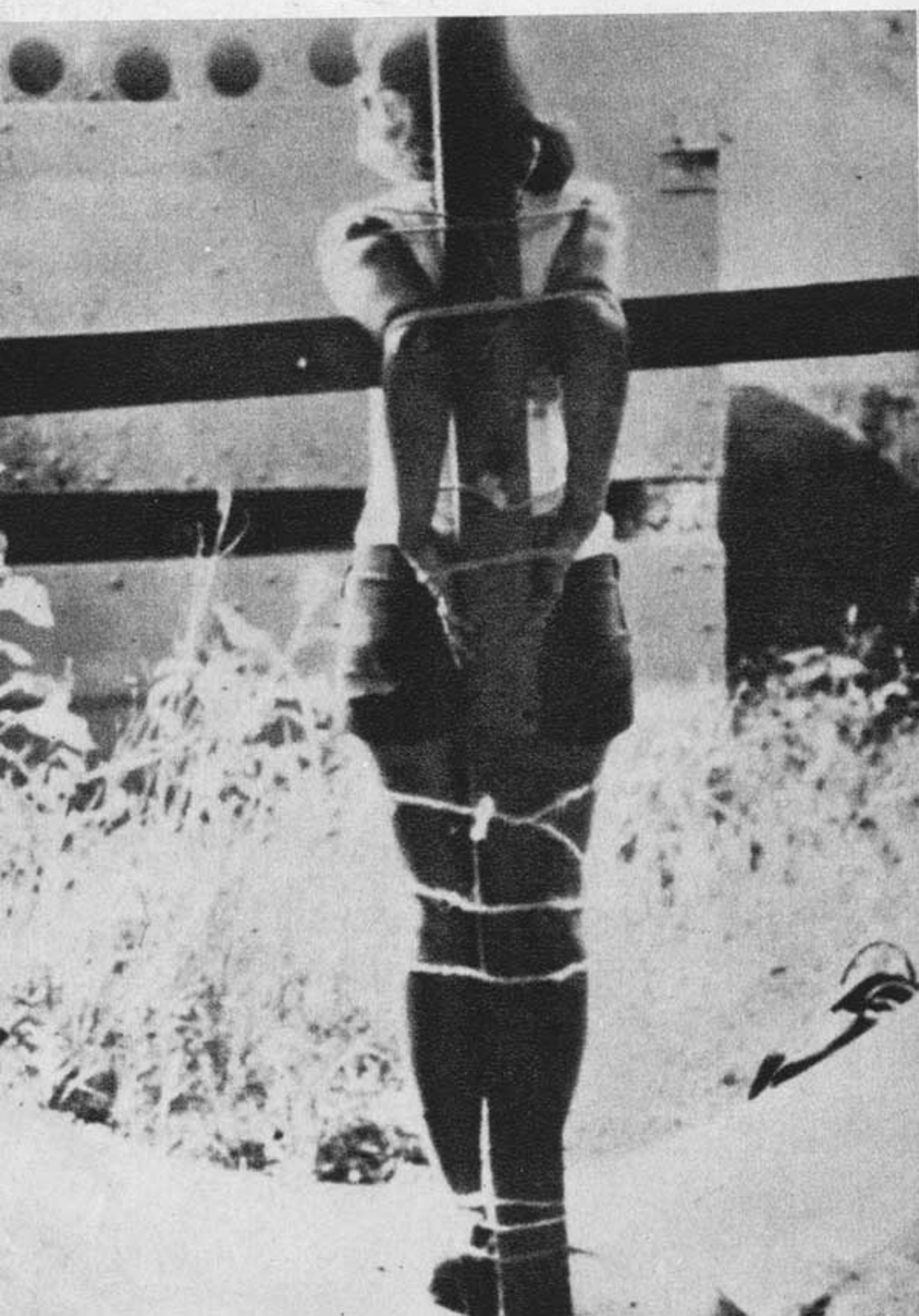
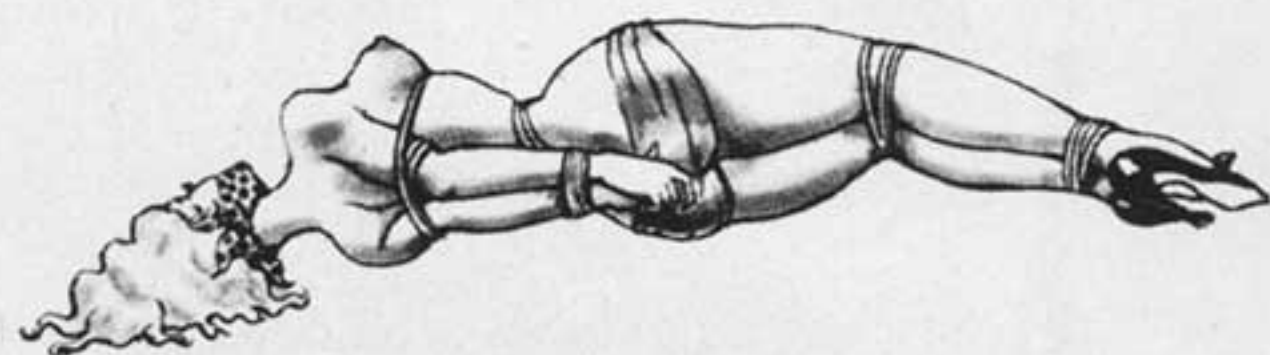














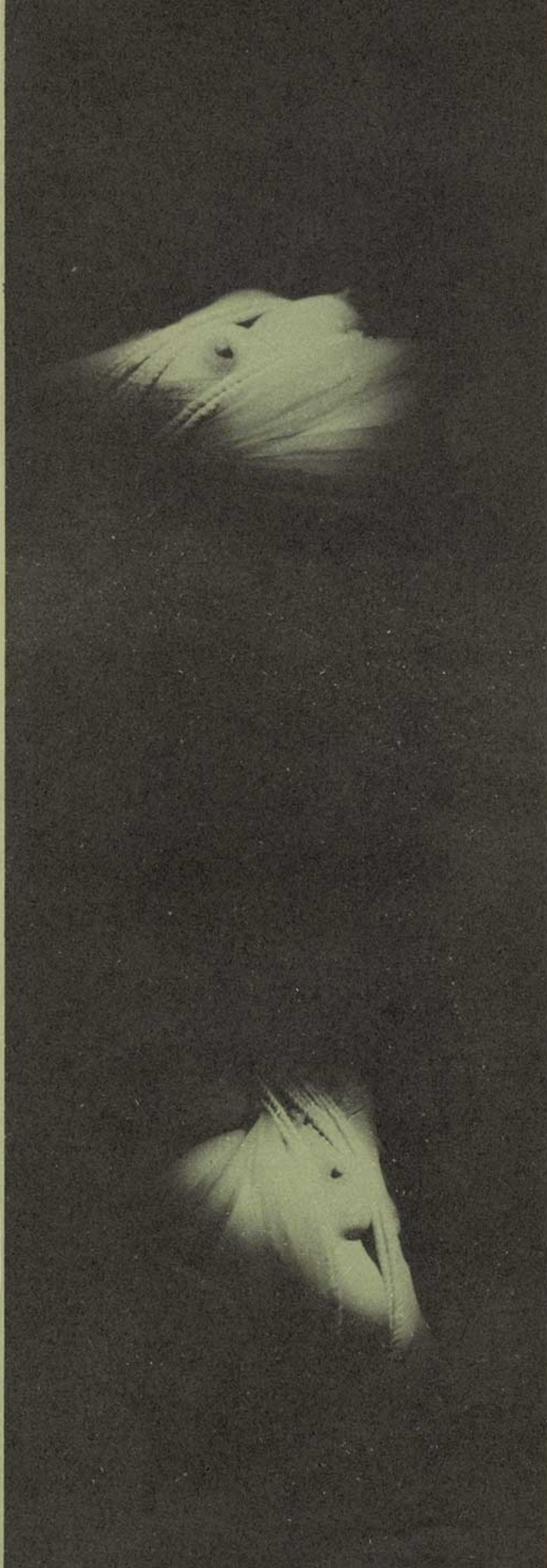
白　い　炎



カメラ・吉田久







裏窓・既刊号総目次

- ★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる
ことをおすすめします。
- ★三冊以上御注文の際は送料は不要です。
- ★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。
- ★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区松ガ丘2丁目21番 振替東京10756 久保書店宛

38年(十一月号)二五〇円

○犬吠岬の太陽……………	文・エダ・キリコ
○暗い画廊……………	カメラ・吉田 久
○フォト作品集……………	金井 行雄
○アメリカSM絵物語……………	フェニクス商会
○ウィナスの誕生……………	森下 高茂
○ねむれぬ夜の追憶(鬼頭暁・絵)……………	北海 道雄
○悪党半九郎(小日向一夢・絵)……………	潮 一樹
★グラビア・時代妖美術集……………	中島 喜美
★グラビア・海外の公刊誌より……………	フェニクス商会
★グラビア・犬吠岬……………	吉田 久
○ヒルマの首枷……………	春川 光彦
○ある女装者の夜々……………	かびや・かずひこ
○■画集・黒い皮の響宴……………	鬼頭 暁
○大都会の夜の底で(江淵晃夫・絵)……………	九十九 郎
○青雲崩れるとき(古正英生・絵)……………	井村 錠
○現代マゾヒズム文化時評・(19)……………	森下 高茂
○体当たりマゾヒズム論・(14)……………	水尾 究
○ゴルドンの記憶(江淵晃夫・絵)……………	阿麻 哲郎
○絵物語・鉦山町の女たち……………	文・宗方 八郎
○絵物語……………	文・都築 峰子
○絵物語・武士道無残……………	文・島本 春雄
○絵物語……………	文・東 桂史

38年(十月号)二五〇円

○絵物語 龍宮城の反乱……………	文・祖父江 新
○時代 妖説朽木女忍伝……………	文・島本 春雄
○サド 異端の城……………	文・三鬼 俊
○戦国 本能寺炎上……………	文・中川 彩子
○絵物語 本能寺炎上……………	文・井村 錠
★グラビア・ミッドナイト……………	文・小日向一夢 久
★グラビア・海外の公刊誌より……………	文・吉田 久
○雁形城落城図……………	文・小日向一夢
○時代妖美術集……………	文・中島 喜美
○伊賀の闇の葉(古正英生・絵)……………	文・佐藤達四郎
○裏切り(秋吉空・絵)……………	文・九十九 郎
○ミッドナイト撮影記……………	文・エダ・キリコ
○蛇縛女切支丹(東桂史・絵)……………	文・義川 源
○アラビアの城・5 毒ぐもに巻かれる弓子……………	文・北園透一郎
○お転婆学園奇襲作戦……………	文・郷 保夫
○ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)……………	文・阿麻 哲郎
○現代マゾヒズム文化時評(18)……………	文・森下 高茂
○体当たりマゾヒズム論・(13)……………	文・水尾 究
○寄稿作品ご紹介と短評……………	文・編集部 編
○裏窓叢書名場面集……………	文・編集部 編

38年(九月号)二五〇円

○裏窓草紙「絵本いろはうた」……………	文・うた・宮古志満夫
○絵物語 海賊虹姫伝奇……………	文・島本 春雄
○絵物語 変幻白だぬき……………	文・春日 章
○アメリカ絵物語 男爵夫人の拷問博物館……………	文・井村 錠
★グラビア・洋画のSMシーン・スチル集……………	文・古正 英生
★グラビア・海辺のうた……………	文・吉田 久
★グラビア・夜のなげき……………	文・吉田 久
★グラビア・海外SM絵物語・ご紹介……………	文・小日向一夢
○小笹姫受難(小日向一夢・絵)……………	文・潮 一樹
○特製マゾキン(山田彬弘・絵)……………	文・嶋岡 晨
○魔女アクリリカ(中川彩子・絵)……………	文・春川光彦
○■鬼頭暁画集「美しきものの檻」……………	文・春川光彦
○絵物語 必殺のデリンジャー……………	文・落合竜二
○体当たりマゾヒズム論・14……………	文・水尾 究
○現代マゾヒズム文化時評・18……………	文・森下高茂
○穴(あな)……………	文・石山省一
○お化粧される弓子(鬼頭暁・絵)……………	文・北園透一郎
★裏窓叢書名場面集(中島喜美ほか絵画集……………	文・阿麻哲郎
○ゴルドンの記憶⑥(江淵晃夫・絵)……………	文・阿麻哲郎

38年(八月号)二五〇円

○絵物語 東京——神戸十六時間……………	文・祖父江 新
○絵物語 ぬめ肌女郎……………	文・山田 彬弘
○絵物語 密林の美女……………	文・矢桐 重八
○西部 紅のライフル……………	文・春日 章
○絵物語……………	文・黒部 恭治
○絵物語……………	文・中川 彩子
○絵物語……………	文・祖父江 新
○絵物語……………	文・落合 竜二
★グラビア・砂の上の船……………	文・吉田 久
★グラビア・海外サド写真特選集……………	文・吉田 久
★グラビア・海外SM絵物語……………	文・小日向一夢
○小笹姫受難(小日向一夢・絵)……………	文・井村 錠
○妖異水底に沈む(秋吉樹・絵)……………	文・信夫 澄夫
○お仕置きにぬれる弓子(鬼頭暁・絵)……………	文・北園透一郎
○お転婆学園秘密作戦(江淵晃夫・絵)……………	文・郷 保夫
○女の争い(都築峰子・絵)……………	文・五所 章
○フィギュア・トレーニング……………	文・春川 光彦
○切支丹散華(東桂史・絵)……………	文・北村 仙也
○現代マゾヒズム文化時評(17)……………	文・森下 高茂
○体当たりマゾヒズム論・(13)……………	文・水尾 究
○ゴルドンの記憶⑤(江淵晃夫・絵)……………	文・阿麻 哲郎

38年(七月号)二五〇円

絵物語 無明怨念記……

文・矢桐 重八
絵・春日 章

鞭のニコラス……

文・春川 光彦
絵・中川 彩子

続・アラビアの城

文・北園透一郎
絵・鬼頭 暁

泣きじゃくる弓子

吉田 久

静かな山林の午後

絵画集・サディスチンの微笑……

江淵 晃夫
喜多 玲子

切支丹女牢……

鬼頭 暁

南北戦争以前……

鬼頭 暁

海外SM絵物語……

フェニクス商会
黒部 恭治

切腹殉教記(小日向一夢・絵)……

黒部 恭治

しのび違い刺青情話(都築峰子・絵)……

北野 竜一

くたばれッ淑女学院……

郷 保夫

西鶴におけるマゾヒズム……

安東 泉

血染め白百合(古正英生・絵)……

佐藤達四郎

体当たりマゾヒズム論(12)……

水尾 究

墓場からの命令(山田彬弘・絵)……

祖父江 新

わが愛の渴望(落合竜二・絵)……

白木ゆりこ

38年(六月号)二〇〇円

鬼頭暁時代妖美術集……

鬼頭 暁

中島喜美時代妖美術集……

中島 喜美

グラビア・幽囚の部屋……

吉田 久

続・美しき海賊船……

フェニクス商会

七つの大罪(中川彩子・絵)……

落合竜二

続・異端の終末……

芦田 奈貴

おどろ記珍化論……

左 次郎

「ロリータ」における

ニフエティズム……

「夜と霧」……

安東 泉

放浪と自己恋着の画家……

黒田 史朗

月光の道で……

河村 童八

鬼婦長……

丸亀 恵子

夜の妖蝶……

立原 道夫

ボスには乳房がある……

五所 章

体当たりマゾヒズム論(11)……

水尾 究

きんぎれ不動(小日向一夢・絵)……

庄内 裕治

復讐黒髪秘聞(中島喜美・絵)……

黒部 恭治

38年(五月号)二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆……

文・島本 春雄
絵・東 桂史

流刑星の美女たち……

文・豊田 一狼
絵・山田 彬弘

江淵晃夫妖美術集……

江淵 晃夫

グラビア・夢幻のへや……

藤沢 修

美しき海賊船……

フェニクス 商会・提供

くさりと美少女……

海外SM画傑作選……

井村 錠

茅女物語……

潮 一樹

会津の女兵……

飯田 豊吉

その夜……

阿麻 哲朗

ゴルドンの記憶(2)……

村山 省

椎名夫人の足……

かびや・かずひこ

ほも紳士録……

森下 高茂

現代マゾヒズム文化時評(14)……

水尾 究

体当たりM論(10)……

北野 竜一

私の愛した女優……

北園透一郎

アラビアの城……

祖父江 新

38年(四月号)二〇〇円

絵物語・冥府海賊伝奇……

文・島本 春雄
絵・秋吉 樹

マドリヌと黄金の靴……

文・松平 莊司
絵・中川 彩子

白狐のお新いろさんげ……

絵・東 桂史

小日向一夢妖美術展……

小日向一夢

黒いタイツ……

毛 卓三

鏡と女……

猪島 昌也

鏡と女……

藤沢 修

海外SM画傑作選……

フェニクス 商会・提供

ゴルドンの記録(1)……

阿麻 哲朗

処刑の図……

三鬼 俊

無分別な夜……

海老沢 七郎

大阪非情地帯……

豊中 夢夫

内外ミュージックホール・スナップ集……

藤沢 修

「虹川画伯のアトリエ」演出ウラ話……

北野 竜一

文芸評論「醜いコメディ」について……

安東 泉

文芸評論「醜いコメディ」について……

かびや・かずひこ

はも紳士録(4)……

38年(三月号)二〇〇円

絵物語・スリーベット号……

文・豊田 一狼
絵・鬼頭 暁

不時着す……

文・島本 春雄

銭姫党伝奇……

文・古正 英生

白峰の女忍者……

文・矢桐 重八

グラビア・けんらんたる商品……

絵・小日向一夢

黒猫を捕えた(1)(2)……

毛 卓三

海外SMフォト・画傑作選……

泰西出版資料

醜いコメディ……

淡路 周五

大利根無頼……

祖父江 新

和装恋慕……

宮古志 満夫

はも紳士録(3)……

かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論(8)……

水尾 究

大とギプスと搾衣……

村山 省

不死身の女……

春川 光彦

「蠍たち」にみる

海老沢 七郎

あるサディスチンのタイプ……

安東 泉

鬼頭暁時代妖美術展……

38年(三月号)二〇〇円

絵物語・スリーベット号……

文・豊田 一狼
絵・鬼頭 暁

不時着す……

文・島本 春雄

銭姫党伝奇……

文・古正 英生

白峰の女忍者……

文・矢桐 重八

グラビア・けんらんたる商品……

絵・小日向一夢

黒猫を捕えた(1)(2)……

毛 卓三

海外SMフォト・画傑作選……

泰西出版資料

醜いコメディ……

淡路 周五

大利根無頼……

祖父江 新

和装恋慕……

宮古志 満夫

はも紳士録(3)……

かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論(8)……

水尾 究

大とギプスと搾衣……

村山 省

不死身の女……

春川 光彦

「蠍たち」にみる

海老沢 七郎

あるサディスチンのタイプ……

安東 泉

鬼頭暁時代妖美術展……

38年(11月号) 1100F

絵物語・姫法師呪文……

文・島本 春雄
絵・小日向一夢

・変化黒髪小僧……

文・京 剣児
絵・古正 英生

秋吉樹妖美画個展……

秋吉 樹

グラビア・黒い皮のスタジオ……

泰西 出版

・美の凝結……

金井 行雄

・美の模像……

金井 行雄

海外SM画傑作展……

泰西 出版

島原の子守唄……

春川 光彦

金色の胸毛……

立原 道夫

郡氏の応接室……

豊中 夢夫

代用品じゃつまらない……

九十九 十郎

フォルリ城の花嫁……

三鬼 俊

おれの名はダニエル……

祖父江 新

愛の戦慄と充実……

白木 ゆりこ

体当たりマゾヒズム論……

水尾 究

はも紳士録(2)……

かびや・かずひこ

新・森栄利論……

間野 嶺

新・安岡章太郎論……

安東 泉

女因お運の死……

小田 桐 爽

浪人夢想日記……

市原 砂夫

カブー家の第三夫人……

加木 れい子

38年(1月号) 1100F

絵物語・ハレウィンの歌う首……

文・松平 莊司
絵・中川 彩子

・赤鯨奇伝……

文・島本 春雄
絵・小日向一夢

・隠密野香猫……

中島 喜美

山田彬弘妖美画個展……

山田 彬弘

グラビア・美の回帰……

毛 卓三

・美の彷徨……

北 好夫

・美の孤立……

金井 行雄

クリスマススイヴに悪魔がくる……

九十九 十郎

赤い血のうずまき……

関町 妙男

仮面のたわむれ……

溝口 雄太

黒い幻想……

白木 ゆりこ

小さな赤い腰巻の記憶……

外村 良

体当たりマゾヒズム論(6)……

水尾 究

夜の感傷……

方里 小路 崑

忍者の遁走記……

祖父江 新

決闘立花屋……

花巻 京太郎

女性的情念の三十年……

かびや・かずひこ

「叩き声」を解剖する……

安東 泉

小説「連」のレスピアニズム……

間野 嶺

婦人機密将校ボーリン……

泰西 出版資料

売られていく玩具たち……

北園 透一郎

37年(12月号) 1100F

絵物語・洞穴の姫と……

文・松平 莊司
絵・中川 彩子

・耳の戦慄……

絵・曾我部 泰

・妖説黒縄盗賊……

絵・小日向一夢

グラビア・犬と女……

毛 卓三

・美の発端……

北 好夫

・美の展開……

毛 卓三

・美の落差……

金井 行雄

かわいい調教師……

北園 透一郎

殉国……

中康 弘通

投げ節お駒……

花巻 京太郎

締めつける愛情……

春川 光彦

東京午前零時……

豊中 夢夫

日本刑罰史(終回)……

名和 弓雄

はも・とその周辺(終回)……

かびや・かずひこ

体当たりマゾヒズム論(5)……

水尾 究

新・三島由紀夫論……

安東 泉

お春さらわれ草紙……

小田 桐 爽

千代の青春……

浦戸 宏

赤い城……

三津井 弓雄

ある身の上相談から……

神原 栄知

イララする夜に……

羽鳥 なつ子

37年(11月号) 1100F
絵物語・かわいいアンヌの……
文・松平 莊司
絵・中川 彩子
ばうけん……
異聞・牛裂きの刑……
絵・東 桂史
宝石の血……
絵・秋吉 樹
グラビア・美の鋭角……
毛 卓三
・美の冗舌……
金井 行雄
・美の傾斜……
金井 行雄
・美の断面……
金井 行雄
海外SMフォト特選集……
泰西 出版資料
あわれ雪路……
丸亀 恵史
おかつばとおさげの間……
間野 嶺
霧笛の町……
五所 章
妖美画傑作選……
沖沙二 都築 峰子
火刑幻想……
多賀 満
夜の画帳……
鳴滝 三郎
足……
村山 省
体当たりマゾヒズム論(4)……
水尾 究
さまアミろ……
春川 光彦
ある恋の物語……
山木 節夫
不安と絶望から幸福への道へ……
桜井 和子
畜獣デリムソン(終回)……
阿麻 哲郎
はも・とその周辺(9)……
かびや・かずひこ
風雲地獄街道(6)……
鈴宮 英樹

37年(10月号) 1100F

絵物語・ひざまずいて……

絵・秋吉 樹
絵・曾我部 泰

・柔肌切支丹……

江洲 晃夫

江洲晃夫妖美画個展……

金井 行雄

グラビア・舞台名場面集……

金井 行雄

・たわむれのふたり……

藤沢 修

・美と醜のあいだ……

金井 行雄

ある青年の休暇……

五所 章

紅の私刑……

東島 孝

女奴隷の浴室……

市川 菊夫

妖しい体臭の夜……

阿麻 哲郎

畜獣デリムソン(11)……

小田 桐 爽

鬼洞又四郎の煩惱……

松平 莊司

ギラルド王の金色奴隷……

多賀 満

現代女牢記……

河西 恒一

江戸の怪談……

水尾 究

はも・とその周辺(8)……

かびや・かずひこ

海外SM映画ご紹介……

美濃村 晃

体当たりM論(3)……

水尾 究

盗む……

村山 省

おろかな馬のものがたり……

馬場 弘二

風雲地獄街道(5)……

鈴宮 英樹

37年(九月号)二〇〇円

絵物語・凄絶めくら忍法……絵・東 桂史

・密林の女王ムムタール絵・中川彩子

・蛇と鞭……絵・山田彬弘

北原環妖美画個展……北原 環

グラビア・SM式美容鍛練法……毛 卓三

・屈曲……毛 卓三

・悪夢……毛 卓三

・女ひとりのへや……猪島 昌也

・かわいいいくちびる……毛 卓三

お浜の受難……花巻京太郎

山小屋の暴風雨……駒井たまき

戦慄の女体爆弾……綾川 妖司

鈴の泣き声……浦戸 宏

白痴美の女……青柳貫次郎

日本型罰史(3)……名和 弓雄

はも・とその周辺(7)……かびや・かずひこ

「痲癪老人日記」を解剖する……安東 泉

タロの恋……八巻 令

体当たりM論(2)……水尾 究

女賊と姫君……霧山 志郎

畜獣デリムソン(10)……阿麻 哲郎

鬼婆のすむ家……三枝喜久治

風雲地獄街道(2)……鈴宮 英樹

37年8月号ぜんぶ

売り切れました

37年(七月号)二〇〇円

絵物語・最初の火星人……絵・山田 彬弘

〃 鞭に生きる女(5)……ウァン・ロッド

〃 海外SMフォト特集

〇中川彩子妖美画個展……中川 彩子

★グラビア・時代劇のムード……猪島 昌也

〃 石伐り場の女……毛 卓三

〃 沼のほとり……毛 卓三

フォト時代劇・島抜け伝八……海老沢七郎

旗本被虐年譜……島本 春雄

鼻には鼻を……九十九十郎

脱走兵とその妻……竹谷 十三

姫に捧げられた人獣の話……白畑 高之

はも・とその周辺(5)……かびや・かずひこ

地獄で泣け……万里小路 崑

武后秘話……綾川 妖司

奇縁縁切り榎……小田桐 爽

絵本かぞえうた……喜多 玲子

畜獣デリムソン(8)……阿麻 哲郎

忘念油屋火事……竜崎 聖吾

現代マゾヒズム文化時評……森下 高茂

菰塚温泉のおもいで……影 なぎさ

裏窓タウン……編集部・編

風雲地獄街道(2)……鈴宮 英樹

37年(六月号)二〇〇円

絵物語無残女忍者記……文・矢桐 重八

〃 時間旅行機第一号……文・豊田 一狼

〃 鞭に生きる女④文・画・ウァン・ロッド

〃 フン族の暴雄アッチラ画・中川 彩子

碧眼蛮女伝……小田桐 爽

肉の濁流……城堂 純

畜獣デリムソンⅦ……阿麻 哲郎

グラビア追いつめられていく演技……毛 卓三

〃 和室のひとり……猪島 昌也

〃 女体倉庫……毛 卓三

〃 ふとんの上で……猪島 昌也

色餓鬼島田……竜崎 聖吾

桜とサムワイとサディズム……浜野 真砂

哀艶十六夜街道……文・円城寺 達

A心酔のタイプ……かびや・かずひこ

日本刑罰史(1)……名和 弓雄

稲妻さんげ……万里小路 崑

現代マゾヒズム文化時評……森下 高茂

黒髪幻想曲……宣 文彦

地獄船青竜号……永井卓二郎

縄を待つ女……堀越 早苗

風雲地獄街道(1)……鈴宮 英樹

37年5月号ぜんぶ

売り切れました